IBM Unica Marketing Platform バージョン 8 リリース 6 2012 年 6 月 30 日

管理者ガイド



本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、583ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Marketing Platform バージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0、および新しい版で明記 されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

- 原典: IBM Unica Marketing Platform Version 8 Release 6 June 30, 2012 Administrator's Guide
- 発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 担当: トランスレーション・サービス・センター
- 第1刷 2012.7

- 注 -

© Copyright IBM Corporation 1999, 2012.

目次

第1章 IBM Unica Marketing Platform	4
	1
IBM Unica Marketing のビキュリティー機能について 構成管理について	1
構成自生について、	2
HDM Offica Marketing のロ $\pi \gamma \gamma + \Lambda$	3
IBM Unica Marketing にログインするには	4
第 2 章 内部ユーザー・アカウントの管理	7
ユーザー・アカウントのタイプ: 内部および外部	7
内部ユーザー・アカウントのプロパティーについて .	8
新規ユーザー・アカウントを追加するには	9
ユーザー・アカウントを削除するには	9
内部ユーザーのパスワード有効期限を変更するには	10
内部ユーザー・パスワードをリセットするには	10
内部ユーサー・アカウントのフロパティーを変更す	
	11
内部ユーサーのシステム・ステーダスを変更するに	1.1
	11
内部ユーリー・ナータ・ソースを追加りるには	12
内部ユーリー・ナータ・ソー人のハスリートよには	10
ロジイン石を変更するには	12
「コーザー」 ウィンドウのリファレンフ	13
「エージー」ラインドラのラフテレンス・・・・・	15
ユーザーのロケール設定を設定するには	16
外部ユーザーの同期化の強制	16
外部ユーザーの強制同期化	17
第3章 IBM Unica Marketing でのセキ	
ュリティーの管理1	9
IBM Unica Marketing でのセキュリティー管理に関	
する情報の入手先................	20
Marketing Platform でのセキュリティー管理について	20
Marketing Platform および Campaign での役割と権限	
について	21
Marketing Platform でのセキュリティー管理プロセス	21
グループのタイプ: 内部および外部	22
パーティションおよびセキュリティーの管理につい	
τ	23

グループまたはサブグループにユーザーを追加す	
るには.................	28
グループまたはサブグループからユーザーを除去	
するには	28
	20
「ユーリー・クルーノ」リインドリのリファレン	20
	30
ユーザーの役割と権限の管理	31
役割を作成するには.............	31
役割の権限を変更するには	31
役割を除去するには	32
グループへの役割の割り当てまたはグループから	
の役割の除去を行うには	32
マーザーへの役割の割り当てまたけマーザーから	52
ユーダーへの役割の割り目でよたはユーダーから	22
	33
	34
リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品	
の権限..................	34
リファレンス: Marketing Platform の権限	35
リファレンス: Interaction History の権限	36
リファレンス: Attribution Modeler の権限	36
第4章 IBM Unica Campaign でのセキ	
コリティーの管理	30
	00
セキュリティー・ホリンーについて	39
	- 30
クローバル・セキュリティー・ホリシー・・・・	57
Campaign による権限の評価方法	40
クローハル・ピキュリティー・ホリシー Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用	40 41
Campaign による権限の評価方法	40 41
クローバル・ピキュリティー・ホリシー Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 . セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン	40 41 41
 クローバル・ピキュリティー・ホリシー Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 . セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン セキュリティーのシナリオ 	40 41 41 41 42
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 41 42 42
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 42
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 44
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 42 44 46 47
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 42 44 46 47 47
Campaign による権限の評価方法	 40 41 41 42 42 44 46 47 47 48
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 42 44 46 47 47 48 48
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 48 49
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 47 48 48 49 49
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 49 49 50
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 42 44 46 47 47 48 48 49 49 50 54
 Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン セキュリティーのシナリオ セキュリティーのシナリオ シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社 シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社 シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス セキュリティー・ポリシーの実装 セキュリティー・ポリシーの作成 セキュリティー・ポリシーの削除 フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティ ー・ポリシーの割り当て Campaign での管理権限について レポート・フォルダー権限の構成 が開資料: Campaign での管理権限 Windows 偽装の管理 Windows 偽装の管理 Windows 偽装の管理 	40 41 41 42 42 42 44 46 47 47 48 49 49 50 54
 Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン セキュリティーのシナリオ セキュリティーのシナリオ シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社 シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社 シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス セキュリティー・ポリシーの実装 セキュリティー・ポリシーの作成 セキュリティー・ポリシーの削除 フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティ ー・ポリシーの割り当て Campaign での管理権限について レポート・フォルダー権限の構成 参照資料: Campaign での管理権限 Windows 偽装とは? Windows 偽装とは? Windows 偽装とは? Windows 偽装とは? 	40 41 41 42 42 44 46 47 47 47 48 49 49 50 54 54
クローハル・セキュリティー・ホリシー・ホリシーの評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 49 49 50 54 54 54
 Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン セキュリティーのシナリオ シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社 シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社 シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス セキュリティー・ポリシーの実装 セキュリティー・ポリシーの作成 セキュリティー・ポリシーの削除 フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティ ー・ポリシーの割り当て Campaign での管理権限 シボート・フォルダー権限の構成 参照資料: Campaign での管理権限 Windows 偽装とは? Windows 偽装を使用する理由 Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係 	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 48 49 49 50 54 54 54 55
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 48 49 49 50 54 54 54 55 55
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 48 49 49 50 54 54 55 55
Campaign による権限の評価方法	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 48 49 49 50 54 54 55 55 55
 Campaign による権限の評価方法 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用 セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイド ライン セキュリティーのシナリオ シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社 シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社 シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス セキュリティー・ポリシーの実装 セキュリティー・ポリシーの実装 セキュリティー・ポリシーの削除 フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティ ー・ポリシーの割り当て Campaign での管理権限について レポート・フォルダー権限の構成 参照資料: Campaign での管理権限 Windows 偽装を使用する理由 Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係 Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログイン イン、 Windows 偽装の作業 	40 41 41 42 42 44 46 47 47 48 49 49 50 54 54 55 55 55

proxy という名前の仮想データ・ソースに関する
認証の資格情報を設定するには
第5草 備成の官埋59
プロパティー・カテゴリーについて
テンフレートを使用してカテコリーを複与する .60
フロバティーの説明について
テノオルトのユーリー・ロケール設定について 61
ノロハティー他の編集
ノロハリイー他を補朱りる
ハノコリーの後子と的际
ノンノレートから初焼ルノコリーとIFI成9-3 05 カテゴリーを削除する 63
第 6 章 レポートの構成 65
IBM Unica Marketing スイートのレポートについて 65
レポートおよびセキュリティーについて 66
レポート・スキーマについて
Framework Manager データ・モデルについて 73
Report Authoring レポートについて
レポート・スキーマのカスタマイズ
使用するレポート・スキーマ
コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メト
リックを追加するには
カスタム属性を追加するには
レスポンス・タイプを追加するには
コンタクト・ステータス・コードを追加するには 78
パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠

を指定するには..............	. '	78
パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴		
のオーディエンス・レベルを構成するには...	. '	79
追加のオーディエンス・レベルまたはパーティショ		
ンのレポート・スキーマの作成	. '	79
キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキ		
ーマを作成するには		80
キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータ		
スの内訳スキーマを作成するには......		81
オファー実績スキーマを作成するには		82
キャンペーン実績スキーマを作成するには...		82
キャンペーン・カスタム属性のスキーマを作成す		
るには................		83
対話実績スキーマを新規作成するには		84
更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプト		
の生成		84
ビューまたはレポート・テーブルの更新の前に .		84
レポート・ビューまたはテーブルの更新済み SQL		
スクリプトの生成		85
ビューまたはレポート・テーブルの更新....		86
データ・ソース別の SQL スクリプト		86
「レポート SOL ジェネレーター」ページのリフ		
アレンス		87
IBM Cognos モデルのカスタマイズ		88

ーの追加	. 90
IBM Unica アプリケーションの Cognos レポートの	
カスタマイズまたは作成について.......	. 91
新しい Campaign レポートの作成に関するガイド	
ライン・・・・・・・・・・・・・・	. 91
対話点パフォーマンス・ダッシュボードの構成	. 92
新規ダッシュボード・レポートの作成に関するガ	
イドライン・・・・・・・・・・・・・	. 93
第7章 ダッシュボードの作成と管理	95
IRM Unica 事前定義ポートレットについて	95
ダッシュボードの計画	95
ダッシュボード・オーディエンス	. 96
グローバル・ダッシュボード	. 96
ダッシュボードの表示に必要なユーザー権限	. 96
IBM Unica 事前定義ポートレットの使用可能性 .	. 97
IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事	
項	. 97
ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れ	
るには	. 98
事前定義ポートレットの説明	. 99
Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポー	
トレット	. 99
Marketing Operations リスト・ポートレット	100
Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット	100
Campaign リスト・ポートレット.....	101
Interact IBM Cognos レポート・ポートレット	101
Distributed Marketing リスト・ポートレット	101
Optimize リスト・ポートレット	102
Attribution Modeler IBM Cognos レポート・ポー	
	102
Interaction History IBM Cognos レホート・ホー	
	102
ダッンユルートのセットアック	103
タッシュホートの官哇に必要な権限	103
クリンエル トレットを右効またけ無効にするに	105
事前定我小 ドレクドを有効または無効にするに け	105
ダッシュボードを作成するには	105
事前定義ポートレットをダッシュボードに追加す	105
るには	105
ダッシュボードをレイアウトするには	106
ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行	100
うには	106
ポートレットをダッシュボードから削除するには	107
ポートレットの名前またはプロパティーを変更す	
るには	107
ダッシュボードの名前またはプロパティーを変更	
するには	107
ダッシュボードを削除するには	107
カスタム・ポートレットの作成と使用	108
カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性	108
カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項	108

ポートレット作成プロセスの概要	109
オンプレミス NetInsight レポートから URL を	
作成するには	109
IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成す	
るには	110
IBM Coremetrics Web Analytics レポートから	
URL を作成するには	111
イントラネットまたはインターネットのページか	
ら URL を作成するには.	111
ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追	
加するには	111
「ポートレットの管理」ウィンドウのリファレン	
Ζ	112
ダッシュボードのメンバーシップの管理	112
ダッシュボード管理タスクについて.....	112
ダッシュボード・メンバーシップを認可または削	
除するには	112

第8章 IBM Unica Scheduler での実

行のスケジューリング 115
Campaign Schedule プロセスと IBM Unica
Scheduler の相違点
スケジューラー・トリガー
着信トリガー
スケジューラーの制限
スケジューラーの繰り返しパターン
実行の従属関係
タイム・ゾーンのサポート
Scheduler の制限
フローチャートのスケジューリングに必要な権限 120
Scheduler 実行パラメーター
Campaign フローチャート実行用のデフォルト・
パラメーターのオーバーライド
スケジュールの作成
デフォルト・パラメーターを使用してフローチャ
ート・スケジュールを作成するには
デフォルト・パラメーターをオーバーライドして
フローチャート・スケジュールを作成するには . 122
制限をセットアップするには
「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケ
ジュールの編集」ウィンドウのリファレンス123
「フローチャート・パラメーターの上書き」ウィ
ンドウのリファレンス
スケジュールの管理
スケジューラー管理ウィンドウのリファレンス 12

手動ユーサー・ア	カワン	\[\begin{bmatrix} <	下户	KI	Υ,	5	IRV	1ι	Jnic	ca	
Marketing と IBM	Coren	netr	rics	間	の	シン	グ	ル	• +	トイ	
ンオンのセットア	ップ										130

IBM	Coremet	rics と	IBM	Unic	a N	Iarke	eting	ς <i>σ</i>)間	のシ	/	
ング	ル・サイ	ンオン	用に	Web	P	プリ	ケー	ーシ	Ξ			
サー	バーを構	成する	方法.									132

第 10 章 Windows Active Directory
との統合133
Active Directory 統合機能
Active Directory 統合の前提条件
IBM Unica Marketing と Windows Active Directory
の統合方法
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory
の統合)
必要な情報の入手
グループ・メンバーシップおよびマッピングの計
画
Marketing Platform へのディレクトリー・サーバ
ー資格情報の格納138
IBM Unica Marketing での統合の構成 139
同期化のテスト
PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory
ユーザーのセットアップ
Windows 統合ログインへのセキュリティー・モ
ードの設定
マップされたグループへの役割の割り当て143
Web アブリケーション・サーバーの冉起動 143
ブラウザーの構成
Active Directory ユーザーとしてのログインのテ
λ Γ

LDAP 統合機能
LDAP 統合の削促采作 \dots
IBM Unica Marketing C LDAP リーバーの航台力
伝
構成ノロビスのチェックリスト (LDAP の就面) 14/ 必要なは起のユギ 149
い安な旧報の八十148 ガループ・メンバーシップセトバフッピングの計
シル ノ・ハマハーシックわよいマッピングの計 両 140
回 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

	•
ー資格情報の格納	. 150
IBM Unica Marketing での統合の構成	. 151
同期化のテスト...........	. 153
LDAP へのセキュリティー・モードの設定	. 153
マップされたグループへの役割の割り当て.	. 154
Web アプリケーション・サーバーの再起動	. 154
LDAP ユーザーとしてのログインのテスト	. 154

第 12 章 Web アクセス制御プラットフ

ォームとの統合..........	•	155
SiteMinder との統合の前提条件		. 156
Tivoli Access Manager との統合の前提条件		. 159
IBM Unica Marketing と Web アクセス制御プラ	ツ	
トフォームの統合方法		. 160
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス	ζ	
制御統合)		. 160
LDAP 統合の実行		. 161

IBM Unica Marketing での Web アクセス制	御約	充	
合の構成..............		. 16	1
Web アプリケーション・サーバーの再起動		. 16	2
Web アクセス制御の同期化と IBM Unica			
Marketing ログインのテスト		. 16	2

第 13 章 IBM Unica Marketing への

SSL の実装	16	3
SSL 証明書について	. 16	3
IBM Unica Marketing でのクライアントおよびサー		
バーの役割	. 16	4
IBM Unica Marketing の SSL について	. 16	5
IBM Unica Marketing における SSL の実装方法	16	6
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	. 16	7
証明書の取得または作成	. 16	7
SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの		
構成	. 17	0
SSL 用の IBM Unica Marketing の構成	. 17	0
SSL 構成の検証	. 17	7
SSL に関する有用なリンク	. 17	7

第14章 データ・フィルターのセット

アップ	179
データ・フィルターのセットアップについて	179
ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルタ	
ーの関連付け	179
データ・フィルターの概念	179
データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生	
成と手動指定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	180
手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ	
方法	180
構成プロセスのチェックリスト (データ・フィル	
ターの手動指定)	181
Marketing Platform のインストール	181
データ・フィルター基準の計画 (手動生成)	181
必要な情報の入手 (手動指定)	182
データ・フィルターを指定する XML の作成	
(手動指定)	182
データ・フィルター・システム・テーブルへのデ	
ータの追加	182
データ・フィルターへのユーザーおよびグループ	
の割り当て...............	183
データ・フィルター XML のリファレンス (手	
動指定)	183
例: データ・フィルターの手動指定	187
自動指定によるデータ・フィルターのセットアップ	
方法。	191
プロセス・チェックリストの構成......	191
Marketing Platform のインストール	192
データ・フィルター基準の計画 (自動生成)	192
ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの	
取得	193
必要な情報の入手 (自動生成)	193
データ・フィルターを指定する XML の作成	
(自動生成)	193

第 15 章 データ・フィルターの管理 207

ユ	ーザー	およひ	バグル		プ割	Ŋ	当て	[]	よ・	57	デ		タ・	,	
P	クセス	を制限	する												207
拡	張検索	につい	て.												207
デ	ータ・	フィル	ター	割	り当	て	の管	理							208
	割り当	行済る	タデー	-タ	• 7	イ	ル	ター	を	表	示す	-3	に	は	208
	データ	・フィ	ィルら	7 —	にコ	L-	ザー	ーお	よ	び	グル	/—	プ	を	
	割り当	行るし	こは.												209
	データ	・フ	ィルら	7—	割り) 当	てる	を削	除	す	るに	は			209

第 16 章 IBM Unica Marketing

Platform	のログ				-		211
システム・	ログについ	τ.					. 211
システム・	ログの構成						. 211

第17章 プロセス・チェックリストの

構成	5
構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルタ	
ーの手動指定)	5
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の	
統合)	6
構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)21	7
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御	
統合)	8
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	8

第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のコーティリティーおよび

Platform のユーティリティーおよび	
SQL スクリプト	219
追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティ	
ーの実行	221
追加マシンに Marketing Platform ユーティリテ	
ィーをセットアップするには	221
リファレンス: Marketing Platform ユーティリティ	
	222
configTool ユーティリティー	222
datafilteringScriptTool ユーティリティー	. 226
encryptPasswords ユーティリティー	. 228
partitionTool ユーティリティー	229
populateDb ユーティリティー	232
restoreAccess ユーティリティー	. 232
scheduler_console_client ユーティリティー	. 234
Marketing Platform SQL スクリプトについて	. 236
リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト	236
全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)	236

データ・フィルターのみの削除		
(ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)		. 237
システム・テーブルの削除		
(ManagerSchema_DropAll.sql)		. 237
システム・テーブルの作成....		. 238

付録 A. 「構成」ページでのプロパティ

ーの構成...............	241
Marketing Platform 構成プロパティー	. 241
全般 ナビゲーション	. 241
全般 データ・フィルタリング	. 242
全般 パスワード設定	. 242
全般」その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	245
プラットフォーム	246
プラットフォーム スケジューラー	248
プラットフォーム スケジューラー 繰り返し	210
定義	248
プラットフォーム スケジューラー スケジュ	240
ール登録 キャンペーン 「オブジェクト・タイ	
	250
	230
ノノットノオーム・スケンユーノー・スケンユ	
ール	051
	. 251
フラットフォーム セキュリティー・・・・	251
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細	
(Login method details) Windows 統合ログイン	
(Windows integrated login)	. 252
プラットフォーム セキュリティー ログイン	
方法の詳細 LDAP	. 254
プラットフォーム セキュリティー ログイン	
方法の詳細 Web アクセス制御	. 257
プラットフォーム セキュリティー ログイン	
方法の詳細 LDAP 同期	. 258
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細	
(Login method details) LDAP 同期 (LDAP	
synchronization) Unica グループへの LDAP 参	
照のマップ (LDAP reference to Unica group	
map)	. 267
IBM Coremetrics 構成プロパティー	268
Coremetrics	268
Coremetrics 統合 パーティション パーティ	
ション[n]	268
Interaction History 構成プロパティー	269
Interaction History	269
Interaction History $\downarrow \pm \forall \forall \forall = \forall = \forall (navigation)$	270
Interaction History パーティション パーティ	270
$\frac{1}{2} \frac{1}{2} \frac{1}$	271
Interportion History パーティンコン パーティ	2/1
$\frac{1}{10000000000000000000000000000000000$	272
$\mathcal{I} \subseteq \mathcal{I} \subseteq$. 212
Interaction History //ーナインヨン //ーナイ	070
$\searrow \exists \checkmark [n] \mid CoreMetrics$	273
Interaction History バーティション バーティ	0
$\gamma \exists \gamma[n] \mid CampaignAndInteract$	277
Interaction History バーティション パーティ	
$\dot{\mathcal{V}} \exists \mathcal{V}[n] \mid eMessage \ldots \ldots \ldots \ldots \ldots$. 279

Internation History Marshall Ress	
Interaction History ハーナインヨン ハーナイ	200
ンヨン[n] + Reports	280
Autibution Modeler 構成ノロハワイー	201
Authorithm Modeler $+ \int L \int - \sqrt{3} \sqrt{(navigation)}$	281
Authorithm Modeler Amelistener	282
	201
$\mathcal{Y} \equiv \mathcal{Y}[\mathbf{n}] + \mathbf{AMFreids} + \mathbf{N} = \mathbf{n} + \mathbf$	284
Autobulon Modeler $+ / (-) + 2 = 2 + / (-) + 2 = 2$	201
$\mathcal{Y} = \mathcal{Y}[\mathbf{n}] \cdot \cdot$	284
Authorithm Modeler $ / - j + 2 = 2 + / - j + 2 = 2$	205
$\mathcal{Y} \equiv \mathcal{Y}[n] + \text{dataSources} $	283
AutoutionWiddeler $+ \sqrt{2} + \sqrt{2} + \sqrt{2} + \sqrt{2}$	
$\mathcal{I} \subseteq \mathcal{I}[\mathbf{n}] + \mathcal{I} = \mathcal{I} = (\text{server}) + \mathcal{I} = \mathcal{I}$	206
$(\text{encoding}). \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots \dots $	280
AttributionModeler $ / - \tau -$	
$\mathcal{I} = \mathcal{I}[\mathbf{n}] + \mathcal{I} = \mathcal{I}(\mathbf{server}) + \mathcal{I} + \mathcal{I} $	201
(logging)	286
Attribution Modeler $ / - f + 2 = 2 + / - f + 2$	200
$\mathcal{V} \exists \mathcal{I}[n] \mid \text{AdvancedOptions} \dots \dots \dots$	288
	290
Reports 統合 Cognos [ハーンヨン]	290
レホート スキーマ [製品] [スキーマ名]	202
SQL 構成	293
	295
レホート スキーマ キャンペーン オファー	
美積	295
レホート スキーマ (Schemas) キャンペーン	
[入キーマ名 (schema name)] 列 [コンタクト	
指標 (Contact Metric)]	296
レホート スキーマ (Schemas) キャンペーン	
[スキーマ名 (schema name)] 列 [レスホンス	
指標 (Response Metric)]	297
レホート スキーマ キャンペーン パフォー	
	299
レボート スキーマ キャンペーン オファ	
ー・レスホンス内訳	300
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン	
オファー・レスポンスによるブレークアウト	
(Offer Response Breakout) [レスボンス・タイプ	
(Response Type)]	300
レポート スキーマ キャンペーン キャンペ	
ーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳	301
レポート スキーマ キャンペーン キャンペ	
ーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳	
[コンタクト・ステータス・コード]	302
レポート スキーマ キャンペーン カスタム	
属性 カラム [キャンペーン・カスタム・カラ	
Δ]	303
レポート スキーマ キャンペーン カスタム	
属性 カラム [オファー・カスタム・カラム] .	304
レポート スキーマ キャンペーン カスタム	
属性 カラム [セル・カスタム・カラム]	305
レポート スキーマ Interact	305
レポート スキーマ Interact 対話実績	306
レポート スキーマ eMessage	307
Marketing Operations 構成プロパティー	308

Marketing Operations
Marketing Operations Navigation
Marketing Operations About
Marketing Operations umoConfiguration 311
Marketing Operations umoConfiguration
templates
Marketing Operations umoConfiguration
attachmentFolders
Marketing Operations umoConfiguration email 321
Marketing Operations umoConfiguration markup 322
Marketing Operations umoConfigurations grid 323
Marketing Operations umoConfiguration
workflow 325
Marketing Operations umoConfiguration
integration Services 326
Marketing Operations umoConfiguration
sommoion Integration
Marketing Operations LymaConfiguration L reports 227
Marketing Operations unoconfiguration reports 327
Marketing Operations + umoConfiguration +
invoiceRollup
Marketing Operations umoConfiguration
database
Marketing Operations umoConfiguration
listingPages
Marketing Operations umoConfiguration
objectCodeLocking
Marketing Operations umoConfiguration
thumbnailGeneration
Marketing Operations umoConfiguration
notifications
Marketing Operations umoConfiguration
notifications email
Marketing Operations umoConfiguration
notifications project
Marketing Operations umoConfiguration
notifications projectRequest
Marketing Operations umoConfiguration
notifications program
Marketing Operations umoConfiguration
notifications marketingObject
Marketing Operations umoConfiguration
notifications approval
Marketing Operations umoConfiguration
notifications asset
Marketing Operations umoConfiguration
notifications invoice
Campaign 構成プロパティー
Campaign
Campaign Collaborate
Campaign navigation
Campaign caching
Campaign partitions
Campaign パーティション パーティション[n]
eMessage
Campaign パーティション パーティション[n]
reports

Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V}[n]$ Campaign | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} [n] Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} = \mathcal{V}$ | サーバー (server) | エンコード (encoding) . . 419 Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V}[n]$ Campaign | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} [n] Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | パーティション | パーティション[n] Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} [n] Campaign | パーティション | パーティション[n] Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V$ Campaign | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{I} > \mathcal{I} > \mathcal{I} [n] Campaign | パーティション | パーティション[n] eMessage | serverComponentsAndLocations | eMessage | $\mathcal{N} - \mathcal{F} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V} + \mathcal{V} = \mathcal{N} - \mathcal{V} + \mathcal{V$ eMessage | パーティション | パーティション[n] eMessage | \mathcal{N} - \mathcal{F} \mathcal{T} \mathcal{T} eMessage | パーティション | パーティション[n] 461

Interact ランタイム環境構成プロパティー 461
Interact 設計環境構成プロパティー 500
Optimize 構成プロパティー
Campaign unicaACOListener
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize sessionRunMonitor
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize MemoryTuning
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize userTemplateTables
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize AlgorithmTuning
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize Debug
Campaign パーティション パーティション[n]
Optimize logging
Campaign unicaACOOptAdmin
Distributed Marketing 構成プロパティー 534
ナビゲーション
構成設定
付録 B. Cognos レホートのスタイル・
ガイド

グローバル・レポートのスタイル.				. 563
レポートのページ・スタイル				. 567
リスト・レポート・スタイル				. 567
クロス集計レポートのスタイル .				. 569
チャートのスタイル				. 570
ダッシュボード・レポートのスタイ	ル			. 571

付録 C. レポートおよびレポート・スキ

ーマ															573
eMessa	gel	ノポ	<u>~</u>	トオ	うよ	び	レズ	ポー	\cdot \vdash	• 7	マキ	-	7		575
Interact	tν	ポ	- 1	、お	よう	びし	/ボ	<u>,</u> —	ト・	・ス	丰	-~	7		576

付録 D. IBM Unica フレーム・セット	
の再ブランド設定	579
企業テーマを準備するには	580
企業テーマを適用するには	580
IBM Unica テクニカル・サポートへの	

お問い合わ	a . りせ		- /	-		·	-	•	-		581
特記事項.											583

第1章 IBM Unica Marketing Platform の概要

IBM[®] Unica[®] Marketing Platformは、以下の機能を備えています。

- IBM Unica Marketing の多くの製品に関するレポート作成に対応。
- 認証および権限認可を含め、IBM アプリケーションのセキュリティーに対応。
- 構成管理。これには、ユーザーのロケール設定の指定、および一部の IBM Unica Marketing アプリケーションの構成プロパティーを編集するためのインターフェー スも含まれています。
- スケジューラー。これを使用して、定義した間隔で実行するようにプロセスを構成することができます。
- ダッシュボード・ページ。これを構成して、社内でさまざまな役割を担当するユ ーザーのグループに役立つ情報を組み込むことができます。
- IBM 製品の共通ユーザー・インターフェース。

IBM Unica Marketing のセキュリティー機能について

Marketing Platform のセキュリティー機能は、中央リポジトリーと Web ベースのイ ンターフェースで構成され、ここで IBM Unica Marketing 内部ユーザーが定義さ れ、IBM Unica Marketing アプリケーション内の機能に対するさまざまなレベルの アクセス権限がユーザーに割り当てられます。

IBM Unica Marketing アプリケーションは、Marketing Platform のセキュリティー機 能を使用して、ユーザーを認証し、ユーザーのアプリケーション・アクセス権限を 検査し、ユーザーのデータベース資格情報およびその他の必要な資格情報を格納し ます。

IBM Unica で使用されているセキュリティー・テクノロジー

Marketing Platform では、業界標準の暗号化方式を採用して、認証を実行し、すべての IBM Unica Marketing アプリケーションにわたってセキュリティーを適用しています。ユーザーおよびデータベースのパスワードは、多様な暗号化テクノロジーを使用して保護されています。

役割による権限管理

Marketing Platform では、ほとんどの IBM Unica Marketing アプリケーション内部 の機能に対するユーザーの基本アクセス権限を定義しています。さらに、Campaign および Marketing Platform の場合は、アプリケーション内部の機能およびオブジェ クトに対するユーザーのアクセス権限を制御することができます。

さまざまな権限を役割に割り当てることができます。その後は、以下のいずれかの 方法で、ユーザーの権限を管理することができます。

- 個別ユーザーに役割を割り当てる
- グループに役割を割り当て、ユーザーをそのグループのメンバーにする。

Campaign のパーティションについて

Marketing Platform は、Campaign ファミリーの製品でパーティションに対するサポ ートを提供しています。パーティションは、異なるユーザー・グループに関連付け られたデータを保護する方法を提供します。 Campaign または関連の IBM Unica Marketing アプリケーションをマルチパーティションを操作できるように構成する と、アプリケーション・ユーザーにとっては、各パーティションはアプリケーショ ンの個別インスタンスとして表示され、同じシステムに他のパーティションが存在 することはまったく表示されません。

グループについて

サブグループは、その親に割り当てられたユーザー・メンバーと役割を継承しま す。 IBM Unica Marketing 管理者は無限数のグループを定義でき、どのユーザーも 複数のグループのメンバーになることができます。これによって、役割のさまざま な組み合わせを作成しやすくなります。例えば、1 人のユーザーは、eMessage 管理 者であると同時に、管理権限を持たない Campaign ユーザーになることができま す。

1 つのグループは、1 つのパーティションのみに所属することができます。

データ・ソース資格情報の管理

ユーザーと管理者の両方が、ユーザーのデータ・ソース資格情報を事前にセットア ップすることができます。そのため、データ・ソースへのアクセスが必要な IBM Unica アプリケーションで作業する際に、データ・ソース資格情報の入力を求める プロンプトがユーザーに表示されることはありません。

外部のユーザーおよびグループ管理システムとの統合

IBM Unica Marketing は、ユーザーおよびリソースを集中管理するために使用され る外部システムと統合するように構成することができます。このようなシステムに は、Windows Active Directory Server、サポートされる他の LDAP ディレクトリ ー・サーバー、および Netegrity SiteMinder や IBM Tivoli Access Manager などの Web アクセス制御プラットフォームがあります。これによって、エラー、サポー ト・コスト、およびアプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減 少します。

データ・フィルター

Marketing Platform は、IBM Unica Marketing 製品でのデータ・アクセス制限を指定 できる、構成可能なデータ・フィルターをサポートしています。データ・フィルタ ーを使用すると、IBM ユーザーが IBM Unica アプリケーションで表示して操作で きる顧客データを制限することができます。

構成管理について

「構成」ページから、IBM Unica Marketing アプリケーションの中央構成プロパティーにアクセスすることができます。Marketing Platform の管理者権限を持つユーザーは、「構成」ページを使用して以下のことができます。

- 構成プロパティーを表示する。構成プロパティーは、製品別にカテゴリーおよび サブカテゴリーの階層に編成されています。
- 構成プロパティーの値を編集する。
- 一部のカテゴリーを削除する (削除できるカテゴリーは、「設定」ページの「カ テゴリーの削除」リンクに表示されます)。

Marketing Platform で提供されるユーティリティーを使用して、「構成」ページで追加の変更を行うことができます。詳しくは、222ページの『configTool ユーティリティー』を参照してください。

IBM Unica Marketing のローカライズ

Marketing Platform は、文字セットのエンコード機能を備え、管理者が個別ユーザー または全ユーザーのロケール設定を指定できるようにすることで、ローカライズに 対応しています。ユーザーが自分のロケール設定を指定することもできます。

管理者は、内部ユーザーおよび外部ユーザーの両方に対して、ユーザーごとに、またはこの機能をサポートする IBM Unica アプリケーション全体にわかって、ロケール設定を指定することができます。この設定は、IBM Unica アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

Marketing Platform は、デフォルトの文字セット・エンコードとして UTF-8 をサポ ートしています。したがって、ユーザーは任意の言語 (例えば中国語や日本語) でデ ータを入力できます。ただし、Marketing Platform での文字セットの完全サポート は、以下の構成によっても異なることに注意してください。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベース
- IBM Unica Marketing にアクセスするために使用されるクライアント・マシンお よびブラウザー

共通ユーザー・インターフェース

Marketing Platform は、IBM Unica Marketing アプリケーション用の共通のアクセス・ポイントとユーザー・インターフェースを備えています。共通インターフェースには以下の機能があります。

- 複数の IBM Unica Marketing 製品がインストールされている場合、新規ウィンド ウを起動せずに製品間で移動できます。
- 「最新」メニューを使用して、最近訪問したページのリストを表示し、それらの 任意のページに移動できます。
- IBM Unica Marketing ページをホーム・ページ (ログインしたときに最初に表示 されるページ) として設定でき、「ホーム」アイコンをクリックしていつでもそ のページに戻ることができます。
- 「検索」フィールドを使用して、インストール済みの各製品の検索機能にアクセ スできます。この検索機能のコンテキストは表示中のページです。例えば、 Campaign 内部でキャンペーンのリストを表示している場合、検索はキャンペーン 全体を対象に実行されます。特定の Marketing Operations プロジェクトを検索し たい場合は、Marketing Operations プロジェクトのリストを表示しているときに検 索を実行すればよいことになります。

IBM Unica Marketing にログインするには

以下の要件を満たす必要があります。

- IBM Unica Marketing サーバーに接続するためのイントラネット (ネットワーク) 接続
- サポートされるブラウザーがご使用のコンピューター上にインストール済み
- IBM Unica Marketing にログインするユーザー名とパスワード
- ネットワーク上の IBM Unica Marketing にアクセスする URL

URL は以下のとおりです。

http://host.domain.com:port/unica

ここで、

host は、Marketing Platform がインストールされているマシンです。

domain.com は、ホスト・マシンが常駐するドメインです。

port は、Marketing Platform アプリケーション・サーバーが listen しているポート 番号です。

注:以下の手順では、Marketing Platform に対する管理者権限を持つアカウントを使用してログインしているものとします。

ブラウザーを使用して IBM Unica Marketing URL にアクセスします。

- IBM Unica Marketing が、Windows Active Directory または Web アクセス制御プ ラットフォームと統合するように構成されていて、そのシステムにログインして いる場合は、デフォルトのダッシュボード・ページが表示されます。これでログ インは完了です。
- ログイン画面が表示されたら、デフォルトの管理者資格情報を使用してログイン します。単一パーティション環境では、asm_admin で、パスワードに password を使用してログインします。マルチ・パーティション環境では、platform_admin で、パスワードに password を使用してログインします。

パスワードを変更するように求めるプロンプトが表示されます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティーを高めるために新規パスワード を選択してください。

IBM Unica Marketing が SSL を使用するように構成されている場合、初めてサインインしたときにデジタル・セキュリティー証明書の受け入れを求めるプロンプトが出ることがあります。証明書を受け入れるには、「はい」をクリックします。

ログインが成功すると、IBM Unica Marketing でデフォルトのダッシュボード・ペ ージが表示されます。ダッシュボード・ページを構成するまでは、そのページ上に 「ページが見つかりません」というメッセージが表示される場合があります。

Marketing Platform 管理者アカウントに割り当てられているデフォルトの権限では、 「設定」メニューの下にリストされたオプションを使用して、ユーザー・アカウン トとセキュリティーを管理することができます。IBM Unica Marketing ダッシュボ ードを管理するには、**platform_admin** としてログインする必要があります。

第 2 章 内部ユーザー・アカウントの管理

このセクションでは、IBM Unica Marketing Platform ユーザー・インターフェース を使用して作成されたユーザー・アカウント (内部アカウントと言います)の属性を 管理する方法について説明します。これは、LDAP サーバーや Web アクセス制御 システムなどの外部システムからインポートされた外部ユーザー・アカウントとは 対照的なものです。Marketing Platform ユーザー・インターフェースを使用して内部 アカウントを管理することができます。外部アカウントは外部システムで管理され ます。

ユーザー・アカウントのタイプ:内部および外部

IBM Unica Marketing が外部サーバー (サポートされている LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合は、2 種類のユーザー・ア カウントをサポートします。

- 内部 セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるユーザー・アカウント。これらのユーザーは IBM Unica Marketing によって認証されます。
- 外部 外部サーバーとの同期化によって IBM Unica Marketing にインポートされるユーザー・アカウント。この同期化が行われるのは、IBM Unica Marketing が外部サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザーは、外部サーバーによって認証されます。外部サーバーの例は、LDAP サーバーおよび Web アクセス制御サーバーです。

ご使用の構成に応じて、内部ユーザーのみ、外部ユーザーのみ、または両方の組み 合わせを使用することができます。IBM Unica Marketing と Windows Active Directory を統合し、Windows 統合ログインを有効にしている場合、外部ユーザーの みを使用することができます。

IBM Unica Marketing と LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部ユーザーの管理

通常、外部ユーザー・アカウントの属性は、外部システムによって管理されます。 IBM Unica Marketing 内では、外部ユーザー・アカウントの以下の 2 つの側面のみ を制御することができます。内部グループのメンバーシップ (ただし、外部グルー プは不可)、および IBM Unica Marketing アプリケーションのロケールに影響する 設定。

IBM Unica Marketing インターフェースでの内部ユーザーと外部ユ ーザーの識別

IBM Unica Marketing のユーザー・セクションでは、内部ユーザーと外部ユーザーとでは、次のように別のアイコンを使用しています。



内部ユーザー・アカウントのプロパティーについて

このセクションでは、内部ユーザー・アカウントのプロパティーについて詳しく説 明します。

ユーザーがパスワードを忘れた場合

Marketing Platform は、内部ユーザー・パスワードをハッシュ形式で格納しており、 これらの格納済みパスワードを平文に戻すことはできません。内部アカウントを持 つユーザーがパスワードを忘れた場合は、新規パスワードを割り当てる必要があり ます。

パスワードのリセット

内部アカウントを持つユーザーは、自分のパスワードを変更できます。それには、 元のパスワードを入力し、新規パスワードを入力して確認します。 IBM Unica Marketing 管理者も、必要な場合にはどのユーザーのパスワードでもリセットするこ とができます。

パスワード有効期限

すべての内部ユーザーに対するパスワード有効期限を「構成」ページで設定できま す。内部ユーザーに対して(システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されて いない場合)ユーザーごとに有効期限を設定することもできます。

内部アカウントのシステム・ステータス

内部システム・ステータスのシステム・ステータスは、「アクティブ」か「無効」 のいずれかです。無効なアカウントのユーザーは、いずれの IBM Unica Marketing アプリケーションにもログインできません。無効なユーザー・アカウントが以前に はアクティブで、1 つ以上のグループのメンバーシップを持っている場合、そのア カウントを再びアクティブにできます。無効なユーザー・アカウントをアクティブ にする際、グループ・メンバーシップはそのまま保持されます。

内部アカウントの代替ログイン

任意の内部ユーザー・アカウントについて、代替ログインを指定することができま す。通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシステムの root として実行される場合に必要です。

内部アカウントのデータ・ソース

ユーザーは、一部の IBM Unica Marketing アプリケーションで使用されるデータ・ ソースにアクセスする際には適切な資格情報が必要です。その場合、内部ユーザ ー・アカウント・プロパティーに資格情報を入力することができます。 Campaign などの IBM Unica Marketing アプリケーションで作業していて、デー タ・ソース情報を求めるプロンプトが表示された場合、IBM Unica Marketing アプ リケーションは、この情報を Marketing Platform データ・ストアに格納します。こ れらのデータ・ソースは、IBM Unica Marketing インターフェースを使用して作成 されていない場合でも、Marketing Platform でユーザーのデータ・ソース・リストに 表示されます。

新規ユーザー・アカウントを追加するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 左のペインにある「Username」リストの上の「新規ユーザー」ボタンをクリックします。

右のペインに「新規ユーザー」ページが表示されます。

3. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックします。

ウィンドウに「正常に保存しました」 というメッセージが表示されます。

4. 「**OK**」をクリックします。

左のペインのリストに新規ユーザー名が表示されます。

ユーザー・アカウントを削除するには

重要: Campaign 権限が、Campaign オブジェクトに対する所有権またはアクセス権 限を単一ユーザーに制限するようにセットアップされている場合、そのユーザーの アカウントを削除すると、オブジェクトにアクセスできなくなります。そのような アカウントは削除するのではなく、代わりに無効に設定する必要があります。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 削除するアカウントのユーザー名をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. 右のペインのアカウント詳細の上にある「**ユーザーの削除 (Delete User)**」ボタ ンをクリックします。

「このユーザーを削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに 表示されます。

4. 「**OK**」をクリックします。

ユーザー・アカウントが削除され、「Username」リストからユーザー名が除去 されます。

内部ユーザーのパスワード有効期限を変更するには

システム全体のパスワード有効期限プロパティーが「満了なし」に設定されている 場合は、個々のユーザーのパスワードの有効期限は変更できません。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. ユーザー名をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。

編集可能フィールドにユーザーの詳細が表示されます。

4. 「PW の有効期限 (PW expiration)」フィールドの日付を変更します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

5. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、新しいパスワードの有効期限を含めて、ユーザー・アカウントの 詳細が表示されます。

内部ユーザー・パスワードをリセットするには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するユーザー名をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「**パスワードのリセット**」リンクをクリックします。

右ペインにユーザーの「パスワードのリセット」ページが表示されます。 4. 「**パスワード**」フィールドに新規パスワードを入力します。

パスワードを入力すると、実際のパスワード・テキストの代わりにアスタリスク が表示されます。

- 5. 「確認」フィールドに同じパスワードを入力します。
- 6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「パスワードが正常にリセットされました」というメッセージが表 示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

注: ユーザー・パスワードをリセットすると、ユーザーが次回 IBM Unica Marketing アプリケーションにログインするときに、パスワードを変更するよう に求めるプロンプトが出されます。

内部ユーザー・アカウントのプロパティーを変更するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。

右のペインに「プロパティーの編集」ページが表示され、編集可能フィールドに ユーザーの詳細が表示されます。

4. 必要に応じてフィールドを編集します。

ユーザーのパスワードをリセットするには、10ページの『内部ユーザー・パス ワードをリセットするには』を参照してください。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、新規ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

内部ユーザーのシステム・ステータスを変更するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。

右のペインに「プロパティーの編集」ページが表示され、編集可能フィールドに ユーザーの詳細が表示されます。

4. 「**ステータス**」ドロップダウン・リストからステータスを選択します。オプションは「ACTIVE」および「DISABLED」です。

注:「DISABLED」を選択すると、ユーザーはすべての IBM Unica Marketing アプリケーションにログインできなくなります。Marketing Platform に対する管 理者権限を持つユーザー自体を使用不可にすることはできません。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。 6. 「**OK**」をクリックします。

右のペインに、新規ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

内部ユーザー・データ・ソースを追加するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをク リックします。

右のペインにユーザーの「データ・ソース・リスト」ページが表示されます。

4. 「新規追加」をクリックします。

右のペインに「新規データ・ソース」ページが表示されます。

5. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

右のペインにユーザーの「データ・ソース・リスト」ページが表示され、新規デ ータ・ソース名およびデータ・ソース・ログインがリストされます。

内部ユーザー・データ・ソースのパスワードまたはログイン名を変更するに は

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをク リックします。

右のペインにユーザーの「データ・ソース・リスト」ページが表示されます。

4. 変更する「**データ・ソース名**」をクリックします。

右のペインに「データ・ソース・プロパティーの編集」ページが表示され、すべての編集可能フィールドにデータが入っています。

5. フィールドを編集します。詳しくは、11ページの『内部ユーザー・アカウント のプロパティーを変更するには』を参照してください。

新規パスワードを設定しない場合は、元のパスワードが保持されます。 6. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。 7. 「**OK**」をクリックします。 右のペインにユーザーの「データ・ソース・リスト」ページが表示され、新規ロ グイン名 (変更した場合) がリストされます。

内部ユーザーのデータ・ソースを削除するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「ユーザー」リストが表示されます。

2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

右のペインに、ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをク リックします。

ユーザーのデータ・ソースがリストされます。

4. 削除するデータ・ソースの名前をクリックします。

データ・ソースの詳細がリストされます。

5. 「削除」をクリックします。

「このデータ・ソースを削除してもよろしいですか」というメッセージがウィン ドウに表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

ユーザーのデータ・ソースがリストされ、削除したデータ・ソースが除去されて います。

「ユーザー」ウィンドウのリファレンス

新規ユーザー

フィールド	説明
名	ユーザーの名前。
姓	ユーザーの姓。
ログイン	ユーザーのログイン名。必須フィールドはこのフィールドだけで す。

フィールド	説明
パスワード	ユーザーのパスワード。
	パスワードを作成する場合は以下の規則に従ってください。
	 パスワードには大/小文字の区別があります。例えば、password と Password は同じではありません。
	 IBM Unica Marketing でパスワードを作成またはリセットする場合は、任意の文字を使用することができます。
	追加のパスワード要件は「構成」ページで設定します。IBM Unica Marketing のインストール先のパスワード要件を表示するには、「パ スワード」フィールドの横の「パスワード規則 (Password Rules)」 リンクをクリックします。
パスワードの確認	「 パスワード 」フィールドに入力したものと同じパスワード。
肩書き	ユーザーの肩書き。
部門	ユーザーの部門。
会社	ユーザーの会社
国	ユーザーの国
住所	ユーザーの住所
電話 (会社)	ユーザーの電話番号 (会社)。
携帯電話	ユーザーの携帯電話番号。
電話 (自宅)	ユーザーの自宅の電話番号。
E メール・アドレス	ユーザーの電子メール・アドレス。
	このフィールドは、RFC 821 で定義されている電子メール・アドレ スに準拠していなければなりません。詳しくは、「RFC 821」を参 照してください。
代替ログイン	ユーザーの UNIX ログイン名 (ある場合)。
	通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシス テムの root として実行される場合に必要です。
ステータス	ドロップダウン・リストから「ACTIVE」または「DISABLED」を選 択します。
	デフォルトでは「ACTIVE」が選択されています。
	無効にされたユーザーは、すべての IBM Unica Marketing アプリケ ーションにログインできなくなります。

プロパティーの編集

フィールドは、次の表に示すものを除いて、「新規ユーザー」ウィンドウのフィールドと同じです。

フィールド	説明
パスワード	このフィールドは、「プロパティーの編集」ウィンドウでは使用で きません。
ログイン	このフィールドは、「プロパティーの編集」ウィンドウでは使用で きません。
PW の有効期限	ユーザーのロケールに適した形式の日付 (例えば、en_US の場合、 形式は MM, dd, yyyy です)。
	システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されている場合は、 ユーザーの有効期限を変更することはできません。

パスワードのリセット

フィールド	説明
パスワード	新規パスワード
確認	「 パスワード 」フィールドに入力したものと同じパスワード。

新規データ・ソース / データ・ソース・プロパティーの編集

フィールド	説明
データ・ソース	ユーザーが IBM Unica Marketing アプリケーションからアクセスで きるようにするデータ・ソースの名前。IBM Unica Marketing の名 前は、表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較お よび作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、 customer と Customer というデータ・ソース名を両方作成すること はできません)。必須。
データ・ソース・ロ グイン	このデータ・ソースのログイン名。必須
データ・ソース・パ スワード	このデータ・ソースのパスワード。データ・ソース・アカウントに パスワードが設定されていない場合には、このフィールドを空のま まにできます。
パスワードの確認	パスワードの再入力(「 データ・ソース・パスワード 」フィールド を空にした場合は、ここも空のままにしてください)。

ユーザーごとのロケール設定の指定

内部ユーザーと外部ユーザーの両方について、ロケール設定をユーザーごとに指定 することができます。この設定は、IBM Unica Marketing アプリケーションの言 語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

IBM Unica Marketing 全体ですべてのユーザーに適用されるデフォルトの設定もあ ります。詳しくは、61ページの『デフォルトのユーザー・ロケール設定について』 を参照してください。

このプロパティーを個別ユーザーに設定する場合、そのユーザーに適用する設定が デフォルト設定をオーバーライドします。

注: ロケールの可用性は IBM Unica Marketing アプリケーションによって異なる場合があり、必ずしもすべての IBM Unica Marketing アプリケーションがこのロケール設定をサポートしているわけではありません。IBM Unica Marketing でのロケール設定の可用性とサポートを判別するには、具体的な製品資料を参照してください。

ユーザーのロケール設定を設定するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

「Username」リストが表示されます。

2. ロケール設定を設定するユーザー名をクリックします。

ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「構成設定の編集 (Edit Configuration Preferences)」リンク をクリックします。

ユーザーの「設定」ページが表示されます。

4. 左のペインで「**スイート**」をクリックします。

新しいウィンドウに「地域」設定プロパティーが表示されます。

- 5. ドロップダウン・リストからオプションを選択します。
- 6. 「保存して終了する」をクリックします。

設定が保存され、「設定」ページが閉じ、「ユーザー」ページに戻ります。

外部ユーザーの同期化の強制

IBM Unica Marketing を Windows Active Directory または LDAP サーバーと統合 されるように構成した場合、事前定義された間隔でユーザーとグループが自動的に 同期化されます。この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更された ユーザーおよびグループのみが IBM Unica Marketing に組み込まれます。IBM Unica Marketing の「ユーザー」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザーお よびグループを強制的に同期化することができます。

外部ユーザーの同期化を強制するには、このセクションの手順を使用してください。

外部ユーザーの強制同期化

- 1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックしま す。
- 2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

第 3 章 IBM Unica Marketing でのセキュリティーの管理

IBM Unica Marketing Platform は、IBM Unica Marketing アプリケーション内のオ ブジェクトおよび機能へのユーザー・アクセスを制御するための役割および権限を サポートしています。

IBM Unica Marketing 製品のバージョン 8.0.0 では、Marketing Platform のセキュリ ティー機能を使用してユーザーのアプリケーション・アクセスを詳細に管理できる のは、Marketing Platform 自体および Campaign のみです。その他の IBM Unica Marketing 製品は、Marketing Platform によって設定される一部の基本的なアプリケ ーション・アクセス役割を使用するだけで、詳細なセキュリティー設定はなく、設 定がユーザー・インターフェースの Marketing Platform 領域に入ることもありませ ん。IBM Unica Marketing 製品は、権限を以下のように管理します。

 Marketing Platform では、役割および権限は Marketing Platform 管理ページへの ユーザーのアクセスと、ユーザーが自分のアカウント以外のユーザー・アカウン トを変更する能力を制御します。管理者は、これらの役割を「ユーザーの役割と 権限」ページで管理します。

レポート機能は Marketing Platform のコンポーネントですが、この機能に「ユー ザーの役割と権限」ページに専用のエントリーがあり、幅広い基本的な権限のみ を持つデフォルト役割があります。

- Interaction History および Attribution Modeler では、役割および権限によって、管理ページへのユーザーのアクセスと、レポートを表示する能力を制御します。管理者は、これらの役割を「ユーザーの役割と権限」ページで管理します。
- Campaign では、権限はオブジェクトに対するユーザーのアクセスと、オブジェクトに関する各種のアクションを実行するユーザーの能力を制御します。 Campaign でのみ、権限をフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用することができ、複数の役割を1つのポリシーにグループ化して、そのポリシーをユーザーまたはユーザー・グループに割り当てることができます。管理者は Campaign の役割を「ユーザーの役割と権限」ページで管理します。
- Marketing Operations の場合、「ユーザーの役割と権限」ページでの基本的な役割のセットアップは、カスタマイズされたセキュリティー・スキームを開発するための出発点にすぎません。Marketing Operations には、Marketing Operations 領域のユーザー・インターフェースを使用して管理できる詳細なセキュリティー・スキームがあります。
- Distributed Marketing、 eMessage、Interact、 Lead Referrals、および PredictiveInsight には、アプリケーション・アクセスのための幅広い基本的な権限 を持つデフォルトの役割があります。これらのアプリケーションへのユーザー・ アクセスを詳細に定義できる権限はありません。
- Optimize、 CustomerInsight、および NetInsight には、Marketing Platform での役 割または権限はありません。

IBM Unica Marketing でのセキュリティー管理に関する情報の入手先

IBM Unica Marketing のセキュリティー管理に関する情報を以下の方法で見つける ことができます。

- Marketing Platform での役割および権限を持つすべての製品 本書では、ユー ザー単位で、またはグループ・メンバーシップを介して行うユーザーへの役割の 割り当てに関する情報を示します。
- Marketing Platform、 Interaction History、および Attribution Modeler この 章では、Marketing Platform、Interaction History、および Attribution Modeler の権 限を管理するための情報を取り上げます。

レポート機能については、基本的な権限はこの章で説明されていますが、セキュ リティーがレポートでどのように機能するかについての詳細は、66ページの『レ ポートおよびセキュリティーについて』に記載されています。

- **Campaign** 本書の 39 ページの『第 4 章 IBM Unica Campaign でのセキュリ ティーの管理』を参照してください。
- Interact、 eMessage、PredictiveInsight、 Distributed Marketing 基本的な役割の説明については、34ページの『リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。
- Marketing Operations 基本的な役割の説明については、34 ページの『リファ レンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。セキュ リティー機構のセットアップの詳細は、Marketing Operations の製品資料を参照し てください。

Marketing Platform でのセキュリティー管理について

Marketing Platform 内で AdminRole または PlatformAdminRole 役割を持つユーザー のみが、自分以外のユーザー・アカウントのセキュリティー管理機能にアクセスす ることができます。マルチパーティション環境では、PlatformAdminRole 役割を持つ ユーザーのみが、パーティションにまたがってユーザーを管理することができま す。AdminRole 役割を持つユーザーは、自分のパーティション内のユーザーのみを 管理できます。

Marketing Platform 管理者は、「ユーザー・グループ」ページおよび「ユーザーの役割と権限」ページを使用して、以下のタスクを実行します。

- 内部グループを作成し、そのメンバーシップとパーティション割り当てを管理する。
- 必要に応じて、Marketing Platform および Campaign の役割を作成し、これらの 役割に権限を割り当てる。
- 個別ユーザー、内部グループ、または外部グループのいずれかまたはすべてに役 割を割り当てることによって、IBM Unica Marketing アプリケーションに対する ユーザー・アクセスを管理する。

この概説を読んで、以下の事項を理解してください。

- 内部グループと外部グループの違い
- 内部グループを作成して役割および権限を割り当てるプロセス
- 内部グループのプロパティー

• Marketing Platform 内で事前構成されているユーザー・アカウント、グループ、お よび役割

Marketing Platform および Campaign での役割と権限について

Marketing Platform および Campaign での役割は、構成可能な権限の集合です。 Marketing Platform および Campaign での役割ごとに、アプリケーションへのアクセ スを制御する権限を指定できます。デフォルトの役割を使用するか、新しい役割を 作成することができます。使用可能な権限のセットは、システムによって定義され ており、新しい権限を作成することはできません。

役割割り当てについて

一般に、ユーザーに与える役割は、そのユーザーが IBM Unica Marketing を使用す るときに組織内で実行する機能を反映した権限を持つ役割にしてください。役割 は、グループに割り当てるか、個々のユーザーに割り当てることができます。グル ープによって役割を割り当てる利点は、役割の組み合わせをグループに割り当てる ことができ、後でその組み合わせを変更する場合は、複数のユーザーについて何度 も変更を行う必要がなく、1 個所で変更できることです。グループによって役割を 割り当てる場合は、グループにユーザーを追加または削除することによって、ユー ザー・アクセスを制御します。

システムが役割を評価する方法

ユーザーが複数の役割を持つ場合、システムはそれらすべての役割をまとめたもの から、権限を評価します。特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力 は、すべての役割から集約された権限に基づいて認可あるいは否定されます。 Campaign の場合、特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力は、そのオ ブジェクトのセキュリティー・ポリシーに基づいて認可あるいは否定されます。

Marketing Platform でのセキュリティー管理プロセス

Marketing Platform のセキュリティー管理機能を使用してユーザー・アプリケーションのアクセスを管理する操作は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、 基本プロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

ユーザー・アプリケーション・アクセスを管理するには

- Marketing Platform、Interaction History、Attribution Modeler、および Campaign へのユーザー・アクセスを制御するために使用する役割を計画します。これらの 役割とその権限を必要に応じて構成します。
- セキュリティー要件の達成に必要なグループを計画します。システムをどのよう に構成するかに応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、またはその両方 の組み合わせが必要になります。
- 3. 必要な内部グループおよび外部グループを作成します。
- 4. グループを役割に割り当てます。
- 5. 内部ユーザー・アカウントのみを使用する場合は、内部ユーザー・アカウントを 必要に応じて作成します。

6. ユーザーに許可したいアプリケーション・アクセスに基づいて、ユーザーをグル ープに割り当てるか、役割を個別ユーザーに割り当てます。

グループのタイプ:内部および外部

IBM Unica Marketing が外部サーバー (サポートされている LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合は、2 種類のグループをサ ポートします。

内部 – セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるグループ。これらのユーザーは IBM Unica Marketing によって認証されます。

外部 – 外部システムのグループにマップされる IBM Unica Marketing グルー プ。この同期化が行われるのは、IBM Unica Marketing が外部サーバーと統合さ れるよう構成されている場合のみです。外部サーバーの例は、LDAP サーバーお よび Web アクセス制御サーバーです。本書で外部グループと言われるグループ は、実際には IBM Unica Marketing で作成されていて、外部システムにマップさ れているグループであることに注意してください。

ご使用の構成に応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、または両方の組み 合わせを使用することができます。

IBM Unica Marketing と LDAP または Windows Active Directory サーバーとの統 合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部グループの管理

外部グループのメンバーシップは、外部システムで管理されます。

内部グループと同じように、マップされた外部グループに役割を割り当てることが できます。

内部グループおよびサブグループの管理

管理者は、内部グループをいくつでも無制限に定義することができます。また、どの内部ユーザーも外部ユーザーも、複数の内部グループおよびサブグループのメン バーになることができます。

サブグループは、その親に割り当てられたユーザー・メンバーと役割を継承しま す。グループとそのサブグループは、常に1つのパーティションに所属します。

パーティションに割り当てることができるのは内部グループのみであり、マルチパ ーティション環境ですべてのパーティションにグループを作成できるのは、 platform_admin ユーザーのみ、または PlatformAdminRole の役割を持つ別のアカウ ントのみです。

パーティションおよびセキュリティーの管理について

Campaign および関連製品のパーティションは、異なるユーザー・グループに関連付 けられたデータを保護する方法を提供します。区分化を使用すると、ユーザーのパ ーティションは別個に実行されている Campaign のインスタンスのように表示さ れ、同じシステムで他のパーティションがまったく実行されていないように見えま す。このセクションでは、マルチパーティション環境でのセキュリティー管理の特 殊な考慮について説明します。

パーティションでのユーザー・メンバーシップ

ユーザーを、そのグループ・メンバーシップに基づいてパーティションに割り当て ることができます。パーティションへのアクセス権限をユーザーに与えるには、ま ずグループをパーティションに割り当て、その後でユーザーをグループに割り当て ます。

1 つのグループまたはサブグループは、1 つのパーティションのみに割り当てるこ とができます。サブグループのパーティション割り当てを親グループが獲得するこ とはありません。グループをパーティションに割り当てることができるのは、 platform_admin ユーザーか、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウント だけです。

1人のユーザーは1つのパーティションのみのメンバーにする必要があります。

役割とパーティションについて

パーティションとの関連では、必ず役割が存在します。単一パーティション環境で は、すべての役割がデフォルトのパーティションである partition1 に自動的に作成 されます。マルチパーティション環境では、役割は、パーティションを作成したユ ーザーのパーティション内に作成されます。例外は platform_admin ユーザーおよび PlatformAdminRole 役割を持つその他の任意のアカウントで、これらのアカウントは どのパーティションにでも役割を作成することができます。

パーティションについての詳細

このセクションでは、パーティションへのグループの割り当て、およびグループへ のユーザーの割り当てについて説明します。パーティションの構成について詳しく は、Campaign のインストール資料を参照してください。

事前構成されたユーザーおよび役割

IBM Unica Marketing が最初にインストールされた時点では、このセクションで説明するように、3 つのユーザーが事前構成され、Marketing Platform および Campaign のシステム定義の役割が割り当てられています。

これらの内部ユーザー・アカウントはすべて、デフォルト・パスワードとして 「password」を使用しています。

platform_admin ユーザー・アカウント

platform_admin ユーザー・アカウントは、IBM Unica Marketing 管理者が、マルチ パーティション環境内のすべてのパーティションにわたって製品構成、ユーザー、 およびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持 つレポート機能を除き) パーティションによるフィルタリングなしに使用できるよ うに設計されています。デフォルトでは、このアカウントは Marketing Platform 内 の以下の役割を持っています。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - AdminRole
 - UserRole
 - PlatformAdminRole

これらの役割により、platform_admin ユーザーは、Marketing Platform 内部でレポ ート機能以外のすべての管理タスクを実行することができます。追加パーティシ ョンが作成された場合、platform_admin ユーザーは、追加パーティション内のユ ーザー、グループ、役割、および構成にアクセスして管理することができます。

PlatformAdminRole 役割は、この役割の権限を変更できるユーザーはいないという 点で特異であり、この役割を持つユーザーのみが別のユーザーに PlatformAdminRole 役割を割り当てることができます。

- Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - グローバル・ポリシーの管理役割

この役割により、platform_admin ユーザーは Campaign 内部のすべてのタスクを 実行することができます。

デフォルトでは、このユーザーには Marketing Platform および Campaign の外側の IBM Unica Marketing 製品に対するアクセス権限はありません。

asm_admin ユーザー・アカウント

asm_admin ユーザー・アカウントは、IBM Unica Marketing 管理者が、単一パーティション環境内のユーザーおよびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持つレポート機能を除き) 使用できるように設計されています。このアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - AdminRole
 - UserRole

以下に示す例外を除き、これらの役割により、asm_admin ユーザーは、Marketing Platform 内の asm_admin が所属するパーティション (デフォルトでは partition1) の内部で、すべての管理タスクを実行することができます。

このユーザーは、これらの役割により、「構成」ページを管理することができま す。「構成」ページではパーティションによるユーザーのフィルタリングは行わ れません。このため、Marketing Platform で AdminRole 役割から管理者構成ペー ジ権限を削除して、構成タスクを platform_admin ユーザー用にとっておく必要が あります。 例外は以下のとおりです。

- レポート機能にアクセスするには、Reports System 役割を付与する必要があり ます。
- このユーザーは、PlatformAdminRole 役割をユーザーまたはグループに割り当 てることはできません。

デモ・アカウント

デモ・アカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - UserRole

この役割により、デモ・ユーザーは、「ユーザー」ページで自分のアカウント属 性を表示および変更できますが、自分のアカウントの役割またはパーティション を変更したり、Marketing Platform に含まれている他の機能にアクセスしたりする ことはできません。デフォルトでは、このユーザーにはどの IBM Unica Marketing 製品にもアクセスする権限はありません。

Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
グローバル・ポリシーのレビュー役割

この役割により、デモ・ユーザーはブックマークを作成し、Campaign でキャンペ ーン、セッション、オファー、セグメント、およびレポートを表示することがで きます。

platform_admin アカウントの保持

マルチパーティション環境では、すべてのパーティションにわたって IBM Unica Marketing ユーザーのセキュリティーを管理できるようにするために、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つユーザー・アカウントが少なくとも 1 つ は必要です。

platform_admin アカウントは、事前に構成済みで、PlatformAdminRole 役割を備えて います。 platform_admin アカウントは、IBM Unica Marketing の「ユーザー」機能 で削除したり無効にしたりできないスーパーユーザーです。ただし、このアカウン トには、他のユーザーと同じパスワード制限が適用されます。例えば、誰かが platform_admin としてログインしようとして誤ったパスワードを N 回 (有効なパス ワード規則に応じて異なります) 続けて入力した場合、システムで platform_admin アカウントが無効になります。このアカウントを復元するには、以下のいずれかの アクションをとる必要があります。

- Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のユーザーがいる場合 は、そのユーザーとしてログインして、platform_admin ユーザーのパスワードを リセットするか、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカ ウントを作成します。
- Marketing Platform 内の PlatformAdminRole 役割を持つユーザーが 1 人だけ (例 えば、platform_admin だけ)の場合は、232ページの『restoreAccess ユーティリ ティー』で説明されている方法で、新規 platform_admin を作成できます。

restoreAccess ユーティリティーを使用して PlatformAdminRole アクセスを復元し なければならない状況を避けるために、PlatformAdminRole 特権を持つアカウントを 複数作成することをお勧めします。

内部グループの管理

このセクションでは、内部グループの管理方法について説明します。

新規内部グループを追加するには

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。

左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 左のペインにある「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストの上の「新規グル ープ」ボタンをクリックします。

「新規グループ」ページが表示されます。

- 3. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
- 4. 「変更を保存」をクリックします。

「**グループ階層 (Group Hierarchy**)」リストに新規グループの名前が表示されます。

新規サブグループを追加するには

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. サブグループを追加するグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページが表示されます。

3. 右のペインの上部にある「新規サブグループ」ボタンをクリックします。

「新規サブグループ」ページが表示されます。

- 4. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
- 5. 「変更を保存」をクリックします。

「**グループ階層 (Group Hierarchy)**」リストの該当のグループの下に新規サブグ ループが追加されます。

注:親グループのフォルダー・アイコンが閉じている場合、リストを展開するに は正符号 (+) をクリックします。

グループまたはサブグループを削除するには

グループまたはサブグループを削除すると、グループのメンバーはそのグループに 割り当てられた役割を失うことになり、役割が明示的に親に割り当てられている場 合を除き、グループの親もまた、それらの役割の割り当てを失うことを覚えておい てください。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 削除するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

グループの詳細ページが表示されます。

注:親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選 択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 右のペインの上部にある「グループの削除」ボタンをクリックします。

「このグループとそのすべてのサブグループを削除してもよろしいですか」とい うメッセージがウィンドウに表示されます。

4. 「**OK**」をクリックします。

グループが削除され、グループ名がそのサブグループ (ある場合) とともに、グ ループ階層のリストから削除されます。

グループまたはサブグループの説明を変更するには

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。

左のペインに「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

2. 説明を変更するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページが表示されます。

注:親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選 択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 「**プロパティーの編集**」をクリックします。

「プロパティーの編集」ページが表示されます。

- 4. 必要に応じて説明を編集します。
- 5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

パーティションにグループを割り当てるには

この手順は、Campaign に複数のパーティションが構成されている場合のみ必要で す。PlatformAdmin ユーザーのみがこのタスクを実行できます。

- 1. 各パーティションに割り当てるグループを決定します。必要に応じて、グループ を作成します。
- 2. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストが表示されます。

3. パーティションに割り当てるグループまたはサブグループの名前をクリックしま す。

グループ詳細ページが表示されます。

4. 「プロパティーの編集」をクリックします。

「プロパティーの編集」ページが表示されます。

5. 「**パーティション ID**」ドロップダウン・リストから目的のパーティションを選 択します。

このフィールドは、複数のパーティションが構成されている場合のみ有効になります。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

グループまたはサブグループにユーザーを追加するには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

注: 「ユーザー・グループ」ページで、グループ名をクリックして「ユーザーの 編集」をクリックすることで、同じタスクを実行することができます。

2. 変更するユーザー名をクリックします。

ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。

ユーザーの「グループの編集」ページが表示されます。

4. 「選択可能なグループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。

選択したグループ名が強調表示されます。

5. 「追加」ボタンをクリックします。

グループ名が「**グループ**」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

ユーザー・アカウントの詳細が表示され、割り当てたグループまたはサブグルー プがリストされます。

グループまたはサブグループからユーザーを除去するには

重要: グループまたはサブグループからユーザーを除去すると、そのグループまた はサブグループに割り当てられている役割がユーザーから除去されます。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「Username」リストが表示されます。

2. 変更するユーザー名をクリックします。

ユーザー・アカウントの詳細が表示されます。

- ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。
 ユーザーの「グループの編集」ページが表示されます。
- 4. 「**グループ**」ボックスのグループ名をクリックして選択します。

選択したグループ名が強調表示されます。

5. 「除去」ボタンをクリックします。

グループ名が「選択可能なグループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

削除されたグループまたはサブグループのユーザー・アカウントの詳細が表示 されます。

8. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。

「プロパティーの編集」ページが表示されます。

- 9. 必要に応じて名前または説明を変更します。
- 10. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

11. 「**OK**」をクリックします。

変更したグループの詳細が表示されます。

「ユーザー・グループ」ウィンドウのリファレンス 新規グループ、新規サブグループ、プロパティーの編集

フィールド	説明			
グループ名	グループ名。上限は 64 文字です。			
	グループ名を作成するときは以下の文字を使用できます。			
	• 英字の大文字および小文字 (A から Z)			
	• 数字 (0 から 9)			
	• 単一引用符 (')			
	 ハイフン (-) 			
	• 単価記号 (@)			
	・ スラッシュ (/)			
	• 小括弧			
	・ コロン (:)			
	 セミコロン (;) 			
	• スペース (先頭文字以外)			
	IBM Unica Marketing 名は表示のためには大/小文字の区別を維持し ていますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用 します (つまり、Admin と admin の両方を別個のグループ名として 作成することはできません)。			
	サブグループを作成する場合は、親グループと関連のある名前をサ ブグループに付けることをお勧めします。			
	必須			
説明	グループの説明。上限は 256 文字です。			
	グループまたはサブグループに付与する計画の役割を説明に含めて おくと役立ちます。そうすれば、グループ詳細ページを表示したと きに、役割とユーザーの両方が一目でわかります。			
パーティション ID	複数のパーティションが構成されている場合のみ、使用可能です。			
	グループにパーティションを割り当てると、そのブートのメンバー はそのパーティションのメンバーになります。1 人のユーザーは 1 つのパーティションのみのメンバーになることができます。			

ユーザーの編集、役割の編集

フィールド	説明
選択可能なグループ	ユーザーが割り当てられていないグループおよびサブグループのリ
または選択可能な役	スト。
割	
グループまたは役割	ユーザーが割り当てられているグループとサブグループまたは役割
	のリスト。

ユーザーの役割と権限の管理

このセクションでは、役割と権限によってユーザーのアプリケーション・アクセス を管理する方法について説明します。

役割を作成するには

新規役割を作成する必要があるのは、細分化された権限が設定されている製品の場 合のみです。レポート機能および一部の IBM Unica Marketing 製品では基本的な権 限しか使用できないものもあるので、そのような製品に対しては追加の役割を作成 する必要はありません。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックし ます。

「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある製品名の隣の正符号をクリックしてから、役割を作成するパー ティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい 場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。

グローバル・ポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティー/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

5. 「役割の追加」をクリックします。

新しい役割のセットのフィールドがリストに追加されます。

- 6. 役割の名前と説明を入力します。
- 7. 「変更を保存」をクリックし、役割を保存して「プロパティー/役割」ページに残るか、「権限の保存および編集」をクリックし、「権限」ページに進んでリスト内のいずれかの役割について、権限を追加または変更します。

役割の権限を変更するには

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある「**キャンペーン**」または「**プラットフォーム**」の横の正符号を クリックして、役割を変更したいパーティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」またはユーザー作成のポリシーの下に作成したい場合は、該当のポリシー名をクリックします。

選択したポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティー/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

5. 「権限の保存および編集」をクリックします。

「権限」ページが表示され、すべての権限のグループとすべての既存の役割がリ ストされます。

- 6. 役割グループの横にある正符号をクリックすると、それぞれの役割で選択可能な すべての権限とそれらの権限の状態が表示されます。
- 7. 権限を変更する役割の列で、権限の行のボックスをクリックして、状態を「認可 (Grant)」、「拒否 (Deny)」、または「不認可 (Not Granted)」に設定します。
- 8. 「変更を保存」をクリックして変更を保存し、「プロパティー/役割」ページに戻 ります。

「前回保存時の状態に戻す」をクリックして前回の保存時以降の変更を取り消し て「権限」ページに残るか、「取り消し」をクリックし、前回の保存時以降の変 更を破棄してパーティションまたはポリシーのページへ進みます。

役割を除去するには

重要: 役割を除去すると、その役割が割り当てられていたすべてのユーザーおよび グループから役割が除去されます。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックし ます。

「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。

2. 左のリストにある「**キャンペーン**」または「**プラットフォーム**」の横の正符号を クリックして、役割を作成したいパーティションの名前をクリックします。

パーティション内の既存の役割が表示されます。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい 場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。

グローバル・ポリシー内の既存の役割が表示されます。

4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。

「プロパティー/役割」ページに既存の役割のリストが表示されます。

- 5. 削除する役割の「除去」リンクをクリックします。
- 6. 「変更を保存」をクリックします。

グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去を行 うには

グループに役割を追加する場合にはそのグループのメンバーがその役割を獲得し、 グループから役割を削除する場合にはそのグループのメンバーがその役割を失いま す。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。

「ユーザー・グループ」ページが表示されます。

2. 操作対象のグループの名前をクリックします。

グループ詳細ページに、グループのユーザーおよび役割のリストが表示されま す。

3. 「役割の割り当て」をクリックします。

「役割の編集」ページが表示されます。グループに割り当てられていない役割 が、左の「**利用できる役割**」ボックスに表示されます。現在グループに割り当て られている役割は、右の「**役割**」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。

選択した役割名が強調表示されます。

- 5. 「追加」または「除去」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方 のボックスに移動します。
- 6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

グループ詳細が右のペインに表示され、「**役割**」リストに変更が表示されています。

ユーザーへの役割の割り当てまたはユーザーからの役割の除去を行 うには

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

「ユーザー」ページが表示されます。

2. 操作対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。

ユーザー詳細ページにユーザーの属性、役割、グループ、およびデータ・ソース のリストが表示されます。

3. 「役割の編集」をクリックします。

「役割の編集」ページが表示されます。ユーザーに割り当てられていない役割 が、左の「**利用できる役割**」ボックスに表示されます。ユーザーに現在割り当て られている役割は、右の「**役割**」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。

選択した役割名が強調表示されます。

- 5. 「追加」または「削除」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方 のボックスに移動します。
- 6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

ウィンドウに「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

ユーザーの詳細が右のペインに表示され、「**役割**」リストに変更が表示されています。

リファレンス:権限の状態の定義

それぞれの役割について、事前定義された権限のどれを認可するか、認可しない か、または拒否するかを指定することができます。これらの状態には以下の意味が あります。

- 認可 緑のチェック・マーク で示されます。ユーザーのその他の役割で 明示的に権限が否定されない限り、この特定の機能を実行する権限が明示的に認 可されます。
- 拒否 赤の「X」 で示されます。ユーザーの他の役割で権限が認可されて いるかどうかに関係なく、この特定の機能を実行する権限が明示的に拒否されま す。
- 不認可 グレーの「X」 で示されます。特定の機能を実行する権限を明示的に認可または拒否しません。ユーザーの役割のいずれかでこの権限が明示的に認可されていない場合、ユーザーはこの機能を実行することはできません。

リファレンス:基本的な役割のみを使用する製品の権限

以下の表では、基本的な役割のみを使用する IBM 製品で利用できる役割の機能定 義について説明しています。追加情報については、製品資料を参照してください。

IBM Unica アプリケ				
ーション	役割			
Leads	Leads 役割は、将来の利用のために予約されています。			
Reports	 ReportsSystem – report_system 権限を認可します。これによって、「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」オプションおよび「レポート・フォルダーの権限の同期」オプションにアクセスすることができます。 			
	• ReportsUser – report_user 権限を認可します。これは、IBM Cognos 8 BI システムにインストールされた IBM Unica 認証プ ロバイダーのみが使用します。			
	IBM Cognos 8 BI 統合の認証オプションおよび IBM Unica 認証プ ロバイダーがレポート権限を使用する方法については、66 ページの 『レポートおよびセキュリティーについて』を参照してください。			
eMessage	 eMessage_Admin - すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 			
	• eMessage_User - 将来の利用のために予約されています。			
Interact	 InteractAdminRole – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 			

IBM Unica アプリケ ーション	役割	
Distributed Marketing	 collab_admin - すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 	
	 corporate – Campaign および Distributed Marketing を使用して再 使用可能な Lists およびオンデマンド・キャンペーン・テンプレ ートを開発することができます。企業キャンペーンを作成および 変更できます。 	
	 field – 企業キャンペーンに参加でき、Distributed Marketing で Lists およびオンデマンド・キャンペーンを作成および実行できま す。 	
PredictiveInsight	• User – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。	
Marketing Operations	 PlanUserRole – デフォルトでは、PlanUserRole 役割を持つユーサーには Marketing Operations で有効になっている権限はほとんどありません。これらのユーザーは、計画、プログラム、またはプロジェクトを作成することはできず、管理設定へのアクセス権限も限定されています。 	
	• PlanAdminRole – デフォルトでは、PlanAdminRole 役割を持つユ ーザーには Marketing Operations で有効にされるほとんどの権限 が備わっています。これには、すべての管理設定および構成設定 へのアクセス権限も含まれ、広範囲のアクセス権限が許可されま す。	
	アクセス権限は、Marketing Operations のセキュリティー・ポリシー によってさらに詳細に定義されます。	

リファレンス: Marketing Platform の権限

以下の表では、Marketing Platform で役割に割り当てることができる権限について説 明します。

権限	説明
「ユーザーの管理」	ユーザーは、自分のパーティション内のユーザー・アカウントに関
ページ	する「ユーザー」ページで、以下のすべてのユーザー管理タスクを
	実行することができます。内部ユーザー・アカウントの追加および
	削除。属性、データ・ソース、役割の割り当ての変更。
「アクセス・ユーザ	ユーザーが「ユーザー」ページを表示できるようにします。
ー」ページ	
「ユーザー・グルー	ユーザーは、グループへのパーティションの割り当て (これを実行
プの管理」ページ	できるのは platform_admin ユーザーのみです) を除き、「ユーザ
	ー・グループ」ページですべてのアクションを実行することができ
	ます。この権限を持つユーザーは、グループの作成、変更、削除、
	グループ・メンバーシップの管理、グループに対する役割の割り当
	てを行うことができます。

権限	説明
「ユーザーの役割の	ユーザーは、「ユーザーの役割と権限」ページで以下のすべてのア
管理」ページ	クションを実行することができます。Marketing Platform および
	Campaign での役割の作成、変更、削除、およびリストされたすべて
	の IBM Unica Marketing 製品の役割に対するユーザーの割り当て。
「構成の管理」ペー	ユーザーは、「構成」ページで以下のすべてのアクションを実行す
ジ	ることができます。プロパティー値の変更、テンプレートからの新
	規カテゴリーの作成、「 カテゴリーの削除 」リンクがあるカテゴリ
	ーの削除。
「データ・フィルタ	ユーザーは、「データ・フィルター」ページで以下のすべてのアク
ーの管理」ページ	ションを実行することができます。データ・フィルターの割り当
	て、および割り当ての除去。
「スケジュール済み	ユーザーは、「スケジュール済みタスク」ページで以下のすべての
タスクの管理」ペー	アクションを実行することができます。スケジュール定義の表示と
ジ	実行、および実行の表示。
ダッシュボードの管	ユーザーは、「ダッシュボード」ページで以下のすべてのアクショ
理	ンを実行することができます。ダッシュボードの作成、表示、変
	更、削除、ダッシュボード管理者の割り当て、ダッシュボード・ア
	クセス権限の管理。

リファレンス: Interaction History の権限

以下の表では、Interaction History で役割に割り当てることができる権限について説明します。

権限	説明
ETL ジョブのスケジ ュール	Interaction History の「設定」ページでユーザーが Interaction History ETL ジョブおよびレポート生成をスケジュールできるようにしま す。
カスタム列のマッピ ングの定義	ユーザーが Interaction History の「設定」ページで Campaign ETL ジョブを構成する際に、「キャンペーン・オーディエンス・レベル 構成」ウィンドウにアクセスできるようにします。
チャネルの定義とマ ッピング	Interaction History の「設定」ページでユーザーが「チャネル・マッ ピング」セクションにアクセスできるようにします。
レスポンス・タイプ の定義とマッピング	Interaction History の「設定」ページでユーザーが「レスポンス・タ イプ・マッピング」セクションにアクセスできるようにします。
クロスチャネル・レ ポートの表示	Interaction History レポート・パックに含まれるレポートをユーザー が表示できるようにします。
管理レポートの表示	ユーザーが Interaction History 管理レポートを表示できるようにします。

リファレンス: Attribution Modeler の権限

以下の表では、Attribution Modeler で役割に割り当てることができる権限について 説明します。

権限	説明
Attribution Modeler ジ	ユーザーが Attribution Modeler ジョブをスケジュールできるように
ョブのスケジュール	します。
Attribution Modeler ジ	「スケジュールされた実行」ページおよび「スケジュール定義」ペ
ョブの監視	ージを参照する権限をユーザーに与え、それらのページには
	Attribution Modeler ジョブのみがリストされるようにします。
Attribution Modeler ジ	ユーザーが、スケジュールされた Attribution Modeler ジョブですべ
ョブの開始/一時停止/	てのアクションを実行できるようにします。
再開/停止	
レポートの表示	将来の利用のために予約されています。

第 4 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティーの管理

Campaign は Marketing Platform のセキュリティー機能を使用して、Campaign のオ ブジェクトと機能へのユーザー・アクセスを制御します。管理者は Marketing Platform のセキュリティー・インターフェースを使用して、Campaign へのユーザ ー・アクセスに必要なユーザー・アカウント、グループ・メンバーシップ、役割、 および権限を構成します。

Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスは、セキュリティー・ポリ シーを使って実装されます。

セキュリティー・ポリシーについて

セキュリティー・ポリシーは Campaign のセキュリティーを管理する「ルール・ブ ック」であり、ユーザーがアプリケーションで操作を実行するたびにそれが参照さ れます。セキュリティー・ポリシーはパーティションごとに作成されます (複数の パーティション間でセキュリティー・ポリシーが共有されることはありません)。 Campaign の 1 つのパーティションで複数のセキュリティー・ポリシーを設定する ことができます。

1 つのセキュリティー・ポリシーは、定義される複数の役割から成ります。それぞれの役割には、ユーザーが実行できる操作とアクセスできるオブジェクトを決定する権限のセットが含まれます。ユーザーを役割に直接割り当てることができます。 または、グループを役割に割り当てることもできます (グループ内のユーザーが役割に割り当てられます)。

最上位フォルダーでキャンペーンやオファーなどのオブジェクトを作成するとき、 セキュリティー・ポリシーをそのオブジェクトに適用します。さらに、最上位フォ ルダーを作成するとき、セキュリティー・ポリシーをフォルダーに適用すると、そ のフォルダー内に作成されるオブジェクトやサブフォルダーは、フォルダーに適用 されたセキュリティー・ポリシーを継承します。

セキュリティー・ポリシーをオブジェクトやフォルダーに適用することで、 Campaign のオブジェクトをさまざまなユーザー・グループ用に分けることができま す。例えば、1 つのポリシーに属するユーザーが、他のポリシーに関連付けられた オブジェクトにアクセスできないよう (表示さえできないよう) セキュリティー・ポ リシーを構成することができます。

独自のセキュリティー・ポリシーを作成できます。あるいは、Campaign に含まれる 既定のグローバル・セキュリティー・ポリシーを使用することもできます。

グローバル・セキュリティー・ポリシー

Campaign には、既定のグローバル・セキュリティー・ポリシーが含まれています。 これはそのまま使用することも、組織の必要に合わせて変更することもできます。 独自のセキュリティー・ポリシーを作成しないことにした場合、Campaign で作成したオブジェクトに対して、既定のグローバル・セキュリティー・ポリシーが適用されます。

独自のポリシーに追加してグローバル・ポリシーを使用するか、独自のポリシーを 排他的に使用できます。グローバル・ポリシーは、使用しない場合でも削除できま せん。

作成するすべてのセキュリティー・ポリシーは、グローバル・セキュリティー・ポ リシーの下に存在します。グローバル・ポリシーの下で、組織内の部門ごとに別々 に従業員のセキュリティー・ポリシーを作成できます。

グローバル・セキュリティー・ポリシーには、6 つの役割が事前定義されており、 必要な場合は、グローバル・ポリシーに役割を追加できます。事前に定義された役 割を削除することはできませんが、その権限を変更することは可能です。

事前定義された役割は、以下のとおりです。

- ・フォルダー所有者 すべての権限が有効。
- ・オブジェクト所有者 すべての権限が有効。
- **管理** すべての権限が有効。デフォルト・ユーザー asm_admin には、この役割 が割り当てられます。
- ・実行 すべての権限が有効。
- 設計 ほとんどのオブジェクトに対する読み取り権限および書き込み権限。フロ ーチャートまたはセッションのスケジュールを設定できません。
- 承認 読み取り専用権限。

グローバル・セキュリティー・ポリシーは、所有者役割およびフォルダー所有者役 割を介してすべてのユーザーに適用されます。これには、グローバル・ポリシー内 で他のどの特定の役割にも割り当てられていないユーザーも含まれます。グローバ ル・ポリシーは常に適用されるため、例えば、ある役割にグローバルにアクセス権 を拒否するために使用できます。

Campaign による権限の評価方法

ユーザーがタスクを実行する際、またはオブジェクトへのアクセスを試行する際、 Campaign は以下のステップを実行します。

- グローバル・セキュリティー・ポリシーの中で、このユーザーが属するすべての グループと役割を識別します。ユーザーは、1 つまたは複数の役割に属すること ができ、役割に属さないこともできます。オブジェクトを所有しているユーザー は、所有者役割に属します。オブジェクトが存在するフォルダーを所有するユー ザーは、フォルダー所有者 (Folder Owner) 役割に属します。ユーザーがその他 の役割に属するのは、その役割に(直接、またはその役割に割り当てられたグル ープに属しているために)割り当てられた場合だけです。
- アクセスされようとしているオブジェクトにカスタム定義ポリシーが(存在する 場合)割り当てられているかどうかを識別します。割り当てられていれば、シス テムはそのカスタム・ポリシー内でユーザーが属するすべてのグループと役割を 識別します。

- 3. ステップ 1 と 2 からの結果に基づいて、ユーザーの属するすべての役割の権限 を集約します。この複合役割を使用して、システムは以下のようにアクションの ための権限を評価します。
 - a. このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「**拒否済み**」の場合、ユーザーはアクションの実行を許可されません。
 - b. このアクションについて、どの役割のアクセス権も「**拒否済み**」でなけれ ば、このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「**付与**」であ るかどうかを検査します。そうであれば、ユーザーはアクションの実行を許 可されます。
 - c. a と b がどちらも真でない場合、ユーザーはアクセス権を拒否されます。

所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用

既定では、各セキュリティー・ポリシーには、すべての権限が付与されている所有 者役割とフォルダー所有者役割が含まれています。これらの役割は、既定では、セ キュリティー・ポリシーの作成時に作成されます。カスタム設計セキュリティー・ ポリシーがあればそこからこれらの役割を削除したり、権限を変更したり、既定の 権限を使用したりすることができます。グローバル・セキュリティー・ポリシーで これらの役割の権限を変更することは可能ですが、削除することはできません。

所有者役割とフォルダー所有者役割はすべてのユーザーに適用されます。ユーザー をそれらの役割に割り当てる必要はありません。所有者役割は、ユーザーが作成し た単一のオブジェクトに適用されます。フォルダー所有者役割は、ユーザーが所有 するフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用されます。

これらの役割は、ユーザー自身が所有していないオブジェクトにアクセスするのを 制限する際に便利です。例えば、セキュリティー・ポリシー内の全オブジェクトに 対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を作成することができます。 すべてのユーザーに読み取り専用役割を割り当てます。他の役割が権限 (例えば編 集または削除)を明示的に拒否しない限り、各ユーザーは (所有者役割の下)所有オ ブジェクトの編集または削除と、(フォルダー所有者役割の下)各自が所有するフォ ルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザー が所有するオブジェクトとフォルダーについては (読み取り専用役割の下)表示のみ 可能です。

セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイドライン

セキュリティー・ポリシーを設計するときは、以下のガイドラインに従ってください。

- 設計をシンプルに保つ。 Campaign では複数のセキュリティー・ポリシーおよび 役割を作成することが可能ですが、セキュリティー設計はできるだけシンプルに 保ち、セキュリティーの必要を満たすために使用するポリシーおよび役割の数は できるだけ少なくするべきです。例えば、最低限のレベルとして、新しい役割や ポリシーを作成せずに既定のグローバル・セキュリティー・ポリシーをそのまま 使用することができます。
- セキュリティー・ポリシー間での潜在的な競合を避けてください。
 組織で複数の セキュリティー・ポリシーを実装する場合、ポリシーを設計する際に潜在的な競 合について留意してください。例えば、複数のセキュリティー・ポリシーで移動 権限およびコピー権限を持つユーザーは、その権限を持つポリシーを越えた場所

にオブジェクトおよびフォルダーを移動またはコピーすることができます。これ を行う際、移動されたオブジェクトまたはフォルダーは宛先のセキュリティー・ ポリシーを取るため (別のフォルダーの下にある場合)、ある場所においては正当 なユーザーが、宛先のセキュリティー・ポリシーでは役割を持たないために、移 動されたオブジェクトにアクセスできなくなることがあります。あるいは、オブ ジェクトにアクセスする予定ではなかった、宛先のセキュリティー・ポリシーで 役割を持つユーザーが、移動されたオブジェクトにアクセスできるようになるこ ともあります。

- ユーザーにオブジェクトの変更を許可するには、表示権限を割り当ててください。Campaignの多数のオブジェクトを変更するには、オブジェクトに対する表示権限と変更権限の両方が付与されている必要があります。この要件は、以下のオブジェクトに当てはまります。
 - キャンペーン
 - フローチャート
 - オファー
 - オファー・リスト
 - オファー・テンプレート
 - セッション
 - 戦略的セグメント

セキュリティーのシナリオ

このセクションでは、セキュリティー・モデルの例を挙げ、セキュリティー・ポリ シーを使って Campaign で実装する方法について説明します。

- ・ 『シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社』
- 44 ページの『シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社』
- 46ページの『シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス』

シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社

社内の全従業員が同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) のセットに対して作業を行います。オブジェクトの共有と再利用が推奨されていま す。従業員のグループが互いのオブジェクトにアクセスできないようにする必要は ありません。オブジェクトに対する従業員のアクセス権限、変更権限、または使用 権限を決定する権限のセットを、組織内における役割に基づいて作成する必要があ ります。

解決策

オブジェクトをグループまたは部門によって分離する必要がないので、単一のセキ ュリティー・ポリシーだけが必要です。既存のグローバル・セキュリティー・ポリ シーで従業員の職務に応じて役割を定義し、役割ごとに各オブジェクトまたは機能 に対する適切な権限を定義します。

AT COVER THE

機能/役割	管理者	設計者	承認者
キャンペーン	\checkmark	\times	\times
• キャンペーンを追 加			×
 キャンペーンを編 集 			×
 キャンペーンを削除 			×
• キャンペーンを実 行		×	×
 キャンペーン・サ マリーを表示 	\square	\square	\square
オファー	\checkmark	\times	\times
• オファーを追加		\checkmark	×
• オファーを編集			×
 オファーを削除 		×	×
• オファーを回収		×	×
 オファー・サマリ ーを表示 		\checkmark	\checkmark

例えば、管理者にはキャンペーンおよびオファーに対する全アクセス権限および編 集権限があります。承認者は、キャンペーンおよびオファーにアクセスすることは できますが、それらを追加、編集、削除、または実行することはできません。

オプションで、それらの役割と一致するユーザー・グループを IBM Unica Marketing で作成し、ユーザーをそのグループに追加するだけでユーザー権限を割り 当てることもできます。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示してい ます。

表2. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	マネージャー	デザイナー	レビューアー
キャンペーン	\checkmark	\times	\times
 キャンペーンを追加 			×

機能/役割	マネージャー	デザイナー	レビューアー
 キャンペーンを編 集 	\square	\square	×
• キャンペーンを削 除	\checkmark	\checkmark	×
• キャンペーンを実 行	\square	×	×
 キャンペーン・サ マリーを表示 	\checkmark	\checkmark	\checkmark
オファー	\checkmark	\times	\times
• オファーを追加	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを編集	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを削除	\checkmark	×	×
• オファーを回収	\checkmark	×	×
• オファー・サマリ ーを表示	\checkmark	\checkmark	\checkmark

表2. このシナリオにおけるオブジェクト権限 (続き)

シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社

会社に 2 つのビジネス部門 (東部と西部) があり、それらの間でデータは共有され ません。各部門内でそれぞれ異なる職務を果たす人は同じオブジェクト (キャンペ ーン、オファー、テンプレート) にアクセスする必要がありますが、そのオブジェ クトに対して持つ権限はその役割に応じて異なります。

解決策

2 つの別々なセキュリティー・ポリシーを、それぞれに適切な役割と権限を使用し て定義します。各セキュリティー・ポリシー内の役割は、各部門のニーズに応じ て、同じものか異なるものにすることができます。両方の部門にまたがって作業を 行う必要がある個人 (例えば、業務担当者、部門間管理者、または CEO) を除き、1 つのポリシーだけで各ユーザーを役割に割り当てます。それらのユーザーには、グ ローバル・ポリシー内で役割を割り当てないでください。両方の部門にまたがって 作業するユーザーに対しては、グローバル・ポリシー内の役割を割り当て、必要な 権限を付与します。

キャンペーンやオファーなどを保持するために、各ポリシーに属するトップレベ ル・フォルダーを作成します。これらのフォルダーは、それぞれの部門に固有のも のです。一方のポリシー内の役割を持つユーザーは、他方のポリシーに属するオブ ジェクトを認識できません。

以下の表は、Campaign で可能なオブジェクト権限のサンプルのほんの一部を示しています。

表 3.	東部部門のセキュ	リティー	・ポリシー
------	----------	------	-------

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	マネージャー	デザイナー	レビューアー
キャンペーン	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
• キャンペー ンを追加	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ンを編集 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ンを削除 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ン・サマリ ーを表示 					
オファー	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
• オファーを 追加	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを 編集	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 オファーを 削除 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
• オファー・ サマリーを 表示					

表 4. 西部部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	マネージャー	デザイナー	レビューアー
キャンペーン	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
• キャンペー ンを追加	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ンを編集 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ンを削除 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペー ン・サマリ ーを表示 					

表4. 西部部門のセキュリティー・ポリシー (続き)

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	マネージャー	デザイナー	レビューアー
オファー	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
• オファーを 追加	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを 編集	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを 削除	\checkmark	\checkmark	\checkmark	×	×
 キャンペー ンを追加 	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark	\checkmark

シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス

会社のある部門内の従業員は、同じオブジェクト・セット(キャンペーン、オファ ー、テンプレートなど)に対する読み取り権限を必要としますが、自分自身が所有 するオブジェクトと、自分自身が所有するフォルダー内のオブジェクトについての み、編集と削除を許可されます。

解決策

オブジェクトの読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を定義します。その 部門のすべてのユーザーをこの役割に割り当てます。デフォルトの権限を、所有者 役割およびフォルダー所有者役割用に定義されたままにしておきます。

注:単一のセキュリティー・ポリシーだけが必要な会社では、グローバル・ポリシ ーを使用して、すべてのユーザーをレビュー役割に割り当てることができます。

各ユーザーは (所有者役割の下) 所有オブジェクトの編集または削除と、(フォルダ ー所有者役割の下) 各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除 を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーにつ いては (読み取り専用役割の下) 表示のみ可能です。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示してい ます。

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビューアー
キャンペーン	\checkmark	$\mathbf{\nabla}$	\times
• キャンペーンを追 加	\checkmark	\checkmark	×
 キャンペーンを編 集 	\checkmark	\checkmark	×

表 5. シナリオ 3 におけるオブジェクト権限

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビューアー
 キャンペーンを削 除 	\square	\square	×
 キャンペーン・サ マリーを表示 	\square	\square	\square
オファー	\checkmark	\checkmark	\times
• オファーを追加	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを編集	\checkmark	\checkmark	×
• オファーを削除	\checkmark	\checkmark	×
 オファー・サマリ ーを表示 	\checkmark	\checkmark	\checkmark

表 5. シナリオ 3 におけるオブジェクト権限 (続き)

セキュリティー・ポリシーの実装

このセクションでは、Campaign でセキュリティー・ポリシーを作成したり削除した りする方法、およびセキュリティー・ポリシーを Campaign のフォルダーやオブジ ェクトに適用する方法について説明します。

注: Campaign セキュリティー・ポリシーに対して作業を行うには、Marketing Platform の「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページを管理する ための権限が割り当てられている必要があります。マルチパーティション環境で は、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウン トだけが、すべてのパーティションでセキュリティー・ポリシーを処理できます。

セキュリティー・ポリシーの作成

- 1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」 をクリック します。「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。
- 2. 「キャンペーン」ノードの下の、セキュリティー・ポリシーを追加するパーティ ションを選択します。
- 3. 「グローバル・ポリシー (Global Policy)」をクリックします。
- 4. ページの右側で、「ポリシーを追加 (Add Policy)」をクリックします。
- 5. ポリシー名と説明を入力します。
- 6. 「変更を保存」をクリックします。

新規ポリシーが「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページの 「グローバル・ポリシー」の下にリストされます。既定では、ポリシーにはフォ ルダー所有者役割とオブジェクト所有者役割が含まれています。

セキュリティー・ポリシーの削除

Campaign でユーザーが作成したセキュリティー・ポリシーで、使用されていないものがあれば、この手順を使用してそれを削除します。グローバル・ポリシーは削除できません。

注: Campaign でオブジェクトに対して適用されたセキュリティー・ポリシーは削除 しないでください。使用中のセキュリティー・ポリシーを削除する必要がある場合 はまず、そのセキュリティー・ポリシーを使用する各イベント・オブジェクト/フォ ルダーのセキュリティー・オブジェクトを別のポリシー (例えばグローバル・ポリ シー) に設定します。これを行わないと、そのオブジェクトにアクセスできなくな る場合があります。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」 をクリックし ます。

「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。

- 2. 「キャンペーン」ノードの下の、セキュリティー・ポリシーを削除するパーティ ションを選択します。
- 3. 「**グローバル・ポリシー (Global Policy**)」の横にあるプラス記号をクリックしま す。
- 4. 削除するポリシーをクリックします。
- 5. 「ポリシーを削除 (Delete Policy)」をクリックします。

確認ダイアログが表示されます。

6. 「OK」をクリックして、ポリシーを削除します。

フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティー・ポリシーの割 り当て

Campaign で最上位フォルダーまたはオブジェクトを作成するときには、そのセキュ リティー・ポリシーを選択する必要があります。最上位オブジェクトまたはフォル ダーに関連付けることができるのは、そのユーザーに役割が割り当てられているポ リシーだけです。

既定では、Campaign の全オブジェクトがグローバル・ポリシーに関連付けられます が、オプションのカスタム定義ポリシーを割り当てることもできます。

フォルダーまたはオブジェクトをセキュリティー・ポリシーに関連付けるときに は、以下の規則に注意してください。

- フォルダー内のオブジェクトに対してセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。
 オブジェクトは、それが格納されているフォルダーのセキュリティー・ポリシーを自動的に継承します。
- トップレベル・フォルダーは、セキュリティー・ポリシーを決定します。
 フォル ダー内のオブジェクト (サブフォルダーを含む) は、親フォルダーのセキュリティ ー・ポリシーを継承します。言い換えると、最上位フォルダーのセキュリティ ー・ポリシーは、その中のオブジェクトおよびサブフォルダーのセキュリティ ー・ポリシーを決定します。したがって、フォルダー内のオブジェクトに対して 手動でセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。オブジェクト

のセキュリティー・ポリシーを変更するには、適切なセキュリティー・ポリシー を持つフォルダーの中、または最上位ルート・フォルダーにオブジェクトを移動 する必要があります。

セキュリティー・ポリシーは、オブジェクトを移動またはコピーすると変更されます。
 複数のセキュリティー・ポリシー間でオブジェクトとフォルダーを移動またはコピーできますが、移動/コピーを実行するユーザーは、ソースと宛先の両方のポリシーでその操作を行う権限を持っている必要があります。

ソースとは異なるセキュリティー・ポリシーに属するフォルダーまたは場所にオ ブジェクトやフォルダーが移動/コピーされた後、その下位のオブジェクトやサブ フォルダーのセキュリティー・ポリシーは、新しいフォルダーまたは場所のセキ ュリティー・ポリシーに自動的に変更されます。

Campaign での管理権限について

Campaign での管理権限はパーティションごとに割り当てられます。これらの管理機能は、セキュリティー・ポリシーにおけるオブジェクト関連の機能権限 (グローバル・セキュリティー・ポリシーを含む)とは異なります。これらの権限を持つユーザーは、パーティション内の任意のオブジェクトに対して、許可された操作を実行できます。

各パーティションには、次の 4 つの役割が事前定義されています。

- システム管理 すべての権限が使用可能です。既定のユーザー asm_admin には、この役割が割り当てられます。
- 実行 ほとんどの権限が有効です。ただし、クリーンアップ操作の実行、オブジェクト/フォルダーの所有権の変更、グローバル抑制の管理などの管理機能を除きます。
- 設計 「実行」役割と同じ権限です。
- レビュー すべてのオブジェクトに対する読み取り専用アクセス権限。フロー チャートの場合、これらのユーザーはフローチャートの編集モードにアクセスで きますが、保存は許可されていません。

上記以外にも、必要に応じてそれぞれのパーティションに管理役割を追加できま す。

Campaign で管理役割と権限を管理する手順は、Marketing Platform で役割と権限を 管理する手順と同じです。

レポート・フォルダー権限の構成

「レポート」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファ ー)の「レポート」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグルー プの権限を、それが物理的に保管される IBM Cognos[®] システム上のフォルダー構 造に基づいて構成することができます。

- 1. ReportSystem 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
- 「設定」>「レポート・フォルダーの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」を選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフ ォルダーの名前を取得します。(これは、いずれかのパーティションのフォルダ ー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構 成する必要があることを意味します。)

- 3. 「設定」>「ユーザー権限」>「キャンペーン」
- 4. 「**キャンペーン**」ノードの下の最初のパーティションを選択します。
- 5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。
- 6. 「権限の保存および編集」を選択します。
- 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。「レポート」エントリーは、 「レポート・フォルダー権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」オプシ ョンの初回実行後に表示されます。
- 8. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
- 9. 各パーティションについて、ステップ 4 から 8 を繰り返し実行します。

参照資料: Campaign での管理権限

Campaign には、以下のカテゴリーの管理権限が含まれています。

- 管理
- オーディエンス・レベル
- データ・ソース
- ディメンション階層
- 履歴
- ログ
- ・ レポート (フォルダーの権限)
- システム・テーブル
- ユーザー・テーブル
- ユーザー変数

注: カテゴリー・ヘッダーの権限を設定することにより、そのカテゴリー内のすべての機能に対して権限を設定できます。

管理

表 6. 管理 (管理権限)

権限	説明
Access Monitoring Area	キャンペーン監視域へのアクセスを許可します。
Perform Monitoring Tasks	キャンペーン監視領域での監視タスクの実行を許可します。
Access Analysis Area	キャンペーン分析域内のレポートへのアクセスを許可します。
Access Optimizations Link	Optimize がインストール済みの場合、そのアプリケーションへのア クセスを許可します。

表 6. 管理 (管理権限) (続き)

権限	説明
Run svradm Command	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した管理機能の実
Line Tool	行を許可します。
Run genrpt Command	Campaign レポート生成ユーティリティー (unica_acgenrpt) の実行
Line Tool	を許可します。
Takeover Flowcharts in Edit Mode	他のユーザーからの「編集」または「実行」モードでのフローチャ ート制御の引き継ぎを許可します。 注: 「ロックされた」フローチャートの制御を引き継いだ場合、他 方のユーザーが締め出されて、最後の保存時より後のフローチャー トの変更内容がすべて失われます。
Connect to Running Flowcharts	Campaign Server Manager (unica_svradm) または Campaign ユーザ ー・インターフェースを介した実行中のフローチャートへの接続を 許可します。
Terminate Server	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した Campaign サ
Processes	ーバー (unica_acsvr) の終了を許可します。
Terminate Campaign Listener	Campaign Server Manager (unica_svradm) または svrstop ユーティ リティーを使用した Campaign リスナー (unica_aclsnr) の終了を許 可します。
Run sesutil	Campaign セッション・ユーティリティー (unica_acsesutil) の実行
Command Line Tool	を許可します。
Override Virtual	フローチャート詳細設定の仮想メモリー設定のオーバーライドを許
Memory Settings	可します。
Access Custom	キャンペーン設定ページからのカスタム属性定義へのアクセスと管
Attributes	理を許可します。
Cell Report Access	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセ ル・レポートにアクセスできるようにします。セル内容レポートへ のアクセスを除外します (この権限も明示的に付与されている場合 を除く)。
Cell Report Export	セル・レポートへのアクセス権限が付与されている場合、セル・レ ポートの印刷とエクスポートを許可します。
Cell Content Report	フローチャートの「 編集 」ページで「 レポート 」アイコンからセル
Access	内容レポートにアクセスできるようにします。
Cell Content Report	セル内容レポートのエクスポートが付与されている場合、セル内容
Export	レポートの印刷とエクスポートを許可します。
Perform Cleanup	unica_acclean またはカスタム・ツールを使用したクリーンアップ
Operations	操作の実行を許可します。
Change Object/Folder Ownership	オブジェクトまたはフォルダーの所有権の変更を許可します。

オーディエンス・レベル

表 7. オーディエンス・レベル (管理権限)

権限	説明
Add Audience Levels	「キャンペーン設定」ページの「 オーディエンスの管理 」で、新し
	いオーディエンス・レベルの作成を許可します。

表7. オーディエンス・レベル (管理権限) (続き)

権限	説明
Delete Audience	「キャンペーン設定」ページの「 オーディエンスの管理 」で、既存
Levels	のオーディエンス・レベルの削除を許可します。
Manage Global Suppressions	Campaign でのグローバル抑制セグメントの作成および構成を許可します。
Disable Suppression in Flowchart	フローチャートの詳細設定ダイアログでの「このフローチャートの グローバル抑制を無効にする」チェック・ボックスの選択/選択解除 を許可します。

データ・ソース

表 8. データ・ソース (管理権限)

権限	説明
Manage Datasource	管理域からの、またフローチャート内での、データ・ソース・ログ
Access	インの管理を許可します。
Set Save with DB	テーブル・カタログおよびフローチャート・テンプレート内で「 デ
Authentication	ータベース認証情報と共に保存」フラグを有効にすることを許可し
	ます。

ディメンション階層

表 9. ディメンション階層 (管理権限)

権限	説明
Add Dimension Hierarchies	新しいディメンション階層の作成を許可します。
Edit Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の編集を許可します。
Delete Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の削除を許可します。
Refresh Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の最新表示を許可します。

履歴

表 10. 履歴 (管理権限)

権限	説明
コンタクト履歴テー ブルに記録	コンタクト・プロセスを構成するとき、コンタクト履歴テーブルへ のログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Contact History	コンタクト履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。
Log to Response History Tables	レスポンス・プロセスを構成するとき、レスポンス履歴テーブルへ のログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Response History	レスポンス履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。

ログ

表 11. ロギング (管理権限)

権限	説明
View System and	フローチャート・ログおよびシステム・ログの表示を許可します。
Flowchart Logs	
Clear Flowchart Logs	フローチャート・ログのクリアを許可します。
Override Flowchart	デフォルトのフローチャート・ログ・オプションのオーバーライド
Log Options	を許可します。

レポート (フォルダーの権限)

「レポート」ノードは、「設定」メニューから「レポート・フォルダー権限の同 期」を初めて実行した後に、パーティションの権限ページに表示されます。同期プ ロセスによって、IBM Cognos システムに物理的に置かれているレポートのフォル ダー構造が決定され、それらのフォルダーの名前がこのノードの下にリストされま す。

このノードの下の設定により、リストに表示されるフォルダーのレポートへのアクセスが認可または拒否されます。

システム・テーブル

表 12. システム・テーブル (管理権限)

権限	説明
Map System Tables	システム・テーブルのマッピングを許可します。
Remap System Tables	システム・テーブルの再マップを許可します。
Unmap System Tables	システム・テーブルのマップ解除を許可します。
Delete System Table	システム・テーブルからのレコードの削除を許可します。
Records	

ユーザー・テーブル

表13. ユーザー・テーブル (管理権限)

権限	説明
Map Base Tables	ベース・テーブルのマッピングを許可します。
Map Dimension Tables	ディメンション・テーブルのマッピングを許可します。
その他のテーブルの	その他のテーブルのマッピングを許可します。
マップ	
Map Delimited Files	区切り文字で区切られているファイルへのユーザー・テーブルのマ
	ッピングを許可します。
Map Fixed-Width Flat	固定幅のフラット・ファイルへのユーザー・テーブルのマッピング
Files	を許可します。
Map Database Tables	データベース・テーブルへのユーザー・テーブルのマッピングを許
	可します。
Remap User Tables	ユーザー・テーブルの再マップを許可します。

表13. ユーザー・テーブル (管理権限) (続き)

権限	説明
Unmap User Tables	ユーザー・テーブルのマップ解除を許可します。
Recompute Counts and Values	テーブル・マッピング内の「計算 (Compute)」ボタンを使用して、 テーブルのカウントと値を再計算することを許可します。
未加工 SQL を使用す る	未加工 SQL を選択プロセスのクエリー、カスタム・マクロ、およ びディメンション階層で使用できるようにします。

ユーザー変数

表 14. ユーザー変数 (管理権限)

権限	説明
Manage User Variables	フローチャートのユーザー変数の既定値を作成、削除、および設定 できるようにします。
Use User Variables	出力ファイルまたはテーブル内でのユーザー変数の使用を許可しま す。

Windows 偽装の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『Windows 偽装とは?』
- 『Windows 偽装を使用する理由』
- 55 ページの『Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係』
- 55 ページの『Windows 偽装グループ』
- 55 ページの『Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログイン』

Windows 偽装とは?

Windows 偽装は、Campaign の管理者が、Campaign ユーザーを Windows ユーザー に関連付けることを可能にするメカニズムです。その関連付けにより、Campaign ユ ーザーが呼び出す Campaign プロセスが、対応する Windows ユーザーの資格情報 のもとで実行されるようになります。

例えば、Windows 偽装が有効になっている場合、Campaign のユーザー jsmith が フローチャートを編集すると、unica_acsvr プロセスが Marketing Platform のログ イン名 jsmith に関連する Windows ユーザー ID のもとで開始されます。

Windows 偽装を使用する理由

Windows 偽装を使用することにより、ファイル・アクセスに関して Windows レベルのセキュリティー許可の仕組みを利用することができます。 NTFS を使用するようセットアップされているシステムの場合、ユーザーおよびグループによるファイルやディレクトリーへのアクセスを制御することができます。

さらに、Windows 偽装を使用するなら、Windows システム監視のさまざまなツール を使用することにより、どのユーザーがサーバー上のどの unica_acsvr プロセスを 実行しているかを知ることができます。

Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係

Windows の偽装を使用するには、Campaign ユーザーと Windows ユーザーの間に 1 対 1 の関係を確立する必要があります。つまり、Campaign の各ユーザーが、それ と正確に同じユーザー名の 1 人の Windows ユーザーに対応していなければなりま せん。

多くの場合、Campaign を使用することになる、一群の Windows 既存ユーザーの集 合から管理作業を開始することになります。 Marketing Platform において、 Campaign ユーザーを、それぞれ関連する Windows ユーザーと正確に同じ名前で作 成する必要があります。

Windows 偽装グループ

Campaign ユーザーをセットアップする対象となる Windows ユーザーのそれぞれ を、Windows 偽装グループに入れることが必要です。次に、そのグループを特定の ポリシーに割り当てる必要があります。

Campaign パーティション・ディレクトリーに対する read/write/execute 特権を、 そのグループについて付与するなら、管理作業を簡素化できます。

Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログイン

Windows 偽装がセットアップされている場合、ユーザーが Windows にログインした時点で、Campaign ユーザーは、シングル・サインオンを使用して自動的に IBM Unica Marketing にログインすることになります。ブラウザーを開いて IBM Unica Marketing の URL に移動する際に、再度ログインする必要がなく、IBM Unica Marketing の開始ページがすぐに表示されます。

Windows 偽装の作業

このセクションでは、Windows 偽装のセットアップに含まれる以下の作業について 説明します。

- 『Windows 偽装のプロパティーの設定』
- 56 ページの『Campaign ユーザーの作成』
- 56ページの『Windows 偽装グループの作成』
- 56ページの『Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て』
- 56ページの『Windows 偽装グループへの権限割り当て』

注: Windows 偽装の実行には、LDAP および Active Directory が必要です。 LDAP および Active Directory のセットアップについて詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Windows 偽装のプロパティーの設定

「構成」ページの Campaign > unicaACListener カテゴリーで、 enableWindowsImpersonation プロパティーの値を TRUE に設定します。 注:場合によっては、Windowsのドメイン・コントローラーのセットアップに基づいたプロパティーの付加的な要件があるかもしれません。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」のうちシングル・サインオンに関するセクションを参照してください。

Campaign ユーザーの作成

Marketing Platform を使用して、Campaign の内部または外部ユーザーを作成することができます。

外部ユーザーは、Active Directory のユーザーおよびグループ同期を構成することに より作成します。作成する各ユーザーのログイン名は、そのユーザーの Windows ユーザー名と同じでなければなりません。

Windows 偽装グループの作成

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザー用の Windows グループを作成します。その後、Campaign ユー ザーに対応する Windows ユーザーを、このグループに追加します。

グループの作成について詳しくは、Microsoft Windows のドキュメンテーションを参照してください。

Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザーに対応するユーザーを格納するための Windows グループの作成 後、そのグループを以下のポリシーに追加する必要があります。

- プロセスのメモリー・クォータの調整
- トークン・オブジェクトの作成
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

グループをポリシーに割り当てることについて詳しくは、Microsoft Windows のドキ ュメンテーションを参照してください。

Windows 偽装グループへの権限割り当て

Windows Explorer を使用して、Campaign インストール済み環境下の partitions/*partition_name* フォルダーに対する read/write/execute アクセス権限を、 Windows 偽装グループに付与します。

フォルダーに対する権限割り当てについて詳しくは、Microsoft Windows のドキュメ ンテーションを参照してください。

プロキシー・サーバー認証サポートについて

すべてのインターネット・トラフィックが必ずプロキシー・サーバーを通過するように Campaign を構成および実行する必要がある場合、プロキシー・サーバー認証 サポートを使用できます。この機能により Campaign の Active-X コンポーネント は、認証を必要とするプロキシー・サーバーを介して接続し、(ユーザーごとに) 保 管された資格情報を自動的に渡すことができます。以下の認証メカニズムを使用し て、プロキシーを介したアクセスを構成できます。

- 基本
- ダイジェスト
- NTLM (NT LAN マネージャー)
- ネゴシエーション (Kerberos または NTLM へと解決される場合がある)

注: サポートされるメカニズムの実際のバージョンは、Internet Explorer ブラウザー によって決まります。

ブラウザーでのローカル・エリア・ネットワーク設定のサポートにつ いて

Active-X コンポーネントは、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 設定に関す る次のような Internet Explorer (IE) オプションをサポートします。

- 自動構成。これには、設定を自動検出し、プロキシー自動設定 (Proxy Auto Configuration、PAC) スクリプトを自動構成スクリプトとして使用するオプション が含まれます。
- プロキシー・サーバー。これには、LAN 用にプロキシー・サーバーを使用したり、ローカル・アドレスの場合にプロキシー・サーバーを迂回したりするオプション、および詳細設定(HTTP プロキシー・アドレスとポート、例外)が含まれます。

注: 例えば http://machine:port/proxy.pac のような http または https スキーム を使用するには、Active-X コンポーネントが PAC ファイル・アドレスを必要とし ます (提供されている場合)。 IE は file スキーム (例えば file://C:/windows/ proxy.pac) を認識しますが、file スキームを使用した場合には Active-X コンポー ネントが PAC ファイルの探索に失敗します。また、認証が必要な場合 (例えば認証 を必要とする Web サーバーによって PAC ファイルが提供される場合) にも、 Active-X コンポーネントが PAC ファイルを見つけることができない可能性があり ます。

proxy という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報 を設定するには

それぞれの Campaign ユーザーごとに、Marketing Platform では、"proxy" という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報 (ユーザー名とパスワード) を設定する必要があります。これらの資格情報はプロキシー・サーバーへの接続に使われます。

1. 「設定」>「ユーザー」ページで、各 Campaign ユーザーごとに proxy という名 前のデータ・ソースを追加します。

2. proxy データ・ソース用のユーザー名とパスワードには、プロキシー・サーバー のユーザー名およびパスワードを設定します。

注: Marketing Platform にデータが保管されるとき、データは自動的に暗号化されま す。しかし Web サーバーから Active-X 実装にデータが渡されるときには、エンコ ードされるだけです (暗号化されません)。この通信のために追加的なセキュリティ ーが必要であれば、SSL を使用するよう Campaign を構成する必要があります。

注: プロキシー・サーバーのユーザー名またはパスワードが変更された場合、各ユ ーザーの "proxy" データ・ソースの値を編集することにより、ユーザーはこれらの 認証値が一致するように更新する必要があります。

第5章構成の管理

IBM Unica Marketing を初めてインストールするときは、「構成」ページに、IBM Unica Marketing Platform の構成に使用されるプロパティーといくつかのグローバル 構成プロパティーのみが表示されます。追加の IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールするときは、それらのアプリケーションの構成に使用されるプ ロパティーが Marketing Platform に登録されます。その後、それらのプロパティー が「構成」ページに表示され、そこで値の設定または変更ができるようになりま す。

アプリケーションによっては、中央リポジトリーに格納されない追加構成プロパテ ィーがあることがあります。アプリケーションのすべての構成オプションについて 詳しくは、アプリケーションの資料を参照してください。

プロパティー・カテゴリーについて

Marketing Platform を最初にインストールしたときに、レポート、一般、およびプラ ットフォームというカテゴリーが表示されます。これらのカテゴリーには、スイー トにインストールされるすべての IBM Unica Marketing アプリケーションに適用さ れる、以下のプロパティーが含まれています。

- デフォルトのロケール設定
- ログイン・モードおよびモード固有の設定を指定するプロパティーが含まれた、
 セキュリティー・カテゴリーおよびサブカテゴリー
- パスワード設定
- データ・フィルターの構成に使用されるプロパティー
- スケジュールの構成に使用されるプロパティー
- レポート機能の構成に使用されるプロパティー

インストールされる IBM Unica Marketing アプリケーションに応じて、追加カテゴ リーにはアプリケーション固有のカテゴリーおよびサブカテゴリーが含まれます。 例えば、Campaign をインストールした後は、**キャンペーン・**カテゴリーに Campaign関連のプロパティーおよびサブカテゴリーが含まれています。

カテゴリー・タイプを識別する

カテゴリーは 3 つのタイプのいずれかで、以下のようにそれぞれ別のアイコンによって識別されます。

カテゴリー・タイプ	アイコン
構成可能なプロパティーが含まれていないカ テゴリー	
構成可能なプロパティーが含まれているカテ ゴリー	F/

カテゴリー・タイプ	アイコン
カテゴリーの作成に使用できるテンプレー ト・カテゴリー	

テンプレートを使用してカテゴリーを複写する

IBM Unica Marketing アプリケーションのプロパティーは、アプリケーションのイ ンストール時に Marketing Platform に登録されます。アプリケーションの構成にカ テゴリーの複写が必要な場合、カテゴリー・テンプレートが用意されています。カ テゴリーを作成するには、テンプレートを複写します。例えば、適切なテンプレー トを複写することによって、新規のCampaignパーティションまたはデータ・ソース を作成することができます。テンプレートから作成したカテゴリーを削除すること もできます。

カテゴリー・テンプレートを識別する

「構成」ページで、ナビゲーション・ツリーにカテゴリー・テンプレートが表示されます。ツリー内では、カテゴリー・テンプレートのラベルがイタリックになっていて小括弧で囲まれているので、識別することができます。

新規カテゴリーに名前を付ける

新規カテゴリーに名前を付ける際には、以下の制限が適用されます。

- ・ ツリー内で兄弟関係にあるカテゴリー間で(つまり同じ親カテゴリーを共有する カテゴリー間で)固有の名前である必要があります。
- 以下の文字は、カテゴリー名には使用できません。

また、名前をピリオドで始めることはできません。

テンプレートから作成したカテゴリーを削除する

デフォルトでは、テンプレートから作成したカテゴリーはすべて削除できます。

カテゴリーの削除

「構成」ページには、削除できるカテゴリーと削除できないカテゴリーがありま す。テンプレートから作成したカテゴリーは、すべて削除できます。また、IBM Unica Marketing 製品が登録されている場合、そのカテゴリー・セットには削除可能 なカテゴリーが含まれている場合があります。

「構成」ページで削除可能なカテゴリーには、「設定」ページに「**カテゴリーの削** 除」リンクが表示されます。このページは、ナビゲーション・ツリーでカテゴリー を選択すると表示されます。

プロパティーの説明について

プロパティーの説明には以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- オンライン・ヘルプを起動するには、「ヘルプ」>「このページのヘルプ」をクリックします。製品をクリックし、それに続くページで構成カテゴリーをクリックして、カテゴリー内のすべてのプロパティーを説明するトピックに移動します。
- 「ヘルプ」>「製品資料」をクリックした際に起動されるページからは、PDF 形式のすべての製品資料にアクセスすることができます。すべてのプロパティーの説明は、「Marketing Platform Administrator's Guide」の付録に含まれています。

画面の最新表示について

構成ナビゲーション・ツリーの上部にある最新表示ボタン ¹ には、以下の機能 があります。

- ・ ツリーの内容を最新表示します。これは、構成設定の最新情報を取得したい場合 に役立ちます。ツリーを表示している間に設定が更新される場合があります(例 えば、アプリケーションが登録または登録解除されたり、他のユーザーが設定を 更新したりした可能性があります)。
- 必要に応じてツリーを縮小または展開して、最後にノードを選択したときの状態
 にナビゲーション・ツリーを戻します。

重要: 編集モードになっているときに「最新表示」をクリックすると、ページは 読み取りモードに戻ります。保存されていなかった変更はすべて失われます。

デフォルトのユーザー・ロケール設定について

Marketing Platform には、これを実装するすべての IBM Unica Marketing アプリケ ーションに適用されるデフォルトのロケール属性があります。このデフォルトを設 定するには、「スイート」カテゴリーの「地域設定」プロパティーの値を設定しま す。 このプロパティーについて詳しくは、「構成」領域でオンライン・ヘルプを参照するか、「*Marketing Platform Administrator's Guide*」を参照してください。IBM Unica Marketing アプリケーションにこの属性が実装されているかどうかを調べるには、そのアプリケーションの資料を参照してください。

ユーザーのアカウントでこのプロパティーの値を変更することによって、ユーザー 単位でこれらのデフォルト値をオーバーライドすることができます。詳しくは、16 ページの『ユーザーごとのロケール設定の指定』を参照してください。

プロパティー値の編集

このセクションでは、「構成」ページでプロパティー値を編集する方法について説 明します。

カテゴリーに移動する

1. IBM Unica Marketing にログインします。

2. ツールバーの「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページに構成カテゴリー・ツリーが表示されます。

3. カテゴリーの横にある正符号アイコンをクリックします。

カテゴリーが開き、サブカテゴリーが表示されます。カテゴリーにプロパティー が含まれている場合は、プロパティーがその現行値と共に表示されます。

4. 編集するプロパティーが表示されるまで、カテゴリーおよびサブカテゴリーを展 開します。

プロパティー値を編集する

1. 『カテゴリーに移動する』に説明されている方法で、設定するプロパティーが含 まれているカテゴリーまで移動します。

カテゴリーの「設定」ページには、対象のカテゴリーのすべてのプロパティーの リストと、その現行値が表示されます。

2. 「設定の編集」をクリックします。

カテゴリーの「設定の編集」ページの編集可能フィールドにプロパティー値が表 示されます。

3. 必要に応じて値を入力または編集します。

UNIX では、すべてのファイル名およびディレクトリー名で大/小文字が区別され ます。入力するファイル名およびフォルダー名の大/小文字は、UNIX マシン上の ファイル名またはフォルダー名の大/小文字と一致する必要があります。

4. 変更を保存するには「**保存して終了する**」をクリックし、保存せずにページを終 了するには「**キャンセル**」をクリックします。

カテゴリーの複写と削除

このセクションでは、「構成」ページでカテゴリーを複写および削除する方法について説明します。
テンプレートから新規カテゴリーを作成する

1. 「構成」ページで、複写するテンプレート・カテゴリーまで移動します。

他のカテゴリーと異なり、テンプレート・カテゴリーのラベルはイタリックで、 小括弧で囲まれています。

2. テンプレート・カテゴリーをクリックします。

「テンプレートからのカテゴリーの作成 (Create category from Template)」ページが表示されます。

- 3. 「新規カテゴリー名」フィールドに名前を入力します (必須)。
- この時点で新規カテゴリーのプロパティーを編集できます。また、後で編集する こともできます。
- 5. 「保存して閉じる」をクリックして、新規構成を保存します。

新規カテゴリーがナビゲーション・ツリーに表示されます。

カテゴリーを削除する

1. 「構成」ページで、削除するカテゴリーまで移動し、クリックしてそのカテゴリ ーを選択します。

カテゴリーの「設定」ページが表示されます。

2. 「カテゴリーの削除」リンクをクリックします。

「"category name" を削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

3. 「OK」をクリックします。

そのカテゴリーは、ナビゲーション・ツリーに表示されなくなります。

第6章 レポートの構成

レポート作成機能のために、IBM Unica Marketing はサード・パーティーのビジネ ス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合します。レポート作 成は、以下のコンポーネントに依存します。

IBM Cognos のインストール済み環境

IBM Enterprise アプリケーションと IBM Cognos インストール済み環境を統合する IBM Unica Marketing コンポーネントのセット

いくつかの IBM Unica Marketing アプリケーションでは、アプリケーションの IBM システム・テーブルでレポート・ビューやテーブルを作成できるようにする レポート・スキーマ

IBM Cognos Report Studio で作成された IBM Unica Marketing アプリケーション のレポート例

この章では、各レポート・コンポーネントについて説明し、インストール後の構成 に関する情報を提供します。レポートのインストールについては、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」を参照してください。

IBM Unica Marketing スイートのレポートについて

IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする場合、各アプリケーションは自己を Marketing Platform に登録します。登録処理時に、各アプリケーションは自己のエントリーを「分析」メニュー項目に追加します。

アプリケーションのレポート・パッケージを構成した後は、次のようにします。

- アプリケーションの「分析」メニュー項目で、クロスオブジェクト・レポートへのアクセスが提供されます。
- 次に、該当するオブジェクトの「分析」タブに単一オブジェクト・レポートが表示されます。
- サンプル・ダッシュボードにアプリケーションのダッシュボード・レポートが表示され、それらを新しいダッシュボードに追加できます。

通常、IBM Unica アプリケーションのインストール時に、IBM Unica 製品のレポート・パッケージがインストールされます。レポート・スキーマは、すべてのレポート・パッケージに含まれているわけではありませんが、以下の IBM Cognos BI コンポーネントはすべてに含まれています。

- IBM Unica アプリケーション・レポート用のカスタマイズ可能な IBM Cognos レポート・メタデータ・モデル
- IBM Cognos 8 BI Report Authoring で作成された、カスタマイズ可能な IBM Unica アプリケーション・レポート
- レポート・データ・モデルおよびレポートについて説明した解説書

IBM Cognos モデルは、IBM Unica アプリケーション・データベース内のレポート・ビュー (またはテーブル) を参照し、また IBM Unica レポート・パッケージで も配信される IBM Cognos レポートで、そのデータを利用できるようにします。

インストール直後は、レポートはデフォルトの状態にあり、サンプルのレポートと 見なされます。理由は次のとおりです。多くの IBM Unica アプリケーションには、 追加やカスタマイズが可能なオブジェクト、属性、またはメトリックのセットがあ ります。例えば、Campaign では、レスポンス・タイプ、カスタム・キャンペーン属 性、追加オーディエンス・レベルなどを追加することができます。ご使用のシステ ムのデータ設計を実装した後、レポートを再表示して、レポート例をカスタマイズ したり、新しいレポートを作成したりできます。

ユーザーの実装環境のデータ設計の後でレポートを構成する方法は、IBM Unica Marketing システムに組み込まれている IBM Unica アプリケーションによって異なります。

- Campaign および Interact の場合、レポート・スキーマをカスタマイズしてから、 インストール時に作成されたビューまたはレポート・テーブルを更新します。その時に、Cognos データ・モデルと新しく更新されたレポート・ビューを同期化し、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みのモデルを公開します。これで、新規カスタム属性が、Report Authoring で使用可能になり、それらの属性をレポート例に追加したり、属性を表示する新規レポートを作成したりすることができます。
- レポート・スキーマを提供しない IBM Unica アプリケーションおよびeMessage (カスタマイズ可能なスキーマを提供) については、Cognos IBM レポートのみを 構成します。

このセクションでは、セキュリティー・モデル、スキーマ、データ・モデル、およ びレポートについて説明します。

レポートおよびセキュリティーについて

レポート機能は、以下のアクセス制御機構によって制御されます。

- ユーザーが IBM インターフェースからレポートを実行可能かどうかは、IBM Unica アプリケーション・アクセス設定によって付与されている権限に応じて決 まります。さらに、Campaign、eMessage、および Interact の場合、IBM Cognos システム上でのフォルダー構造に基づいて、レポートのグループへのアクセス権 限を付与または否認することができます。(この機能は、その他の製品には使用で きません。)
- 管理者がスキーマのカスタマイズやレポート SQL ジェネレーターの実行を行え るかどうかは、Marketing Platform に構成されている権限によって決まります。

 また、IBM Cognos 8 BI システムが IBM 認証を使用するように構成し、それに よって IBM Cognos システムから IBM アプリケーション・データへのアクセス を制御することもできます。

レポート・フォルダー権限について

IBM Cognos システムにインストールする IBM Cognos レポート・パッケージに は、フォルダーに編成する IBM Unica アプリケーション用のレポートの仕様が含ま れています。例えば、Interact 用のフォルダーには、「Interact Reports」という名前 が付けられ、レポートの仕様は、IBM Cognos システム上のそのフォルダーの中に 物理的に配置されます。

Campaign、eMessage、および Interact の場合、レポートのグループに対する権限 を、それらが IBM Cognos システム内で物理的に格納されているフォルダー構造に 基づいて構成することができます。

IBM Cognos ファイル・ディレクトリーとの同期

IBM Cognos システム上のレポート・フォルダーの IBM Unica システムを認識でき るようにするには、IBM Unica インターフェースの「設定」メニューにある「レポ ート・フォルダーの権限の同期」オプションを実行します。このオプションは、 IBM Cognos システムに接続して、どのフォルダーが存在するのかを判別します。 その後、Campaign パーティションのユーザー権限リストにエントリーを作成しま す。「レポート」という名前のエントリーが、「ログ」エントリーと「システム・ テーブル」エントリーの間の権限リストに表示されます。これで、「レポート」エ ントリーを展開すると、レポート・フォルダー名がリストされ、権限が表示されて います。

新規権限のデフォルト設定は「不認可」です。したがって、「レポート・フォルダ ーの権限の同期」オプションを実行した後で、レポート・フォルダーの権限を構成 する必要があります。そうしないと、誰も IBM Cognos レポートにアクセスできな くなります。

パーティションとフォルダー・パーティション

フォルダー同期プロセスでは、すべてのパーティションについて、Cognos システム にある全フォルダーの名前を取得します。いずれかのパーティションのレポート・ フォルダー権限を構成することにした場合、すべてのパーティションについて権限 を構成する必要があります。

IBM Cognos BI システムの保護について

ご使用の IBM システムを IBM Cognos 8 BI システムと統合した場合、2 つの方 法で IBM Cognos システムから IBM アプリケーション・データへのアクセス権限 が提供されます。

 IBM アプリケーションから: 誰かが IBM インターフェースからレポートを要求 した場合、IBM システムは IBM Cognos システムに接続し、レポート・ビュー またはテーブルに対してクエリーを実行してから、IBM インターフェースに戻っ てレポートを送信します。 IBM Cognos アプリケーションから: ユーザーが Framework Manager で IBM ア プリケーション・データ・モデルを処理する場合、または Report Authoring でレ ポートを処理する場合は、IBM アプリケーションのデータベースに接続します。

デフォルトの状態では、Cognos システムは無保護です。これは、IBM Cognos アプ リケーションにアクセスできるユーザーなら誰でも、IBM アプリケーションのデー タベースからデータへのアクセスを持っていることを意味します。

IBM Unica 認証プロバイダー

IBM Cognos が IBM 認証を使用するように構成されている場合は、Marketing Platform のセキュリティー層と通信する IBM Cognos 8 BI システムに IBM Unica 認証プロバイダーをインストールして、ユーザーを認証します。アクセス権限につ いては、ユーザーは有効な IBM ユーザーでなければならず、また次の権限のいず れかを付与する役割を持っている必要があります。

- report_system、これは IBM インターフェースのレポート構成オプションへのア クセス権限も付与します。デフォルトの役割「ReportsSystem」は、この権限を付 与します。
- report_user、これは IBM インターフェースのレポート構成オプションではな く、レポートへのアクセス権限を付与します。デフォルトの役割「ReportsUser」 は、この権限を付与します。

「認証」と「ユーザーごとに認証」の2つの認証オプションがあります。

モード = 認証

認証モードが「認証」に設定されている場合、IBM Unica Marketing システムと IBM Cognos システムとの間の通信は、マシン・レベルで保護されています。

ユーザーは単一レポートのシステム・ユーザーを構成し、レポート構成設定でそれ を識別します。レポートのシステム・ユーザーを構成するには、以下を実行しま す。

- ユーザーを作成し、そのユーザーに、ReportsSystem の役割を割り当てます。 ReportsSystem は、すべてのレポート機能へのアクセス権限をユーザーに付与しま す。
- ユーザーのデータ・ソースに、IBM Cognos システムのログイン資格情報を格納 します。
- 規則に従って名前を付けます (必須ではありません)。cognos_admin と名前を付ける。

IBM Unica 認証プロバイダーは、次のようにしてユーザーを認証します。

- IBM Unica Marketing ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、Cognos システムとの通信で、レポート・システム・ユーザーのレコ ードに格納された資格情報を使用します。認証プロバイダーは、ユーザーの資格 情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) としてログインし、認証プロバイダーがユーザー資格情報を検証します。

モード = ユーザーごとに認証

認証モードが「ユーザーごとに認証」に設定されている場合、システムはレポート・システム・ユーザーを使用しません。代わりに、個々のユーザーのユーザー資格情報を評価します。

- IBM ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、そのユーザー資格情報を Cognos システムとの通信に組み込みます。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、自分自身の資格でログインし、認証プロバイダーが資格情報を検証します。

このモードでは、すべてのユーザーがレポートを参照するために ReportsUser また は ReportsSystem のいずれかの役割を持っている必要があります。通常は、1 人ま たは 2 人の管理者に ReportsSystem の役割を割り当て、IBM インターフェースで レポートを参照する必要がある IBM ユーザーのユーザー・グループに ReportsUser の役割を割り当てます。

認証と権限

認証プロバイダーでは、レポート権限を確認する以外に権限検査を行いません。 Cognos アプリケーションにログインするレポート作成者は、レポート・フォルダー 権限が IBM システム上でどのように設定されていても、Cognos システム上のすべ てのレポートにアクセスすることができます。

レポート権限のリファレンス

レポート構成機能にアクセスし、次の設定によってレポート自体を制御します。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
「 設定 」メニューの「 構成 」オプション (「構成」ページ でレポート・スキーマを構成します)	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions) 」>「プラットフォーム」の下にあるプラッ トフォーム権限「構成へのアクセス権限 (Access to Configuration)」
「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」お よび「レポート・フォルダーの権限の同期」オプション	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions) 」>「プラットフォーム」の下にあるレポー ト権限「report_system」 標準の ReportsSystem 役割には、この権限があります。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
分析機能のメニュー	製品ごとに異なるアプリケーションのアクセス設定は、次 のとおりです。 ・
	Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設 定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions) 」のキャンペーン・パーティション・レベ ルにある「管理」>「アクセス分析セクション (Access Analysis Section)」の権限です。
	Marketing Operations および Distributed Marketing につ いては、セキュリティー・ポリシーの「分析」権限で す。
「分析」タブ	個々のオブジェクトに関するセキュリティー・ポリシーの 分析 (または解析) 権限です。
レポートで表示されるデータ	Cognos システムの認証モードが「ユーザーごとの認証」 である場合、ユーザーがレポート内のデータを参照するに は、ReportsSystem または ReportsUser のどちらかの役割 を持っている必要があります。

レポート・スキーマについて

Campaign、Interact、および eMessage のレポートを実装する場合は、レポート・ビ ューおよびテーブルの作成から開始し、レポートが報告可能なデータを抽出できる ようにします。これらのアプリケーションのレポート・パッケージには、レポー ト・ビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成するためにレポート SQL ジェネレーターで使用されるレポート・スキーマが含まれています。

Campaign および Interact の場合は、スキーマ・テンプレートをカスタマイズして、 レポートに含める予定のすべてのデータが表示されるようにします。次に、レポー ト SQL ジェネレーターを実行し、結果のスクリプトを取得して、アプリケーショ ン・データベースでそのスクリプトを実行します。

eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、管理者また はインストール・チームは、同様にレポート・ビューやテーブルを作成する SQL を生成し、eMessage データベースでスクリプトを実行する必要があります。

レポート・スキーマを使用すると、サード・パーティーのレポート・ツールを使用 して、より簡単に IBM Unica アプリケーション・データを検査できるようになりま す。ただし、IBM Unica Marketing のユーザー・インターフェースでレポートを表 示したい場合は、ご使用のシステムを IBM Cognos 8 BI と統合する必要がありま す。

レポート SQL ジェネレーターについて

レポート SQL ジェネレーターは、レポート・スキーマを使用して、IBM Unica ア プリケーションのデータベースからデータを抽出するために必要な分析ロジックを 判別します。次に、SQL 生成します。この SQL は、分析ロジックを実装するビュ ーまたはレポート・テーブルを作成し、ビジネス・インテリジェンス・ツールを有 効にして報告可能なデータを抽出します。

インストールおよび構成時に、システム実装者がIBM Unica のアプリケーション・ データベースを識別するデータ・ソース・プロパティーを構成済みです。レポート SQL ジェネレーターは、以下の場合にアプリケーション・データベースへの接続を 使用します。

- ビューまたは実体化ビューを作成するスクリプトを検証する場合
- レポート・テーブルを作成するスクリプトで使用するための正しいデータ・タイプを判別する場合

JNDI データ・ソース名が正しくないか欠落している場合、レポート SQL ジェネレ ーターは、レポート・テーブルを作成するスクリプトを生成できません。

レポート配置オプションについて

レポート SQL ジェネレーター・ツールを実行する場合は、スクリプトでビュー、 実体化ビュー、またはテーブルを作成するかどうかを指定します。使用する配置オ プションは、システムに含まれるデータの量によって異なります。

- 小規模な実装環境の場合は、必要に応じて、実動データを直接照会するレポート・ビューを効率的に実行することができます。効率がよくない場合は、実体化ビューを試してみてください。
- 中規模の実装環境の場合は、実動システム・データベースで実体化ビューを使用 するか、またはレポート・テーブルを別のデータベースにセットアップします。
- 大規模の実装環境の場合は、別個のレポート・データベースを構成します。

すべての実装環境で、Cognos Connection Administration を使用して、大量のデータ を取得するレポートを業務外の時間帯に実行するようにスケジュールすることがで きます。

実体化ビューおよび MS SQL Server

レポート機能は、MS SQL Server の実体化ビューをサポートしていません。

SQL Server では、実体化ビューは「インデックス・ビュー」と呼ばれています。しかし、SQL Server 上のビューにインデックスを作成する定義では、特定の集計、関数、およびレポート・ビューが含まれているオプションを使用することができません。したがって、SQL サーバー・データベースを使用している場合は、ビューまたはレポート・テーブルを使用してください。

eMessage および Oracle

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが Oracle の場合は、実体化ビューまたはレポート・テーブルを使用する必要があります。

データ同期

実体化ビューまたはレポート・テーブルと一緒に配置する場合、データを実動シス テムのデータと同期する頻度を決定します。その後、データベース管理ツールを使 用して、データの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的にレポート・データを 最新表示してください。

レポートの制御グループおよびターゲット・グループについて

レポートのパッケージに入っているサンプルの IBM Cognos 8 BI レポートには、 ターゲット・グループと制御グループの両方からのデータが含まれています。これ らのレポートをサポートするために、レポート・スキーマには、デフォルトのコン タクトおよびレスポンス履歴メトリックとデフォルトのレスポンス・タイプそれぞ れについて 2 つの列が含まれています。1 つの列には、制御グループからのレスポ ンスが表示され、もう一方の列には、ターゲット・グループからのレスポンスが表 示されます。

サンプルのレポートの拡張や、独自の新規レポートの作成を行う予定の場合、ター ゲット・グループと制御グループの両方からのレスポンス情報を組み込むかどうか を決定します。組み込む場合は、メトリックまたはレスポンス・タイプを追加する ため、レポート・スキーマにターゲット用と制御用の 2 つの列を作成します。組み 込まない場合は、レポート・スキーマにターゲット・グループの項目用の列のみを 作成します。

オーディエンス・レベルおよびレポートについて

デフォルトの状態では、レポート・スキーマはCampaign に付属の単一の定義済みオ ーディエンス・レベル (顧客)のシステム・テーブルを参照します。これは、パフォ ーマンス・レポートおよびレスポンス履歴が、デフォルトでは顧客オーディエン ス・レベルを参照することを意味します。

それらが正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するように、 パフォーマンスおよびレスポンス・スキーマで指定された入力テーブルを編集し て、レポート・スキーマのオーディエンス・レベルを変更することができます。

さらに、Campaign および Interact については、追加のオーディエンス・レベル用の レポート・スキーマを追加することができます。レポート・スキーマは、

「Marketing Platform の構成」ページのテンプレートから作成します。追加のレポート・ビューを Cognos データ・モデルに追加します。その後、Cognos レポートを変更して、追加のオーディエンス・レベルに対応するように変更します。

レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて

パフォーマンス・レポートとレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成する 場合、または追加オーディエンス・レベル用の新規レポート・スキーマを作成する 場合は、オーディエンス・レベルのオーディエンス・キーを指定します。キーに複 数のデータベースの列が含まれている場合 (マルチキー・オーディエンス・キーと 呼ばれることがある)、列名の間にはコンマを使用してください。例えば、 ColumnX,ColumnY と指定します。

レポート・スキーマの「オーディエンス・キー」フィールドに入力できるストリン グの最大長は、255 文字です。オーディエンス・キーが 255 文字より長い場合は、 生成済みの SQL でこの制限を回避することができます。「オーディエンス・キー」フィールドにキーの最初の 255 文字を入力して、通常どおりに SQL スクリプトを生成します。次に、エディターで生成されたスクリプトを開き、検索と置換を使用して、切り捨てられたオーディエンス・キー参照のそれぞれを完全なストリングに置換します。

パーティションおよびレポート・スキーマについて

Campaign に複数のパーティションがある場合、システムの実装者が Cognos システム上でパーティションごとにレポート・パッケージを構成済みです。ただし、ご使用のシステムのデータ設計が実装された後で、パーティションごとにレポート・ビューまたはテーブルを再表示する必要があります。

各パーティションにレポート・スキーマを追加できます。レポート・スキーマは、 「スキーマの構成」ページのテンプレートから作成します。

Framework Manager データ・モデルについて

Cognos モデルは、物理データベース・オブジェクトと、クエリー・サブジェクトお よびクエリー項目に対する物理データベース・オブジェクトの関係を記述するレポ ート・メタデータです。IBM Cognos8 BI Report Authoring でレポートを作成する場 合は、モデルに記述されたクエリー・サブジェクトおよび項目から作成します。

IBM Unica アプリケーションのデータ・モデルは、IBM Unica アプリケーション・ データベース内のレポート・ビューを参照し、また IBM Unica レポート・パッケー ジで配信される Cognos 8 レポートで、そのデータを利用できるようにします。

レポート・ビューを構成して、追加の属性、メトリック、レスポンス・タイプなど を組み込んだ場合は、Cognos レポート・モデルとレポート・ビューを同期させ、 Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みモデルを公開します。これで、新規属性が Report Authoring で使用可能になり、それらの属性を IBM Unica レポートに追加す ることができます。

IBM Unica レポート・パッケージの IBM Cognos 8 モデルでは、以下の 3 つのカ テゴリー (フォルダー) で IBM Unica アプリケーション・メタデータを提供してい ます。

- インポート・ビュー。このレベルでは、IBM Unica アプリケーション・データベ ース内のレポート・スキーマからデータを表示します。データ・ソース接続を介 して、データ・モデルと IBM Unica データベース・ビュー、実体化ビュー、ま たはレポート・テーブルを同期化するには、このビューを使用します。
- モデル・ビュー。これは、基本的なメタデータ変換を実行する作業域です。クエ リー・サブジェクトによって表示されるオブジェクト・エンティティー間の関係 をセットアップして、ビジネス・ビューで使用可能なビルディング・ブロックを 作成します。
- ビジネス・ビュー。このレベルでは、ビジネス・オブジェクトの観点からクエリ ー・サブジェクトを編成して、レポート作成を単純化します。これは、Report Authoring で IBM Unica アプリケーションのレポートを開いたときに表示される 情報です。

Campaign モデルおよび eMessage モデルには、モデル・ビューからビジネス・ビュ ーへのショートカットが含まれています。Interact モデルでは、そのクエリー・サブ ジェクトの一部が 2 つのデータ・ソースにまたがるため、同じ方法のショートカッ トを使用しません。

Report Authoring レポートについて

それぞれの IBM Unica レポート・パッケージには、IBM Cognos 8 Report Authoring で作成された、そのアプリケーション用のレポートがいくつか含まれてい ます。それらをインストールすると、IBM Unica Marketing スイートの共通ユーザ ー・インターフェースで、以下の場所からレポート例を選択して実行することがで きます。

- 「分析」メニューから複数のオブジェクト・レポートにアクセス可能です。
- 単一オブジェクト・レポートは、キャンペーンやオファーなどの項目の「分析」
 タブに表示されます。
- また、Campaign、Marketing Operations、および Interact の場合、レポート・パッ ケージに IBM Unica ダッシュボード用のレポートが含まれています。

フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設定について

インストール時に、システムの実装者が Cognos Connection にある IBM Unica ア プリケーションのレポートのアーカイブをパブリック・フォルダー領域にインポー ト済みです。各 IBM Unica アプリケーションのレポートはフォルダーとサブフォル ダーに編成され、フォルダーとサブフォルダーには、アプリケーションとそのパブ リック・フォルダー領域でのレポートの目的の両方を表す名前が付いています。

また、これらのフォルダーとサブフォルダーは、Campaign、Interact、および eMessage のセキュリティー・アクセス制御モデルでも使用されます。セキュリティ ー・アクセス制御モデルには、フォルダー別のレポートのセキュリティー設定が含 まれています。つまり、これらのアプリケーションのセキュリティー・ポリシーに よって、ユーザーにフォルダー内のすべてのレポートに対するアクセス権限が付与 されます。Marketing Operations のアクセス制御モデルはこのレベルのアクセス権限 を提供しません。Marketing Operations では、すべてのレポートへのアクセス権限が あるか、レポートへのアクセス権限がまったくないかのいずれかです。

ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos Connection インターフェースのフォル ダーまたはサブフォルダーを名前変更しないようにしてください。名前変更する場 合は、必ず IBM Unica アプリケーションが変更済みのフォルダー名を認識するよう に構成してください。

- Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「構成」を選択し、 「キャンペーン」>「パーティション」>[パーティション名]>「レポート」で、レ ポート・フォルダーのプロパティーの値を編集して、フォルダーの実際の名前と 一致するようにしてください。
- Marketing Operationsの場合は、plan_config.xml ファイルを開き、 reportsAnalysisSectionHome および reportsAnalysisTabHome 構成設定の値を編 集してください。

レポートのスタイルと外観について

レポート統合コンポーネントには、グローバル・スタイル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。このスタイル・シートは、すべての IBM Unica アプリケーションのレポート全体にわたって共通するレポート・スタイ ルを設定します。スタイルについて詳しくは、付録の 563 ページの『付録 B. Cognos レポートのスタイル・ガイド』を参照してください。この付録では、さまざ まな種類のレポートに関する以下の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- レポートの作成時に手動で行う必要のあるスタイルの書式設定(スタイル・シートを使用して実装できない特殊なスタイルがあるため)。

IBM Unica レポートでは、ダッシュ文字(「-」)には特殊な意味があります。これ は、計算が適用されないことを示します。例えば、合計を表示する行に固有のカウ ントを計算できない場合は、その事実を示すために「-」が表示されます。

一部のレポートは、データがほとんどまたはまったくない場合、システムで最良の 状態では表示されません。例えば、データ・ポイントが1つの折れ線グラフは、線 を表示することができないため、グラフが空のように見えることになります。ま た、サマリー・データのグラフィカル表現では、データのないデータ・ポイントの 日付や時刻はリストされません。例えば、指定した日付範囲にデータのある日が1 日だけ含まれている場合、グラフにはその日付のみが表示されます。

レポートをカスタマイズして、ご使用のシステムからのデータに最適なチャートや グラフの種類を使用することができます。

レポート生成スケジュールのセットアップについて

IBM Cognos Connection では、レポートの自動実行をスケジュールすることができ ます。レポートごとに、実行頻度、フォーマット・オプション、配信方法、保存場 所などを選択できます。

例えば、毎週月曜日の午前 9:00 にレポートを実行し、そのレポートを、指定された 受信者グループに自動生成電子メールを使用して配布するようスケジュールするこ とができます。

レポートのスケジューリングと配布について詳しくは「*IBM Cognos Connection User Guide*」のスケジュールの章を参照してください。

レポート・スキーマのカスタマイズ

このセクションでは、カスタム・データを組み込んでそのデータをレポートに表示 できるように、レポート・スキーマをカスタマイズする方法について説明します。 このタスクの最初のステップは、変更するスキーマを決定することです。次に、シ ステムのレポートの目的に応じて、このセクションの手順のステップを実行してく ださい。

- 76ページの『使用するレポート・スキーマ』
- 76ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加する には』
- 77 ページの『カスタム属性を追加するには』

- 77 ページの『レスポンス・タイプを追加するには』
- 78ページの『コンタクト・ステータス・コードを追加するには』
- 78ページの『パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定するには』
- 79ページの『パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエン ス・レベルを構成するには』

使用するレポート・スキーマ

変更する必要があるレポート・スキーマは、カスタマイズする予定のレポートに応 じて決まります。付録の「製品別のレポートおよびレポート・スキーマ」には、レ ポート・パッケージで提供されているレポート例をサポートするレポート・スキー マを示す表があります。カスタマイズする予定のレポートを決定してから、レポー ト・スキーマ・マップで適切なレポートを参照してください。

- 573 ページの『付録 C. レポートおよびレポート・スキーマ』
- 576 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』
- 575 ページの『eMessageレポートおよびレポート・スキーマ』

注: eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、変更お よび新規 eMessage レポートの作成はできます。

コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加する には

キャンペーン実績およびオファー実績のレポート・スキーマにコンタクト・メトリ ックまたはレスポンス・メトリックを追加することができます。始める前に、以下 の情報を判別してください。

- メトリックを追加したいレポートをサポートしているレポート・スキーマ。詳しくは、付録の 573 ページの『付録 C. レポートおよびレポート・スキーマ』を参照してください。
- ターゲット・グループに加えて、制御グループのレポート・スキーマに列を追加 する必要があるかどうか。72ページの『レポートの制御グループおよびターゲッ ト・グループについて』を参照してください。
- メトリックの計算方法。例えば、メトリックの合計、平均、カウントを出すことができます。

続いて、以下の手順を実行します。

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「 *適切なレポート・スキーマの名前*」を展開します。
- 「列」ノードを展開し、「コンタクト・メトリック」または「レスポンス・メト リック」のいずれかを選択します。
- 3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名」をクリックして、コンタクト・メトリッ クまたはレスポンス・メトリックの名前を入力します。
- 4. 「**列名**」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。 すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
- 5. 「関数 (Function)」には、メトリックの計算方法または判別方法を指定します。

- 6. 「入力列名」には、IBM Unica アプリケーション・データベースにある適切なテ ーブルから、この属性用の列の名前を入力してください。入力列名では、大文字 と小文字が区別されます。
- 7. 「**制御処理フラグ**」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・ スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
- 8. 「変更を保存」をクリックします。
- 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマに制御グループ列を追加します。今度は、数値1を入力してください。数値1は、この列が制御グループを表すことを示します。

カスタム属性を追加するには

カスタム・キャンペーン属性、オファー属性、およびセル属性をカスタム・キャン ペーン属性レポート・スキーマに追加することができます。始める前に、以下の情 報を判別してください。

- UA_CampAttribute 、UA_CellAttribute、または UA_OfferAttribute のうちの適切なテーブルにある、属性の AttributeID 列の値。
- 属性のデータ・タイプ:ストリング値、数値、または日付/時刻値

続いて、以下のステップを実行します。

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・カスタム属性」>「列」を展開します。
- 2. 追加する属性のタイプに一致する列のタイプを選択します。
- 3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてカ スタム属性の名前を入力します。
- 4. 「**列名**」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。 すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
- 5. 「属性 ID」には、この属性の ID を入力します。
- 6. 「**値タイプ**」には、属性のデータ・タイプを指定します。

注:通貨値を保持する属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに NumberValue を指定します。Campaign で、「フォーム要素タイプ」が「選択ボ ックス - 文字列」に設定されている属性を追加する場合は、「値タイプ」フィ ールドに StringValue を追加します。

7. 「変更を保存」をクリックします。

レスポンス・タイプを追加するには

キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマにレスポンス・タイプを追加 することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- ターゲット・グループに加えて、制御グループのレポート・スキーマに列を追加 する必要があるかどうか。72ページの『レポートの制御グループおよびターゲッ ト・グループについて』を参照してください。
- UA_UsrResponseType テーブルからのレスポンス・タイプ・コード。

続いて、以下のステップを実行します。

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳」>「列」>「レスポンス・タイ プ」を展開します。
- 2. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてレ スポンス・タイプの名前を入力します。
- 3. 「**列名**」には、レポート・スキーマで使用するレスポンス・タイプの名前を入力 してください。
- 4. 「**レスポンス・タイプ・コード**」には、このレスポンス・タイプの 3 文字のコ ードを入力します。レスポンス・タイプ・コードでは、大文字と小文字が区別さ れます。
- 5. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・ スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
- 6. 「変更を保存」をクリックします。
- 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマに制御グループ列を追加します。今度は、数値1を入力してください。数値1は、この列が制御グループを表すことを示します。

コンタクト・ステータス・コードを追加するには

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス内訳スキーマにコンタクト・ス テータス・コードを追加することができます。始める前に、UA_ContactStatus テー ブルのコンタクト・ステータス・コードを判別してください。

続いて、以下のステップを実行します。

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳」>「列」>「コンタ クト・ステータス」を展開します。
- 2. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてコ ンタクト・ステータス・タイプの名前を入力します。
- 3. 「**列名**」には、レポート・スキーマで使用するコンタクト・ステータス・タイプ の名前を入力してください。
- 「コンタクト・ステータス・コード」には、このコンタクト・ステータスの 3 文字のコードを入力します。コンタクト・ステータス・コードでは、大文字と小 文字が区別されます。
- 5. 「変更を保存」をクリックします。

パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定するには

Campaign および Interact の標準レポートには、どちらにも、カレンダーの周期でデ ータを要約したパフォーマンス・レポートが含まれています。これらのレポートで 使用されている時間枠がデフォルトの「時間経過に伴う変動」以外のものに指定す るには、以下の手順を実行します。

- 1. 「設定」>「構成」を選択して「レポート」>「スキーマ」を展開し、「キャンペ ーン」または「対話」のいずれかを選択します。
- 2. 目的の実績スキーマを選択します。

- 3. 「設定の編集」をクリックします。
- 4. 「**スキーマ設定**」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション・ リストを選択します。
- 5. 「変更を保存」をクリックします。

パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエン ス・レベルを構成するには

開始の前に、以下の事項を決定します。

- 目的のオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴 テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの名前。
- コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルに対するオーディエンス・キー。72ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて』を参照してください。

次に、それぞれの該当のレポート・スキーマに対して、このセクションの手順を実 行します。

- Campaign の場合: オファー実績、キャンペーン実績、キャンペーン・オファーの レスポンスの内訳、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳
- Interact の場合: 対話実績
- 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「ProductName」 >「SchemaName」を展開します。
- 2. 右のフォームで、「設定の編集」をクリックします。
- 3. 「**入力テーブル**」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キ ーのシステム・テーブルを確認します。

注: 複数のオーディエンス・キーの列名を区切るには、コンマを使用してください。詳しくは、72ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて』を参照してください。

4. 「変更を保存」をクリックします。

追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマ の作成

以下の理由で、追加のレポート・スキーマを作成する場合があります。

- 複数のオーディエンス・レベルでレポートを作成する。複数のオーディエンス・レベルのデータが存在するレポートを作成する場合や、ユーザーに複数のオーディエンス・レベルのいずれかを指定するよう求めるプロンプトを出すフィルターを追加する場合などです。そのため、追加の一連のコンタクトとレスポンス履歴テーブルを指すスキーマが必要です。
- 複数のパーティションにレポートを構成しており、パーティションのシステム・ テーブルごとに異なるスキーマのカスタマイズを実装する必要がある。

始める前に、以下の情報を判別してください。

作成するレポート・スキーマ。

- Campaign の場合: キャンペーン・オファー・レスポンスの内訳、オファー実績、キャンペーン実績、オファーのコンタクト・ステータスの内訳、およびキャンペーン・カスタム属性
- Interact の場合: 対話実績
- このオーディエンス・レベルに関する以下のテーブルの名前。
 - Campaign の場合: コンタクト履歴テーブル、詳細なコンタクト履歴テーブル、 およびレスポンス履歴テーブル
 - Interact の場合: 詳細なコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブル
- このオーディエンス・レベルに関するオーディエンス・キー列 (複数列の場合も ある)の名前
- オーディエンス・レベルの名前を表す2または3文字の短いコードを選びます。新規レポート・スキーマのテーブル名またはビュー名を指定する場合は、このコードを使用します。

レポートの目的に応じて、次の手順のステップを実行してください。

キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマを作成するに は

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スター・スキーマ」を展開しま す。
- 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエン ス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャン ペーン・オファーのレスポンス世帯と指定します。
- 3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス 履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

4. 新規ノードの下で、「**列**」>「レスポンス・タイプ」を選択し、次に該当のオー ディエンス・レベルのレスポンス・タイプを構成します。

このステップのヘルプについては、77ページの『レスポンス・タイプを追加するには』の手順を参照してください。

- 5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーンのレスポンスの内訳」を選 択して「設定の編集」をクリックします。
- 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィー ルドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前 は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように 指定します。UARC_CRB0_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しく は、293 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』 を参照してください。

7. 「変更を保存」をクリックします。

- 8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファーのレスポンスの 内訳」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、 オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字 で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC CORBO HH と指定します。

10. 「変更を保存」をクリックします。

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳スキーマ を作成するには

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スター・スキーマ」を展開しま す。
- 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス世帯と指定します。
- 3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス 履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

4. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・ステータス・コード」を選択し、次 に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・ステータスを構成します。

このステップのヘルプについては、78ページの『コンタクト・ステータス・コ ードを追加するには』の手順を参照してください。

- 5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・コンタクト・ステータス のコンタクト履歴」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィー ルドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前 は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように 指定します。UARC_CCSBO_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳し くは、293ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構 成』を参照してください。

- 7. 「変更を保存」をクリックします。
- 8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファーのコンタクト・ ステータスのコンタクト」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、 オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字 で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC_COCSBO_HH_ と指定します。

10. 「変更を保存」をクリックします。

オファー実績スキーマを作成するには

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「オファー実績スター・スキーマ」を展開します。
- 2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」で、オーディエンス・レベルを示 すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、オファー実績世帯と指 定します。
- 3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・ キーをサポートするテーブルを確認します。
- 4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション を選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

5. 構成ツリーの新規ノードの下で、「**列」>「コンタクト・メトリック**」を選択 し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成しま す。

このステップのヘルプについては、76ページの『コンタクト・メトリックまた はレスポンス・メトリックを追加するには』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「**列**」>「レスポンス・メトリック」を選択し、次に該当の オーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、76ページの『コンタクト・メトリックまた はレスポンス・メトリックを追加するには』の手順を参照してください。

- 7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (オファーのコンタク ト履歴) を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 8. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View name)**」フィー ルドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、 すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように 指定します。UARC_OCH_HH_。テーブルとビューの命名規則について詳しくは、 293 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参 照してください。

- 9. 「変更を保存」をクリックします。
- 10. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各 項目に対して、ステップ 7 から 9 を繰り返します。

キャンペーン実績スキーマを作成するには

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン実績スター・スキーマ」を展開します。
- 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエン ス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャン ペーン実績世帯と指定します。
- 3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・ キーをサポートするテーブルを確認します。

4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション をすべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

5. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・メトリック」を選択し、次に該当の オーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、76ページの『コンタクト・メトリックまた はレスポンス・メトリックを追加するには』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・メトリック」を選択し、次に該当の オーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、76ページの『コンタクト・メトリックまた はレスポンス・メトリックを追加するには』の手順を参照してください。

- 7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (キャンペーンのコン タクト履歴) を選択します。
- 8. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View name)**」フィー ルドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、 すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように 指定します。UARC_CCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しく は、293ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』 を参照してください。

- 9. 「変更を保存」をクリックします。
- 10. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各 項目に対して、ステップ 8 と 9 を繰り返します。

キャンペーン・カスタム属性のスキーマを作成するには

それぞれのパーティションでは、キャンペーン・カスタム属性スキーマが 1 つだけ 必要です。すべてのオーディエンス・レベルに同一のスキーマが使用されます。

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」> 「キャンペーン・カスタム属性」を展開します。
- 「新規カテゴリー名 (New category name)」で、パーティションを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・カスタム属性パーティション 2 と指定します。
- 3. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」を展開し、次に、レポート・スキーマを 作成するパーティションで必要なカスタム・セル、オファー、およびキャンペー ン属性を追加します。

このステップのヘルプについては、77ページの『カスタム属性を追加するに は』の手順を参照してください。

(オプション)必要に応じてビューやテーブルの名前を編集できます。新規ノードの下で、「SQL構成」を展開し、各項目を選択してビューまたはテーブル名を調べます。名前を変更する場合、名前は、すべての文字が大文字で、18文字以

下である必要があります。また、スペースを含めてはなりません。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、293ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

5. 「変更を保存」をクリックします。

対話実績スキーマを新規作成するには

- 1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「対話」>「対話実績 スター・スキーマ」を展開します。
- 2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」フィールドで、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、対話実績世帯と指定します。
- 3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キ ーをサポートするテーブルを確認します。
- 4. 「**スキーマ設定**」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションを すべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できま せん。

- 5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (インタラクティブ・ チャネル・オファーのコンタクト履歴サマリー) を選択します。
- 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARI_OCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、 293ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照 してください。

- 7. 「変更を保存」をクリックします。
- 8. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各 項目に対して、ステップ 6 から 7 を繰り返します。

更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

このセクションでは、Campaign、eMessage、および Interact のインストールおよび 構成時に設定された、デフォルトのレポート・ビューまたはスキーマを更新するプ ロセスについて説明します。ご使用の IBM Unica システムにレポートがまだセット アップされていない場合は、このセクションの手順を使用しないでください。代わ りに、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」を参照してくださ い。

ビューまたはレポート・テーブルの更新の前に

開始の前に、データ・ソースのプロパティーが正しく構成されていることを確認し てください。

1. 86 ページの『データ・ソース別の SQL スクリプト』の表を参照して、更新ス クリプトを実行するデータベースを検証します。

- 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「*ProductName*」を 展開します。
- 3. データ・ソース・フィールド内の値セットが適切なデータ・ソースの実際の JNDI 名と一致していることを確認します。

レポート・ビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生 成

この手順では、既存のレポート・ビューやテーブルの更新済み SQL スクリプトを 生成する方法について説明します。初めてビューまたはテーブルを構成する場合 は、この手順を使用しないでください。代わりに、「*IBM Unica Marketing Platform* インストール・ガイド」を参照してください。

更新済み SQL スクリプトを生成するには、以下の手順を実行します。

- 1. 「**設定」>「レポート SQL ジェネレーター**」 を選択します。「SQL ジェネレ ーター」ページが表示されます。
- 2. 「製品」フィールドで、適切な IBM Unica アプリケーションを選択します。
- 3. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。86 ページの『データ・ソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、適切なス キーマを判別して選択します。
- 「データベース・タイプ」を選択します。このオプションは、スクリプトを生成しているデータベースのデータベース・タイプと一致している必要があります。
- 5. 「**生成タイプ**」フィールドで、適切なオプション (ビュー、実体化ビュー、またはテーブル) を選択します。

「データベース・タイプ」が MS SQL Server に設定されている場合、実体化 ビューというオプションはありません。

JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。

- 6. 「**除去ステートメントの**生成 (Generate Drop Statement)」の値を「Yes」に設 定します。
- (オプション) SQL を調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレ ーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスクリプトが 表示されます。
- 8. 「**ダウンロード**」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定 を求めるプロンプトが出されます。単一のレポート・スキーマを「スキーマ」 フィールドから選択すると、スクリプト名はスキーマの名前 (eMessage_Mailing_Execution.sql など) と同じになります。複数のレポート・ スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名 (Campaign.sql など) のみが 使用されます。名前の詳細なリストについては、86ページの『データ・ソース 別の SQL スクリプト』を参照してください。

- スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、 必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保 存」をクリックします。
- 10. ステップ 7 から 10 を繰り返します。ただし、今度は「除去ステートメント (Drop Statement)」フィールドでは「No」を選択してください。
- 11. 生成する各スクリプトに対して、ステップ 3 から 11 を繰り返します。

注: スクリプトの妥当性検査を無効にする必要がある場合もあります。例え ば、Marketing Platform で IBM Unica アプリケーション・データベースに接続 できないが、どうしてもスクリプトを生成したい場合です。妥当性検査を無効 にするには、レポートのデータ・ソース構成プロパティーの値を消去します。 スクリプトを生成すると、レポート SQL ジェネレーターは、データ・ソース に接続できないという警告を表示しますが、引き続き SQL スクリプトを生成 します。

ビューまたはレポート・テーブルの更新

この手順では、既存のビューまたはレポート・テーブルの更新について説明してい ます。初めてビューまたはレポート・テーブルを作成する場合は、この手順を使用 しないでください。代わりに、ご使用の IBM Unica アプリケーションに関するイン ストール・ガイドに記載されているレポートの章を参照してください。

ビューまたはテーブルを更新する SQL スクリプトの生成とダウンロードが完了した後、アプリケーション・データベースでそれらを実行します。

- 生成して保存した SQL スクリプトを見つけます。『データ・ソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、どのスクリプトをどのデータベースに対して実行 するかを決定します。
- 2. データベース管理ツールを使用して、除去スクリプトを実行します。
- 3. データベース管理ツールを使用して、作成スクリプトを実行します。
- 4. レポート・テーブルについては、データベース管理ツールを使用して、実動シス テムのデータベースから適切なデータを新規テーブルに設定します。
- 5. レポート・テーブルおよび実体化ビューの場合、データベース管理ツールを使用 して、IBM Unica アプリケーションの実動データベースと新規レポート・テーブ ルまたは実体化ビューとの間のデータの同期化処理をスケジュールに入れ、定期 的に実行します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。レポート SQL ジェネレーターがお客様に代わってこの SQL を生成することはありません。

データ・ソース別の SQL スクリプト

以下の表では、各データ・ソースについて生成する必要のあるスクリプトと結果ス クリプトの名前を示し、ビューまたは実体化ビューを作成する場合にどの IBM Unica アプリケーション・データベースに対してどのスクリプトを実行する必要が あるかも示します。次のことに注意してください。 この表にはデータ・ソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしてい ますが、これらはお客様が変更している場合があります。

Interact レポート・スキーマは、	複数のデータ・ソースを参照します。	データ・ソ
ースごとに別の SQL スクリプ	トを生成してください。	

レポート・スキーマ	データ・ソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
すべての Campaign レポート・スキー マ	Campaign システム・テーブル (campaignPartition1DS)	Campaign.sql (レポート・スキーマご とに別のスクリプトを生成していない 場合)。別のスクリプトを生成してい る場合、各スクリプトの名前は個々の スキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・テ ーブルに関する表を追跡します。	eMessage_Mailing_ Performance.sql
	(campaignPartition1DS)	
対話配置履歴、対話実績、および対話 ビュー	Interact 設計時間データベース	Interact.sql
	(campaignPartition1DS)	
対話ラーニング	Interact 学習テーブル	Interact_Learning.sql
	(InteractLearningDS)	
対話ランタイム	Interact ランタイム・データベース	Interact_Runtime.sql
	(InteractRTDS)	

•

「レポート SQL ジェネレーター」ページのリファレンス

レポート SQL ジェネレーターは、ユーザーの構成したレポート・スキーマを使用 して、ビューやレポート・テーブルを作成する SQL を生成します。

項目	説明
製品	レポート・スキーマ・テンプレートがインストールされている製品をリストします。
スキーマ	ユーザーが選択した製品のレポート・スキーマをリストします。詳しくは、以下の説明 を参照してください。
	 573 ページの『付録 C. レポートおよびレポート・スキーマ』
	• 575 ページの『eMessageレポートおよびレポート・スキーマ』
	• 576 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』
データベース・タイプ	生成されるスクリプトを実行する予定のアプリケーション・データベースのデータベー ス・タイプを示します。

項目	説明
生成タイプ	生成するスクリプトによって、ビュー、実体化ビュー、またはレポート・テーブルを生 成するかどうかを示します。
	 データベース・タイプが MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。
	 JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。
	 4 番目のオプションの XML は、SQL スクリプトでは生成されません。代わりに、 XML のスキーマの記述が作成されます。その後、必要に応じて、サード・パーティ ーの ETL またはインポート・ツールで XML ファイルを使用することができます。
	71 ページの『レポート配置オプションについて』も参照してください。
Drop ステートメントを生成 するかどうか	生成するスクリプトが除去スクリプトであるかどうかを示します。既存のビューまたは テーブルを更新する場合は、除去スクリプトおよび作成スクリプトを生成して、新しい 作成スクリプトを実行する前に除去スクリプトを実行することをお勧めします。
	フィールドで「Yes」を選択した場合、SQL ジェネレーターによって、スクリプトの最 後に「DROP」という単語が付加されます。
生成	このオプションをクリックすると、SQL ジェネレーターがスクリプトを作成し、この ウィンドウにスクリプトを表示します。その後は、必要に応じてそのスクリプトをコピ ーして貼り付けることができます。
ダウンロード	このオプションをクリックすると、SQL ジェネレーターがスクリプトを作成し、ご使 用のシステムにスクリプトを保存するように求めるプロンプトを出します。生成された スクリプトに使用される名前については、以下を参照してください。
	86 ページの『データ・ソース別の SQL スクリプト』.

IBM Cognos モデルのカスタマイズ

IBM Unica をカスタマイズして追加のメトリック、属性、またはオーディエンス・ レベルを組み込み、レポート・ビューまたはテーブルをそのスキーマに基づいて変 更する場合は、IBM Cognos 8 BI モデルも編集する必要があります。IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへのクエリーを実行 し、データ・モデル内の追加項目をインポートしてください。

IBM Cognos 8 モデルの更新方法は、IBM Unica のレポート・ビューまたはテーブ ルに加えられた変更によって異なります。

- ・属性、メトリック、またはレスポンス・タイプの列を追加して既存のビューを変 更した場合は、関連ビューを表すクエリー・オブジェクトを更新することによっ て新規列をインポートしてください。
- パフォーマンスやランタイム・レポートの時間経過に伴う変動を変更した場合、 または追加オーディエンス・レベル用の新規レポート・スキーマを作成した場 合、新規ビューが追加されています。この場合は、Framework Manager MetaData Wizard を使用して、ビューをデータ・モデルにインポートしてください。

このセクションでは、Cognos 8 モデルにカスタマイズを追加するためのガイドライ ンとして使用できる例を示します。詳しくは、「*IBM Cognos 8 BI 8.4 Framework Manager User Guide*」および Framework Manager のオンライン・ヘルプを参照して ください。

例: データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の 追加

以下の例の手順では、IBM Cognos 8 モデルにある既存のビューに項目を追加する 方法を示しています。この例では、Campaign データベースにカスタム・オファー属 性を追加してから、レポートに含める必要があるとします。以下のタスクがすでに 完了している必要があります。

- UA OfferAttribute テーブルでオファー属性を作成する。
- オファー属性をキャンペーン・カスタム属性レポート・スキーマに追加する。
- ・ レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、オファー・カスタム属 性レポート・ビュー (UARC_OFFEREXTATTR)を更新する。

ここで、Cognos 8 Campaign モデルに新規オファー属性を追加するには、以下の手順を実行します。

- Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリーに移動し、CampaignModel サブディレクトリーをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリーは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
- Framework Manager では、Campaign.cpf ファイル (プロジェクト)を開いて、 「インポート・ビュー」ノードを展開します。
- 「インポート・ビュー」の下で、カスタム・オファー属性(インポート・ビュー (Import View)」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「UARC_OFFEREXTATTR」)のレポート・ビューを表示するク エリー・オブジェクトを選択します。
- 4. 「ツール」>「オブジェクトの更新 (Update Object)」を選択します。Cognos は、ビューのノードの下にリストされている列を最新表示して、Campaign デー タベース内の UARC_OFFEREXTATTR レポート・ビューに現在存在する列をす べて反映します。
- 「モデル・ビュー」を展開し、このビュー内のカスタム・オファー属性(「モデ ル・ビュー」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」)を表す ノードを選択します。
- 「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードをダブルクリック して、「クエリー・サブジェクト定義 (Query Subject Definition)」ダイアロ グ・ボックスを開きます。
- 新規列を見つけて、「モデル・ビュー」に追加します。クエリー項目の名前を編集して、読みやすくします。例えば、Campaign データ・モデルの「インポート・ビュー」にある LASTRUNDATE という名前の列は、「モデル・ビュー」で「前回実行日」として表示されます。

注:「ビジネス・ビュー」には、「モデル・ビュー」にある「オファー・カスタ ム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードへのショートカットが含まれていま す。これは、手動で追加することなく「ビジネス・ビュー」で現在使用可能な新 規クエリー項目です。

- 8. モデルを保存します。
- 9. パッケージを Cognos コンテンツ・ストアに公開します。

これで、IBM Cognos Report Authoring を使用して、適切なレポートに属性を追加することができます。

例: IBM Cognos 8 データ・モデルへの新規ビューの追加

以下の例の手順では、IBM Cognos 8 データ・モデルに新しいビューまたはテーブ ルを追加する方法を示しています。この例では、キャンペーン実績のレポート・ス キーマについての時間経過に伴う変動を変更し、ここで Cognos モデルの変更をイ ンポートする必要があるとします。以下のタスクをすでに完了している必要があり ます。

- 「時間経過に伴う変動」オプションに四半期単位を追加して、キャンペーン実績のスキーマを変更する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
 このスクリプトには、次の追加レポート・ビューを作成する指示が含まれています。UARC_CCCH_QU、UARC_CCH_QU、UARC_CCH_QU、
 UARC_COCH_QU、UARC_CORH_QU、および UARC_CRH_QU
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、追加レポート・ビュー を作成する。

ここで、Cognos 8 Campaign モデルに新規レポート・ビューを追加するには、以下の手順を実行します。

- Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリーに移動し、CampaignModel サブディレクトリーをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリーは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
- 2. Framework Manager では、キャンペーン・プロジェクトを開いて、「**インポー** ト・ビュー」ノードを展開します。
- 3. 「キャンペーン実績」フォルダーを選択して、「メタデータ・ウィザード (Metadata Wizard)」(マウスの右クリック・メニューからアクセス)を実行しま す。
- 4. メタデータ・ウィザードを使用して、新規ビューをインポートします。
- 5. 「モデル・ビュー」>「キャンペーン実績」ノードを展開して、「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」という名前の新規項目を モデル化します。

このステップのヘルプについては、リファレンスのその他のエントリーを調べて ください。必ず同一の構造と、他の「時間経過に伴う変動」ノードに含まれる関 係を維持してください。また、以下に関する情報については、「*Cognos 8 BI 8.3 Framework Manager User Guide*」を参照してください。

• 新規の名前空間の作成

- スター・スキーマ・グループの作成
- 結合の追加
- 「ビジネス・ビュー」を展開して、「モデル・ビュー」にある「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」ノードへのショートカットを作成します。
- 7. モデルを保存します。
- 8. パッケージを Cognos コンテンツ・ストアに公開します。
- Report Authoring を開き、先ほど作成した「四半期別のキャンペーン実績 (Campaign Performance by Quarter)」スキーマのオブジェクトを使用して、新 規レポートを作成します。

IBM Unica アプリケーションの Cognos レポートのカスタマイズまたは作 成について

前にも述べたとおり、レポート例をカスタマイズしてカスタム・データを組み込ん だり、新規レポートを作成したりすることができます。Cognos Connection から、レ ポートのオプションを構成したり、一定の時刻にレポートを実行するようにスケジ ュールしたり、Report Authoring を起動してレポートをカスタマイズしたりするこ とができます。

レポートを計画して実装する場合は、以下のソースを参照してください。

- IBM Unica アプリケーションのユーザー・ガイドには、その製品の IBM Unica レポート・パッケージにあるすべてのレポートの簡略説明が記載されています。
- IBM Unica レポート・パッケージには、パッケージ内の各レポートの仕様と、レ ポートをサポートしている Framework Manager メタデータ・モデルについて説明 した解説書が付属しています。モデルやレポートをカスタマイズする前に、これ らの資料を調べてください。必ず、レポートの構成方法について理解してから変 更を行ってください。
- IBM Cognos 8 BI レポートの作成および編集に関する詳細な資料については、 IBM Cognos 8 BI の資料 (特に「IBM Cognos 8 BI Report Studio Professional Authoring User Guide」)を参照してください。
- 使用するレポート・スタイルについては、付録の 563 ページの『付録 B. Cognos レポートのスタイル・ガイド』を参照してください。
- Marketing Operations レポートのカスタマイズについては、「*Marketing Operations Administration Guide*」を参照してください。

新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン

IBM Cognos Report Authoring で Campaign の新しいレポートを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

 Campaign メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様に ついて説明している参照資料を調べます。これは、レポート・パッケージのイン ストール・ディレクトリーの CampaignReportPack¥cognos8¥docs サブディレクト リーにあります。

- Report Authoring を使用して、新しいレポートを作成するか、既存のレポートを コピーし、変更します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してく ださい。
- 既存のレポートのコピー (またはレポート自体)を変更する場合は、レポートの構成をよく理解しておいてください。その後、Report Authoring のツールバーと「プロパティー」ペインを使用して、カスタム属性およびメトリックを追加し、オブジェクトとクエリー・アイテムを適切な方法で変更することができます。 Report Authoring 使用方法については、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。レポート例の中のオブジェクトとクエリー・アイテムについては、レポート・パッケージにあるリファレンス資料を参照してください。
- 「分析」タブに表示されるオブジェクト固有のレポートを得るには、オブジェクトから渡された値を受け入れるパラメーター ID を作成します。「分析」ページ に表示されるシステム全体のレポートを得るには、キャンペーンまたはオファーのすべてのオブジェクト値を含んだプロンプトを作成します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- 新しいレポートを Campaign で表示できるようにするには、「パブリック・フォ ルダー (Public Folders)」の下の適切なフォルダーにレポートを保存します。
 - 「分析」タブに表示するには、「Campaign Object Specific Reports」フォル ダーに保存します。
 - 「分析」ページに表示するには、「Campaign」フォルダーに保存します。
 - ダッシュボード・ポートレットに追加する計画の場合は、「Unica Dashboards¥Campaign」フォルダーに保存します。

対話点パフォーマンス・ダッシュボードの構成

Interact には、対話点別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポ ートがあります。ダッシュボード・レポートは、クエリー・パラメーターについて のプロンプトをユーザーに出さないため、対話点パフォーマンス・レポートのイン タラクティブ・チャネルのチャネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポ ートのチャネル ID は 1 に設定されます。チャネル ID が実装環境に適していない 場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルター式でチャネル ID を 変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリ ング・スキルが必要です。 IBM Cognos BI レポートの作成および編集についての 詳しい資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に、ご使用の Cognos のバージ ョンに対応した「*IBM Cognos BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」)を参照してください。

対話点パフォーマンス・レポートのクエリーおよびデータ項目については、Interact レポート・パッケージに含まれている参照資料を参照してください。

複数のインタラクティブ・チャネルをダッシュボードに表示する必要がある場合 は、対話点パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャネル ID を変 更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダ ッシュボードに追加します。

新規ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン

Campaign、Interact、および Marketing Operations の IBM Unica レポート・パッケ ージには、IBM Unica ダッシュボードで表示するための特殊な形式のレポートが含 まれています。IBM Cognos Report Authoring で新規ダッシュボード・レポートを作 成するには、次のガイドラインに従ってください。

- メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説明している参照資料を調べます。これは、レポート・パッケージのインストール・ディレクトリーの中の ProductNameReportPack¥cognos8¥docs サブディレクトリーにあります。
- メインの Unica Dashboards フォルダーの下にある該当のサブディレクトリー に、すべてのダッシュボード・レポートを保存する。
 - Campaign の場合: Unica Dashboards¥Campaign
 - Interact の場合: Unica Dashboards¥Interact
 - Marketing Operations の場合: Unica Dashboards¥Plan. (Plan は Marketing Operations の以前の名前です。)
- レポートの形式を設定し、ダッシュボード・ポートレットに適切に収まるように サイズ調整を行う。使用する書式設定の説明については、付録の『Style Guide for the IBM Cognos 8 BI reports』の 571ページの『ダッシュボード・レポートのス タイル』を参照してください。
- ダッシュボード・レポートにはタイトルを含めないでください。ダッシュボード・レポートが表示されるポートレットによって、レポートにそのタイトルが指定されます。
- ダッシュボード・レポートにはハイパーリンクを含めないでください。
- ダッシュボード・レポートにはページ番号を含めないでください。

新規ダッシュボード・ポートレットを作成してそれにレポートを追加するには、 108ページの『カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性』および 110ページ の『IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには』を参照してくださ い。

第7章 ダッシュボードの作成と管理

ダッシュボードは、会社内部でさまざまな役割を果たすユーザーのグループにとっ て役立つ情報が含まれている、構成可能なページです。管理者は、ダッシュボード を作成し、ポートレットと呼ばれるコンポーネントを追加してダッシュボードを構 成します。

IBM Unica ポートレットは、IBM Unica Marketing ユーザーが追跡する際に重要となり得るキー・メトリックと、IBM Unica Marketing ページにアクセスする便利な 方法として使用できるリンクのリストを提供します。

ダッシュボードには、事前定義の IBM ポートレットおよびユーザー定義のポート レットを入れることができます。ユーザー作成のポートレットには、IBM Unica Marketingのページ、会社のイントラネット上のページ、またはインターネット上の ページがあります。

IBM Unica 事前定義ポートレットについて

IBM Unica では、2 つのタイプの事前定義ダッシュボード・ポートレットがあり、 作成するどのダッシュボードにでもすぐに追加することができます。

IBM Unica 事前定義ポートレットでは、Marketing Platform シングル・サインオ ン・メカニズムを使用して IBM Unica Marketing のコンテンツにアクセスします。 ユーザーがこれらのポートレットが含まれているダッシュボードを表示する際、資 格情報を求めるプロンプトは表示されません。

- リスト: ユーザーに固有の IBM Unica Marketing 項目のリストです。リスト・ポ ートレットの例には、最近使ったキャンペーン (My Recent Campaigns) (Campaign), 自分のアラート (Marketing Operations)、およびコンテンツ・サマリ ー・レポート (NetInsight) があります。
- IBM Cognos レポート: 特殊フォーマット・バージョンの IBM Unica Marketing レポート。

NetInsight レポートを含め、独自のダッシュボード・ポートレットを作成することも できます。詳しくは、108ページの『カスタム・ポートレットのタイプと使用可能 性』を参照してください。

ダッシュボードの計画

組織でダッシュボード機能をどのような方法で使用するかを計画する際は、マーケ ティング管理チームと一緒に作業して以下の詳細を決定する必要があります。

- ユーザーに必要なダッシュボードはどれか。
- どのユーザーがどのダッシュボードへのアクセス権限を持つか。
- 各ダッシュボードにどのポートレットを入れるか。

 ダッシュボードのロールアウト後に、各ダッシュボードのダッシュボード管理者 として誰を任命するか。ダッシュボード管理者は、ダッシュボードへのユーザ ー・アクセスを管理し、必要に応じて個々のダッシュボードの内容とレイアウト を変更します。

ダッシュボード・オーディエンス

ダッシュボードをグループに関連付けたり、ダッシュボードに個々のユーザーを割 り当てたりすることによって、ダッシュボードを表示できるユーザーを制御できま す。グループのメンバーはそのグループに関連付けられているダッシュボードにア クセスでき、メンバー以外はそうしたダッシュボードを表示できません。

また、1 つ以上のグローバル・ダッシュボードを作成できます。このダッシュボードは、グループのメンバーシップやユーザー個々の割り当てには関係なく、特定の パーティション内のすべての IBM Unica Marketing ユーザーが表示できます。

グローバル・ダッシュボードを作成する場合、できるだけ広範囲のユーザーにとっ て関心のあるポートレットを組み込む必要があります。例えば、Campaign をインス トールした場合、事前定義の IBM ポートレットの 1 つである「最近使ったカスタ ム・ブックマーク」ポートレットを入れることができます。

Marketing Platform を初めてインストールするときには、ダッシュボードはありません。

グローバル・ダッシュボード

ダッシュボードを作成する際、選択した Marketing Platform グループのメンバーだ けがダッシュボードを使用できるようにするのか、グローバル・ダッシュボードと するのかを選択できます。グローバル・ダッシュボードは、グループのメンバーシ ップに関係なく、ダッシュボードが属するパーティションのすべてのメンバーが表 示できます。

グローバル・ダッシュボードには、できるだけ広範囲のユーザーにとって関心のあるポートレットを組み込む必要があります。例えば、Campaign をインストールした 場合、事前定義の IBM ポートレットの 1 つである「最近使ったカスタム・ブック マーク」ポートレットを入れることができます。

ダッシュボードの表示に必要なユーザー権限

ダッシュボードを使用すると、IBM Unica Marketing ユーザーは、各製品内部でユ ーザーに対して構成されている権限に関係なく、複数の製品 (Marketing Operations や Campaign など) からのページを単一のページに表示することができます。

一部のダッシュボード・ポートレットでは、ポートレット内部のリンクをクリック して作業できるページを開くことによって、IBM Unica Marketing 製品での作業を 実行することができます。ユーザーにタスクを実行する権限がない場合は、ページ が表示されません。 ポートレット内のコンテンツの一部はユーザー別にフィルタリングされます。例え ば、ユーザーがキャンペーンを直接操作できない場合は、「最近使ったキャンペー ン」ポートレットにはリンクが何も表示されない可能性があります。

IBM Unica 事前定義ポートレットの使用可能性

IBM Unica では、多くの製品で事前定義ポートレットが用意されています。IBM Unica 事前定義ポートレットが使用可能かどうかは、インストールした IBM Unica Marketing 製品によって異なります。また、IBM Cognos ポートレットは、IBM Unica Marketing のレポート機能が実装されている場合にのみ使用できます。

Marketing Platform で事前定義の IBM Unica ポートレットを有効にしてからでない と、ダッシュボードでそれらのポートレットを使用することはできません。IBM Unica ポートレットは、それが所属する製品がインストールされているかどうかに 関係なく、Marketing Platform にリストされます。インストールされている製品のみ に所属するポートレットを有効にすることをお勧めします。ダッシュボードに追加 できるポートレットのリストには、有効になっているポートレットのみが表示され ます。

IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事項

レポートは、視覚的要素が加わることで大量のデータがスキャンしやすくなるの で、ダッシュボードに追加するには魅力的なコンポーネントです。しかし、レポー トには追加の処理リソースが必要になるため、多数のレポートが含まれているダッ シュボードに多数のユーザーが定期的にアクセスする場合には、パフォーマンスが 問題になる可能性があります。

組織はその必要性に応じてデータを調整してさまざまな方法で使用しますが、この セクションでは、IBM Cognos レポートが含まれるダッシュボードのパフォーマン スを改善するうえで役立つ一般的なガイドラインを示します。これらのガイドライ ンはすべて、高度にリソース集約型である IBM Cognos レポート・ポートレットに 適用されます。

IBM Cognos での実行のスケジューリング

一定間隔で実行されるように IBM Cognos レポートをスケジュールすることができ ます。レポートをスケジュールに入れると、そのレポートが含まれているダッシュ ボードにユーザーがアクセスするたびにレポートが実行されることはなくなりま す。その結果、レポートが含まれているダッシュボードのパフォーマンスが向上し ます。

Cognos でスケジュールできるのは、ユーザー ID パラメーターを含まない IBM レ ポートだけです。レポートに ID パラメーターがない場合は、すべてのユーザーが 同じデータを表示できます。データは、ユーザーに基づいてフィルター操作されま せん。以下のポートレットをスケジュールに入れることはできません。

- すべての事前定義された Campaign ポートレット
- Marketing Operations の自分のタスク・サマリーおよび自分の承認サマリーの事前定義ポートレット

レポートのスケジューリングは、IBM Cognos で実行するタスクの 1 つです。スケ ジューリングに関する一般情報について、詳しくは Cognos 資料を参照してくださ い。ダッシュボード・ポートレットの特殊なスケジューリング要件については、 『ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れるには』を参照してください。

データに関する考慮事項

レポートに含まれているデータに基づいてスケジュールされた実行を計画する必要 があります。例えば、「過去 7 日間のオファー・レスポンス」ダッシュボードを毎 晩実行して、現在日の前の 7 日間に関する情報がこのダッシュボードに入るように することができます。一方、「市場金融ポジション」ダッシュボード・レポートで は四半期ベースの金融指標が比較されるので、このダッシュボード・レポートを週 1 回実行するよう選択することもできます。

ユーザー期待値

追加のスケジュール要件は、レポートの対象ユーザーがどの程度の頻度のデータ更 新を期待しているかということです。これについては、スケジュールを計画すると きにユーザーと相談する必要があります。

ガイドライン

ここに示すのは、ダッシュボードの IBM Cognos レポートのスケジューリングを計 画するうえで役立つ大まかなガイドラインです。

- ロールアップ情報を含むレポートは、一般に、毎晩実行するようにスケジュールします。
- 多数の計算を含むレポートは、1 つのスケジュールにまとめます。

ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れるには

ダッシュボード・レポート (事前定義ポートレットまたはユーザー作成ポートレット) をスケジュールに入れるには、まずビューを作成してそれをスケジュールに入れ、その後ここに説明する方法でポートレットを構成する必要があります。

注: ユーザー別にフィルタリングされないレポートのみをスケジュールに入れることができます。

- 1. Cognos でレポートをコピーして、新しい名前でそれを保存します。
- Cognos で、コピー後のレポートを開き、元のレポートと同じ名前のビューとしてそれを保存します。 Unica Dashboard/Product フォルダーに保存してください。ここで、Product は、該当の製品フォルダーです。
- 3. Cognos で、ビューをスケジュールに入れます。
- 4. IBM Unica Marketing で、レポートをダッシュボードに追加します (まだ追加し ていない場合)。

105 ページの『事前定義ポートレットをダッシュボードに追加するには』または 111 ページの『ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加するには』を 参照してください。

5. レポートが事前定義ポートレットである場合にのみ、IBM Unica Marketing で以 下を実行してください。
- 「ダッシュボード管理」ページで、ポートレットの隣にある「ポートレットの 編集」アイコンをクリックします。
- 「このレポートはスケジュールが設定されていますか?」の隣にある「はい」
 を選択します。
- 「保存」をクリックします。

事前定義ポートレットの説明

このセクションでは、すべての IBM 事前定義ダッシュボード・ポートレットについて、製品別およびポートレット・タイプ別に説明します。

Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポート・パッケージで使用できる Marketing Operations ダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
自分のタスクのサマ リー	すべての進行中プロジェクトのレポートを表示中のユーザーの、す べてのアクティブ・タスクと完了したタスクを示す IBM Cognos レ ポートの例。
自分の承認のサマリ ー	レポートを表示中のユーザーの、アクティブな承認と完了した承認 のデータを示す IBM Cognos レポートの例。
マネージャー承認の サマリー	システム内のすべての進行中プロジェクトに関するアクティブな承認と完了した承認のデータを表示する IBM Cognos レポートの例。
プロジェクト・タイ プ別プロジェクト	システム内のすべての進行中プロジェクトをテンプレート・タイプ 別に示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
ステータス別プロジ ェクト	システム内のすべてのプロジェクトをステータス別 (ドラフト、進 行中、保留、キャンセル、終了) に示す 3-D 棒グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
マネージャー・タス クのサマリー	すべての進行中プロジェクトに関するアクティブ・タスクと完了し たタスクのデータを表示する IBM Cognos レポートの例。
市場金融ポジション	現行の暦年のすべての状態のすべての計画について、予算、予測、 コミット済み、および実際の金額の時刻表を表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要で す。
プロジェクト・タイ プ別の金額	現行の暦年でプロジェクト・タイプ別の実際の支出金額を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートに は、金融管理モジュールが必要です。
四半期別の完了プロ ジェクト	この四半期の早期、定時、および遅れて完了したプロジェクトの数 を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
要求および完了した プロジェクト	1 カ月あたりのプロジェクト要求の数と完了プロジェクトの数の時 刻表グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートで は、送信済み、受け入れ済み、または差し戻しの状態のプロジェク ト要求のみを数えます。
プロジェクト・タイ プ別の予測	現行の暦年でプロジェクト・タイプあたり送信される支出の 3-D 円 グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。

表 15. 標準 Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット

表 15. 標準 Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット (続き)

レポート	説明
プロジェクト・タイ	現行の暦年でプロジェクト・タイプあたりの予算の 3-D 円グラフを
プ別の予算	表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理
	モジュールが必要です。

Marketing Operations リスト・ポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポート・パッケージがインストールさ れていない場合でもダッシュボードで使用できる標準 Marketing Operations ポート レットについて説明します。

表 16. 標準 Marketing Operations ポートレット

レポート	説明
アクション待ちの承 認	アクション待ちの承認リスト
マイ・タスクの管理	「保留中」と「有効」のタスク、および「開始前」と「進行中」の 承認をリストします。各項目のステータスを変更するオプションが 表示されます。
	 タスクの場合、ステータスを「終了」または「スキップ」に変更 できます。
	 「開始前」の承認の場合、ステータスを「送信」または「キャン セル」に変更できます。
	 所有している「進行中」の承認の場合、ステータスを「停止」、 「終了」、「キャンセル」のいずれかに変更できます。
	 承認するように割り当てられている「進行中」の承認の場合には、ステータスは「承認」または「拒否」に変更できます。
自分のアクティブ・ プロジェクト	アクティブなプロジェクトをリストします。
自分のアラート	自分の Marketing Operations アラートをリストします。
自分の要求	自分が所有している要求をリストします。
自分のタスク	自分が所有しているタスクをリストします。
予算超過プロジェク ト	暦年の予算を超過したすべてのプロジェクトをリストします。この レポートには、金融管理モジュールが必要です。

Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージで使用可能なダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
Campaign 投資収益率 比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたキャ ンペーンについて、その ROI の概略を比較した IBM Cognos レポ ート。

レポート	説明	
Campaignレスポンス	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された 1 つ	
率の比較	以上のキャンペーンについて、それらのレスポンス率を比較した	
	IBM Cognos レポート。	
Campaign オファー別	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオフ	
収益比較	ァーを含んでいるキャンペーンごとに、これまでに受け取った収益	
	を比較した IBM Cognos レポート。	
過去 7 日間のオファ	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された各オ	
ー・レスポンス	ファーに基づいて、過去7日間に受け取ったレスポンスの数を比較	
	した IBM Cognos レポート。	
オファー・レスポン	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオフ	
ス率比較	ァー別に、レスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。	
オファー・レスポン	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された各種	
ス内訳	のアクティブなオファーを、状況ごとに分けて示した IBM Cognos	
	レポート。	

Campaign リスト・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージがインストールされていない 場合でも、ダッシュボードで使用できる標準 Campaign ポートレットについて説明 します。

レポート	説明
最近使ったカスタ	レポートを表示するユーザーによって作成された Web サイトまた
ム・ブックマーク	はファイルへのリンクのリスト。
最近使ったキャンペ	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のキャンペー
ーン	ンのリスト。
最近使ったセッショ	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のセッション
ン	のリスト。
キャンペーン・モニ	レポートを表示するユーザーによって作成された、実行済みまたは
ター・ポートレット	現在実行中のキャンペーンのリスト。

Interact IBM Cognos レポート・ポートレット

対話点パフォーマンス - 7 日間に 1 対話点あたり受け入れたオファーの数を表示します。

このダッシュボード・レポートは、ID が 1 のインタラクティブ・チャネルを指す ように定義されています。このレポートの追加バージョンを作成する (そして追加 のインタラクティブ・チャネルに関する報告を取得する) か、このレポートが指示 するインタラクティブ・チャネルの ID を変更するには、92 ページの『対話点パフ ォーマンス・ダッシュボードの構成』を参照してください。

Distributed Marketing リスト・ポートレット

このセクションでは、ダッシュボードで使用できる標準 Distributed Marketing ポートレットについて説明します。

レポート	説明
リスト管理	レポートを使用するユーザーのアクティブなリストのリスト。
キャンペーン管理	レポートを表示するユーザーのアクティブな企業キャンペーンおよ びオンデマンド・キャンペーンのリスト。
サブスクリプション 管理	現行ユーザーの企業キャンペーンに対するサブスクリプションのリ スト。
カレンダー	アクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンド・キャンペーン のスケジュールを表示するカレンダー。

Optimize リスト・ポートレット

ダッシュボードで使用できる標準 Optimize ポートレットです。

表17. Optimize リスト・ポートレット

レポート	説明
自分の最近の最適化	レポートを表示するユーザーが過去 30 日間に実行した最後の 10
セッション	個の Optimize セッションのリスト。
最後に成功した最適	過去 30 日間の正常に完了したレポートを表示するユーザーが実行
化実行インスタンス	した、最後の 10 個の Optimize セッションのリスト。
最後に失敗した最適	過去 30 日間の正常に完了しなかったレポートを表示するユーザー
化実行インスタンス	が実行した、最後の 10 個の Optimize セッションのリスト。

Attribution Modeler IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Attribution Modeler レポート・パッケージで使用可能なダッ シュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
チャネル・キャンペ	各チャネルのキャンペーンごとの各オファーに関する以下のデータ
ーン・オファー・ア	を示す IBM Cognos レポートです。
トリビューション・	 対話数
ドリルタワン	 レスポンス数
	 レスポンスのパーセンテージ
	• 収益
	• レスポンスあたりの平均収益
	・ レスポンスあたりのコスト
	• 投資収益率 (ROI)

Interaction History IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Interaction History クロスチャネル・レポート・パッケージで 使用できるダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明	
時間経過に伴うクロ	各チャネルに関する以下のデータを示す IBM Cognos レポートで	
スチャネル・サマリ	す。	
-	 キャンペーン数 	
	 対話数 	
	• レスポンス数	
	• レスポンスのパーセンテージ	
	• 収益	
	• レスポンスあたりの平均収益	
	• レスポンスあたりのコスト	
	• 投資収益率 (ROI)	

ダッシュボードのセットアップ

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのセットアップ方法について説明します。

ダッシュボードの管理に必要な権限

対象のパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理できるのは、そのパ ーティションで「ダッシュボードの管理」権限を持つユーザーだけです。デフォル トでは、Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーにこの権限が付与さ れます。

Marketing Platform を初めてインストールする際、事前定義されたユーザー asm_admin は、デフォルト・パーティションである partition1 に対するこの役割を 持っています。ダッシュボード管理者の適切な資格情報については、管理者にご相 談ください。

Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーは、ユーザーが属するパーティション内にある個々のダッシュボードを管理するために任意の IBM Unica Marketing ユーザーを割り当てることができます。ダッシュボード管理は、 Marketing Platform のダッシュボード管理領域で行われます。

ダッシュボードとパーティション

マルチ・パーティション環境でダッシュボードを管理している場合、このセクショ ンを参照して、マルチ・パーティションがダッシュボードにどのように影響を及ぼ すかを理解してください。 ユーザーのパーティション・メンバーシップをセットア ップする方法については、23ページの『パーティションおよびセキュリティーの管 理について』を参照してください。

マルチ・パーティション環境では、ユーザーが表示または管理可能なのは、ユーザ ーが属するパーティションと関連付けられているダッシュボードのみです。

ダッシュボード管理者がダッシュボードを作成すると、以下のパーティション関連 の規則が適用されます。

- 作成されたダッシュボードを使用できるのは、それを作成したユーザーと同じパ ーティションのメンバーだけです。
- ダッシュボードで使用できるのは、管理者が属するパーティションで有効になっている事前定義されたポートレットだけです。
- ダッシュボードに割り当てることができるのは、管理者と同じパーティションに 割り当てられたグループとユーザーだけです。

複数のパーティションを構成した場合、ダッシュボードをセットアップする手順は 以下のとおりです。

1. ダッシュボードで作業する前に、各パーティションに 1 つ以上のグループを関 連付け、それぞれのグループに適切なユーザーを割り当てます。

このタスクを実行できるのは、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけです。

これらのタスクについては、4 章の『IBM Unica でのセキュリティーの管理』を 参照してください。

2. 各パーティションで、少なくとも 1 人のユーザーに「ダッシュボードの管理」 権限があることを確認し、それらのユーザー名を控えてください。

Marketing Platform AdminRole 役割にはデフォルトでこの権限がありますが、ダ ッシュボード管理者に対してより制限的なアクセス権限を持つ役割を作成するこ ともできます。これらのダッシュボード管理者は、自身のパーティション内のす べてのダッシュボードを管理できます。

- 3. システム内で構成されている各パーティションで、以下を実行します。
 - a. 対象パーティションのメンバーであり、IBM Unica Marketing にサインイン するパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理可能なアカウン トを使用します。

前述のステップで作成したユーザーのリストを参照します。

b. 「**設定」>「ダッシュボード・ポートレット**」ページで、必要に応じて事前定 義されたポートレットを有効にします。

詳しくは、105ページの『事前定義ポートレットを有効または無効にするに は』を参照してください。

- c. 「ダッシュボードの管理」ページで、必要なダッシュボードを作成し、ポートレットを追加します。
- d. 非グローバル・ダッシュボードの各々に対して、ダッシュボードを表示可能 なユーザーを割り当てます。

ダッシュボードに対して個々のユーザーまたはグループを割り当てられま す。

e. それぞれのダッシュボードに、1 人以上のユーザーをダッシュボード管理者 として割り当てます。

これらのタスクを実行する方法の詳細については、本章の残りの部分を参照してく ださい。

事前定義ポートレットを有効または無効にするには

ダッシュボードを作成する前に、このタスクを実行してください。すでにインスト ール済みの IBM Unica 製品を参照するポートレットのみを有効にする必要がありま す。

- 1. IBM Unica Marketing にログインして、「設定」>「ダッシュボード・ポートレット」を選択します。
- ポートレット名の隣にあるチェック・ボックスをクリックして、ポートレットの 有効と無効を切り替えます。

チェック・マークを付けるとポートレットが有効になり、チェック・ボックスの チェックをはずすとポートレットが無効になります。

選択したポートレットが有効になり、ダッシュボードへの組み込みに使用できる ようになります。

ダッシュボードを作成するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 「**ダッシュボードの作成**」をクリックします。

「ダッシュボードの作成」ページが開きます。

- 3. 固有のタイトル (必須) と説明 (オプション) を入力します。
- 4. ダッシュボード・タイプを選択します。
 - ダッシュボードに関連付けられているグループに属するユーザーだけがアクセスできるように制限する場合、「ユーザーまたはグループに固有のダッシュボード」を選択します。
 - パーティション内のすべてのユーザーがダッシュボードを表示可能にする場合
 には、「全員を対象としたグローバル・ダッシュボード」を選択します。
- 5. 「保存」をクリックします。

「ダッシュボード管理」ページに新しいダッシュボードがタブとして表示され、 「管理」タブにもリストされます。

事前定義ポートレットをダッシュボードに追加するには

ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する方法については、108ページの『カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性』を参照してください。

- 1. IBM Unica Marketing で、「**ダッシュボード**」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
- 2. 「ポートレットの管理」をクリックします。

「ポートレットの管理」ページが開き、有効なポートレットがリスト表示されま す。 また、ダッシュボードの「ポートレットの管理」アイコンをクリックすると、 「管理」タブから「ポートレットの管理」ページにアクセスできます。

3. ポートレットの横にあるチェック・ボックスを選択して、ダッシュボードに追加 する 1 つ以上のポートレットを選択します。

ポートレットを選択する際に、以下の機能を使用すると役立ちます。

- ポートレットのリストを名前でフィルター操作したり、ポートレットのソースである製品ごとにリストをフィルター操作したりします。
- リスト内のすべてのポートレットを一度に表示したり、一度に1つずつ表示したりできます。
- 列見出しをクリックして、リストをソースまたはポートレット名ごとにアルフ ァベット順にソートできます。昇順と降順のどちらも可能です。
- 4. 「更新」をクリックします。

選択したポートレットがダッシュボードに追加されます。

ダッシュボードをレイアウトするには

- 1. IBM Unica Marketing で、「**ダッシュボード**」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
- 2. ポートレットをドラッグして、ページ上で調整します。
- 3. 「**レイアウトの保存」**をクリックします。

ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行うには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト 表示されます。

- 2. 作業対象のダッシュボード下部にある「**権限の管理**」アイコンをクリックしま す。「権限の管理」タブが開きます。
- 「ダッシュボード管理者の管理」アイコンをクリックします。「ダッシュボード管理者の管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト表示されます。
- 4. 名前を選択または選択解除します。

名前が選択されているユーザーが、ダッシュボードの管理権限を獲得します。

ユーザーを検索するには、以下の方法があります。

- 「検索」フィールドにユーザー名の一部または全体を入力して、リストをフィ ルター操作します。
- すべてのユーザー、指定されていないユーザーのみ、指定されたユーザーのみのいずれかを表示します。
- 列見出しをクリックして、リストをソートします。
- フィルター基準に基づいてすべてのユーザーを一度に表示したり、リストを複数ページに分けて表示したりします。

5. 「更新」をクリックします。

ポートレットをダッシュボードから削除するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト 表示されます。

- ポートレットを削除するダッシュボードで、削除するポートレットの隣にある 「削除」アイコンをクリックします。
- 3. プロンプトが表示されたら、「はい、削除します」をクリックします。

ポートレットがダッシュボードから削除されます。

ポートレットの名前またはプロパティーを変更するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト 表示されます。

2. 作業対象のダッシュボードで、名前を変更するポートレットの隣にある「ポート レットの編集」アイコンをクリックします。

「ポートレットの編集」ウィンドウが開きます。

- 3. ポートレットの名前、説明、URL、または非表示の変数を編集します。
- 4. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードの名前またはプロパティーを変更するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 作業対象のダッシュボード下部にある「設定の管理」アイコンをクリックしま す。

「設定」タブが開きます。

3. 「**ダッシュボードの編集**」アイコンをクリックします。

「ダッシュボードの編集」ウィンドウが開きます。

- ダッシュボードのタイトル、説明、タイプの編集、そのダッシュボードの有効化 や無効化、あるいはユーザーによるレイアウト変更の可否の調整を行います。
- 5. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードを削除するには

1. IBM Unica Marketing で、「ダッシュボード」」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連 付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

- 2. 作業対象のダッシュボード下部にある「**ダッシュボードの削除**」アイコンをクリ ックします。
- 3. プロンプトが表示されたら、「はい、削除します」をクリックします。

ダッシュボードが削除されます。

カスタム・ポートレットの作成と使用

このセクションのトピックでは、カスタム・ポートレットの作成と使用の方法について説明します。

カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性

以下のタイプの IBM Unica Marketing ページからポートレットを作成できます。

- 任意の IBM Unica Marketing IBM Cognos レポート。これには、追加のインタ ラクティブ・チャネルを指示するようカスタマイズされた Interact 対話点パフォ ーマンス・レポートが含まれます。任意の既存のダッシュボード・レポートをカ スタマイズすることも、ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズすること もできます。ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズする場合は、93 ペー ジの『新規ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン』を参照して ください。
- 自動更新する NetInsight または NetInsight のオンデマンド・レポートまたはダ ッシュボード。
- 任意の IBM Coremetrics[®] Web Analytics レポート。

さらに、インターネットまたは会社のイントラネットのページからポートレットを 作成することができます。

IBM の事前定義ポートレットとは異なり、自分が作成したポートレットはそれを作成したダッシュボードでしか使用できません。

カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項

ポートレットの作成を計画している場合、認証に関する以下の考慮事項に注意する 必要があります。

- ポートレットが、Marketing Platform を認証に使用するか認証を何も使用しないように構成されたオンプレミス・インストールからの NetInsight レポートの場合、または Marketing Platform を認証に使用するその他の任意の IBM Unica Marketing 製品からのダッシュボード・レポートの場合は、ユーザーがポートレットを表示する際に資格情報を求めるプロンプトは表示されません。
- ポートレットが、認証に Marketing Platform を使用するように構成されていない オンプレミス・インストールからの NetInsight レポートの場合は、ユーザーはブ ラウザー・セッションごとにログイン資格情報を入力する必要があります。
- ポートレットが NetInsight オンデマンド・レポート、または認証を必要とするインターネットまたはイントラネットのページの場合、そのポートレットはブラウザーと同様の動作をします。ユーザーは、ブラウザー・セッションでページを最

初に表示するときにページのコンテンツにログイン資格情報を入力する必要があり、Cookie を使用してユーザーのログイン状態が保持されます。

 使用するポートレットが IBM Coremetrics Web Analytics レポートの場合、ユー ザーが表示できるのは、IBM Coremetrics で権限を持っているレポートだけで す。また、IBM Coremetrics でシングル・サインオンが有効な場合には、ユーザ ーは資格情報を入力しないでも、Marketing Platform ダッシュボードで IBM Coremetrics レポートを表示できます。無効な場合には、IBM Coremetrics レポー トを Marketing Platform ダッシュボードで表示するには、ユーザーは IBM Coremetrics 資格情報を入力する必要があります。

ポートレット作成プロセスの概要

このセクションでは、ポートレットの作成手順の概要を示します。詳細は、本書の 別の個所に記載されています。

1. ポートレットとして使用するページの URL を取得して作成します。

そのためには、URL を取得して、必要に応じて変更します。

以下の手順は、各種のポートレット・ソースの URL の作成方法について説明しています。

- NetInsight オンプレミス・レポート 『オンプレミス NetInsight レポートから URL を作成するには』
- IBM Unica Marketing IBM Cognos レポート 110ページの『IBM Cognos ダ ッシュボードから URL を作成するには』
- Coremetrics レポート 111ページの『IBM Coremetrics Web Analytics レポー トから URL を作成するには』
- NetInsight オンデマンド・レポート、およびインターネットまたは企業イント ラネットのページ - 111ページの『イントラネットまたはインターネットの ページから URL を作成するには』
- 2. ポートレットをダッシュボードに追加します。

111 ページの『ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加するには』を 参照してください。

オンプレミス NetInsight レポートから URL を作成するには

この手順は、オンプレミス NetInsight インストール済み環境のレポートに使用します。

1. NetInsight で、エクスポートするレポートを表示します。

NetInsight ダッシュボードを使用している場合は、ダッシュボードの左上にある レポートのみがエクスポートされます。

2. レポートの右上のツールバーにある「**エクスポート**」アイコン *を*クリ ックします。

「エクスポート・オプション」ウィンドウが開きます。

- 3. 以下のように、フィールドに情報を入力します。
 - 「エクスポート・タイプ」ドロップダウンから「ポートレット URL」を選択 します。
 - 「レポートの形式」ドロップダウンから「Web ブラウザー」を選択します。
 - レポートに組み込む値の数を指定します。
 - レポート・グラフィックの幅をピクセルで指定します。パス・レポートは、指定した幅に関係なくサイズを自己調整します。積み重ね棒レポートでは、指定した幅が自動的に 30% 増加します。
 - ポートレットには編集可能なタイトルがあるので、レポート・ヘッダーを非表示にすることを選択してください。
- 4. 「**エクスポート**」をクリックします。

レポートの URL がダイアログ・ボックスに表示されます。

- 5. その URL をコピーして、テキスト・エディターに貼り付けます。
- 6. 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見 つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。
- URL の先頭に以下を付加します。 YourIBMUnicaURL/suiteSignOn?target=。ここで、 YourIBMUnicaURL は、IBM Unica Marketing のインストール用のログイン URL です。

例えば、以下の情報があるとします。

- IBM Unica Marketing URL は http://myHost.myDomain:7001/unica
- エンコード済みの NetInsight レポート URL は MyEncodedReportURL

最終 URL は以下のようになります。 http://myHost.myDomain:7001/unica/ suiteSignOn?target=MyEncodedReportURL

IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成するには

IBM Cognos でダッシュボード・レポートを作成する方法については、93 ページの 『新規ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン』を参照してください。

IBM Cognos ダッシュボード・ポートレット URL の形式は以下のとおりです。

http(s)://HOST.DOMAIN:port/unica/reports/jsp/
dashboard_portlet.jsp?product=Product& report=ReportName

ここで、

- Product は、IBM Cognos システムの「Unica ダッシュボード」フォルダーの中 にある IBM Unica アプリケーションのサブフォルダーの名前です。 つまり、 Campaign、Interact、または Marketing Operations を表す Plan です。(Plan は Marketing Operations アプリケーションの以前の名前です。)
- *ReportName* は、ダッシュボード・レポートの HTML エンコード名です。例: Campaign%20Performance%20Comparison

次に例を示します。

http://serverX.companyABC.com:7001/unica/reports/jsp/ dashboard_portlet.jsp?product=Campaign&report=Campaign%20Performance %20Comparison

98 ページの『ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れるには』で説明され ている方法でレポートをスケジュールに入れてある場合は、URL の末尾に以下を追 加します。

&isView=true

注: 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見 つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。

IBM Coremetrics Web Analytics レポートから URL を作成す るには

IBM Coremetrics レポートに対して以下の手順を使用します。

ユーザーが IBM Coremetrics にログインしなくてもダッシュボードで IBM Coremetrics レポートを閲覧できるようにするには、IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics の間のシングル・サインオンを有効にする必要があります。詳しくは、 127 ページの『第 9 章 IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics Web Analytics の 間のシングル・サインオンを有効にする』を参照してください。

- 1. IBM Coremetrics にログインし、「管理」>「API」に移動します。
- 2. レポート・カテゴリーを選択してから、レポート名を選択します。
- 3. 「API の URL を生成してクリップボードにコピー 」をクリックします。
- 4. その URL をコピーして、テキスト・エディターに貼り付けます。
- 5. デフォルトで、レポートは一度に 25 行を返します。返される行数を変更するに は、コピーした URL の末尾に以下を追加してください。

&rowCount= の後に、返されるようにする行数を表す数字。

例えば、&rowCount=50 とします。

イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成す るには

この手順は、オンデマンドの NetInsight ページも含め、イントラネット・ページま たはインターネット・ページに使用します。

- 1. ブラウザーに目的のページを表示し、ブラウズのアドレス・フィールドから URL をコピーします。
- 2. 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見 つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。

ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加するには

この手順を実行する前に、本書の別の個所に示す説明に従って URL を作成する必要があります。

- 1. IBM Unica Marketing で、「**ダッシュボード**」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
- 2. 「ポートレットの管理」をクリックします。

「ポートレットの管理」ウィンドウが開きます。

3. 「カスタム・ポートレットの作成」をクリックします。

「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウが開きます。

4. フィールドに入力して、「保存」をクリックします。

ウィンドウが閉じ、「ダッシュボード」タブに戻ります。新しいポートレットは 左上隅に配置されます。以前に追加されたポートレットにオーバーレイされる場 合もあります。ポートレット見出しをクリックして、ダッシュボード内の適切な 位置に配置されるようにドラッグします。

5. 「**レイアウトの保存**」をクリックします。

「ポートレットの管理」ウィンドウのリファレンス

フィールド	説明
ポートレット名	ポートレットの適切な名前を入力します。
ポートレットの説明	ポートレットの説明を入力します。この説明により、他の管理者 は、このダッシュボードの一部として対象のポートレットが含まれ ている理由を知ることができます。
ポートレット URL	作成した URL に貼り付けます。
非表示変数	ポートレットにおいてログインをユーザーに求める場合、サイトに 資格情報を保護された状態で送信するために名前と値のペアを入力 できます。Web サイトから予想どおりの変数名を取得する必要があ ります。

ダッシュボードのメンバーシップの管理

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボード管理タスクについて

ダッシュボード管理者に任命された場合は、そのダッシュボードのメンバーシッ プ、レイアウト、およびコンテンツを管理する責任があります。

ダッシュボードのレイアウトおよびコンテンツの変更に関するタスクは、「ダッシ ュボードのセットアップ」で説明されています。

このセクションでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボード・メンバーシップを認可または削除するには

1. IBM Unica Marketing で、「**ダッシュボード**」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。

2. 作業対象のダッシュボード下部にある「**権限の管理**」アイコンをクリックしま す。

「権限の管理」タブが開きます。

3. 「**ダッシュボード・ユーザーの**管理」アイコンをクリックします。

「ダッシュボード・ユーザーの管理」ページが開きます。

4. チェック・ボックスを選択または選択解除して、ダッシュボードに対するアクセ ス権を付与または削除します。

名前が選択されているユーザーが、ダッシュボードを表示できます。

ユーザーを検索するには、以下の方法があります。

- 「検索」フィールドにユーザー名の一部または全体を入力して、リストをフィ ルター操作します。
- すべてのユーザー、指定されていないユーザーのみ、指定されたユーザーのみのいずれかを表示します。
- 列見出しをクリックして、リストをソートします。
- フィルター基準に基づいてすべてのユーザーを一度に表示したり、リストを複数ページに分けて表示したりします。
- 5. 「更新」をクリックします。

第 8 章 IBM Unica Scheduler での実行のスケジューリング

IBM Unica Scheduler を使用すると、定義する間隔でプロセスを実行するように構成 することができます。現在は、IBM Scheduler を以下のスケジュールに使用できま す。

- Campaign フローチャートの実行
- Optimize 最適化セッションおよび最適化後のフローチャート実行
- eMessage メール配信
- PredictiveInsight モデル実行とスコア実行

スケジューラーでは、スケジュールと実行という 2 つの基本概念を使用します。

- スケジュールとは、1回または繰り返しベースで実行したい任意のタスクです。 スケジュールを定義するときに、IBM Unica Marketing オブジェクト、タスクを 実行する頻度、および開始日と終了日を指定します。
- 実行とは、スケジュールの実行インスタンスです。
- 2 つのタイプのスケジュールがあります。
- 時刻ベース 実行は指定の時刻に発生します。
- トリガー・ベース スケジュールが指定のトリガーを受け取ったとき (例えば、 別のスケジュールがその実行の成功または失敗を示すトリガーを送信したとき) に、実行が発生します。

いずれのタイプのスケジュールも、1回実行、または繰り返しベースの実行に構成 することができます。

Campaign Schedule プロセスと IBM Unica Scheduler の相違点

IBM Unica Marketing の 8.0 リリースから、IBM Unica Scheduler は、フローチャ ート全体のスケジュール実行で Campaign Schedule に代わるものとして意図されて います。IBM Unica Scheduler は、フローチャートが実際に実行されていない場合、 サーバー・システムのリソースを一切消費しないため、より効率的です。IBM Unica Scheduler は、フローチャート内の Campaign Schedule プロセスがフローチャートの 実行中にのみ機能するときは、たとえフローチャートが実行されていない場合で も、フローチャートを開始します。

Campaign Schedule プロセスは、旧バージョンとの完全な互換性を維持するために、 また、 IBM Unica Scheduler では処理されないその他のユースケースに備えて、保 存されています。例えば、Campaign Schedule プロセスを使用して Campaign トリ ガーを送信したり、従属プロセスの実行を遅らせたりすることができます。

フローチャート実行を開始するトップレベルのプロセスとして Campaign Schedule プロセスを使用するフローチャートをスケジュールするときは、 IBM Unica を使用 しないでください。一般に、どちらか 1 つあれば十分です。ただし、IBM Unica Scheduler によって開始されるフローチャート内に Schedule プロセスがある場合、 そのプロセスは構成どおりに機能します。後続のプロセスが実行される前に、IBM Unica Scheduler と Schedule プロセスに必要な条件が満たされる必要があります。

IBM Unica Scheduler とは異なり、Campaign Schedule プロセスは外部トリガーを送 信して、コマンド・ライン・スクリプトを呼び出すことができます。IBM Unica Scheduler は、それ自体のスケジュールにのみ、トリガーを送信できます。

スケジューラー・トリガー

スケジュールを作成または編集するときに、スケジューラー・トリガーをセットア ップすることができます。

トリガーは、実行が正常に完了したとき、または実行が失敗したときに、IBM Scheduler が送信できるテキスト・ストリングです。完了時にトリガーを送信するス ケジュールがある場合、そのトリガーを受け取ったときに実行を開始する別のスケ ジュールを設定することができます。

すべてのスケジュールがすべての送信されたトリガーを受け取りますが、スケジュ ールが実行を開始するのは、そのトリガー・ストリングが待機しているトリガー・ ストリングに一致する場合のみです。この方法で、無限数の依存関係がスケジュー ル間に作成できます。

トリガーを作成した後、Scheduler ユーザー・インターフェースでそのトリガーがド ロップダウン・リストに表示されるので、再び使用しやすくなります。

トリガーの例

一組の Campaign フローチャートのすべてに同じトリガーを指定することによっ て、それらを同時に実行するようにスケジュールすることができます。トリガーを 使用して、一組のフローチャートを次々に順番に実行することもできます。

以下の例では、指定順序で実行する一連のフローチャートをセットアップする方法 を示します。

- フローチャート1は、実行が正常に完了したときに送信される「フローチャート 1実行完了」トリガーを指定してスケジュールされています。
- フローチャート 2 は、以下のようにスケジュールされます。
 - 「フローチャート 1 実行完了」トリガーを受信しときに開始する。
 - 実行が正常に完了したら、「フローチャート 2 完了」トリガーを送信する。
- フローチャート 3 は、「フローチャート 2 実行完了」トリガーを受信したとき に開始するようにスケジュールされます。

開始トリガーについて

開始トリガーを使用してセットアップしたスケジュールは、その開始日に関係な く、作成直後からトリガーを listen し始めます。ただし、トリガーが開始日をオー バーライドすることはありません。例えば、スケジュールの開始日が 2010 年 12 月 12 日の場合、2010 年 12 月 5 日に開始トリガーを受け取ったとしても、2010 年 12 月 12 日になるまでは実行を開始しません。

着信トリガー

リリース 8.6.0 以降、IBM Scheduler は、外部アプリケーションから送信されるト リガーに応答できるようになりました。この機能は scheduler_console_client ユ ーティリティーによって使用可能になります。このユーティリティーが発行するト リガーにより、そのトリガーをリッスンするよう設定された 1 つ以上のスケジュー ルを起動できます。

scheduler_console_client はバッチ・スクリプト・アプリケーションであるため、 例えば別のバッチ・スクリプトを使用することにより、外部アプリケーションから これを呼び出すことが可能です。

例えば、トリガー「T1」をリッスンするようにスケジュールを設定した場合、次の コマンドを使って scheduler_console_client ユーティリティーを実行することに より、T1 トリガーを送信できます。 scheduler_console_client.bat -v -t T1

このユーティリティーは、以下の情報を提供できます。

- 特定のトリガーをリッスンするよう構成されているスケジュールのリスト。
- トリガーの送信が正常に完了したかどうか(ただし、トリガーをリッスンしているスケジュールが正常に実行されたかどうかを報告することはできません)。

このユーティリティーの使用方法について詳しくは、234ページの 『scheduler_console_client ユーティリティー』を参照してください。

セキュリティーに関する考慮事項

エンタープライズ・アプリケーション内でのスケジューリングは、管理者の作業と 見なされます。 scheduler_console_client ユーティリティーの実行権限を持つす べてのユーザーには、トリガーを発行する権限もあると想定されます。

いずれかのユーザーがこのユーティリティーを使ってトリガーを発行しないように するには、そのユーザーが持つ、このユーティリティーの実行権限を取り消す必要 があります。

スケジューラーの制限

多数のプロセスがシステムに大量の要求を送ると予想される場合は、制限を使用し てパフォーマンスを管理します。制限は、「設定」>「構成」ページでセットアップ するスケジューラー・グループに基づいています。グループに制限しきい値を割り 当て、スケジュールをそのグループに関連付けます。

制限しきい値とは、そのグループに関連付けられた、同時実行が可能な実行の最大数です。サーバー上でのリソース消費量を削減するには、制限しきい値を小さい値に設定することができます。制限を適用できるのは、IBM Scheduler で作成されたスケジュールのみです。

デフォルト・グループの無制限しきい値

すべてのスケジュールは制限グループに所属していなければなりません。あるスケジュールについて制限を有効にしたくない場合は、そのスケジュールを「デフォル

ト」スケジューラー・グループ (スケジュールの作成時に「スケジューラー・グル ープ」フィールドでデフォルトで選択されているオプション)のメンバーにしてく ださい。このグループの制限しきい値は高いので、事実上は制限がないのと同じ意 味になります。

制限の例外

フローチャートを Campaign 内部で、または Campaignunica_svradm ユーティリティーを使用して実行する場合、これらの実行は制限しきい値にはカウントされず、 即時に実行されます。

制限の例

- システム・リソースが心配な場合、制限を使用してサーバーへの負荷を管理する ことができます。例えば、多数の複雑な Campaign フローチャートを実行しなけ ればならない場合、同時に実行できるフローチャートの数を制限する制限グルー プにそれらを割り当てることができます。この制限は、Campaign サーバーまたは マーケティング・データベースへの負荷を管理するのに役立ちます。
- 制限を使用して、スケジュールの優先順位を設定できます。制限しきい値の大き いグループに高優先順位のスケジュールを割り当てることによって、システム・ リソースをできる限り効率的に使用してこれらのスケジュールが実行される状況 を確保することができます。低優先順位のスケジュールは、制限しきい値の小さ いグループに割り当ててください。
- 繰り返しパターンを使用してスケジュールされたフローチャートがある場合は、 制限を使用して、実行が重ならずに順序よく行われるようにすることができま す。例えば、10時間の間、毎時間実行されるように設定された繰り返しパターン を持つフローチャートをスケジュールに入れたとします。そのフローチャート で、1つの実行を完了するのに1時間以上かかる場合、直前の実行が完了する前 に次の実行が開始しようとする可能性があります。この場合、まだ実行中のフロ ーチャートがロックされるため、次の実行は失敗する結果になります。これが起 こらないようにするには、しきい値1の制限グループを作成し、フローチャート のスケジュールをこのグループに割り当てることができます。

スケジューラーの繰り返しパターン

繰り返しパターンを構成することによって、繰り返し実行するスケジュールをセッ トアップすることができます。設定した繰り返しパターンは、指定の開始時刻後に 開始されます。

いくつかの繰り返しパターンのオプションがあります。

- 事前定義 共通繰り返しパターンのセットで、その中から選択できます。
- cron 表現 6 個から 7 個のフィールドで構成され、空白文字で区切られたスト リングであり、時間のセットを表します。
- 単純なカスタム繰り返しパターン 多くの一般的な会議スケジューラーに似た繰り返しパターンを作成するユーザー・インターフェース。

スケジューラーの繰り返しパターンはすべて、cron 表現に基づいています。 Scheduler では、これらの cron 表現を作成しやすいように、ユーザー・インターフ ェース内に事前定義パターンを用意しています。独自のカスタム cron 表現を書く場 合は、これらの式を読むことに慣れていないユーザーにもパターンが理解しやすい ように、繰り返しパターンのわかりやすい説明を作成することをお勧めします。

重要:繰り返しパターンはすべて、次回の長い間隔の終わりでリセットされます。 例えばカスタム週次パターンを3週間ごとに実行するよう設定した場合、パターン は毎月の終わりにリセットされるので、このパターンは毎月3週目に実行されるこ とになります。これはすべての cron 表現の特性です。第3週、第6週、第9 週、第12週というように実際に実行されるスケジュールを設定するには、目的の それぞれの実行日について個別にスケジュールを作成する必要があります。

実行の従属関係

実行が正常終了した 1 つ以上のスケジュールされた他の実行に従属するように、ス ケジュールをセットアップできます。

例えば、繰り返しパターンを持つスケジュール S1 をセットアップしたとします。 S1 には、S1 の実行が正常終了するたびに送信されるトリガーがあります。 S2、S3、S4 の 3 つのスケジュールは、S1 からの発信トリガーを受け取ると開始す るように構成されています。さらにスケジュール S5 は、S2、S3、S4 が正常に終了 すると実行するようにセットアップできます。S5 が実行されるのは、従属する 3 つの実行すべてが完了した場合のみです。

例で示されているようなシナリオをセットアップするには、「開始時期」ドロップ ダウン・リストの「他のタスクの完了時」オプションを使用して S5 を構成しま す。

このようにして他の実行に従属する実行を構成する場合には、以下の考慮事項に注 意してください。

- 構成しているスケジュールが従属するスケジュールは、繰り返し実行されるスケジュールであってはなりません。先ほどの例の場合、S2、S3、S4 は繰り返し実行されないスケジュールである必要があります。ただし、S1 が繰り返し実行されるので、S2、S3、S4 は S1 の実行に基づいて実際には繰り返されます。
- 他のスケジュールに従属するスケジュールも、繰り返し実行されるスケジュール であってはなりません。この例の場合、S5 は繰り返し実行されないスケジュール である必要があります。この場合も、S1 が繰り返されるので、S5 も同じように 実際には繰り返されます。
- 他のスケジュールに従属するスケジュールを、他のスケジュールの「他のタスクの完了時」オプションの基準として使用することはできません。この例の場合、
 S5 を他のスケジュールの「他のタスクの完了時」オプションの基準として使用することはできません。
- 「他のタスクの完了時」オプションを使用して構成したスケジュールを削除する 場合、最初に、「他のタスクの完了時」オプションを削除するために構成を変更 する必要があります。その後、スケジュールを削除できます。

タイム・ゾーンのサポート

世界中の数多くのタイム・ゾーンのいずれかのコンテキストで実行が行われるよう にスケジュールすることが可能です。 スケジュールを作成する場合、デフォルトでは、Platform がインストールされてい るサーバーのタイム・ゾーンが常に使用されます。ただし、「タイム・ゾーンの選 択」ドロップダウン・リストにリスト表示されている他のタイム・ゾーンも選択で きます。これらのオプションは、GMT 時刻の後に、そのタイム・ゾーンに通常使用 される用語が付されて表されます。例えば、(GMT-08:00) ピトケアン島、 (GMT-08:00) 太平洋標準時間 (米国およびカナダ) などです。

選択したタイム・ゾーンが、以下を含め、スケジュールのすべての側面に適用され ます。

- 「スケジュールされた実行」ページおよび「スケジュール定義」ページに表示される情報
- 繰り返しパターンおよびトリガー

Scheduler の制限

IBM Unica Scheduler の以下の制限について注意してください。

- フローチャート実行を手動で開始する場合でもコマンド行からフローチャート・ コマンドを実行する場合でも、IBM Unica Scheduler に影響が出ることはなく、 逆も同様です。ただし、1 つだけ例外があります。いずれかの方法でフローチャ ート実行が開始された場合、その後にいずれかの方法でフローチャートを実行し ようとすると、直前の実行が完了していない場合にはロック・エラーにより失敗 します。
- Scheduler トリガーは、どのような方法であっても Campaign フローチャート・ト リガーと情報のやりとりをすることはありません。スケジュール・プロセスまた は Campaign トリガー・ユーティリティー unica_actrg によって送信されたトリ ガーが IBM Unica Scheduler 内のスケジュールの実行を開始することはできず、 逆も同様です。

フローチャートのスケジューリングに必要な権限

IBM Unica Scheduler を使用してフローチャートをスケジュールに入れるには、以下の権限が必要です。

権限	説明
バッチ・フローチャートのスケジュール	デフォルトの実行パラメーターを使用してフ ローチャートのスケジューリングを実行でき ます。
バッチ・フローチャートのスケジュールのオ ーバーライド	フローチャートのスケジューリングのための デフォルトの実行パラメーターをオーバーラ イドできます。
バッチ・フローチャートの実行	フローチャートを実行できます (スケジュー ル済みフローチャートを正常に実行するため に必要です)。

注: スケジュール済みフローチャートを実行する場合、フローチャートはスケジュ ール済みタスクを作成した Marketing Platform ユーザーによって実行されます。こ のユーザー・アカウントが無効になっているか削除されていた場合、そのユーザー が以前にスケジュールに入れたフローチャートはすべて実行に失敗します。このユ ーザー・アカウントを非アクティブにしたいが、以前にスケジュールに入れられた フローチャートは実行できるようにしたいという場合は、そのユーザー・アカウン トの状態を「アクティブ」に設定したままにし、「バッチ・フローチャートの実 行」 権限のみを認可してください。

Scheduler 実行パラメーター

Campaign フローチャートをスケジュールに入れると、フローチャートは、実行パラ メーターが含まれたストリングを IBM Scheduler に渡すことができます。このスト リングは、実行が開始されたときに Campaign に返されます。Campaign では、「フ ローチャート・パラメーターの上書き」ダイアログ・ボックスで設定された値のす べてが単一のストリングとして Scheduler に渡されます。このストリングは、「実 行パラメーター」フィールドに表示されます。

Campaign フローチャート実行用のデフォルト・パラメーターの オーバーライド

Campaign フローチャート実行をスケジュールに入れた場合、Scheduler は、フロー チャート用に定義されているデフォルトの実行パラメーターを使用します。これら のパラメーターには、以下のものがあります。

- フローチャートが使用するテーブル・マッピングが含まれているテーブル・カタログ。
- フローチャート内部で定義されたユーザー変数値。
- フローチャートがアクセスするデータ・ソースのログイン情報。デフォルトは、 フローチャートをスケジュールに入れるユーザーです。

Campaign では、これらのデフォルト値をオーバーライドして、異なるデータ・ソー スに対して実行したり、異なる結果を得たりする、unica_svradm ユーティリティー が提供する機能に似た機能を利用できます。例えば、単一のフローチャートについ て複数の実行をスケジュールに入れて、ユーザー変数の値の組み合わせをいろいろ テストすることができます。実動データベースからこれらのテスト実行用のサンプ ル・データベースに切り替える、代替テーブル・カタログを指定することもできま す。組織で、テスト実行と運用実行に異なるデータベース・ログインが必要な場合 は、適切なログイン情報を指定することができます。

スケジュールの作成

スケジュールに入れるオブジェクトを作成するときに、スケジュールを作成しま す。現在は、Campaign フローチャートと eMessage メール配信のみで IBM Scheduler を使用して実行をスケジュールすることができます。

デフォルト・パラメーターを使用してフローチャート・スケジュー ルを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「実行」アイコンをクリックし、「こ れをスケジュール」を選択します。 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックスが 開きます。

2. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックス内のフィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「繰り返しの設定」をクリックして反復パター ンをセットアップします。

3. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要:フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフロ ーチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャ ート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

デフォルト・パラメーターをオーバーライドしてフローチャート・ スケジュールを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「実行」アイコンをクリックし、「こ れをスケジュール - 詳細」を選択します。

「フローチャート・パラメーターの上書き (Override Flowchart Parameters)」ダイ アログ・ボックスが開きます。

2. ダイアログ・ボックスの各フィールドに入力して、フローチャート・パラメータ ーを指定します。

このフィールドに入力したパラメーターの構文は、チェックされません。先へ進 む前に、正しい値を入力してあることを再確認してください。

3. 「実行をスケジュール」をクリックします。

「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックスが 表示されます。

4. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックス内のフィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「**繰り返しの設定**」をクリックして反復パター ンをセットアップします。

5. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要:フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフロ ーチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャ ート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

制限をセットアップするには

スケジュール対象のオブジェクトのタイプ (フローチャートまたはメール配信) に対 して、制限グループを明確にセットアップする必要があります。

- 1. 「構成」ページで、テンプレートの下の以下のいずれかの制限グループ・テンプ レートに移動します。
 - 「Platform」>「Scheduler」>「スケジュール登録」> 「Campaign」> [オブジ ェクト] >「制限グループ」> (制限グループ)

- 「Platform」>「Scheduler」>「スケジュール登録」>「PredictiveInsight」> [オブジェクト] >「制限グループ」>「制限グループ」
- 2. 63 ページの『テンプレートから新規カテゴリーを作成する』で説明されている 方法で、カテゴリー (制限グループ)を作成します。

「制限しきい値」プロパティーに設定する数値は、そのグループに関連付ける同 時実行が可能な実行の最大数です。実行に適格なスケジュールのうち、制限しき い値を超えたスケジュールは、実行待ちのキューに入れられ、入れられた順序で スケジューラーは実行通知を受け取ります。

構成済みのスケジューラー・グループは、スケジュールの作成および編集に使用 できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「**スケジュー ラー・グループ**」ドロップダウン・リストに表示されます。

この方法で実行を制御したいオブジェクトのタイプごとに、制限グループを作成 する必要があります。例えば、フローチャート制限グループは、フローチャート のスケジューリングのみに使用でき、メール配信制限グループはメール配信のス ケジューリングのみに使用できます。

3. 必要に応じて、1 つ以上のスケジュールをグループに割り当ててください。

「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケジュールの編集」 ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、スケジュールを作成または編集する場合に使用するウィンド ウについて詳しく説明します。

フィールド	説明
スケジュールされた項目タ イプ	スケジュールされたオブジェクトのタイプ。このフィールドは、自動的にデータが表示 され、読み取り専用です。
スケジュールされた項目名	スケジュールされたオブジェクトの名前。このフィールドは、自動的にデータが表示さ れ、読み取り専用です。
スケジュール名	スケジュールの名前を入力してください。
説明	スケジュールの説明を入力してください。
実行パラメーター	Campaign でフローチャートをスケジュールに入れる場合、「フローチャート・パラメ ーターの上書き」ダイアログで設定した値のすべてが単一ストリングとして Scheduler に渡され、「実行パラメーター」フィールドに表示されます。実行パラメーターはスケ ジューラー自体では使用されません。スケジューラーは、フローチャートの実行時に Campaign にストリングを返すだけです。
スケジューラー・グループ	1 つ以上の制限グループを作成してある場合、このスケジュールをグループに関連付け て、同時に実行できるこのスケジュールの実行数を制限することができます。このフィ ールドにオプションとして表示するためには、グループを「構成」ページのプロパティ ーを使用して作成する必要があります。
正常完了時にトリガーを送信	このスケジュールの実行が正常に完了したときに、その実行がトリガーを送信するよう にするには、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールが このトリガーを listen するように設定することができます。
エラーの発生時にトリガー を送信	このスケジュールの実行が失敗したときにその実行がトリガーを送信するようにするに は、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリ ガーを listen するように設定することができます。

フィールド	説明
タイム・ゾーンの選択	サーバーのタイム・ゾーンとは別のタイム・ゾーンを使用する場合に、スケジュールの 計算時に使用するタイム・ゾーンを選択します。詳細については、タイム・ゾーンのサ ポートを参照してください。
開始時期	以下のオプションの1つを選択して、スケジュールをいつ実行するのかを指定しま す。開始時刻は、最初の実行のみに適用されます。これは、スケジュールが実行に最初 に適格になる時刻を定義します。スケジュールがトリガーを待つように構成されている 場合、制限グループのメンバーである場合、または繰り返しパターンが含まれている場 合は、実際の最初の実行は開始日の後になることがあります。
	 ・ 「相足時刻に - 日時を選択してください。 ・ トリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか、新規トリガーを入力してください。 新規トリガーを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。
	 指定日以後のトリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか新規トリガーを入力 し、日時を選択してください。新規トリガーを入力する場合は、この同じストリング を成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。
	以下のオプションの 1 つを選択して、実行の数を指定します。 • 1 回だけ実行 - スケジュールは 1 回実行されます。指定する開始日時に実行を開 始する場合に使用できます。
	• n 回実行後に停止 - 指定の実行数が (成功か失敗かに関係なく)発生した後か、または終了日に達するか、どちらか早い方の条件で実行が停止します。
	• 指定日時に停止 - 指定の終了日時に達するまで、実行が定義された回数だけ開始されます。制限による制約によって実行が遅延した場合は、この日時の後で実行が発生することもあります。
	 他のタスクの完了時 - このオプションで選択した他のタスクすべてが正常に完了した場合にのみ、スケジュールが実行されます。119ページの『実行の従属関係』を参照してください。
繰り返しパターン	以下のオプションから 1 つを選択してください。
	 定義済みの繰り返しパターンを使用 - リストからパターンを選択してください。 Marketing Platform には事前定義されたパターンのセットが用意されています。また、「構成」ページでプロパティーを追加して、独自のパターンを作成することができます。
	• 単純なカスタム繰り返しパターンを使用 - 間隔を選択してください。
	• cron スケジュール表現を使用 - 有効な cron 表現を入力してください。

「フローチャート・パラメーターの上書き」ウィンドウのリファレ ンス

次の表では、「フローチャート・パラメーターの上書き」ダイアログのフィールド について説明します。このダイアログの編集可能フィールドはすべてオプションで す。これらのフィールドに入力するパラメーターの構文は、システムで検査されま せん。先に進む前に、入力した値が正しいことを念入りに確認してください。

フィールド	説明
フローチャート ID	フローチャートの固有 ID。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り
	専用です。

フィールド	説明
キャンペーン - フローチャ	キャンペーンの名前、キャンペーン・コード、およびフローチャート名。このフィール
ート名	ドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュール・ジョブ名	スケジュールされたジョブの名前。このフィールドは、デフォルトでは
	「CampaignName - FlowchartName 」ですが、任意の名前に変更できます。
カタログ・ファイル名	この実行に使用するテーブル・カタログ・ファイルを指定します。
データ・ソース	これらのフィールドは、このフローチャートがアクセスするすべてのデータ・ソースの
	デフォルトのログイン情報をオーバーライドするために使用します。

スケジュールの管理

アクセス可能なすべてのページから、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を選択することによって、すべてのスケジュールを管理するこ とができます。これらのページにアクセスするには、Marketing Platform でのスケジ ューラー・タスク表示権限を持っている必要があります。マルチパーティション環 境では、自分が所属するパーティション内で作成されたスケジュールのみが表示さ れます。ただし、PlatformAdminRole 役割を持っている場合は、すべてのパーティシ ョンのすべてのスケジュールされた実行を表示することができます。

スケジュール管理ページは以下のとおりです。

- スケジュール定義 このページでは、すべてのスケジュール定義を表示でき、リストのスケジュール名をクリックしてスケジュールを編集することができます。
- スケジュールされた実行の表示 このページでは、各スケジュールのキューに入っている実行および完了した実行を表示でき、キューに入っている実行のキャンセルまたは実行の削除を行うことができます。

単一のフローチャートのスケジュール管理ページを表示するには、フローチャートの「実行メニュー」から「スケジュール時に表示」を選択します。

リストのスケジュール済み項目は、フローチャートに直接進むリンクになっていま す。

スケジューラー管理ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を 選択した場合、またはフローチャートの「実行」メニューから「スケジュール時に 表示」を選択した場合にアクセスできる、スケジューラー管理ウィンドウについて 詳細に説明します。

フィールド	説明
スケジュール名	この実行がインスタンスとして含まれているスケジュール。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
開始	実行の開始時刻。
最新更新	フローチャートまたはメール配信プロセスの実行からの最新のステータス更新日時。

スケジュールされた実行

フィールド	説明
実行状態	Scheduler に定義されている実行の状態で、以下のとおりです。
	• 予定されています - 実行は開始されていません。
	 キューに登録済み - Scheduler は実行を開始しましたが、制限による制約のため、 IBM Unica Marketing 製品はスケジュールされた実行の実行を開始していません。
	 実行中 - 実行が開始されました。
	• 完了 - 実行は完了し、「失敗」または「成功」の状態が返されました。
	 キャンセル済み - ユーザーが「スケジュールされた実行」ページで「キャンセル済 みにする」をクリックして、実行をキャンセルしました。ユーザーがキャンセル済み のマークを付けたときに実行がキューに入っていた場合、実行はされません。実行中 だった場合は、キャンセル済みのマークはつきますが、このアクションによって実行 が停止することはありません。
ステータス	製品によって定義されたオブジェクトの実行のステータス。実行が「キャンセル済み」 ステータスを送信し、その後その実行が再開されて別のステータスをスケジューラーに 送信すると、ステータスがこのフィールドで更新されます。
詳細	製品によって提供される、実行に関する情報。例えば、フローチャート実行の場合、フローチャート名と ID が詳細に含まれ、実行が失敗した場合にはエラー、および実行が 成功した場合には経過時間も含まれます。

スケジュール定義

フィールド	定義
スケジュール名	スケジュールの作成者が指定したスケジュールの名前。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
作成者	スケジュールを作成したユーザーのログイン。
開始トリガー	このスケジュールが受け取った場合に、実行を開始するストリング。開始トリガーが指 定されていない場合、このフィールドはブランクです。
終了	このスケジュールの最終実行の日時。
繰り返しパターン	繰り返しパターンの記述名。
成功時にトリガー	このスケジュールの実行が正常に完了したことを製品が報告する場合に送信されるスト リング。成功時トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。
失敗時にトリガー	このスケジュールの実行が失敗したことを製品が報告する場合に送信されるストリン グ。失敗時トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。

第9章 IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics Web Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする

組織で IBM Coremetrics Web Analytics を使用する場合、IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing との間でシングル・サインオンを有効にできます。シングル・サイ ンオンを使用すると、ユーザーは、IBM Unica Marketing ユーザー・インターフェースから IBM Coremetrics レポートに移動する際に、ログインを求められることが なくなります。

また、IBM Unica Marketing ダッシュボードで IBM Coremetrics レポートを参照す る場合、シングル・サインオンでユーザーはこうしたレポートを表示できるように なります (IBM Coremetrics でレポートに対するアクセス権がある場合)。

IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics Web Analytics との間 でシングル・サインオンを有効にするための 2 つのオプション

シングル・サインオンを有効にするには、2 つのオプションのいずれかを選択できます。

• IBM Coremetrics を構成して、IBM Unica Marketing ユーザーが初めて IBM Coremetrics にナビゲートするときに自動的に IBM Coremetrics ユーザー・アカウ ントが作成されるようにできます。

すべての IBM Unica Marketing ユーザーが IBM Coremetrics でシングル・サイン オンを使用するようにしたい場合には、このオプションを選択することを推奨し ます。

128 ページの『自動ユーザー・アカウント作成による IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics 間のシングル・サインオン・セットアップ』を参照してください。

 既存の各ユーザーの IBM Coremetrics ログイン名を IBM Unica Marketing のそれ ぞれの詳細ページに追加することで、IBM Unica Marketing ユーザー・アカウン トをシングル・サインオン用に構成できます。

このオプションを選択する場合、IBM Coremetrics に対するアクセスを要求する ユーザーには IBM Coremetrics アカウントがなければなりません。

一部の IBM Unica Marketing ユーザーだけに IBM Coremetrics でシングル・サイ ンオンを使用させる場合には、このオプションを選択することを推奨します。

詳しくは、130ページの『手動ユーザー・アカウント作成による IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics 間のシングル・サインオンのセットアップ』を参 照してください。

シングル・サインオン・ユーザーの IBM Coremetrics における権限

IBM Coremetrics で自動アカウント作成オプションを選択しない場合には、シング ル・サインオン・ユーザーが IBM Coremetrics で持つ権限は、直接 IBM Coremetrics にログインした場合と同じです。

IBM Coremetrics で自動アカウント作成オプションを選択した場合には、シングル・ サインオン・ユーザーが IBM Coremetrics で持つ権限は以下のとおりです。

• デフォルトでは、ユーザーは、管理者が自動作成されるすべてのユーザー用に構成した IBM Coremetrics グループに付与された権限を持ちます。

管理者は、このグループに関連付けられた権限を変更できます。

 また管理者は、既に IBM Coremetrics アカウントを持つユーザーの自動アカウン ト作成をオーバーライドできます。特定のユーザーに関してオーバーライドが行 われると、そのユーザーの権限は、IBM Coremetrics に直接ログインした場合と 同じになります。

詳しくは、『自動ユーザー・アカウント作成による IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics 間のシングル・サインオン・セットアップ』を参照してください。

サーバー・クロックの調整

Marketing Platform が配置されているサーバー上のクロックは、IBM Coremetrics サ ーバー・クロックの時刻と一致しなければなりません。シングル・サインオンで は、IBM Coremetrics サーバーで許容されるサーバー・クロック時刻との誤差は最大 で 15 分 (900 秒) までです。

ベスト・プラクティスとして、サーバー・クロックを同期してください。確実に同 期するには、Network Time Protocol (NTP)を使用してください。

サーバー・クロックを同期できず、クロック間の誤差が 15 分以上になっている可 能性がある場合には、Marketing Platform の「Coremetrics」カテゴリーの「クロッ ク・スキュー調整 (秒) (Clock skew adjustment (seconds))」構成プロパティーを、 クロック間の誤差を反映する数値に設定できます。

自動ユーザー・アカウント作成による IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics 間のシングル・サインオン・セットアップ

1. IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics との間でシングル・サインオンに使用 する IBM Coremetrics クライアント ID を判別します。

後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。

- 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユ ーザーとして IBM Coremetrics にログインし、「管理」リンクをクリックしてか ら、「グローバル・ユーザー認証 (Global User Authentication)」ページに移動し ます。
 - 「IBM Enterprise Marketing Management 共有秘密鍵 (IBM Enterprise Marketing Management Shared Secret)」フィールドに、このフィールドの横 の指示に記されている規則に準拠したストリングを入力します。

後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。

- 「自動ユーザー・アカウント作成 (Automatic User Account Creation)」の下に ある「有効」をクリックします。
- 自動作成したすべてのユーザーを入れるユーザー・グループを選択します。

このグループは、少なくとも以下の Web Analytics 権限がなければなりません。

- 「ダッシュボード」>「標準ダッシュボードの表示」
- 「レポート」>「サイト指標」
- 「レポート」>「インサイト」
- 3. 管理ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザ ー」ページに移動します。
- 4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
 - 「データ・ソース」 名前を入力します。
 - 「データ・ソース・ログイン」 ステップ 1 で控えたクライアント ID を入 力します。
 - 「データ・ソース・パスワード」 ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザー が含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用すること もできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、す べてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。

- 5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下 を実行します。
 - 新規グループを作成し、そのグループに CMUser 役割を追加します。
 - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザー が含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プ ロパティーを設定します。

プロパティー	値
Coremetrics Coremetrics Analytics を有効	True
C 9 S (Enable Coremetrics Analytics)	
Coremetrics 統合 パーティション パー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform
ティション[n] Coremetrics アカウントの	ユーザー・アカウントのログイン名を入力し
Platform ユーザー (Platform user for	ます。
Coremetrics account)	

プロパティー	値
Coremetrics 統合 パーティション パー	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前
ティション[n] Coremetrics アカウントの	を入力します。
データ・ソース (Datasource for	
Coremetrics account)	

複数のパーティションがある場合、「Coremetrics | 統合 | パーティション | partitionTemplate」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが 含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティーを作成する必要があり ます。

テンプレートを使用して作成するカテゴリー名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。

- 7. 自動アカウント作成をオーバーライドしたいユーザーに関しては、以下を実行し ます。
 - Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
 - ユーザーの IBM Coremetrics ログイン名を、ユーザーの詳細ページにある 「Coremetrics ユーザー名」フィールドに入力します。

このフィールドが有効なのは、IBM Coremetrics アカウントを既に持っているユ ーザーのみです。

注: このログイン名のアカウントが IBM Coremetrics に存在しない場合には、ユ ーザーの Marketing Platform ログイン名ではなく、ここで入力した名前でユーザ ーのアカウントが作成されます。

8. 132 ページの『IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing の間のシングル・サイ ンオン用に Web アプリケーション・サーバーを構成する方法』で説明されてい る手順を実行します。

手動ユーザー・アカウント作成による IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics 間のシングル・サインオンのセットアップ

1. IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics との間でシングル・サインオンに使用 する IBM Coremetrics クライアント ID を判別します。

後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。

- 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユ ーザーとして IBM Coremetrics にログインし、「管理」リンクをクリックしてか ら、「グローバル・ユーザー認証 (Global User Authentication)」ページに移動し ます。
 - 「IBM エンタープライズ・マーケティング・マネージメント共有秘密鍵 (IBM Enterprise Marketing Management Shared Secret)」フィールドに、このフィールドの横の指示に記されている規則に準拠した文字列を入力します。

後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。

 「自動ユーザー・アカウント作成 (Automatic User Account Creation)」の下に ある「無効」をクリックします。

- 3. 管理ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザ ー」ページに移動します。
- 4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソー スを構成します。
 - 「データ・ソース」 名前を入力します。
 - 「データ・ソース・ログイン」 ステップ 1 で控えたクライアント ID を入 力します。
 - 「データ・ソース・パスワード」 ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザー が含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用すること もできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、す べてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。

- 5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下 を実行します。
 - 新規グループを作成し、そのグループに CMUser 役割を追加します。
 - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザー が含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プ ロパティーを設定します。

プロパティー	値
Coremetrics Coremetrics Analytics を有効	True
にする (Enable Coremetrics Analytics)	
Coremetrics 統合 パーティション パー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform
ティション[n] Coremetrics アカウントの	ユーザー・アカウントのログイン名を入力し
Platform ユーザー (Platform user for	ます。
Coremetrics account)	
Coremetrics 統合 パーティション パー	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前
ティション[n] Coremetrics アカウントの	を入力します。
データ・ソース (Datasource for	
Coremetrics account)	

複数のパーティションがある場合、「Coremetrics | 統合 | パーティション | partitionTemplate」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが 含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティーを作成する必要があり ます。

テンプレートを使用して作成するカテゴリー名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。

7. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。

 シングル・サインオンを有効にするユーザーごとに、ユーザーの IBM Coremetrics ログイン名を、ユーザーの詳細ページにある「Coremetrics ユーザー 名」フィールドに入力します。

注: IBM Unica Marketing と IBM Coremetrics にまったく同じログイン名のユー ザーが存在する場合、このステップは実行する必要はありません。

9. 『IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing の間のシングル・サインオン用に Web アプリケーション・サーバーを構成する方法』で説明されている手順を実 行します。

IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing の間のシングル・サインオン 用に Web アプリケーション・サーバーを構成する方法

ログインしなくてもダッシュボード内の IBM Coremetrics レポートをユーザーが閲 覧できるようにするには、Marketing Platform が配置された Web アプリケーショ ン・サーバーで以下の適切な手順を実行します。

シングル・サインオンのための WebLogic 構成

WebLogic ドメイン・ディレクトリーの下の bin ディレクトリーにある setDomainEnv スクリプトを、次のように編集します。

以下を JAVA_OPTIONS に追加します。

-Dweblogic.security.SSL.ignoreHostnameVerification=true

シングル・サインオンのための WebSphere 構成

- 1. WebSphere 管理コンソールにログインします。
- 2. 「セキュリティー」を展開し、「SSL 証明書と鍵の管理」をクリックします。
- 「構成設定」の「エンドポイント・セキュリティー構成の管理」をクリックします。
- 4. Marketing Platform が配置されたセルおよびノードに関するアウトバウンド設定 に移動します。
- 5. 「関連項目」の下で、「鍵ストアおよび証明書」をクリックして、 NodeDefaultTrustStore 鍵ストアをクリックします。
- 6. 「追加プロパティー」の下で、「署名者証明書」および「ポートから取得」を クリックします。
- 7. 以下のように、項目に情報を入力します。
 - ホスト名: welcome.coremetrics.com
 - ・ポート: 443
 - エイリアス: coremetrics_cert

第 10 章 Windows Active Directory との統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーまた は Windows Active Directory サーバーと統合するように構成することができます。

IBM Unica Marketing をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユー ザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合 は、企業の権限ポリシーを IBM Unica Marketing アプリケーションに拡張するため の柔軟なモデルを提供します。統合によって、エラー、サポート・コスト、および アプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended* Software Environments and Minimum System Requirements」という資料を参照してく ださい。

Active Directory 統合機能

Marketing Platform は、Windows Active Directory との統合により、このセクション で説明する機能を提供します。

Active Directory 統合による認証

IBM Unica Marketing アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform へのクエリーを実行します。Active Directory サーバー統合が実 装され、Windows 統合ログインが有効になっている場合、ユーザーは企業ネットワ ークにログインした時点ですべての IBM Unica Marketing アプリケーションに対し て認証され、IBM Unica Marketing アプリケーションにログインするためのパスワ ードが不要になります。ユーザーの認証は Windows ログインに基づいて行われ、 アプリケーションのログイン画面はバイパスされます。

Windows 統合ログインが有効になっていない場合、ユーザーは、各自の Windows 資格情報を使用して IBM Unica Marketing ログイン画面でログインする必要があり ます。

内部ユーザーと外部ユーザーについて

Windows 統合ログインが有効になっている場合、すべてのユーザーは Active Directory サーバーに維持されます (本書で内部ユーザーと呼ぶ一部のユーザーを Marketing Platform に作成するオプションはありません)。内部ユーザーを作成する 機能が必要な場合は、Windows 統合ログインを有効にしないでください。

Windows 統合ログインを有効にしない場合は、LDAP サーバーとの統合についての 手順に従ってください。詳しくは、147ページの『構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)』を参照してください。

グループまたは属性に基づくユーザーのインポート

IBM Unica Marketing は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する 定期的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグ ループとそのユーザーをインポートします。 IBM Unica Marketing がサーバー・デ ータベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシッ プは維持されます。

Active Directory グループを IBM Unica Marketing グループにマップすることによって、IBM Unica Marketing の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる Active Directory グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM Unica Marketing グループに設定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform のサブグループは役割を継承しますが、その親に割り当てられている LDAP マッピングまたはユーザー・メンバーシップは継承しません。

IBM Unica Marketing 製品に固有のグループを Active Directory サーバー内に作成 するのが適切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユー ザーを制御することが可能です。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を 行います。

- 1. Active Directory サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている文字列 を判別します。
- 2. 「LDAP ユーザー参照属性名」プロパティーを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位また は組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

3. 「LDAP 参照マップ」プロパティーを構成するとき、値の「フィルター」部分 を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ1 で判別し た文字列を使用します。

この章の残りの部分では、適切な場合に、属性に基づく同期に関する手順が示されます。

グループに基づく同期あるいは属性に基づく同期を選択する必要があります。両方 の方式が同時にサポートされることはありません。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「LDAP 同期間隔」プロパティーを高い値に設定する必要があります。または値を 0 に設定 して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動によ る完全同期に依存する必要があります。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティション に割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグ ループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属 することができます。したがって、1 人のユーザーが複数の LDAP グループに属し ていて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM Unica
Marketing グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザーに対して 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こっ てしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM Unica Marketing グ ループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされたの がどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・ マッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新 マッピングが最後にリストされています。

同期化

IBM Unica Marketing を Active Directory サーバーと統合するように構成した場 合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。こ の自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザーおよびグル ープ (構成で指定されているもの)のみが IBM Unica Marketing に組み込まれま す。IBM Unica Marketing の「ユーザー」領域の同期化機能を使用して、すべての ユーザーおよびグループを強制的に同期化することができます。

Active Directory 統合の前提条件

Windows Active Directory 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティ ング・システムに IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする必要 があります。

さらに、Windows 統合ログオンを実装するには、IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスするユーザーは以下のことをする必要があります。

- サポートされる Windows オペレーティング・システムを実行中のシステムを使用する。
- サポートされるブラウザーを使用する。Windows 統合ログインが有効になってい る場合、ブラウザーは NTLM 許可をサポートしている必要があります。
- IBM Unica Marketing が認証される Windows Active Directory ドメインのメンバーとしてログインする。

IBM Unica Marketing と Windows Active Directory の統合方法

このセクションのトピックでは、IBM Unica Marketing と Windows Active Directory を統合する方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM Unica Marketing の統合は、マルチステップ・ プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別 の個所に記載されています。

1. 136ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバーについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 138 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、Active Directory グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

 138 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の 格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成)の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 139 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 141 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づ く同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期している ことを確認します。

142 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 142 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

8. 143ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

9. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

10. 143 ページの『Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインできること を確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード
 - 識別名 (DN)。追加情報については、137 ページの『識別名について』を参照 してください。
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス

- サーバーが listen するポート。

- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは uniquemember で、Windows Active Directory サーバーでは member です。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
 - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを 判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サー バーでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。ディ レクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
 - ディレクトリー・サーバーが代替ログイン属性に使用するストリングを判別し ます。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている 場合のみです。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の)属性に使われる文字列を取得します。
- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバ ーが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザーの肩書き
 - _ 部門
 - 会社
 - _ 王
 - ユーザーの電子メール
 - 住所 1
 - 勤務先電話
 - 携帯電話
 - 自宅電話

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM Unica Marketing に統合できるようにするには、 ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリ ー・サーバーの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパ スです。DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用 されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナ ーまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サービス内部でのオブジェクト自体 を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの 識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画

この情報は、(属性に基づく同期ではなく)グループに基づく同期を使用する場合にのみ適用されます。

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする 方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グ ループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グルー プにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Unica Marketing ユーザーとして作成されます。

ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にはインポート されません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動 的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納

ご使用のディレクトリー・サーバーが特定アクションを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリーのユーザー名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

- 1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
- LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限 を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイド ラインに従ってください。
 - 後のステップで、「LDAP 資格情報の Unica ユーザー」構成プロパティーの値 をこの IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのユーザー名に設定しま す。このプロパティーのデフォルト値は asm_admin で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。asm_admin アカウントを、デ ィレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できます。
 - この IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前でなければなりません。

3. 以下のガイドラインに従って、この IBM Unica Marketingユーザー・アカウント のデータ・ソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報の
	データ・ソース」プロパティーの値をこのデータ・ソース名に一致
	させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一
	致させるには、データ・ソースの名前を LDAPServer にします。
データ・ソース・ロ	IBM Unica Marketing と同期化されるすべてのディレクトリー・サ
グイン	ーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ
	管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。 DN は以下のようにな
	ります。
	uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com
データ・ソース・パ	ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持つ管理ユーザーの
スワード	パスワードを入力します。

IBM Unica Marketing での統合の構成

136ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページで ディレクトリー・サーバー構成プロパティーを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティーを設定するには

- 1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ ー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリーに移動します。
- 2. 以下の構成プロパティーの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してく ださい。

- LDAP サーバーのホスト名
- ・ LDAP サーバー・ポート
- ユーザー検索フィルター
- Unica に格納されている資格情報を使用
- LDAP 資格情報の Unica ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティーを設定するには

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動します。
- 2. 「LDAP プロパティー」セクションで以下の構成プロパティーの値を設定しま す。

値の設定方法については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してく ださい。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔
- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ
- LDAP プロバイダー URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 設定 Unica グループ・デリミッター
- LDAP 参照設定デリミッター
- LDAP 資格情報の Unica ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- LDAP ユーザー参照属性名

ユーザー属性マップ・プロパティーを設定するには

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動します。
- 2. 「**ユーザー属性マップ**」セクションの値を設定して、リストされている IBM Unica Marketing ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマ ップします。

グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティーは 「ユーザー・ログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。前の「必要な情報の 入手」の手順で検証した値を使用してください。

属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティーは、Marketing Platform がディレクトリー・サ ーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
- Marketing Platform では、電子メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の電子メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform シ ステム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる 場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザーの肩書き	128

属性	指定できる長さ
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの電子メール	128
住所 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM Unica グループにマップするには

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがイン ポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーに なります。

注: asm admin ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ ー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica グループ・マップの LDAP 参 照」カテゴリーに移動します。
- Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループ ごとに、(Unica グループ・マップの LDAP 参照) テンプレートを選択して、 「Unica グループの LDAP 参照」カテゴリーを作成します。以下のプロパティ ーを設定します。
 - 新規カテゴリー名
 - LDAP 参照マップ
 - Unica グループ

例えば、以下の値は、LDAP UnicaUsers グループを Marketing PlatformamUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP reference: cn=UnicaUsers, cn=Users, dc=myCompany, dc=com
- Unica group: amUsers; campaignUsers

同期化のテスト

.

構成をテストするために、(ディレクトリー・サーバー・ユーザーでなく) IBM Unica Marketing ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインして、以下を確 認してください。

予期したとおりにユーザーがインポートされていることを確認します。

グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシ ップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致 していることを確認します。

外部ユーザーの強制同期化

- 1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックしま す。
- 2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ

Windows 統合ログインが有効になっている場合は、platform_admin として IBM Unica Marketing にログインすることはできません。そのため、Marketing Platform に対する管理者権限を持つためには、以下の手順を実行する必要があります。

- IBM Unica Marketing に、内部ユーザー (Active Directory からインポートされた ユーザーでなく、Marketing Platform 内で作成されたユーザー) としてログイン します。これは、Marketing Platform 内で PlatformAdminRole 権限を持つユーザ ーでなければなりません。
- 2. Marketing Platform グループを作成し、そのグループに PlatformAdminRole 役割 を割り当てます。
- 3. 必ず、少なくとも 1 人の Active Directory ユーザーがこのグループのメンバー に入るようにしてください。

Windows 統合ログインへのセキュリティー・モードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティー・モード・プロパティーを設 定します。これによって、Active Directory ユーザーは、IBM Unica Marketing ログ イン画面をバイパスして、Windows ログインに基づいて IBM Unica Marketing アプ リケーションにアクセスできるようになります。

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー」に移動します。
- 2. 「ログイン方法」プロパティーの値を「Windows 統合ログイン」に設定します。
- 3. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Windows 統合ログイン」に移動して、以下のプロパティーの値を設定します。
 - ・ ドメイン
 - クライアント・タイムアウト
 - キャッシュ・ポリシー
 - ドメイン・コントローラー
 - WINS サーバーの IP
 - ドメインの削除
 - ・ 認証失敗時の再試行

マップされたグループへの役割の割り当て

グループに基づく同期を使用する場合、IBM Unica Marketing にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーション・サーバーの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再起動して ください。

ブラウザーの構成

IBM Unica Marketing へのアクセスに使用する Internet Explorer のインスタンスご とに、このタスクを実行してください。これは、Windows 統合ログインで、ユーザ ーに IBM Unica Marketing ログイン画面が表示されないようにするために必要で す。

Internet Explorer で、インターネット・オプションを以下のように設定します。

- ・「ツール」>「インターネット・オプション」を選択します。
- 「セキュリティー」タブで、「レベルのカスタマイズ」をクリックします。
- 「ユーザー認証」セクションで、「現在のユーザー名とパスワードで自動的にロ グオンする」を選択します。

Windows 統合ログインの際のブラウザー関連のログインの問題のトラブルシューティングに役立つ追加情報については、以下のリンクを参照してください。

- http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q258063
- http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q174360
- http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q303650

Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト

- Marketing Platform 内の役割を割り当てられた Marketing Platform グループにマ ップされた Active Directory グループのメンバーである Active Directory ユーザ ーとして、Windows にログインします。
- 2. ブラウザーで IBM Unica Marketing URL を指示します。

IBM Unica Marketing ログイン画面が表示されなくなり、IBM Unica Marketing ユーザー・インターフェースにアクセスできるようになるはずです。ログインできない場合は、232ページの『restoreAccess ユーティリティー』を参照してください。

第 11 章 LDAP サーバーとの統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーまた は Windows Active Directory サーバーと統合するように構成することができます。

IBM Unica Marketing をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユー ザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合 は、企業の権限ポリシーを IBM Unica Marketing アプリケーションに拡張するため の柔軟なモデルを提供します。統合によって、エラー、サポート・コスト、および アプリケーションを実動環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended* Software Environments and Minimum System Requirements」という資料を参照してく ださい。

LDAP 統合機能

IBM Unica Marketing は、LDAP との統合により、このセクションで攻めする機能 を提供します。

LDAP 統合による認証

IBM Unica Marketing アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform へのクエリーを実行します。LDAP 統合が実装されている場合、 ユーザーは、有効な LDAP ユーザー名およびパスワードを認証のために IBM Unica Marketing アプリケーションに入力します。

グループまたは属性に基づくユーザーのインポート

Marketing Platform は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する定期 的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグルー プとそのユーザーをインポートします。 Marketing Platform がサーバー・データベ ースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシップは維 持されます。

LDAP グループを IBM Unica Marketing グループにマップすることによって、IBM Unica Marketing の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる LDAP グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM Unica Marketing グループに指定されている特権を引き継ぐことができます。

サブグループは役割を継承しますが、その親に割り当てられている LDAP マッピン グまたはユーザー・メンバーシップは継承しません。

IBM Unica Marketing 製品に固有のグループを LDAP サーバー内に作成するのが適 切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユーザーを制御 することが可能です。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を行います。

1. LDAP/Active Directory サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている 文字列を判別します。 2. 「LDAP ユーザー参照属性名」プロパティーを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位また は組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

3. 「LDAP 参照マップ」プロパティーを構成するとき、値の「フィルター」部分 を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ1 で判別し た文字列を使用します。

この章の残りの部分では、適切な場合に、属性に基づく同期に関する手順が示され ます。

グループに基づく同期あるいは属性に基づく同期を選択する必要があります。両方 の方式が同時にサポートされることはありません。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「LDAP 同期間隔」プロパティーを高い値に設定する必要があります。または値を 0 に設定 して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動によ る完全同期に依存する必要があります。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティション に割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグ ループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属 することができます。したがって、1 人のユーザーが複数の LDAP グループに属し ていて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM Unica Marketing グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザーに対して 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こっ てしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM Unica Marketing グ ループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされたの がどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・ マッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新 マッピングが最後にリストされています。

内部ユーザーと外部ユーザーのサポート

IBM Unica Marketing は、2 つのタイプのユーザー・アカウントおよびグループを サポートしています。

- 内部 IBM Unica Marketing セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM Unica Marketing 内部で作成されるユーザー・アカウントおよびグル ープ。これらのユーザーは Marketing Platform によって認証されます。
- 外部 サポートされる LDAP サーバーとの同期化によって IBM Unica Marketing にインポートされるユーザー・アカウントおよびグループ。この同期化 が行われるのは、IBM Unica Marketing が LDAP サーバーと統合されるよう構成 されている場合のみです。これらのユーザーは、LDAP サーバーによって認証さ れます。

例えば、顧客を LDAP サーバーに完全な企業ユーザーとして追加せずに IBM Unica Marketing アプリケーションへのアクセス権限を顧客に与えたい場合、両方の タイプのユーザーおよびグループを作成することができます。

このハイブリッド認証モデルを使用する際は、純粋な LDAP 認証モデルの場合より 多くのメンテナンスが必要になります。

同期化

IBM Unica Marketing を LDAP サーバーと統合するように構成した場合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。

この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザーおよびグ ループ (構成で指定されているもの)のみが IBM Unica Marketing に組み込まれま す。IBM Unica Marketing の「ユーザー」領域の同期化機能を使用して、すべての ユーザーおよびグループを強制的に同期化することができます。

LDAP 統合の前提条件

LDAP 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM Unica Marketing アプリケーションをインストールする必要があります。

IBM Unica Marketing と LDAP サーバーの統合方法

このセクションのトピックでは、IBM Unica Marketing と LDAP サーバーの統合方 法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM Unica Marketing 統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の 手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されてい ます。

1. 136ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバーについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 138 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 138 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般 的な構成)の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワード を持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 139 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 141 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく 同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していること を確認します。

6. 153 ページの『LDAP へのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

7. 143 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・ アクセスを実装します。

8. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

9. 154 ページの『LDAP ユーザーとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認して ください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード
 - 識別名 (DN)。追加情報については、137 ページの『識別名について』を参照 してください。
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
 - サーバーが listen するポート。
- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは uniquemember で、Windows Active Directory サーバーでは member です。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
 - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを 判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サー バーでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。ディ レクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
 - ディレクトリー・サーバーが代替ログイン属性に使用するストリングを判別し ます。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている 場合のみです。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の)属性に使われる文字列を取得します。

- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバ ーが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザーの肩書き
 - _ 部門
 - 会社
 - _ 王
 - ユーザーの電子メール
 - 住所 1
 - 勤務先電話
 - 携帯電話
 - 自宅電話

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM Unica Marketing に統合できるようにするには、 ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリ ー・サーバーの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパ スです。DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用 されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナ ーまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サービス内部でのオブジェクト自体 を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの 識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画

この情報は、(属性に基づく同期ではなく)グループに基づく同期を使用する場合にのみ適用されます。

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする 方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グ ループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グルー プにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Unica Marketing ユーザーとして作成されます。 ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にはインポート されません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動 的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納

ご使用のディレクトリー・サーバーが特定アクションを許可していない場合は、以 下の手順に示すように、ディレクトリーのユーザー名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

- 1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
- LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限 を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイド ラインに従ってください。
 - 後のステップで、「LDAP 資格情報の Unica ユーザー」構成プロパティーの値をこの IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのユーザー名に設定します。このプロパティーのデフォルト値は asm_admin で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。asm_admin アカウントを、ディレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できます。
 - この IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前でなければなりません。
- 3. 以下のガイドラインに従って、この IBM Unica Marketingユーザー・アカウント のデータ・ソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報の データ・ソース」プロパティーの値をこのデータ・ソース名に一致 させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一 致させるには、データ・ソースの名前を LDAPServer にします。
データ・ソース・ロ グイン	IBM Unica Marketing と同期化されるすべてのディレクトリー・サ ーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ 管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。 DN は以下のようにな ります。 uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com
データ・ソース・パ スワード	ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持つ管理ユーザーの パスワードを入力します。

IBM Unica Marketing での統合の構成

136ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページで ディレクトリー・サーバー構成プロパティーを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティーを設定するには

- 1. 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ ー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリーに移動します。
- 2. 以下の構成プロパティーの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してく ださい。

- LDAP サーバーのホスト名
- ・ LDAP サーバー・ポート
- ユーザー検索フィルター
- Unica に格納されている資格情報を使用
- LDAP 資格情報の Unica ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティーを設定するには

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動します。
- 2. 「LDAP プロパティー」セクションで以下の構成プロパティーの値を設定しま す。

値の設定方法については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してく ださい。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔
- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ
- LDAP プロバイダー URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 設定 Unica グループ・デリミッター
- LDAP 参照設定デリミッター
- LDAP 資格情報の Unica ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- LDAP ユーザー参照属性名

ユーザー属性マップ・プロパティーを設定するには

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動します。
- 2. 「**ユーザー属性マップ**」セクションの値を設定して、リストされている IBM Unica Marketing ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマ ップします。

グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティーは 「ユーザー・ログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory では sAMAccountName です。前の「必要な情報の 入手」の手順で検証した値を使用してください。

属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティーは、Marketing Platform がディレクトリー・サ ーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
- Marketing Platform では、電子メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の電子メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform シ ステム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる 場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザーの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの電子メール	128
住所 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM Unica グループにマップするには

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがイン ポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーに なります。 注: asm_admin ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

- 「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティ ー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | Unica グループ・マップの LDAP 参 照」カテゴリーに移動します。
- Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループ ごとに、(Unica グループ・マップの LDAP 参照) テンプレートを選択して、 「Unica グループの LDAP 参照」カテゴリーを作成します。以下のプロパティ ーを設定します。
 - 新規カテゴリー名
 - LDAP 参照マップ
 - Unica グループ

例えば、以下の値は、LDAP UnicaUsers グループを Marketing PlatformamUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP reference: cn=UnicaUsers, cn=Users, dc=myCompany, dc=com
- Unica group: amUsers; campaignUsers

同期化のテスト

構成をテストするために、(ディレクトリー・サーバー・ユーザーでなく) IBM Unica Marketing ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインして、以下を確 認してください。

•

予期したとおりにユーザーがインポートされていることを確認します。

グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致していることを確認します。

外部ユーザーの強制同期化

- 1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックしま す。
- 2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

LDAP へのセキュリティー・モードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティー・モード・プロパティーを設 定します。これによって、LDAP ユーザーが IBM Unica Marketing アプリケーショ ンにログインできるようになります。

- 1. IBM Unica Marketing にログインして、「設定」>「構成」をクリックし、「Unica | プラットフォーム | セキュリティー」に移動します。
- 2. 「ログイン方法」プロパティーの値を「LDAP」に設定します。

マップされたグループへの役割の割り当て

グループに基づく同期を使用する場合、IBM Unica Marketing にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーション・サーバーの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再起動して ください。

LDAP ユーザーとしてのログインのテスト

構成をテストするために、Marketing Platform へのアクセス権限を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループのメンバーである LDAP ユーザーとして、IBM Unica Marketing にログインします。

第 12 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合

組織では、Web アクセス制御プラットフォームを使用してセキュリティー・システ ムを統合し、それによって Web サイトへのユーザー・アクセスを調整するポータ ルを提供します。このセクションでは、Web アクセス制御プラットフォームとの IBM Unica Marketing 統合の概要を示します。

認証

ユーザーが Web アクセス制御ポータルを介してアプリケーションにアクセスする 場合、ユーザーの認証は Web アクセス制御システムによって管理されます。IBM Unica Marketing と同期化された LDAP グループのメンバーでもある Web アクセ ス制御ユーザーは、Web アクセス制御システムにログインすると、すべての IBM Unica Marketing アプリケーションに認証されます。これらのユーザーには IBM Unica Marketing アプリケーションのログイン画面は表示されません。

権限

IBM Unica Marketing アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform へのクエリーを実行します。Marketing Platform は、LDAP サー バーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、 LDAP データベ ースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform が LDAP データベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシ ップは維持されます。これらの LDAP ユーザーは Web アクセス制御システムにも 公開されているため、Web アクセス制御システムおよび IBM Unica Marketing は、整合したユーザーのセットを参照します。

ユーザーがアクセスするアプリケーション URL に対する制御を含め、追加の権限 制御も、ほとんどの Web アクセス制御システムを介して利用することができま す。

Web アクセス制御の統合図

次の図は、IBM Unica Marketing が SiteMinder および LDAP ディレクトリー・サ ーバーと連携してしてユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。



次の図は、IBM Unica Marketing が Tivoli Access Manager および LDAP ディレクトリー・サーバーと連携してユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。



SiteMinder との統合の前提条件

IBM Unica Marketing と Netegrity SiteMinder を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Web エージェントおよびポリシー・サーバーを使用するように、SiteMinder を構成する必要があります。
- IBM Unica Marketing アプリケーションに対する URL 要求でログイン名を HTTP 変数として渡すように、SiteMinder を構成する必要があります。また、 IBM Unica Marketing の「Web アクセス制御ヘッダー変数」プロパティーをこの 変数の名前 (デフォルトでは sm_user) に設定する必要があります。
- グループ・メンバーとユーザー・プロパティーを格納するためのリポジトリーとして LDAP を使用するように、SiteMinder ポリシー・サーバーを構成する必要があります。
- SiteMinder をホストする Web サーバーで提供される IBM Unica Marketing アプリケーション URL と、IBM Unica Marketing アプリケーションをホストする Java アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照していなければなりません。
- SiteMinder をホストする Web サーバーの構成では、Java アプリケーション・サ ーバーの IBM Unica Marketing アプリケーション URL に要求をリダイレクトす るように指定する必要があります。
- IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスする必要があるすべてのユー ザーに、SiteMinder を介した HTTP GET および POST 要求のために IBM Unica Marketing Web アプリケーションにアクセスできる権限を SiteMinder 内で付与す る必要があります。

特定の機能を有効にしたり、特定の IBM Unica 製品をサポートしたりするために必要な設定については、このセクションの残りの部分を参照してください。

シングル・ログアウトの有効化

ユーザーが IBM Unica Marketing アプリケーションからログアウトすると同時に SiteMinder からもログアウトできるようにするには、SiteMinder を以下のように構成します。

- SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にロ グインし、「logoffUri」プロパティーを IBM Unica Marketing ログアウト・ペ ージの URL に設定します。例: /sm_realm/unica/j_spring_security_logout。 ここで sm_realm は、SiteMinder セキュリティー・レルムです。
- 2. SiteMinder がユーザーに再度のサインインを強制してログアウト・ページが表示 されることがないように、IBM Unica Marketing ログアウト・ページの保護を解 除してください。

IBM Unica Scheduler の有効化

IBM Unica Scheduler を使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する 必要があります。

- 1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にロ グインし、「ドメイン」をクリックします。
- 2. IBM Unica のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右 クリックして「レルムのプロパティー (Properties of Realm)」を選択します。
- 3. 「**リソース・フィルター (Resource Filter**)」テキスト・ボックス で、/unica/servlet/SchedulerAPIServlet と入力します。

4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選 択します。

IBM Unica Optimize の設定構成

IBM Unica Optimize セッションをスケジュールに入れる予定の場合、以下のように SiteMinder を構成する必要があります。

- SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にロ グインし、「ドメイン」をクリックします。
- 2. IBM Unica のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右 クリックして「レルムのプロパティー (Properties of Realm)」を選択します。
- 3. 「リソース・フィルター」テキスト・ボックスで、/Campaign/optimize/ ext_runOptimizeSession.do と入力します。
- 4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選 択します。
- 5. 前述の 2 つの手順を繰り返し、「リソース・フィルター (Resource Filter)」テ キスト・ボックスに次のストリングを入力します。
 - /Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do
 - /Campaign/optimize/ext_doLogout.do

Marketing Operations の設定構成

Marketing Operations を使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する 必要があります。

- SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にロ グインし、「ドメイン」をクリックします。
- 2. IBM Unica のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右 クリックして「レルムのプロパティー (Properties of Realm)」を選択します。
- 3. 「リソース・フィルター」テキスト・ボックスで、/plan/errorPage.jsp と入力 します。
- 4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選 択します。
- 5. 前述の 2 つの手順を繰り返し、「リソース・フィルター (Resource Filter)」テ キスト・ボックスに次のストリングを入力します。
 - /plan/errorPage.jsp
 - /plan/alertsService
 - /plan/services
 - /plan/invalid_user.jsp
 - /plan/js/js messages.jsp
 - /plan/js/format_symbols.jsp
 - /unica/servlet/AJAXProxy

Tivoli Access Manager との統合の前提条件

IBM Unica Marketing と IBM Tivoli Access Manager を統合するには、以下の前提 条件を満たす必要があります。

- Tivoli Access Manager WebSEAL ジャンクションを構成して、 IBM Unica Marketing アプリケーションに対する URL 要求で、ユーザー名 (完全 DN では なく短縮) を HTTP 変数として渡す必要があります。また、IBM Unica Marketing の「Web アクセス制御ヘッダー変数」プロパティーをこのユーザー名変 数の名前 (デフォルトでは iv-user) に設定する必要があります。
- グループ・メンバーとユーザー属性を格納するためのリポジトリーとして LDAP を使用するように、Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーを構成する必要が あります。
- WebSEAL ジャンクションで定義されている IBM Unica Marketing アプリケーション URL と IBM Unica Marketing アプリケーションをホストする Java アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照しなければなりません。
- IBM Unica Marketing アプリケーションにアクセスする必要があるユーザーはすべて、適切な権限でアクセス制御リスト (ACL) に追加されたグループに属している必要があります。Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを指す WebSEAL ジャンクションを、この ACL に接続する必要があります。

注: ユーザーが IBM Unica Marketing アプリケーションからログアウトする際、 Tivoli Access Manager から自動的にログアウトすることはありません。Tivoli Access Manager からログアウトするには、IBM Unica Marketing アプリケーション からログアウトした後で、ブラウザーを閉じる必要があります。

IBM Unica Scheduler の有効化

IBM Unica Scheduler スケジューラーを使用する予定の場合は、次のようにして、 Tivoli でアクセス制御リスト (ACL) ポリシーを構成する必要があります。

- 1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
- 「ACL」>「ACL の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに 入力して、「適用」をクリックします。
- 3. 「ACL」>「ACL のリスト表示 (List ACL)」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックしま す。
- 4. 「ACL プロパティー」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリーを作成します。
 - 1 つ目のエントリーについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「Trx -全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read, and execute)」権限を付与し ます。
 - 2 つ目のエントリーについては、項目タイプを「その他 (Any-other)」に設定し、「Trx 全探索、読み取り、実行 (Trx Traverse, read and execute)」 権限を付与します。

5. ACL の「ACL 「ACL プロパティー」ページの「接続 (Attach)」タブで、保護 オブジェクトを接続します。Tivoli で完全なスケジューラー・サーブレット・パ ス (WebSEAL から始まり /servlet/SchedulerAPIServlet で終わる)を使用し てください。

IBM Unica Optimize の設定構成

IBM Unica Optimize セッションをスケジュールに入れる予定の場合、Tivoli で以下 のようにアクセス制御リスト (ACL) ポリシーを構成する必要があります。

- 1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
- 「ACL」>「ACL の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに 入力して、「適用」をクリックします。
- 「ACL」>「ACL のリスト表示 (List ACL)」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックしま す。
- 4. 「ACL プロパティー」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリーを作成します。
 - 1 つ目のエントリーについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「Trx -全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read, and execute)」権限を付与し ます。
 - 2 つ目のエントリーについては、項目タイプを「その他 (Any-other)」に設定し、「Trx 全探索、読み取り、実行 (Trx Traverse, read and execute)」 権限を付与します。
- 5. ACL の「ACL プロパティー」ページでの「接続 (Attach)」タブで、保護オブジェクトとして以下に接続します。
 - /Campaign/optimize/ext_runOptimizeSession.do
 - /Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do
 - /Campaign/optimize/ext_doLogout.do

IBM Unica Marketing と Web アクセス制御プラットフォームの統合方法

このセクションのトピックでは、IBM Unica Marketing と Web アクセス制御プラ ットフォームを統合する方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM Unica Marketing と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステッ プ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書 の別の個所に記載されています。

1. 161 ページの『LDAP 統合の実行』

「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。

2. 161 ページの『IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成』

「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティーを設定します。

3. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

4. 162 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログイン のテスト』

ユーザーとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、 および IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

LDAP 統合の実行

本書の他の個所に示されている該当項目の説明に従って、LDAP 統合に必要なすべての手順を実行してください。

IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成

次の表で説明されている方法で、「構成」ページでプロパティーの値を設定しま す。これらのプロパティーの詳細な説明については、「構成」ページのオンライ ン・ヘルプを参照してください。

プロパティー	値
Unica Platform セキュリティー ログイン方法の詳細	「Web アクセス制御」を選択します。
Unica Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 ユーザー名パターン	Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数か らユーザー・ログインを抽出するために使用する Java 正 規表現。正規表現の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があります。SiteMinder および Tivoli Access Manager に推奨される値は、¥w* です。
Unica Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 Web アクセス制御のヘッダー変数	Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数。Web アプリケーション・サーバーに送信 されます。デフォルトでは、SiteMinder は sm_user を使 用し、Tivoli Access Manager は iv-user を使用します。 Tivoli Access Manager の場合は、この値を、IBM HTTP ストリングでなく IBM 未加工ストリングのユーザー名コ ンポーネントに設定します。
Unica 全般 ナビゲーション Unica URL	http://sm_host:sm_port/sm_realm/unica に設定します。 ここで ・ sm_host は、SiteMinder インストールされているマシ ンの名前 ・ sm_port は SiteMinder のポート番号 ・ sm_realm は SiteMinder のレルム

Web アプリケーション・サーバーの再起動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再起動して ください。

Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログインの テスト

- 1. Web アクセス制御システムに同期されていて Marketing Platform へのアクセス 権限を持っている LDAP アカウントを使用して、Web アクセス制御システムに ログインします。
- 2. 以下のことを確認してください。
 - ユーザーが予期したとおりにインポートされている。
 - グループが予期したとおりにインポートされている
 - IBM グループのメンバーシップが、予期される LDAP グループへのマッピン グと一致している。
- 3. ブラウザーで Marketing Platform の URL にアクセスし、ログインします。

IBM Unica Marketing のログイン画面が表示されずに IBM Unica Marketing に アクセスできるはずです。

- 4. Web アクセス制御ソフトウェアが Netegrity SiteMinder である場合は、以下のガ イドラインに従って問題を解決してください。
 - IBM Unica Marketing のログイン画面が表示される場合は、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder に同期されていない可能性があります。
 - IBM Unica Marketing にアクセスできない場合は、SiteMinder の構成が正しいことを確認してください。SiteMinder TestTool を使用して、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder で認可されていて IBM Unica Marketing の URL へのアクセス権限を付与されているかどうかを確認することができます。
 - IBM Unica Marketing にアクセスはできるが、ナビゲーションが正常に機能しない場合、または画像が表示されない場合は、SiteMinder をホストする Web サーバーと Marketing Platform をホストする Java アプリケーション・サーバーが同一のパスを使用して Marketing Platform を参照しているかどうか確認してください。

第 13 章 IBM Unica Marketing への SSL の実装

ネットワークを介して接続する 2 つのアプリケーション間で保護する必要がある通 信はすべて、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して送信することができ ます。SSL は、次のようにしてセキュア接続を提供します。

- アプリケーションが別のアプリケーションの ID を認証できるようにする
- 秘密鍵を使用して、SSL 接続を介して転送されたデータの暗号化および暗号化解 除を行う

SSL を使用して接続する URL は、HTTP ではなく HTTPS で始まります。

プロセスが相互に通信する場合、要求を出すプロセスはクライアントとして動作 し、要求に応答するプロセスはサーバーとして動作します。完全なセキュリティー を目指すには、IBM Unica Marketing 製品とのすべての形式の通信に SSL を実装す る必要があります。

SSL は、片方向または両方向に構成できます。片方向 SSL では、サーバーはクラ イアントに対して証明書を提示する必要がありますが、クライアントはサーバーに 対して証明書を提示する必要はありません。SSL 接続のネゴシエーションを成功さ せるには、クライアントがサーバーを認証する必要があります。サーバーは、すべ てのクライアントからの接続を受け入れます。

このセクションでは、IBM Unica Marketing における片方向 SSL について説明します。

SSL 証明書について

SSL 証明書について全般的に理解するには、このセクションを読んでください。

証明書とは

証明書は、サーバーを何らかの名前付きエンティティーとして識別するデジタル署 名です。証明書は、サーバーの ID を保証する認証局 (CA) によって署名されてい るか、または自己署名されています。 Verisign や Thawte は CA の例です。自己 署名証明書とは、証明書が識別を主張するエンティティーが CS と同一である場合 の証明書です。

サーバー・サイドの証明書

SSL 通信の提供を目的としているすべてのサーバーは、アプリケーション・サーバ ーであるか Campaign リスナーなどの IBM Unica Marketing アプリケーションであ るかに関係なく、証明書を提供する必要があります。

クライアント・サイドのトラストストア

クライアントがサーバーの証明書を受け取った場合、証明書を信頼するかどうかは クライアントの判断によります。証明書がクライアントのトラストストアに存在す る場合、クライアントは自動的にサーバーの証明書を信頼します。トラストストア は、信頼できる証明書のデータベースです。

最近のブラウザーには、CA が承認した共通の証明書がロードされているトラスト ストアを備えたものがあります。大手マーチャントの Web サイトで、保護された サイトに入ったときにプロンプトが出ないのはこのためです。大手マーチャントで は、CA によって署名された証明書を使用しています。ただし、自己署名証明書を 提供する IBM アプリケーションにログインした場合は、プロンプトが表示されま す。

ブラウザーは、サーバーのホスト名が証明書の中のサブジェクト名と一致している ことを確認します (サブジェクト名は、証明書を要求するときに提供する識別名に 使用される共通名です)。この 2 つの名前が一致しない場合、ブラウザーから警告 が出ることがあります。

ブラウザーが、認識できない証明書 (例えば、自己署名証明書) で保護された IBM アプリケーションにアクセスすると、ダイアログ・ウィンドウが開き、ユーザーに 続行するかどうかを尋ねます。ユーザーがローカル側のトラストストアに証明書を インストールすることを選択すると、このプロンプトは表示されなくなります。

IBM Unica Marketing でのクライアントおよびサーバーの役割

ほとんどの IBM Unica Marketing アプリケーションは、2 つの部分から成っています。

- Web アプリケーション。Web アプリケーションは、ユーザーがブラウザー経由 でアクセスするコンポーネントです。
- サーバー (Campaign リスナーおよび Marketing Platform API サーバーなど)。このコンポーネントにはプログラムでアクセスします。

これらのアプリケーション・コンポーネントは、状況に応じて、通信時にクライア ントまたはサーバーのどちらかとして動作することができます。次の例と図では、 IBM コンポーネントが各種の通信で果たす役割を示しています。

例 1 - ブラウザーと IBM Unica Marketing Web アプリケーション の通信

ユーザーがブラウザーを介して IBM Unica Web アプリケーションと通信する場合、ブラウザーはクライアントで、IBM Unica Web アプリケーションはサーバーです。



例 2 - 1 つの IBM Unica Marketing アプリケーションのコンポー ネント間の通信

単一の IBM Unica アプリケーションの 2 つのコンポーネントも、プログラムで相 互に通信できます。例えば、Campaign Web アプリケーションが Campaign リスナ ーに要求を送信する場合、Campaign Web アプリケーションはクライアントで、リ スナーはサーバーです。



例 3 - 両方の役割を果たす IBM Unica コンポーネント

IBM Unica アプリケーション・コンポーネントは、一部の交換ではクライアントとして、別の交換ではサーバーとして通信できます。これらの関係の例を、以下の図に示します。



IBM Unica Marketing の SSL について

これまで見てきたように、多くの IBM Unica アプリケーション・コンポーネント は、通常の操作時にはサーバーとしてもクライアントとしても動作することができ ます。また、一部のIBM Unica コンポーネントは Java で書かれ、一部は C++ で 書かれています。これらの事項が、使用する証明書の形式を決定します。 CA から 1 回限り購入の自己署名証明書を入手して作成する場合は、形式を指定します。

IBM Unica アプリケーションは、IBM Unica サーバー・コンポーネントへの片方向 SSL の要求を行うクライアントとして機能する場合は、トラストストアを必要とし ないことに注意してください。

サーバーとして動作する Java コンポーネント

JSSE SSL の実装を使用して Java で作成され、アプリケーション・サーバーに配置 された IBM Unica アプリケーションの場合は、ご使用の証明書を使用するようにア プリケーション・サーバーを構成する必要があります。証明書は JKS 形式で格納す る必要があります。 アプリケーション・サーバーは、追加構成を必要としないデフォルトの証明書を提 供しています。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書は、単にアプリ ケーション・サーバーで SSL ポートを有効にするだけで、アプリケーション・サー バーの何らかの追加構成を実行しない場合に使用されるものです。

アプリケーション・サーバーによって提供されているデフォルトの証明書以外の証 明書を使用する場合は、追加構成が必要です。この構成については、170ページの 『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』で説明しています。

サーバーとして動作する C++ コンポーネント

Campaign リスナー、Optimize サーバー・コンポーネント、PredictiveInsight サーバー・コンポーネント、および Attribution Modeler リスナーは C++ で書かれており、PEM 形式で格納されている証明書を必要とします。

クライアントとして動作する Java コンポーネント

Java で書かれており、アプリケーション・サーバーに配置されている IBM Unica アプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。構成を簡単にす るために、クライアントとして動作する IBM Unica Java アプリケーションは、片 方向 SSL 通信時にサーバーを認証しません。ただし、暗号化は行われます。

クライアントとして動作する C/C++ コンポーネント

C/C++ で書かれており、OpenSSL の実装を使用しているアプリケーションについて は、トラストストアは必要ありません。Campaign リスナー、Optimize サーバー・ コンポーネント、PredictiveInsight サーバー・コンポーネント、Attribution Modeler リスナー、および NetInsight は、このカテゴリーに該当します。

証明書の数

サーバーとして動作している IBM Unica コンポーネントをホストするマシンごと に、別の証明書を使用するのが理想です。

複数の証明書を使用しない場合、正しい形式 (Java コンポーネントには JKS、C++ コンポーネントには PEM) であれば、サーバーとして動作するすべての IBM Unica コンポーネントに対して同じ証明書を使用できます。すべてのアプリケーションに 対して一つの証明書を使用する場合、ユーザーが初めて IBM Unica アプリケーショ ンにアクセスするときに、ブラウザーによって証明書を受け入れるかどうかを確認 するプロンプトが表示されます。

本章の例は、Java および C++ IBM Unica コンポーネントで使用する自己署名証明 書ファイルの作成方法を示しています。

IBM Unica Marketing における SSL の実装方法

このセクションのトピックでは、IBM Unica Marketing における SSL の実装方法に ついて説明します。

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM Unica Marketing での SSL の構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の 手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されてい ます。

1. 『証明書の取得または作成』

IBM Unica およびご使用のアプリケーション・サーバーで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 170 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』

IBM Unica アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サー バーで SSL ポートを有効にします。アプリケーション・サーバーのデフォルト の証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 170 ページの『SSL 用の IBM Unica Marketing の構成』

IBM Unica Marketing で構成プロパティーを設定します。

4. 177 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM Unica Marketing アプリケーションにログインします。

証明書の取得または作成

証明書を取得または作成するには、いくつかの方法があります。

- アプリケーション・サーバーが提供するデフォルトの証明書を使用する。
- このセクションで説明されている方法で、自己署名証明書を作成する。
- このセクションで説明されている方法で、認証局 (CA) から証明書を取得する。

自己署名証明書の作成方法

IBM Unica Marketing で使用する自己署名証明書ファイルを作成するには、このセクションの手順を実行してください。

- 『C++ IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには』
- 168 ページの『Java IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するに は』

C++ IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するには

Campaign リスナーは、OpenSSL ライブラリーを使用して SSL を実装します。 OpenSSL ディストリビューションには、証明書ファイルを作成できる openssl と 呼ばれるコマンド行プログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法 の詳細については、OpenSSL の資料を参照するか、プログラムの実行時に -help と入力してヘルプにアクセスしてください。

C++ IBM Unica Marketing コンポーネントを SSL 用に設定するときに使用できる 自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。

1. コマンド行で openssl を実行します。

このプログラムと関連の構成ファイル openssl.cnf は、Campaign のインストー ル先の bin ディレクトリーにあります。これは、OpenSSL ディストリビューシ ョンでも使用できます。

2. 鍵を生成します。以下のコマンド例では、key.pem という名前の鍵を作成しま す。

genrsa -out key.pem 1024

3. 要求を生成します。

以下のコマンド例では、request.pem という名前の要求を作成します。

req -new -key key.pem -out request.pem

ツールを使用すると一連の質問が表示されます。ピリオド(.)を入力すると、フィールドはブランクのままになります。自己署名証明書については、少なくとも 共通名を入力する必要があります。

Campaign/bin ディレクトリーから openssl ツールを使用している場合は、同じ ディレクトリーの openssl.cnf ファイルを指す値の -config パラメーターを追 加します。次に例を示します。

req -config openssl.cnf -new -key key.pem -out request.pem

4. 証明書を生成します。

以下のコマンド例では、request.pem および key.pem ファイルを使用して、 certificate.pem という名前の証明書を、作成日から 10,000 日を有効期限に指 定して作成します。

req -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000 -out certificate.pem

Campaign/bin ディレクトリーから openssl ツールを使用している場合は、同じ ディレクトリーの openssl.cnf ファイルを指す値の -config パラメーターを追 加します。次に例を示します。

req -config openssl.cnf -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000
-out certificate.pem

5. テキスト・エディターを使用して、鍵および証明書のコンテンツを、拡張子 .pem の新規ファイルにコピーします。

Java IBM Unica Marketing コンポーネントの証明書を作成するに は

Java で書かれた IBM Unica Marketing Web アプリケーション・コンポーネント は、JSSE ライブラリーを使用します。Sun JDK には、証明書ファイルを作成でき る keytool と呼ばれるプログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方 法の詳細については、Java の資料を参照するか、プログラムの実行時に -help と入 力してヘルプにアクセスしてください。

SSL 用の Java IBM Unica Marketing コンポーネントを設定するときに使用できる 自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。 1. コマンド行で keytool を実行します。

このプログラムは、Sun Java JDK の bin ディレクトリーに入っています。

2. ID 鍵ストアを生成します。

以下のコマンド例では、UnicaClientIdentity.jks という名前の鍵ストアを作成 します。

keytool -genkey -alias UnicaClientIdentity -keyalg RSA -keystore UnicaClientIdentity.jks -keypass clientPwd -validity 1000 -dname "CN=hostName, 0=myCompany" -storepass clientPwd

次のことに注意してください。

- -storepass の値 (例では clientPwd) をメモします。これは、アプリケーション・サーバーの構成時に必要になります。
- -alias の値 (例では UnicaClientIdentity) をメモします。これは、残りの手順で必要になります。
- 識別名の共通名 (CN) は、IBM Unica Marketing へのアクセスに使用するホスト名と同じでなければなりません。例えば、IBM Unica Marketing の URL がhttps://hostName.companyDomain.com:7002/unica/jsp の場合、CN はhostName.companyDomain.com です。識別名の CN 部分が唯一の必須部分です。組織 (O) および組織単位 (OU) は必須ではありません。
- WebSphere 6.0 の場合は、鍵ストア・パスワードと鍵パスワードは同じでなけ ればなりません。
- 3. 作成した ID 鍵ストアに基づいて、証明書を生成します。

以下のコマンド例では、UnicaCertificate.cer という名前の証明書を作成しま す。

keytool-export -keystore UnicaClientIdentity.jks -storepass clientPwd
-alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer

-alias の値は、ID 鍵ストア (例では UnicaClientIdentity) に設定する別名で す。

4. 作成した証明書に基づいて、トラステッド鍵ストアを生成します。

以下のコマンド例では、UnicaTrust.jks という名前のトラステッド鍵ストアを 作成します。

keytool -import -alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer -keystore UnicaTrust.jks -storepass trustPwd

次のことに注意してください。

- プロンプトが出たら Y と入力して、証明書を承認します。
- -alias の値は、ID 鍵ストア (例では UnicaClientIdentity) に設定する別名 です。
- -storepass の値 (例では trustPwd) をメモします。これは、アプリケーション・サーバーの構成時に必要になります。

署名証明書の取得方法

OpenSSL および keytool プログラムを使用して要求を作成し、その要求を CA に 送信して署名付き証明書を作成することができます。または、CA が全面的に提供 する署名付き証明書を取得することができます。次のことに注意してください。

- IBM Unica Marketing アプリケーションが C++ で作成されている場合は、PEM 形式の証明書を取得する。
- その他の IBM Unica Marketing アプリケーションについてはすべて、JKS 形式の 証明書を取得する。

署名付き証明書の取得方法に関する手順については、認証局の資料を参照してくだ さい。

SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成

IBM Unica Marketing アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーショ ン・サーバーで、採用を決定した証明書を使用するように Web アプリケーショ ン・サーバーを構成します。これらの手順の実行について詳しくは、アプリケーシ ョン・サーバーの資料を参照してください。

SSL 用の IBM Unica Marketing の構成

SSL を使用するように IBM Unica Marketing アプリケーションを構成するには、い くつかの構成プロパティーを設定する必要があります。このセクションに示す手順 から、お客様のインストール環境に適した IBM Unica Marketing 製品と SSL を使 用して保護したい通信を選んで使用してください。

セキュア接続で IBM Unica Marketing インストールにアクセスする場合、また次の 手順で説明されている方法でアプリケーション用のナビゲーション・プロパティー を設定する場合は、URL に https およびセキュア・ポート番号を使用する必要が あります。デフォルトの SSL ポートは、WebLogic の場合は 7002、WebSphere の 場合は 8002 です。

- 171 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 171 ページの『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するに は』
- 172ページの『データ・フィルターを備えた Marketing Platform で SSL を構成 するには』
- 172 ページの『Interaction History で SSL を構成するには』
- 173 ページの『Attribution Modeler で SSL を構成するには』
- 173 ページの『Marketing Operations で SSL を構成するには』
- 174 ページの『Campaign で SSL を構成するには』>
- 175 ページの『Optimize で SSL を構成するには』
- 176 ページの『Interact で SSL を構成するには』
- 176 ページの『Distributed Marketing で SSL を構成するには』
- 176ページの『レポートで SSL を構成するには』
- 176 ページの『PredictiveInsight で SSL を構成するには』
• 177 ページの『NetInsight で SSL を構成するには』

Marketing Platform で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

2. 「全般 | ナビゲーション | Unica URL」プロパティーの値を Marketing Platform URL に設定します。

例: https://host.domain:SSL_port/unica

ここで、

- *host* は Marketing Platform がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *domain* は IBM Unica Marketing 製品がインストールされているお客様の企業 ドメインです。
- *SSL_Port* は Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

- HTTP ポートおよび HTTPS ポートを設定するインストール済みの IBM 製品ご とに、「ナビゲーション」カテゴリーでプロパティーを見つけます。プロパティ ーの名前は製品によって異なる場合がありますが、その目的は明確なはずです。 各製品について、製品が配置されているアプリケーション・サーバーの HTTP ポートおよび HTTPS ポートにこれらの値を設定します。
- 4. LDAP 統合を実装してある場合は、『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行してください。
- 5. データ・フィルター機能を使用する予定の場合は、172ページの『データ・フィ ルターを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている 手順を実行してください。

LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには

- 1. 『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
- 2. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

3. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリーに移動し、「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティーの値を true に設定します。

この設定により、Marketing Platform は、ユーザーのログイン時に SSL を使用 して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

- 4. 「Unica | プラットフォーム | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動し、以下の値を設定します。
 - 「LDAP プロバイダー URL」プロパティーの値を 1daps:// host.domain:SSL_Port に設定します。

ここで、

- host は、LDAP サーバーの名前または IP アドレスです。
- domain は、LDAP サーバーのドメインです。
- SSL_Port は、LDAP サーバーの SSL ポートです。

例: ldaps://LDAPMachine.myCompany.com:636

URL が 1daps で始まることに注意してください。

LDAP サーバーのデフォルトの SSL ポートは、636 です。

• 「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティーの値を true に設定します。

この設定により、Marketing Platform は、LDAP サーバーと同期する際に SSL を使用して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

データ・フィルターを備えた Marketing Platform で SSL を構成す るには

Marketing Platform が SSL で配置されており、データ・フィルター機能を使用する 予定の場合は、この手順を実行して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを 追加する必要があります。

- 1. 171 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている 手順を実行します (まだ実行していない場合)。
- 2. テキスト・エディターで datafilteringScriptTool.bat ファイルを開きます。

このファイルは、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクト リーにあります。

3. 以下の太字で示されている変更を追加します。

この例では、印刷用に改行が追加されています。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
-Djavax.net.ssl.trustStore="path_to_your_jks file"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=your_trust_store_password
```

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" %SSL_OPTIONS% com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*

path_to_your_jks file および *your_trust_store_password* を、お客様が使用 する値に置き換えてください。

4. ファイルを保存して閉じます。

Interaction History で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

- 「Interaction History | ナビゲーション | HTTPS ポート」プロパティーの値 を、Interaction History が配置されるアプリケーション・サーバーの HTTPS ポ ートに設定します。
- 「Interaction History | ナビゲーション | サーバー URL」プロパティーの値 を Interaction History URL に設定します。

例: https://host.domain:SSL_port/unica

ここで、

- *host*は、Interaction Historyがインストールされたマシンの名前または IP アドレスです。
- *domain* は IBM Unica Marketing 製品がインストールされているお客様の企業 ドメインです。
- SSL_Port は Interaction History が配置されているアプリケーション・サーバ ーの SSL ポートです。

URL の中の https に注意してください。

Attribution Modeler で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

- 「Attribution Modeler | ナビゲーション | httpsPort」プロパティーの値を、 Attribution Modeler が配置されるアプリケーション・サーバーの HTTPS ポート に設定します。
- 3. 「Attribution Modeler | ナビゲーション | serverURL」プロパティーを調べ て、URL で https が使用されていることを確認します。
- 「Attribution Modeler | AMListener | serverPort」プロパティーの値が、適切な SSL 用ポートであることを確認します。
- 5. 「Attribution Modeler | AMListener | useSSL」プロパティーの値を TRUE に 設定します。

Marketing Operations で SSL を構成するには

1. IBM Unica Marketing にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

 「Marketing Operations | ナビゲーション | serverURL」プロパティーの値を Marketing Operations Web アプリケーションの URL に設定します。

例: serverURL=https://host:SSL_port/plan

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

3. テキスト・エディターまたは XML エディターで plan_config.xml ファイルを 開きます。

plan_config.xml ファイルは、Marketing Operations のインストール先の conf ディレクトリーにあります。

4. 「UAPInitParam notifyPlanBaseURL」プロパティーを SSL 接続用に設定しま す。

例: <UAPInitParam notifyPlanBaseURL="https://host:SSL_Port/plan/ affiniumplan.jsp"/>

ここで、

- *host*は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

 Adobe Acrobat Online Markup 機能を使用可能にして、HTTPS を介して Marketing Operations で作動させるには、「markupServerURL」プロパティーを SSL 接続用に設定します。

例: <UAPInitParam markupServerURL="https://host:SSLport/plan/services/ collabService?WSDL">

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

6. plan_config.xml ファイルを保存して閉じます。

Campaign で SSL を構成するには

1. テキスト・エディターまたは XML エディターで config.xml ファイルを開きま す。

config.xml ファイルは、Campaign のインストール先の conf ディレクトリーに あります。

 unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。 (IBM Unica が提供するファイル unicaclient.pem は、security ディレクトリーにあります。以下に例を示します。

unicaServerSSLFile=C:/Unica/security/certificateFile.pem

- 3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
- 4. Marketing Platform にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

5. 「キャンペーン | unicaACListener | useSSL」プロパティーの値を yes に設定 します。 6. Web アプリケーションを SSL ポートに配置した場合は、「キャンペーン | ナ ビゲーション | serverURL」プロパティーの値を Web アプリケーション URL に設定します。例えば、次のようになります。

serverURL=https://host:SSL_port/Campaign

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前また は IP アドレスです。
- SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

 操作モニターを使用している場合は、「キャンペーン | モニター | serverURL」プロパティーの値を、HTTPS を使用するように設定して、SSL 用に 構成してください。例えば、次のようになります。

serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前また は IP アドレスです。
- SSL Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

Optimize で SSL を構成するには

- Optimize インストール・ディレクトリーの conf ディレクトリーから検出される config.xml ファイルを、テキスト・エディターまたは XML エディターで開き ます。
- unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。(IBM が提供しているファイル unicaclient.pem は、Optimize のインストール先の security ディレクトリーにあります。
- 3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
- 4. 「キャンペーン | unicaACOListener | useSSL」構成プロパティーの値を yes に設定します。
- Optimize コマンド行ツール ACOOptAdmin を使用している場合は、 ACOOptAdmin.bat ファイルまたは ACOOptAdmin.sh ファイルを編集して、以下の 太字のテキストを追加して SSL 証明書を認識させる必要があります。

この例では印刷用に改行が追加されています。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
-Djavax.net.ssl.trustStore=
"path_to_your_jks_file/name_of_your_jks_file"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=password_in_your_jks_file
"$JAVA_HOME/bin/java" %SSL_OPTIONS%"
com.unicacorp.Campaign.optimize.tools.optadmin.OptAdmin "$@"*
```

インストール先の unicaClientIdentity.jks への正しいパスと、jks 証明書の正 しい名前およびパスワードを使用してください。-D オプションはスペースの後 に入力します。

Interact で SSL を構成するには

重要: Interact のいずれかの部分を SSL を使用して通信するように構成すると、パフォーマンス・コストが発生します。IBM では、Interact で SSL を使用するように構成しないことをお勧めします。

Interact 用の SSL 通信を構成するには、最大で 3 つの方法があります。

• 設計環境をクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

Interact ランタイム・サーバーを参照する URL で https を使用します。例えば、 「Campaign |パーティション | パーティション[n] | Interact | ServerGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL] | instanceURL」を https://myserver.domain.com:7007/interact に設定します。

• ランタイム環境をクライアントにし、Marketing Platform をサーバーにする。

詳しくは、171ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』を参照してください。

• 顧客接点をクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

getInstance メソッドを使用して HTTPS URL を指定します。ロード・バランサ ーを使用している場合は、ロード・バランサーも同様に SSL 用に構成すること が必要な場合があります。

Distributed Marketing で SSL を構成するには

SSL を使用するように Campaign を構成した後は、Distributed Marketing を SSL 用 に構成するための追加構成は必要ありません。

レポートで SSL を構成するには

- 1. Cognos の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Cognos を構成しま す。
- 2. Apache の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Apache を構成しま す。
- Cognos の資料で説明されている方法で、IBM Unica Marketing を指定して Cognos の証明書を登録します。
- Cognos の資料で説明されている方法で、Cognos を指定して IBM Unica Marketing 証明書を登録します。

PredictiveInsight で SSL を構成するには

- 1. Enterprise バージョンの PredictiveInsight があり、PredictiveInsight リスナーが SSL を使用して通信するようにしたい場合は、次のようにします。
 - a. PredictiveInsight がインストール済みの環境で、テキスト・エディターまたは XML エディターを使用して Unica/config.xml ファイルを開きます。
 - b. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。例: unicaServerSSLFile=C:/Unica/certificateFile.pem。ここで、 certificateFile.pem は、PredictiveInsight リスナーに使用させたい証明書を 収容しているファイルの名前です。
 - c. config.xml ファイルを保存して閉じます。

2. テキスト・エディターで model_server.conf ファイルを開きます。

このファイルは、PredictiveInsight のインストール先の config ディレクトリー にあります。

- 3. 以下の値を設定します。
 - Server.UseSSL=Yes
 - Server.SSLURL=https://host:SSL_Port/context-root。ここで、
 - host は、PredictiveInsight Web アプリケーションがインストールされてい るマシンの名前または IP アドレスです。
 - SSL_Port は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL ポートです。
 - context-root は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL コンテキ スト・ルートです。

URL が https で始まることに注意してください。

NetInsight で SSL を構成するには

NetInsight は、要求を一切受け入れません。これは常に、HTTP および HTTPS 通信 でクライアントとして機能し、分析される Web サイトのページ・タイトルを解決 します。SSL を使用しているサイトのページ・タイトルを解決する必要がある場 合、確認する必要があるのは、分析対象の Web サイトまたはクラスター・サーバ ーのプロファイル・オプションに入力された URL が正しいこと、および URL に HTTPS プロトコルが含まれていることだけです。

NetInsight は、Marketing Platform と通信しません。

SSL 構成の検証

- 1. 個々の IBM Unica Marketing アプリケーションを開始します。
- 2. IBM Unica Marketing にログインして、インストール済みの個々の IBM Unica Marketing Web アプリケーションにアクセスします。
- Interact ランタイム・サーバーの場合のみ、URL https://host:port/interact/ jsp/admin.jsp を使用して接続をテストします。
- 4. 自己署名証明書を使用している場合は、ブラウザーで 各 IBM Unica Marketing サーバー・コンポーネントを指示して、受信した証明書の情報が期待どおりのも のであることを確認します。

例えば、Campaign リスナーが campaignHost という名前のホストのポート 4664 で実行中の場合は、ブラウザーで https://campaignHost:4664 にアクセスしま す。

ご使用のブラウザーによって、証明書を受け入れるかどうかを尋ねるウィンドウ が開きます。また、証明書の詳細を表示することができます。

SSL に関する有用なリンク

- OpenSSL の資料 http://www.openssl.org/docs/
- keytool の資料 http://download.oracle.com/javase/1.4.2/docs/tooldocs/windows/ keytool.html

• 認証局のリスト - http://www.dmoz.org/Computers/Security/Public_Key_Infrastructure/ PKIX/Tools_and_Services/Third_Party_Certificate_Authorities/

第 14 章 データ・フィルターのセットアップ

さまざまな IBM Unica Marketing アプリケーションで、データ・フィルター操作を 異なる方法で使用します。個々の製品の資料を参照して、製品でデータ・フィルタ ー操作を使用するかどうか、また使用する場合にはその製品でのデータ・フィルタ ー操作方法の詳細を確認してください。

一般に、IBM Unica アプリケーションがデータ・フィルタリングを使用する場合、 IBM Unica 管理者は、構成可能なデータ・フィルターに基づいて IBM Unica 製品 のデータ・アクセス制限を指定することができます。データ・フィルターを使用す ると、IBM Unica ユーザーが IBM Unica アプリケーションで表示して操作できる 顧客データを制限することができます。データ・フィルターで保護するデータは、 指定する顧客テーブル内のフィールドで定義されるデータ・セットと考えることが できます。

データ・フィルターのセットアップについて

Marketing Platform には、IBM Unica Marketing 管理者がデータ・フィルターをセットアップする際に使用できる以下の機能があります。

- データ・フィルターを定義するユーティリティー
- ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当て、割り当て済みのデー タ・フィルターを表示するユーザー・インターフェース

ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルターの関連付け

個別ユーザーまたはユーザー・グループのデータ・アクセスを制限するには、それ らのユーザーまたはユーザー・グループをデータ・フィルターに割り当てます。す べての IBM Unica Marketing ユーザーおよびグループは、データ・フィルターへの 割り当てに使用可能です。複数のユーザーおよびグループを単一のデータ・フィル ターに割り当てることも、1 つのユーザーまたはユーザー・グループを複数のデー タ・フィルターに割り当てることもできます。

注: グループが、そのサブグループのデータ・フィルター割り当てを獲得すること はありません。

複数のデータ・フィルターに割り当てられたユーザーは、それらのデータ・フィル ターのすべてで許可されるレコードをすべて表示することができます。

データ・フィルターの概念

データ・フィルターの設定方法を理解するには、データ・フィルター機能、データ ベース一般、そして (Campaign ファミリーのアプリケーションで使用するデータ・ フィルターをセットアップする場合は)特に Campaign で使用されるある程度の概 念について知っておく必要があります。

 データ構成 - データ構成により一連のデータ・フィルターをグループ化します。
 関連したデータを保護するすべてのデータ・フィルターは、同じデータ構成に関 連付けられます。

- オーディエンス オーディエンス・レベルとして Campaign に指定された顧客テ ーブルの中の1 つ以上のフィールド。代表的なオーディエンス・レベルは、世帯 および個人です。
- 物理フィールド名 データベース・テーブルのフィールドの物理名は、データベース・クライアントでそのテーブルを直接表示したときに表示される名前です。
 データ・フィルターを使用中の場合、顧客データベースのクエリー時に物理名が使用されます。
- ・論理フィールド名-データ・フィルターを定義する際に、物理フィールドへの論理名を割り当てます。Campaignファミリーのアプリケーションに使用されるデータ・フィルターをセットアップする場合は、これらの論理名はCampaignのフィールドに割り当てられた名前と同じものでなければなりません。この名前は、ユーティリティーがデータ・フィルターを生成するときに使用します。

データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定

IBM Unica Marketing 提供のユーティリティー datafilteringScriptTool は、XML を処理して、Marketing Platform システム・テーブルにデータ・フィルターを作成し ます。このユーティリティーは、XML の書き方に応じて、自動生成と手動指定の 2 つの方法で使用することができます。

自動生成

datafilteringScriptTool ユーティリティーでは、JDBC を使用してアクセスでき るデータベース・テーブルまたはビューから、データ・フィルターを自動的に生成 することができます。このユーティリティーは、XML に指定したフィールド内の値 の固有の組み合わせに基づき、データ・フィルター (固有の組み合わせごとに 1 つ のデータ・フィルター) を自動的に作成します。

この方式については、191ページの『プロセス・チェックリストの構成』で説明します。

大量のデータ・フィルターを作成する必要がある場合は、この方式を使用すると便 利です。

手動指定

datafilteringScriptTool ユーティリティーでは、指定するフィールド値に基づき、データ・フィルターを 1 つずつ作成することができます。

この方式については、181ページの『構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)』で説明します。

フィールド値の固有の組み合わせをすべて組み込むわけではないデータ・フィルタ ーのセットを作成する場合は、この方式を使用すると便利です。

手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法

このセクションのトピックでは、手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロ セスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個 所に記載されています。

1. 『データ・フィルター基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 182ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーショ ンでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集 してください。

3. 193 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファ イルを作成します。

4. 182 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptToool ユーティリティーを実行します。このユーティリテ ィーは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

5. 183 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用 して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その 後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている 必須手順をすべて実行してください。

データ・フィルター基準の計画 (手動生成)

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィ ルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、IBM Unica Marketing ユーザーが割り当てられている地理的な販売テリト リーに基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客デー タベースの「地域」フィールドが販売テリトリーに関連付けられている場合、この フィールドをベースにしてデータ・フィルターのグループを設定するという選択が できます。

フィールド制約という概念に注意する必要があります。手動指定を使用してデー タ・フィルターを作成する方法を計画する際は、この概念を理解しておく必要があ ります。フィールド制約は、データ・フィルターを指定するために使用されるフィ ールド/値のペアです。顧客レコードのクエリーを実行する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してフィールド制約を定義する必要があります。

この例では、「地域」フィールドに入る可能性があるのは以下の値です。アジア、 ヨーロッパ、中東、北アメリカ、および南アメリカ。データ・フィルターのフィー ルド制約を使用するときに、これらの値を使用します。顧客テーブルの「地域」フ ィールドの値をフィールド制約として使用して、販売テリトリーのそれぞれについ て異なるデータ・フィルターをセットアップできます。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM Unica Marketing ユーザー は、割り当てられたデータ・フィルターによって表示される販売テリトリー内に入 る顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

必要な情報の入手 (手動指定)

製品の Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションで使用するデー タ・フィルターを定義している場合は、データ・フィルターを定義する XML に指 定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と 一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- フィールド制約に使用するフィールド内の有限のデータ・セット。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを 使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前 を入手してください。
 - オーディエンス・フィールド
 - フィールド制約に使用する予定のフィールド。

データ・フィルターを指定する XML の作成 (手動指定)

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイ ルを作成します。次のステップで、システム・テーブルにこれらの指定を取り込む ユーティリティーを実行します。

データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティーを実行します。このユーティリティーは、XML を使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティーの使用について詳しくは、 226 ページの 『datafilteringScriptTool ユーティリティー』を参照してください。

注: データ・フィルターを削除する必要がある場合は、237ページの『データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法 で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザーおよびグループにすでに割り当てられているデータ・フィルターを表示することもできます。

データ・フィルター XML のリファレンス (手動指定)

このセクションでは、datafilteringScriptTool を使用してデータ・フィルターを 手動で指定して生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素につい て説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論 理フィールド、データ・テーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があ ります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリー内で固有のものでなければな りません。

ー部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テ ーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場 合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成 する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解 する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は id です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は logicalFieldId です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクト に割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータ・フィルターをグループ化するため に使用するデータ構成を定義します。関連データ・フィルターのセットごとに、デ ータ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システム・テーブル
id	このデータ構成に割り当てる固有	該当なし
	ID。	
name	このデータ・フィルター・グルー	テーブル: df_config
	ノに刮り当てる石削。	フィールド: config_name

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用する顧客 テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を 作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システム・テーブル
id	この論理フィールドに割り当てる	該当なし
	固有 ID。	
name	このフィールドまたはオーディエ	テーブル: df_logical_field
	ンスの論理名。Campaign ファミリ ーのアプリケーションで使用する	フィールド: logical_name
	場合は、Campaign で使用されてい	
	るフィールド名またはオーディエ	
	ンス名と同じでなければなりませ	
	h.	
type	顧客テーブル内のこのフィールド	テーブル: df_logical_field
	のデータ・タイプ。指定可能な値	フィールド·type
	は以下のとおりです。	y y y y y y y y y y
	• java.lang.String	
	• java.lang.Long	
	• java.lang.Double	
	• java.lang.Boolean	
	 java.lang.Date (日付形式は「月/ 日/年」で、月、日、年はすべて 数字で表記します。) 	

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システム・テーブル
id	このテーブルに割り当てる固有	該当なし
	ID。	
name	保護する顧客テーブルの物理名。	テーブル: df_table
	データベースが大文字小文字を区 別する場合は、データベースで使 用されている大文字小文字と一致 する必要があります。	フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システム・テーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理	テーブル: df_table_field
	名。データベースが大文字小文字 を区別する場合は、データベース で使用されている大文字小文字と 一致する必要があります。	フィールド: physical_name
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField 力 テゴリー内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データ・フィルターを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
configId	このフィルターを関連付ける	該当なし
	AddDataConfiguration	
	dataConfiguration カテゴリー内のデ	
	ータ構成の ID。	
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用するフィ ールドのデータを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields	該当なし
	logicalFields LogicalField 力	
	テゴリー内の論理フィールドの	
	ID。	
expression	このフィルターに割り当てられる	テーブル: df_field_constraint
	ユーザーのデータを取り出すとき	
	に WHERE 節で使用されるフィール	フィールド: expression
	ド内のデータの 1 項目。データベ	
	ースが大文字小文字を区別する場	
	合は、データベースで使用されて	
	いる大文字小文字と一致する必要	
	があります。	

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリーの製品で使用されるオーディエ ンス・レベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
id	このオーディエンスに割り当てる 固有 ID。	該当なし
name	Campaign で指定されているオーデ ィエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとして使用される顧客 テーブルのフィールド (1 つ以上)を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields	該当なし
	logicalFields LogicalField 力	
	テゴリー内の論理フィールドの	
	ID。Campaign ファミリーのアプリ	
	ケーションを使用している場合	
	は、Campaign で使用されているも	
	のと同じ論理名でなければなりま	
	せん。	
fieldOrder	将来使用される予定です。 値を 0	該当なし
	に設定してください。	

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとテーブルのペアをデ ータ構成と関連付けます。オーディエンス・フィールドごとに関連付けを作成しま す。

要素	説明	システム・テーブル
audienceId	この関連付けで使用されるオーデ ィエンスの ID。AddAudience	該当なし
	audience カテゴリー内の ID 値で なけわばなりません	
tableId	この関連付けで使用されるテーブ	該当なし
	ルの ID。AddDataTable	
	dataTable カテゴリー内の ID 値	
	でなければなりません。テーブル	
	は、audienceID 要素に指定された	
	オーディエンスに含まれているも	
	のでなければなりません。オーデ	
	ィエンスが複数のテーブルに含ま	
	れている場合は、複数の関連付け	
	を作成してください。	

要素	説明	システム・テーブル
configId	この関連付けで使用されるデータ	該当なし
	構成の ID。AddDataConfiguration	
	dataConfiguration カテゴリー	
	内の ID 値でなければなりませ	
	h.	

例: データ・フィルターの手動指定

Jim は、販売区域に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義 されています。

情報の入手

そこで、データ・フィルター用のフィールド制限を指定するために必要なフィール ドをテリトリー・テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

フィールド	フィールド		
(物理名)	(Campaign での名前)	データ	データ・タイプ
cust_region	CustomerRegion	• アフリカ	java.lang.String
		• アフリカ	
		・ アジア	
		• ヨーロッパ	
		 中東 	
		• 北米	
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

表18. テリトリー・テーブルのフィールド

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。 彼は、テリトリー・テーブルに 2 つのオーデ ィエンス・フィールドが含まれることをメモに記録します。hh_id フィールドは世帯 オーディエンスに対応します。テリトリー・テーブルの indiv_id フィールドは、個 人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびフィールド制限フィールドに 1 つの論理フ ィールドを作成する筆があるので、Jim には合計 3 つの論理フィールドが必要であ ることがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Territory という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができまし。

XML の作成

```
Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報に基づく値は、太字
で示されています。
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
<name>SeedData</name>
<operations>
<!-- 関連データ・フィルターをグループ化するデータ構成を作成する -->
<ExecuteBatch>
<name>DataFilters</name>
<operations>
<AddDataConfiguration>
<dataConfiguration>
<id>1</id>
<name>Territory</name>
</dataConfiguration>
</AddDataConfiguration>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!-- データ・フィルターを定義するために使用する論理フィールドを追加する>
<AddLogicalFields>
<logicalFields>
<LogicalField>
<id>1</id>
<name>CustomerRegion</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>2</id>
<name>HouseholdID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>3</id>
<name>IndividualID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
</logicalFields>
</AddLogicalFields>
<!-- テリトリー・フィールドの制限を追加する -->
<AddDataFilters>
<dataFilters>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>1</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Africa</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>2</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Asia</expression>
```

```
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>3</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Europe</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>4</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Middle East</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>5</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>North America</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
</dataFilters>
</AddDataFilters>
<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Territory</name>
<fields>
<TableField>
<name>cust_region</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh id</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv id</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!--オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>
<operations>
<AddAudience>
<audience>
```

```
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>
<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>
```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに regionDataFilters.xml という名前 を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の tools/bin ディレクトリー に保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、datafilteringScriptTool ユーテ ィリティーを使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加し ます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform.での管理者権限を持つアカウントを使用して IBM Unica Marketing にログインします。

グループがすでに IBM Unica Marketing にセットアップされ、地域別にユーザーが 割り当てられていることはわかっています。 そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターからのフィールド制限がデータ・フィルターの拡張データで使用可能であることを確認します。そして、Africa を検索基準として使用して、データ・フィルターの検索を実行します。彼が Africa 地域にセットアップしたデータ・フィルターが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Africa ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、 Africa の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入 れるために、IBM Unica Marketing にセットアップ済みです。Africa グループが検 索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンを クリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検索を続行します。

自動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法

このセクションのトピックでは、自動指定によるデータ・フィルターのセットアッ プ方法について説明します。

プロセス・チェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロ セスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個 所に記載されています。

1. 192 ページの『データ・フィルター基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 193 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバーを使用して、デー タ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を 提供します。

3. 193 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーショ ンでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集 してください。

4. 193 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファ イルを作成します。

5. 182 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptToool ユーティリティーを実行します。このユーティリテ ィーは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。 6. 183 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用 して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その 後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている 必須手順をすべて実行してください。

データ・フィルター基準の計画 (自動生成)

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィ ルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、顧客が住んでいる国、都市、および州に基づいて、顧客データへのアクセ スを制限したい場合があります。顧客データベースに国、都市、および州の各フィ ールドがある場合、これらのフィールドをベースにしてデータ・フィルターのグル ープを設定するという選択ができます。そして、データ・フィルターを指定すると きにこれらの値を使用します。

自動生成を使用してデータ・フィルターを作成する場合は、以下の概念に注意する 必要があります。

- プロファイル・フィールド データ・フィルター生成ユーティリティーが値の固 有の組み合わせを探すときに考慮に入れる値を持つフィールド。ユーティリティ ーは、値の固有の組み合わせごとにデータ・フィルターを作成します。データ・ フィルターが IBM Unica アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レ コードを照会する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価か どうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対し てプロファイル・フィールドを定義する必要があります。
- 固定フィールド データ・フィルター生成ユーティリティーがプロファイル・フィールド値の固有の組み合わせのクエリーを実行する際に、検索対象になるレコードを制限するオプション・フィールド。指定する値は、生成された各データ・フィルターにも組み込まれます。データ・フィルターが IBM Unica アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードを照会する際に、この値がWHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対して固定フィールドを定義する必要があります。

この例では、国について固定フィールドを作成し、都市と州についてプロファイ ル・フィールドを作成することになるでしょう。データ・フィルター生成ユーティ リティーは、これらのフィールドで検出した値の固有の組み合わせごとに、デー タ・フィルターを作成します。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM Unica ユーザーは、割り当て られたデータ・フィルターによって表示される国、都市、および州に住む顧客に属 しているデータのみを表示して処理することができます。 お使いの顧客テーブルに、データ・フィルターを作成したいと思う値がすべては含 まれていないこともあります。例えば、すべての国と州に顧客がいるとは限らない が、将来に備えてすべての国と州に対してデータ・フィルターを作成しておきたい という場合があります。その場合、すべての国と州を組み込むテーブルを参照し、 XML 仕様の GenerateDataFilters セクションでそのテーブルを使用します。ユーティ リティーを使用してデータ・フィルターを作成し終わったら、この「ダミー」テー ブルを破棄することができます。

ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得

データ・フィルター生成ユーティリティー (datafilteringScriptTool) を使用して データ・フィルターを自動的に生成する場合は、JDBC ドライバーが必要です。

- タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバーを使用して、デー タ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を 提供します。
- 2. Marketing Platform がインストールされているマシンにドライバーを配置しま す。
- 3. クラス名とパスをメモしておいてください。

必要な情報の入手 (自動生成)

注: 製品の Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションで使用するデ ータ・フィルターを定義している場合は、データ・フィルターを定義する XML に 指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前 と一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

- データ・フィルターを定義する際に使用するテーブルが含まれているデータベースについて、データベースのタイプ、名前または IP アドレス、およびポート。
- データベースへの接続に使用できるデータベース資格情報 (ユーザー名およびパ スワード)。
- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- プロファイル・フィールドおよび固定フィールドに使用するフィールドの物理名 (固定フィールドはオプションです)。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを 使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前 を入手してください。
 - オーディエンス・フィールド。
 - 固定フィールドおよびプロファイル・フィールドに使用する予定のフィールド。

データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイ ルを作成します。次のステップで、システム・テーブルにこれらの指定を取り込む ユーティリティーを実行します。

データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティーを実行します。このユーティリティー は、XML を使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加しま す。

このユーティリティーの使用について詳しくは、226ページの 『datafilteringScriptTool ユーティリティー』を参照してください。

注: データ・フィルターを削除する必要がある場合は、237ページの『データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法 で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用し て、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果か ら項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザーおよびグルー プにすでに割り当てられているデータ・フィルターを表示することもできます。

データ・フィルター XML のリファレンス (自動生成)

このセクションでは、datafilteringScriptTool を使用してデータ・フィルターを 自動的に生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素について説明 します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論 理フィールド、データ・テーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があ ります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリー内で固有のものでなければな りません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テ ーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場 合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成 する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解 する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は id です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は logicalFieldId です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクト に割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータ・フィルターをグループ化するため に使用するデータ構成を定義します。関連データ・フィルターのセットごとに、デ ータ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システム・テーブル
id	このデータ構成に割り当てる固有	該当なし
	ID。	
name	このデータ・フィルター・グループに割り当てる名前	テーブル: df_config
		フィールド: config_name

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用する顧客 テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を 作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システム・テーブル
id	この論理フィールドに割り当てる	該当なし
	」 回有 ID。	
name	このフィールドまたはオーディエ	テーブル: df_logical_field
	ンスの論理名。Campaign ファミリ ーのアプリケーションで使用する	フィールド: logical_name
	場合は、Campaign で使用されてい	
	るフィールド名またはオーディエ	
	ンス名と同じでなければなりませ	
	h.	
type	顧客テーブル内のこのフィールド	テーブル: df_logical_field
	のデータ・タイプ。指定可能な値	
	は以下のとおりです。	JA -JV F: type
	• java.lang.String	
	• java.lang.Long	
	• java.lang.Double	
	• java.lang.Boolean	
	 java.lang.Date (日付形式は「月/ 日/年」で、月、日、年はすべて 数字で表記します。) 	

GenerateDataFilters

要素	説明	システム・テーブル
tableName	データ・フィルターを生成する 元となるテーブルの物理名。デ ータベースが大文字小文字を区 別する場合は、データベースで 使用されている大文字小文字と 一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name
configurationName	このデータ・フィルターのセッ トを関連付ける AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリー 内のデータ構成の名前。	該当なし
jdbcUrl	データ・フィルターのベースと なるテーブルが含まれている顧 客データベースに対する URL 参照。	該当なし
jdbcUser	顧客データベースへのアクセス 権限を持つアカウントのユーザ 一名。	該当なし
jdbcPassword	顧客データベースへのアクセス 権限を持つアカウントのパスワ ード。	該当なし
jdbcDriverClass	顧客データベースへの接続を提 供する JDBC ドライバーの名 前。	該当なし
jdbcDriverClassPath string	JDBC ドライバーのパス。	該当なし

この要素グループを使用して、データ・フィルターを生成します。

GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField

この要素グループを使用して、データ・フィルター生成ユーティリティーでデー タ・フィルターのセットを定義する値の固有の組み合わせを探す際に対象レコード を制限する、オプションのフィールドおよび値を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
expression	データ・フィルターを作成して	テーブル: df_field_constraint
	このフィルターに割り当てられ	
	たデータを取り出すときに	フィールド: expression
	WHERE 節で使用されるフィー	
	ルド内のデータの 1 項目。デー	
	タベースが大文字小文字を区別	
	する場合は、データベースで使	
	用されている大文字小文字と一	
	致する必要があります。	

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldName	AddLogicalFields logicalFields	テーブル: df_logical_field
	LogicalField カテゴリーの中の論	
	理フィールドの名前。この名前	フィールド: logical_name
	は、Marketing Platform のデー	
	タ・フィルター・ユーザー・イ	
	ンターフェースの拡張検索フィ	
	ールドにラベルとして表示され	
	ます。	
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベ	該当なし
	ースが大文字小文字を区別する	
	場合は、データベースで使用さ	
	れている大文字小文字と一致す	
	る必要があります。	

GenerateDataFilters | profileField | ProfileField

この要素グループを使用して、データ・フィルターのセットを定義するために使用 する値の固有の組み合わせが入っているフィールドを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldName	AddLogicalFields logicalFields LogicalField	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
	カテコリー内の論理フィールドの 名前。	
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベー スが大文字小文字を区別する場合 は、データベースで使用されてい	該当なし
	る大文字小文字と一致する必要が あります。	

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システム・テーブル
id	このテーブルに割り当てる固有	該当なし
	ID。	
name	保護する顧客テーブルの物理名。 データベースが大文字小文字を区 別する場合は、データベースで使 用されている大文字小文字と一致 する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システム・テーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理	テーブル: df_table_field
	名。データベースが大文字小文字 を区別する場合は、データベース で使用されている大文字小文字と 一致する必要があります。	フィールド: physical_name
logicalFieldId	AddLogicalFields logicalFields LogicalField カ テゴリー内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリーの製品で使用されるオーディエ ンス・レベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
id	このオーディエンスに割り当てる 固有 ID。	該当なし
name	Campaign で指定されているオーデ ィエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとして使用される顧客 テーブルのフィールド (1 つ以上)を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields	該当なし
	logicalFields LogicalField 力	
	テゴリー内の論理フィールドの	
	ID。Campaign ファミリーのアプリ	
	ケーションを使用している場合	
	は、Campaign で使用されているも	
	のと同じ論理名でなければなりま	
	せん。	
field0rder	将来使用される予定です。 値を 0	該当なし
	に設定してください。	

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとテーブルのペアをデ ータ構成と関連付けます。オーディエンス・フィールドごとに関連付けを作成しま す。

要素	説明	システム・テーブル
audienceId	この関連付けで使用されるオーデ ィエンスの ID。AddAudience audience カテゴリー内の ID 値で なければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用されるテーブ ルの ID。AddDataTable dataTable カテゴリー内の ID 値 でなければなりません。テーブル は、audienceID 要素に指定された オーディエンスに含まれているも のでなければなりません。オーデ ィエンスが複数のテーブルに含ま れている場合は、複数の関連付け を作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用されるデータ 構成の ID。AddDataConfiguration dataConfiguration カテゴリー 内の ID 値でなければなりませ ん。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データ・フィルターを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
configId	このフィルターを関連付ける	該当なし
	AddDataConfiguration	
	dataConfiguration カテゴリー内のデ	
	ータ構成の ID。	
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用するフィールドのデータを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	AddLogicalFields	該当なし
	logicalFields LogicalField 力	
	ID.	

要素	説明	システム・テーブル
expression	このフィルターに割り当てられる	テーブル: df_field_constraint
	ユーザーのデータを取り出すとき	
	に WHERE 節で使用されるフィール	フィールド: expression
	ド内のデータの 1 項目。データベ	
	ースが大文字小文字を区別する場	
	合は、データベースで使用されて	
	いる大文字小文字と一致する必要	
	があります。	

例: データ・フィルターのセットの自動生成

Jim は、国、都市、および州に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要 があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義 されています。

JDBC ドライバーの入手

Jim は、会社の顧客データベースが Microsoft SQL サーバーであることを知ってい ます。彼は、適切なタイプ 4 のドライバーをダウンロードして、Marketing Platform がインストールされているマシンに配置し、ドライバーの名前とパスをメモに記録 します。

- JDBC ドライバーのクラス名 com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- JDBC ドライバーのパス C:¥tools¥Java¥MsJdbc¥sqljdbc.jar

情報の入手

Jim は、顧客データベースの名前、ホスト、およびポートの情報と、そのデータベースに接続するために必要な資格情報を入手します。

- データベース名 Customers
- データベース・ホスト名 companyHost
- データベース・ポート 1433
- ユーザー名 sa
- パスワード myPassword

Jim が会社の顧客データベースのデータを調べたところ、データ・フィルターを作成したいすべての国、都市、および州に顧客が存在していることがわかりました。 そこで、データ・フィルター用の固定フィールドおよびプロファイル・フィールド を指定するために必要なフィールドを地理テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表19. 地理テーブルのフィールド

フィールド	フィールド		
(物理名)	(Campaign での名前)	データ	データ・タイプ
country	Country	USAFranceBritain	java.lang.String
city	City	個別の都市の有限セ ット	java.lang.String
state	State	個別の州 (または国に 応じて他の方法で名 前が付けられた地域) の有限セット	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。 彼は、地理テーブルに 2 つのオーディエン ス・フィールドが含まれることをメモに記録します。

- hh id フィールド は、世帯オーディエンスに対応します。
- 地理テーブルの indiv id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびそれぞれの固定フィールドとプロファイル・フィールドに 1 つずつの論理フィールドを作成する必要があるので、Jim には合計 5 つの論理フィールドが必要なことがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Geographic という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができまし。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報または使用を決定した情報に基づく値は、 太字で示されています。

```
<?rml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
<name>SeedData</name>
<operations>
<!-- 関連データ・フィルターをグループ化するデータ構成を作成する -->
<ExecuteBatch>
<name>DataFilters</name>
<operations>
<AddDataConfiguration>
<dataConfiguration>
<id>1</id>
```

```
</dataConfiguration>
</AddDataConfiguration>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!-- データ・フィルターを定義するために使用する論理フィールドを追加する>
<AddLogicalFields>
<logicalFields>
<LogicalField>
<id>1</id>
<name>Country</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>2</id>
<name>City</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>3</id>
<name>State</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>4</id>
<name>HouseholdID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>5</id>
<name>IndividualID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
</logicalFields>
</AddLogicalFields>
<!-- データ・フィルターの生成に必要な情報を提供する -->
<GenerateDataFilters>
<!-- データ・フィルターの定義の元となる値の組み合わせが固有かどうか調べるために
テーブルのスキャンを指定する-->
<tableName>Geographic</tableName>
<!-- 生成されたデータ・フィルターを関連付けるデータ構成を識別する -->
<configurationName>Geographic</configurationName>
<!-- データ・ソース接続情報を指定する-->
<jdbcUrl>jdbc:sqlserver://localhost:1433;databaseName=Customers</jdbcUrl>
<jdbcUser>sa</jdbcUser>
<jdbcPassword>myPassword</jdbcPassword>
<jdbcDriverClass>
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver</jdbcDriverClass>
<jdbcDriverClassPath>
<string>C:¥tools¥Java¥MsJdbc¥sqljdbc.jar</string>
</jdbcDriverClassPath>
<!-- 固定フィールドを指定する -->
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>USA</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>France</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
```

```
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>Britain</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
<!-- プロファイル・フィールドを指定する -->
<profileFields>
<ProfileField>
<logicalFieldName>State</logicalFieldName>
<physicalFieldName>state</physicalFieldName>
</ProfileField>
<ProfileField>
<logicalFieldName>City</logicalFieldName>
<physicalFieldName>city</physicalFieldName>
</ProfileField>
</profileFields>
</GenerateDataFilters>
<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Geographic</name>
<fields>
<TableField>
<name>country</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>city</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>state</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh_id</name>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv id</name>
<logicalFieldId>5</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!--オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>
<operations>
<AddAudience>
<audience>
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
```

```
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>
<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>5</logicalFieldId>
<field0rder>0</field0rder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>
<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>
```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに geographicDataFilters.xml という 名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の tools/bin ディレクト リーに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、 datafilteringScriptTool ユーティリティーを使用してデータ・フィルター・シス テム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティーは、多数のデータ・フィルターを作成します。各データ・フィルターで基準となるのは、ユーティリティーが固定フィールド地を含むレコード をデータベースにクエリーして取得する国(固定フィールド)、および都市と州の固 有の組み合わせです。固定フィールドとして指定された国ごとに、都市と州の固有 の組み合わせがすべて使用されます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform での管理者権限を持つアカウントを使用して Marketing Platform にログインします。

グループがすでに Marketing Platform に設定され、都市別にユーザーが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターの 国、都市、州の値がデータ・フィルターの拡張検索で使用可能であることを確認し ます。そして、合衆国の都市の1つ Boston を検索基準として使用して、データ・ フィルターの検索を実行します。Boston のデータ・フィルターが検索結果に表示さ れます。

次に、Jim は Boston ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、 Boston の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入 れるために、Marketing Platform にセットアップ済みです。Boston グループが検索 結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンを クリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検 索を続行します。

初期セット作成後のデータ・フィルターの追加方法

初期セットを作成した後で、データ・フィルターの追加を続けることができます。 例えば、国とその都市/州の組み合わせに基づくデータ・フィルターのセットを作成 し、後になって郵便番号に基づく別のセットを作成する場合があります。

追加のデータ・フィルターの XML は、以下のいずれかの方法で取得できます。

- 元の XML ファイルを変更して新規フィルターを追加する。 dataFilteringScriptTool ユーティリティーを使用してデータベースにデータを 入れた場合、Marketing Platform では新規データ・フィルターのみが作成されま す。
- XML ファイルを作成して新規データ・フィルターを指定する。 dataFilteringScriptTool ユーティリティーを使用してデータベースにデータを 入れた場合、既存のデータ・フィルターは削除されません。

XML を作成したら、データ・フィルター・テーブルにデータを追加して、本書の説 明に従ってユーザーおよびグループを割り当ててください。
第 15 章 データ・フィルターの管理

IBM Unica Marketing 管理者は、構成可能なデータ・フィルターに基づいて IBM Unica 製品のデータ・アクセス制限を指定することができます。データ・フィルタ ーを使用すると、IBM Unica ユーザーが IBM Unica アプリケーションで表示して 操作できる顧客データを制限することができます。

「設定」>「データ・フィルター」 ページでフィルターを処理するには、以下に該 当していなければなりません。

- データ・フィルターは、179ページの『第 14 章 データ・フィルターのセットアップ』で説明されている方法で、Marketing Platform システム・テーブルにセットアップする必要があります。
- 「データ・フィルターの管理 (Administer Data Filters)」ページの権限を持つユ ーザーとしてログインする必要があります。デフォルトでは、「AdminRole」役 割がこの権限を持っています。

ユーザーおよびグループ割り当てによってデータ・アクセスを制限する

個別ユーザーまたはユーザー・グループのデータ・アクセスを制限するには、それ らのユーザーまたはユーザー・グループをデータ・フィルターに割り当てます。 IBM Unica Marketing に存在しているすべてのユーザーおよびグループは、デー タ・フィルターへの割り当てに使用できます。複数のユーザーおよびグループを単 ーのデータ・フィルターに割り当てることも、1 つのユーザーまたはグループを複 数のデータ・フィルターに割り当てることもできます。

注: グループが、その親グループのデータ・フィルター割り当てを獲得することは ありません。

拡張検索について

IBM Unica Marketing には、ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り 当てるためのユーザー・インターフェースがあります。このユーザー・インターフ ェースは、拡張検索機能を使用してユーザー、グループ、およびデータ・フィルタ ーのリストを取得します。これらのリストからユーザーおよびグループを選択し、 選択したデータ・フィルターをそれらのユーザーやグループに割り当てることがで きます。

データ・フィルター検索

データ・フィルターの検索機能は、データ・フィルターがセットアップされたとき に指定された基準と同じ検索基準を提供します。例えば、販売区域に関係する以下 のデータが含まれているフィールドに基づく一連のデータ・フィルターがあるとし ます。

- アフリカ
- アジア

- ヨーロッパ
- 中東
- 北米

データ・フィルター拡張検索では、このデータがドロップダウン・リストに表示されるので、ユーザーはデータ・フィルターの検索時にそのリンクから選択すること ができます。

ユーザーおよびグループ検索

ユーザーおよびグループの拡張検索機能にはテキスト・フィールドがあり、そこに テキストを入力して一致するものを検索することができます。

ユーザーおよびグループ拡張検索を含むタブが初めてロードされたときは、「ユー ザー」と「グループ」の両方のテキスト・フィールドにワイルドカード (*) が表示 されています。このワイルドカードを使用して検索を実行すると、すべてのレコー ドが返されます。

ワイルドカードを削除し、他のテキストを入力せずにフィールドをブランクのまま にすると、レコードは何も返されません。例えば、「ユーザー」テキスト・フィー ルドをブランクにし、「グループ」テキスト・フィールドにアスタリスクを入れて 検索を実行すると、その結果としてグループのみがリストされます。

「ビューの割り当て (View Assignments)」タブで、「ユーザー」と「グループ」の 両テキスト・フィールドをブランクのままにすると、選択されているデータ・フィ ルター基準に関係なく、レコードは何も返されません。

フィールドにテキストを入力すると、テキスト・フィールドに入力した文字に入力 した順序で一致する検索が実行されます。例えば、「North America」という名前の グループを検索するには、この名前に出てくる文字または文字グループを(出てく る順序で)入力します。「north」または「h」を入力した場合は「North America」を 取得できる可能性がありますが、「htron」と入力した場合は取得できません。

この検索では大/小文字を区別しません。つまり、「North」は「north」と同じです。

データ・フィルター割り当ての管理

このセクションでは、データ・フィルターを構成する方法、およびデータ・フィル ター割り当てを管理する方法について説明します。

割り当て済みデータ・フィルターを表示するには

 Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして Marketing Platform に ログインし、「データのフィルタリング (Data Filtering)」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

- 2. 「割り当て済みデータ・フィルターの表示 (View Assigned Data Filters)」をク リックします。
- 3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、検索結果を取得しま す。

基準を満たすデータ・フィルターのリストが表示されます。

データ・フィルターにユーザーおよびグループを割り当てるには

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして Marketing Platform に ログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

- 2. 「ユーザーまたはグループの割り当て」をクリックします。
- 3. データ・フィルターの拡張検索を実行して、データ・フィルターのリストを取得 します。
- 4. ユーザーまたはグループ (あるいはその両方) の拡張検索を実行して、ユーザー およびグループのリストを取得します。
- 5. 検索結果のリストからデータ・フィルターと、それに割り当てるユーザーおよび グループを選択します。
- 6. 「割り当て」をクリックします。

選択したユーザーおよびグループが、選択したデータ・フィルターに割り当てられ ます。

データ・フィルター割り当てを削除するには

 Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして Marketing Platform に ログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

- 2. 「割り当て済みデータ・フィルターの表示 (View Assigned Data Filters)」をク リックします。
- 3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、選択に使用できる検索 結果を取得します。
- 4. 検索結果のリストから、割り当てを削除するデータ・フィルターを選択します。
- 5. 「割り当て解除」をクリックします。

選択した割り当てが削除されます。データ・フィルター自体は削除されません。

第 16 章 IBM Unica Marketing Platform のログ

システム・ログを使用して、使用状況を追跡し、発生する可能性のあるセキュリティー上の問題を検出することができます。システム・ログは、エラー動作や悪意の ある振る舞いが発生したときに検出するのに役立ちます。

システム・ログについて

Marketing Platform アプリケーションが誤動作をした場合、または進入が発生したか またはその試みがあったと考えられる場合は、まずシステム・ログを確認する必要 があります。

システム・ログには、以下の情報が入っています。

- Marketing Platform の構成情報およびすべてのエラー情報とデバッグ情報
- Marketing Platform サーバーで発生した重要イベント (要求、権限認可、取り消し、および失敗)の記録

システム・ログに表示される構成設定について

システム・ログの最初の部分には、起動時に uasm.conf からシステムに読み込まれ た構成設定が表示されます。ログ・ファイル内の構成設定を表示するのは、IBM Unica Marketing のパスワード、Marketing Platform の認証データ・ストア、 Marketing Platform の Web サーバー・ルート、システム・ログ、およびシステムの 監査証跡のプロパティーをセグメントする設定を確認する簡単な方法です。

注: システムは、システム・ログ・ファイルに書き込もうとした際に問題が発生す ると、ファイルの代わりに標準出力 (コマンド行)に書き込みます。

システム・ログ項目の形式

システム・ログ項目の形式は以下のとおりです。

タイム・スタンプ | イベント重大度レベル | メッセージ

- タイム・スタンプ イベントが発生した時刻。
- イベント重大度レベル- イベントのロギング・レベル。
- メッセージ イベントの説明。項目がサーバーに対する要求の場合、メッセージ には一般に、その要求によって呼び出される機能が含まれています。レスポン ス・エントリーには要求の結果が記録されます。

システム・ログの構成

システム・ログを構成するには log4j.properties ファイルを使用します。デフォ ルトでは、このファイルは、Marketing Platform のインストール先の下位の conf デ ィレクトリーに入っています。このファイルに対する変更は、ファイルの格納後 30 秒以内に有効になります。

デフォルトのシステム・ログ設定

デフォルトでは、システム・ログは以下のように構成されます。

- ログ・ファイル名: platform.log
- ログ・ディレクトリー: Unica/Platform/logs
- ログ・レベル: WARN
- バックアップの数:1
- ログ・ファイルの最大サイズ: 10MB

次のことに注意してください。

- バックアップの数またはログ・ファイルのサイズを大きくする場合は、ログの格納先のマシンに十分なメモリーがあることを確認してください。
- ロギング・レベルをデフォルト値より高くすると、パフォーマンスに影響が出る 可能性があります。

システム・ログのロギング・レベルについて

システム・ログで使用可能なロギング・レベルは、以下のとおりです (昇順に示してあります)。

- ERROR
- WARN
- INFO
- DEBUG
- TRACE

高位のレベルには、低位のレベルの情報がすべて含まれています。例えば、レベル を DEBUG に設定すると、DEBUG、INFO、WARN、および ERROR トレースが含まれま す。

ロギング・レベルを DEBUG に設定した場合、応答メッセージには、Marketing Platform データ・ストアに対して実行されたすべての SQL クエリーが含まれます。

Marketing Platform システム全体のロギング・レベルの設定

ファイルの「Examples」セクションの目的の行をアンコメントすることによって、 Marketing Platform のすべてのコンポーネントのロギング・レベルを変更することが できます。行をアンコメントするには、その行の先頭にある # 文字を削除します。 この変更を行う場合、以前のロギング・レベルを指定した行の先頭に、必ず # 記号 を追加してください。

Marketing Platform コンポーネントのロギング・レベルの設定

Marketing Platform の特定のコンポーネントのシステム・ログで、ロギング・レベル を設定することができます。これらのコンポーネントには以下のものがあります。

- ローカライズ
- ユーザーおよびグループ処理
- データ・マイグレーション

- LDAP 統合
- 認証 (サーバー・サイド処理)
- 「構成」ページ
- データベース・アクセス
- 各種のサード・パーティー・ライブラリー (例: ibatis)

デフォルトでは、コンポーネント・レベルのロギングはオフになっています。特定 のモジュールをデバッグするには、log4j.properties ファイルで、そのモジュール の各行の先頭にある # 文字を削除します。

log4j に関する詳細の参照先

log4j に関する追加情報は以下の方法で見つけることができます。

- log4j.properties ファイルの中のコメントを参照する。
- http://logging.apache.org/log4j/docs/documentation.html を参照する。

第 17 章 プロセス・チェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロ セスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個 所に記載されています。

1. 192 ページの『データ・フィルター基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 193 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバーを使用して、デー タ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を 提供します。

3. 193 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーショ ンでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集 してください。

4. 193 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファ イルを作成します。

5. 182 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptToool ユーティリティーを実行します。このユーティリテ ィーは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

6. 183 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用 して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その 後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロ セスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個 所に記載されています。

1. 181ページの『データ・フィルター基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 182 ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーショ ンでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集 してください。 3. 193 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファ イルを作成します。

4. 182 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptToool ユーティリティーを実行します。このユーティリテ ィーは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

5. 183 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM Unica Marketing データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用 して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その 後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM Unica Marketing の統合は、マルチステップ・ プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別 の個所に記載されています。

1. 136ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバーについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 138 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、Active Directory グループのマップ先と なるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

 138 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の 格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成)の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 139 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 141ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づ く同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期している ことを確認します。

142 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 142 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

8. 143 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

9. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

10. 143 ページの『Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインできること を確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM Unica Marketing 統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の 手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されてい ます。

1. 136ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバーについて、IBM Unica Marketing との統合に必要な情報を入手します。

2. 138ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 138 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般 的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワード を持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 139 ページの『IBM Unica Marketing での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 141 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく 同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していること を確認します。

6. 153 ページの『LDAP へのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

7. 143ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・ アクセスを実装します。

8. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

9. 154 ページの『LDAP ユーザーとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインできることを確認して ください。

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM Unica Marketing と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステッ プ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書 の別の個所に記載されています。

1. 161 ページの『LDAP 統合の実行』

「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。

2. 161 ページの『IBM Unica Marketing での Web アクセス制御統合の構成』

「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティーを設定します。

3. 143 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再起動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

4. 162 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM Unica Marketing ログイン のテスト』

ユーザーとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、 および IBM Unica Marketing にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM Unica Marketing での SSL の構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の 手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されてい ます。

1. 167 ページの『証明書の取得または作成』

IBM Unica およびご使用のアプリケーション・サーバーで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 170 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』

IBM Unica アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで SSL ポートを有効にします。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 170 ページの『SSL 用の IBM Unica Marketing の構成』

IBM Unica Marketing で構成プロパティーを設定します。

4. 177 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM Unica Marketing アプリケーションにログインします。

第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティーお よび SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform の概要を示します。これには、すべてのユ ーティリティーに当てはまり、個別のユーティリティーの説明では扱われていない 詳細が含まれます。

ユーティリティーがある場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを備えています。

- 222 ページの『configTool ユーティリティー』 製品登録を含む構成設定のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 226ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティー』 データ・フィルター を作成します。
- 228 ページの『encryptPasswords ユーティリティー』 パスワードの暗号化と格 納を行います。
- 229 ページの『partitionTool ユーティリティー』 パーティションのデータベー ス項目を作成します。
- 232ページの『populateDb ユーティリティー』 Marketing Platform データベー スにデータを設定します。
- 232 ページの『restoreAccess ユーティリティー』 platformAdminRole の役割を 持つユーザーを復元します。
- 234ページの『scheduler_console_client ユーティリティー』 トリガーを listen するように構成されている IBM Unica スケジューラー・ジョブをリストまたは 開始します。

Marketing Platform ユーティリティーの実行の前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーを実行する際の前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、ユーティリティーがあるディレクトリー (デフォ ルトでは、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリー) から実行してください。
- UNIX では、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを 実行するユーザー・アカウントと同じアカウントで、ユーティリティーを実行す ることをお勧めします。別のユーザー・アカウントを使用してユーティリティー を実行する場合は、そのユーザー・アカウントで platform.log ファイルに書き 込めるように、このファイルのファイルのアクセス許可を調整してください。権

限を調整しない場合、ユーティリティーはログ・ファイルに書き込むことができ ず、ツールが正常に機能していても、何らかのエラー・メッセージが表示される 場合があります。

接続の問題のトラブルシューティング

Marketing Platform ユーティリティーがタスクを正常に完了できない場合、以下の情報を参考にして問題を解決することができます。

- encryptPasswords を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、 Marketing Platform システム・テーブルと対話します。これらのユーティリティー は、システム・テーブルのデータベースに接続するために、Marketing Platform の インストール時に提供された情報を使用してインストーラーが設定する、以下の 接続情報を使用します。
 - JDBC ドライバー名
 - JDBC の接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
 - データ・ソース・ログイン
 - データ・ソース・パスワード (暗号化済み)

この情報は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリー にある jdbc.properties ファイルに保管されます。このファイルの値を調べ、そ れが環境に対して正しい値であることを確認します。

加えて、Marketing Platform ユーティリティーは、JAVA_HOME 環境変数に依存します。これは Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトまたはコマンド・ラインで設定されます。

この変数は Marketing Platform インストーラーによって setenv スクリプトで自 動的に設定されるはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合は JAVA_HOME 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。 JDK は、Sun バージョンでなければなりません (WebLogic で利用可能な JRockit JDK などは使用できません)。

設定するときは常に、JAVA_HOME 環境変数は 1.6 バージョンの Sun JRE を指す 必要があります。

正しくない JRE を JAVA_HOME 環境変数が指す場合、IBM Unica インストーラー を実行する前に JAVA_HOME 変数を設定解除する必要があります。そのための手順 は以下のとおりです。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、

set JAVA_HOME= と入力し、右辺を空のまま Return キーを押します。

- *NIX タイプのシステム:端末で、

export JAVA HOME= と入力し、右辺を空のまま Return キーを押します。

これは、実行する Marketing Platform ユーティリティーを起動する前に行います。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字はエスケープす る必要があります。ご使用のオペレーティング・システムの予約文字のリストと、 それらをエスケープする方法に関する資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーの標準オプション

以下のオプションは、すべての Marketing Platform ユーティリティーで使用可能です。

-l logLevel

コンソールで表示するログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、 medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルトのロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語によっ て決まります。ISO 639-1 および ISO 3166 に従って、ICU ロケール ID を使用し てロケールを指定してください。

-h

簡潔な使用状況メッセージをコンソールに表示します。

-m

このユーティリティーのマニュアル・ページをコンソールに表示します。

- V

より詳細な実行情報をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティーの実行

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加構成をせずに Marketing Platform ユーティリティーを実行することができます。しかし、ネットワ ーク上の別のマシンからユーティリティーを実行したい場合があります。この手順 では、これを行う場合に必要なステップを説明します。

追加マシンに Marketing Platform ユーティリティーをセットア ップするには

- 1. この手順を実行するマシンが、次の前提条件を満たしていることを確認してくだ さい。
 - 正しい JDBC ドライバーがマシン上に存在しているか、またはマシンからア クセス可能でなければなりません。
 - マシンは、 Marketing Platform システム・テーブルへのネットワーク・アクセ ス権限を持っている必要があります。

- Java[™] ランタイム環境がマシンにインストールされているか、またはマシンか らアクセス可能でなければなりません。
- 2. Marketing Platform システム・テーブルに関する以下の情報を収集します。
 - システム上の 1 つ以上の JDBC ドライバー・ファイルの完全修飾パス。
 - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

インストーラーでのデフォルト値は、インストーラーが IBM Unica インスト ール・ディレクトリー下に置いたバージョン 1.5 の JRE へのパスです。この デフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。

- データベース・タイプ
- データベース・ホスト
- データベース・ポート
- データベース名/システム ID
- データベース・ユーザー名
- データベース・パスワード
- 3. IBM インストーラーを実行して、Marketing Platform をインストールします。

Marketing Platform システム・テーブルに関して収集したデータベース接続情報 を入力します。IBM インストーラーの使用経験があまりない場合は、Campaign または Marketing Operations のインストール・ガイドを参照してください。

Marketing Platform Web アプリケーションを配置する必要はありません。

リファレンス: Marketing Platform ユーティリティー

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティーについて、機能の詳細、 構文、および例とともに説明します。

configTool ユーティリティー

「構成」ページのプロパティーと値は、Marketing Platform システム・テーブルに格 納されます。configTool ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テー ブルとの間で構成設定をインポートおよびエクスポートします。

configTool を使用する状況

以下の理由がある場合に、configTool を使用すると便利です。

- Campaign で提供されるパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。これは、その後「構成」ページを使用して変更または複製 (またはその両方を)することができます。
- 製品インストーラーで自動的にデータベースにプロパティーを追加できないときに、IBM Unica Marketing 製品を登録する (製品の構成プロパティーをインポートする)場合。
- XML バージョンの構成設定をバックアップのためにエクスポートする場合、または IBM Unica Marketing の別のインストール先にインポートする場合。

「カテゴリーの削除」リンクのないカテゴリーを削除する場合。これを行うには、configToolを使用して構成をエクスポートし、そのカテゴリーを作成するXMLを手動で削除した後、configToolを使用して、編集済みのXMLをインポートします。

重要: このユーティリティーは、設定プロパティーとその値が含まれている、 Marketing Platform システム・テーブル・データベースにある usm_configuration テーブルと usm_configuration_values テーブルを変更します。最良の結果を得る ために、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、または configTool を使用して既存の構成をエクスポートし、その結果ファイルをバックア ップしてください。そうしておけば、configTool を使用してインポートする際にエ ラーが発生した場合でも、構成を復元する方法が得られます。

有効な製品名

このセクションで後述するように、configTool ユーティリティーでは、製品を登録 および登録抹消するコマンドのパラメーターとして製品名を使用します。IBM Unica Marketing のリリース 8.0.0 では、多くの製品名が変更されています。ただし、 configTool で認識される名前は変更されていません。configTool で使用する場合 に有効な製品名を、製品の現在名と共に以下のリストに示します。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Optimize	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
NetInsight	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

configTool	-d -p "elementPath" [-o]
configTool	-i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
configTool	-x -p "elementPath" -f exportFile
configTool	<pre>-r productName -f registrationFile [-o]</pre>
configTool	-u productName

コマンド

-d -p "elementPath"

構成プロパティー階層のパスを指定して、構成プロパティーとその設定を削除しま す。

要素パスでは、カテゴリーとプロパティーの内部名を使用する必要があります。こ れらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリーまたはプロ パティーを選択して、右ペインの括弧内に表示されるパスを見てください。構成プ ロパティー階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲み ます。

次のことに注意してください。

- このコマンドを使用することで、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリーおよびプロパティーのみを削除することができます。アプリケーション全体を登録抹消するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページに「カテゴリーの削除」リンクのないカテゴリーを削除するには、-0オプションを使用します。

-i -p "parentElementPath" -f importFile

指定された XML ファイルから構成プロパティーとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリーのインポート先の親要素へのパスを指定します。 configTool ユーティリティーは、パスで指定したカテゴリーの下 に、プロパティ ーをインポートします。

カテゴリーは、最上位より下の任意のレベルに追加できますが、トップ・カテゴリ ーと同じレベルにカテゴリーを追加することはできません。

親要素パスでは、カテゴリーとプロパティーの内部名を使用する必要があります。 これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリーまたはプ ロパティーを選択して、右ペインで括弧に入れて表示されるパスを見てください。 構成プロパティー階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符 で囲みます。

tools/bin ディレクトリーに対するインポート・ファイルの相対位置を指定する か、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。相対パスを指定する か、または何もパスを指定しないと、configTool はまず tools/bin ディレクトリ ーに対して相対的なファイルを探します。

デフォルトでは、このコマンドは既存のカテゴリーを上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。

-x -p "elementPath" -f exportFile

指定の名前の XML ファイルに構成プロパティーとその設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティーをエクスポートするか、または構成プロパティー階層内のパスを指定して特定のカテゴリーにエクスポートを限定することができます。

要素パスでは、カテゴリーとプロパティーの内部名を使用する必要があります。こ れらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリーまたはプロ パティーを選択して、右ペインの括弧内に表示されるパスを見てください。構成プロパティー階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーに対するエクスポート・ファイルの相対位置を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。ファイル指定に区切り文字 (Unix では /、Windows では / または ¥) が含まれていない場合、configTool は、 Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにファイルを書 き込みます。xml 拡張子を指定していない場合、configTool によってその拡張子が 追加されます。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。登録ファイルの位置は、tools/bin ディレクトリーからの相対パス、または絶対パスで指定できます。デフォルトでは、このコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。productName パラメーターは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。

次のことに注意してください。

-r オプションを使用する場合、登録ファイルの XML の最初のタグは
 <application> でなければなりません。

構成プロパティーを Marketing Platform データベースに挿入するために使用でき る他のファイルが、製品と共に提供されている場合があります。これらのファイ ルに対しては、-i オプションを使用してください。-r オプションで使用できる のは、最初のタグとして <application> タグが入っているファイルだけです。

- Marketing Platform の登録ファイルは Manager_config.xml という名前で、最初のタグは <Suite> です。このファイルを新しいインストールで登録するには、populateDb ユーティリティーを使用するか、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」で説明されているように Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 最初のインストール後に Marketing Platform 以外の製品を登録するには、 configTool で -r オプションと -o オプションを指定して使用し、既存のプロパ ティーを上書きします。

-u productName

productName で指定されているアプリケーションを登録抹消します。製品カテゴリ ーへのパスを含める必要はありません。製品名で十分です。productName パラメー ターは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。これは、 製品のすべてのプロパティーおよび構成設定を削除します。

オプション

-0

-i または -r と共に使用すると、既存のカテゴリーまたは製品登録 (ノード) を上書きします。

-d と共に使用すると、「構成」ページに「カテゴリーの削除」リンクのないカテゴ リー (ノード)を削除することができます。

例

 Marketing Platform のインストール先の conf ディレクトリーにある Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml

 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートのいずれかを、デフォ ルトの Campaign パーティション (partition1) にインポートします。この例では、 Oracle データ・ソース・テンプレート (OracleTemplate.xml) が、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにあることを前提にして います。

configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f
OracleTemplate.xml

すべての構成設定を、D:¥backups ディレクトリーにある myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

configTool-x -f D:\u00e4backups\u00e4myConfig.xml

 Marketing Platform のインストール先の既存の Campaign パーティション (デー タ・ソース・エントリーを含む全体) をエクスポートし、partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存して、デフォルトの tools/bin ディレクトリーに格 納します。

configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f
partitionTemplate.xml

 Marketing Platform のインストール先のデフォルトの tools/bin ディレクトリー にある app_config.xml という名前のファイルを使用して、手動で productName というアプリケーションを登録し、このアプリケーションの既存の登録を上書き するように強制します。

configTool -r product Name -f app_config.xml -o

• productName という名前のアプリケーションを登録抹消します。

configTool -u productName

datafilteringScriptTool ユーティリティー

datafilteringScriptTool ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、 Marketing Platform システム・テーブルのデータベースにあるデータ・フィルター・ テーブルにデータを設定します。

このユーティリティーは、XML の作成方法に応じて、2 つの方法で使用することができます。

 1 セットの XML 要素を使用して、フィールド値の固有の組み合わせに基づいて データ・フィルターを自動生成することができます(固有の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター)。 • やや異なる XML 要素セットを使用して、ユーティリティーで作成する各デー タ・フィルターを指定することができます。

XML の作成については、「*IBM Unica Marketing Platform* 管理者ガイド 」を参照 してください。

datafilteringScriptTool を使用する状況

新規データ・フィルターを作成する場合は、datafilteringScriptTool を使用する 必要があります。

前提条件

Marketing Platform が実装され、稼働している必要があります。

SSL での datafilteringScriptTool の使用

Marketing Platform が片方向 SSL を使用して実装されている場合は、 datafilteringScriptTool スクリプトを変更して、ハンドシェークを実行する SSL オプ ションを追加しなければなりません。スクリプトを変更するには、以下の情報が必 要です。

- トラストストア・ファイルの名前とパス
- トラストストア・パスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (.bat または .sh) を 開き、次のような行を見つけます (例は Windows 版)。

:callexec

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*

これらの行を、次のように編集します (新しいテキストは太字です)。 myTrustStore.jks および myPassword の代わりに、トラストストアのパスおよびフ ァイル名と、トラストストアのパスワードを使用します。

:callexec

SET SSL OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"

-Djavax.net.ssl.trustStore="C:¥security¥myTrustStore.jks"

-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
%SSL_OPTIONS%

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*

構文

datafilteringScriptTool -r pathfile

コマンド

-r path_file

データ・フィルター仕様を指定の XML ファイルからインポートします。このファ イルがインストールの tools/bin ディレクトリーにない場合、パスを指定し、 *path_*file パラメーターを二重引用符で囲みます。

例

 C:¥unica¥xml ディレクトリーにある collaborateDataFilters.xml という名前の ファイルを使用して、データ・フィルターのシステム・テーブルにデータを設定 します。

datafilteringScriptTool -r "C:¥unica¥xml¥collaborateDataFilters.xml"

encryptPasswords ユーティリティー

encryptPasswords ユーティリティーは、以下のように、Marketing Platform が使用 する 2 つのパスワードのいずれかを暗号化して格納するために使用されます。

- Marketing Platform がそのシステム・テーブルにアクセスするために使用するパス ワード。ユーティリティーは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform のイ ンストール先の tools¥bin ディレクトリーにある jdbc,properties ファイルに 格納されている)を、新規パスワードと差し替えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーが提供するデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を使用するように構成されている場合に、 Marketing Platform が使用する鍵ストアのパスワード。証明書は、自己署名証明書か、認証局からの証明書のどちらでも構いません。

encryptPasswords を使用する状況

以下の理由がある場合に、encryptPasswords を使用します。

- Marketing Platform システム・テーブルのデータベースにアクセスするために使用 するアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成してあるか、または認証局から証明書を取得済みの場合。

前提条件

- encryptPasswords を実行して新規データベース・パスワードの暗号化と格納をする前に、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
- encryptPasswords を実行して鍵ストア・パスワードの暗号化と格納をする前に、 デジタル証明書を作成または取得して、鍵ストア・パスワードを確認しておく必 要があります。

追加の前提条件については、219ページの『第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

encryptPasswords -d databasePassword

encryptPasswords -k keystorePassword

コマンド

-d databasePassword

データベース・パスワードを暗号化します。

-k keystorePassword

鍵ストア・パスワードを暗号化して、pfile という名前のファイルに格納します。

例

 Marketing Platform のインストール時に、システム・テーブルのデータベース・ア カウントのログインを myLogin に設定しました。現在、インストールからしばら く経ったので、このアカウントのパスワードを newPassword に変更しました。次 のようにして、encryptPasswords を実行し、データベース・パスワードを暗号化 して格納します。

encryptPasswords -d newPassword

 SSL を使用するように IBM Unica Marketing アプリケーションを構成している最 中で、デジタル証明書を作成済みまたは取得済みです。次のようにして、 encryptPasswords を実行し、鍵ストア・パスワードを暗号化して格納します。

encryptPasswords -k myPassword

partitionTool ユーティリティー

パーティションは、Campaign ポリシーおよび役割に関連付けられます。これらのポ リシーと役割、またそのパーティションとの関連付けは、Marketing Platform システ ム・テーブルに格納されます。partitionTool ユーティリティーは、パーティショ ンの基本ポリシー情報と役割情報を使用して、Marketing Platform システム・テーブ ルにシードを設定します。

partitionTool を使用する状況

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、基本ポリシー情報と 役割情報を用いて Marketing Platform システム・テーブルにシードを設定します。

Campaign での複数のパーティションのセットアップに関する説明について詳しく は、ご使用のバージョンの Campaign に対応するインストール・ガイドを参照して ください。

特殊文字とスペース

スペースを含むパーティション記述、ユーザー名、グループ名、またはパーティシ ョン名は、すべて二重引用符で囲む必要があります。 追加の制約事項については、219ページの『第 18 章 IBM Unica Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用することができます。

- C

-s オプションを使用して指定された既存のパーティションのポリシーと役割の複製 (クローン)を作成し、-n オプションを使用して指定された名前を使用します。これ らのオプションは両方とも、c で必須です。このコマンドは以下を実行します。

- Campaign の管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方に、管理者役割を持 つ新規 IBM Unica Marketing ユーザーを作成する。指定したパーティション名 は、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザーをそのグループの メンバーにする。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成する。
- ソース・パーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製して、新 規パーティションに関連付ける。
- 複製するポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複 製する。
- 複製する役割ごとに、すべての機能を、ソースの役割にマップされていたのと同 じ方法でマップする。
- 役割の複製時に作成された最新のシステム定義の管理者役割に、新規Marketing Platform グループを割り当てる。デフォルト・パーティション (partition1) のクロ ーン作成を行う場合、この役割はデフォルトの管理役割 (管理者) になります。

オプション

-d partitionDescription

オプション。-c と共にのみ使用します。-list コマンドからの出力に表示する説明 を指定します。256 文字以内でなければなりません。説明にスペースが含まれる場 合は、全体を二重引用符で囲みます。

-g groupName

オプション。-c と共にのみ使用します。ユーティリティーで作成する Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのイン スタンス内で固有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで partition_nameAdminGroup が使用されます。

-n partitionName

-list ではオプション、-c では必須。32 文字以内でなければなりません。

-list と共に使用する場合は、情報をリストする元のパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定したパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、(「構成」ページでパーティションのテンプレートを使用して)そのパーティションを構成したときにパーティションに指定した名前と一致する必要があります。

-s sourcePartition

必須。-c と共にのみ使用します。複製するソース・パーティションの名前です。

-u adminUserName

オプション。-c と共にのみ使用します。複製元のパーティションの管理ユーザーの ユーザー名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンスの中で固 有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで *partitionName*AdminUser が使用され ます。

パーティション名は、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
 - partition1 からの複製
 - パーティション名は myPartition
 - デフォルトのユーザー名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用
 - デフォルトのグループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用
 - 説明は「ClonedFromPartition1」

partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
 - partition1 からの複製
 - パーティション名は partition2
 - customerA のユーザー名を指定し、自動的に割り当てられるパスワード partition2 を使用
 - customerAGroup のグループ名を指定
 - 説明は「PartitionForCustomerAGroup」

partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"

populateDb ユーティリティー

populateDb ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルにデフォ ルト (シード) データを挿入します。

IBM インストーラーは、Marketing Platform および Campaign のデフォルト・デー タを使用して、Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定することがで きます。ただし、会社の方針によってインストーラーによるデータベース変更が許 可されていない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テー ブルに接続できない場合は、このユーティリティーを使用して Marketing Platform システム・テーブルにデフォルトのデータを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータに、デフォルトのパーティション用のセキュリティー の役割と権限が含まれています。Marketing Platform の場合、このデータには、デフ ォルトのユーザーとグループ、およびデフォルト・パーティション用のセキュリテ ィーの役割と権限が含まれています。

構文

populateDb -n productName

コマンド

-n productName

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効 な製品名は、Manager (Marketing Platform の場合) と Campaign (Campaign の場合) です。

例

•

Marketing Platform のデフォルト・データを手動で挿入します。

populateDb -n Manager

Campaign のデフォルト・データを手動で挿入します。

populateDb -n Campaign

restoreAccess ユーティリティー

PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーが手違いでロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするためのすべての機能が失われた場合は、restoreAccess ユーティリティーを使用して Marketing Platform へのアクセスを復元することができます。

restoreAccess を使用する状況

このセクションで説明する 2 つの状況下では、restoreAccess を使用することができます。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になっている

Marketing Platform で PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーが、システ ムで無効になってしまう場合があります。以下の例に、platform_admin ユーザー・ アカウントが無効になる仕組みを示します。PlatformAdminRole 権限を持つユーザー (platform_admin ユーザー)が1人しかいないとします。「構成」ページの「全般 | パスワード設定」カテゴリーにある「許容されるログインの試行の最大失敗回数」 プロパティーが3に設定されているものとします。そして、誰かが platform_admin としてログインしようとし、間違ったパスワードを続けて3回入力したとします。 このようにログイン試行が失敗すると、システムで platform_admin アカウントが無 効になります。

この場合、restoreAccess を使用することで、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを Marketing Platform システム・テ ーブルに追加することができます。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティーは、ユーザー指定のロ グイン名とパスワードで PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。

指定のユーザー・ログイン名が内部ユーザーとして Marketing Platform に存在している場合は、そのユーザーのパスワードが変更されます。

PlatformAdmin のログイン名と PlatformAdminRole 権限を持つユーザーのみが、す べてのダッシュボードを一元管理できます。そのため、platform_admin ユーザーが 無効な状態で、restoreAccess を使用してユーザーを作成した場合、platform_admin のログインを持つユーザーを作成する必要があります。

Active Directory 統合の構成が不適切

Windows Active Directory 統合を不適切な構成で実装し、すでにログインできない 状態の場合は、restoreAccess を使用してログインする機能を復元してください。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティーによって「プラットフ オーム | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値が「Windows 統合ロ グイン」から Marketing Platform に変更されます。この変更によって、ロックア ウトされる前に存在していた任意のユーザー・アカウントでログインできるように なります。必要に応じて、新しいログイン名とパスワードも指定できます。この方 法で restoreAccess ユーティリティーを使用する場合、Marketing Platform が配置 されている Web アプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用する場合は、パスワードに関して以下の点に注意してください。

- restoreAccess ユーティリティーでは空白のパスワードをサポートしていません。またパスワード規則を適用しません。
- 使用中のユーザー名を指定した場合、そのユーザーのパスワードはユーティリティーでリセットされます。

構文

restoreAccess -u loginName -p password

restoreAccess -r

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用した場合は、「Unica | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。有 効にするには、Web アプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。

-u *loginName* オプションを指定して使用した場合は、PlatformAdminRole ユーザー を作成します。

オプション

-u loginNname

指定したログイン名で PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。-p オ プションと共に使用する必要があります。

-p password

作成するユーザーのパスワードを指定します。-u を指定する場合は必須です。

例

• PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

restoreAccess -u tempUser -p tempPassword

 ログイン方法の値を Unica Marketing Platform に変更し、PlatformAdminRole 権 限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword

scheduler_console_client ユーティリティー

IBM Unica Marketing Scheduler で構成されたジョブは、トリガーを listen するよう にセットアップされている場合には、このユーティリティーによってリストしたり リストから削除したりできます。

SSL が有効な場合の実行内容

Marketing Platform Web アプリケーションが SSL を使用するように構成されている 場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーで使用するのと同じ SSL 証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには以下の手順を実行します。

- scheduler_console_client が使用する JRE の場所を判別します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合には、
 scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JRE を指します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、
 scheduler_console_client ユーティリティーは Marketing Platform インスト
 ール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトで設定
 されている JRE か、コマンド行で設定された JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を、scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

Sun JDK には、証明書のインポートに使用可能な keytool というプログラムが入っています。このプログラムの使用方法の詳細については、Java の資料を参照するか、プログラムの実行時に -help と入力してヘルプにアクセスしてください。

証明書が一致しないと、Marketing Platform ログ・ファイルには次のようなエラーが 組み込まれます。

原因: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: 要求され ているターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target)

前提条件

Marketing Platform がインストール、配置、および実行されている必要があります。

構文

scheduler_console_client -v -t trigger_name user_name

scheduler_console_client -s -t trigger_name user_name

コマンド

-v

指定のトリガーを listen するよう構成されている Scheduler ジョブをリスト表示します。

-t オプションと共に使用する必要があります。

- S

指定のトリガーを listen するよう構成されている Scheduler ジョブを実行します。

-t オプションと共に使用する必要があります。

オプション

-t trigger_name

Scheduler で構成されているトリガーの名前です。

例

• trigger1 という名前のトリガーを listen するよう構成されているジョブをリスト 表示します。

scheduler_console_client -v -t trigger1

• trigger1 という名前のトリガーを listen するよう構成されているジョブを実行します。

scheduler_console_client -s -t trigger1

Marketing Platform SQL スクリプトについて

このセクションでは、Marketing Platform で提供されている、Marketing Platform シ ステム・テーブルに関連するさまざまなタスクを実行するための SQL スクリプト について説明します。これらは、Marketing Platform システム・テーブルに対して実 行するように設計されています。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform のインストール先の db ディレクトリーにあります。

Marketing Platform システム・テーブルに対して SQL を実行するには、データベー ス・クライアントを使用する必要があります。

リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform SQL スクリプトについて説明します。

全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)

Manager_Schema_DeleteAll.sql スクリプトは、テーブル自体を削除せずに、すべて のデータを Marketing Platform システム・テーブルから削除します。このスクリプ トは、すべてのユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、データ・フィルタ ー、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する状況

破損したデータがあるために Marketing Platform のインスタンスが使用できなくなった場合、ManagerSchema DeleteAll.sql を使用することができます。

追加要件

ManagerSchema_DeleteAll.sql を実行した後で Marketing Platform を作動可能にす るためには、以下のステップを実行する必要があります。

 232ページの『populateDb ユーティリティー』で説明されている方法で、 populateDB ユーティリティーを実行します。populateDB ユーティリティーによ って、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループは復元 されますが、初期インストール後にユーザーが作成またはインポートしたユーザ ー、役割、およびグループは復元されません。

- 222ページの『configTool ユーティリティー』で説明されている方法で、 config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティーを実行 し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルターの作成または LDAP サーバーや Web アクセス制御プラット フォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これ らの構成を実行する必要があります。
- 以前に存在していたデータ・フィルターを復元したい場合は、それらのデータ・ フィルターを指定するために作成された元の XML を使用して、 datafilteringScriptTool ユーティリティーを実行してください。

データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、データ・フィルター・テー ブル自体を削除せずに、すべてのデータ・フィルタリング・データを Marketing Platform システム・テーブルから削除します。このスクリプトは、Marketing Platform からすべてのデータ・フィルター、データ・フィルター構成、オーディエ ンス、およびデータ・フィルター割り当てを除去します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する状況

Marketing Platform システム・テーブルのすべてのデータ・フィルターを削除する必要があるが、その他のデータは削除したくないという場合、 ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用することができます。

重要: ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、2 つのデータ・フィ ルター・プロパティー (デフォルトのテーブル名とデフォルトのオーディエンス名) の値をリセットしません。これらの値が、使用するデータ・フィルターにとっても う無効になるという場合は、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要が あります。

システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)

ManagerSchema_DropAll.sql スクリプトは、すべての Marketing Platform システ ム・テーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブ ル、ユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: このスクリプトを旧バージョンの Marketing Platform システム・テーブルを含 むデータベースに対して実行する場合、データベース・クライアントで、制約が存 在しないことを示すエラー・メッセージが表示されることがあります。これらのメ ッセージは無視して構いません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する状況

Marketing Platform のインスタンスをアンインストールしたが、そのプラットフォームのシステム・テーブルが入っているデータベースにはまだ引き続き使用したい他のテーブルが含まれているという場合、ManagerSchema_DropAll.sql を使用することができます。

追加要件

このスクリプトを実行した後で Marketing Platform を作動可能にするためには、以下のステップを実行する必要があります。

- 『システム・テーブルの作成』で説明されている方法で、適切な SQL スクリプ トを実行してシステム・テーブルを再作成します。
- 232ページの『populateDb ユーティリティー』で説明されている方法で、 populateDB ユーティリティーを実行します。populateDB ユーティリティーを実行すると、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループは 復元されますが、初期インストール後にユーザーが作成またはインポートしたユ ーザー、役割、およびグループは復元されません。
- 222 ページの『configTool ユーティリティー』で説明されている方法で、 config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティーを実 行し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルターの作成または LDAP サーバーや Web アクセス制御プラット フォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これ らの構成を実行する必要があります。

システム・テーブルの作成

会社のポリシーによって、インストーラーを使用して自動的に Marketing Platform システム・テーブルを作成することが許されていない場合は、次の表で説明する方 法でスクリプトを使用して手動で作成してください。スクリプトは、実行しなけれ ばならない順序で示されています。

データ・ソース・タ	
イプ	スクリプト名
IBM DB2®	ManagerSchema_DB2.sq1ManagerSchema_DB2_CeateFKConstraints.sq1
	マルチバイト文字 (中国語、日本語、韓国語など) をサポートする 予定の場合、ManagerSchema_DB2_unicode.sql スクリプトを使用 します。
	• active_portlets.sql
Microsoft SQL Server	• ManagerSchema_SqlServer.sql
	 ManagerSchema_SqlServer_CeaterKConstraints.sql active_portlets.sql
Oracle	 ManagerSchema_Oracle.sql ManagerSchema_Oracle_CeateFKConstraints.sql active neutlate cal
	• active_portiets.sql

スケジューラー機能を使用すると、事前定義された間隔でフローチャートを実行す るように構成することができます。これを使用する場合、この機能をサポートする テーブルも作成する必要があります。Scheduler テーブルを作成するには、以下の表 で説明されているように適切なスクリプトを実行します。

データ・ソース・タ	
イプ	スクリプト名
IBM DB2	quartz_db2.sql
Microsoft SQL Server	quartz_sqlServer.sql
Oracle	quartz_oracle.sql

システム・テーブル作成スクリプトを使用する状況

インストーラーにシステム・テーブルの自動作成を許可しなかった場合、または ManagerSchema_DropAll.sql を使用してデータベースからすべての Marketing Platform システム・テーブルを削除した場合は、Marketing Platform のインストール またはアップグレード時に、これらのスクリプトを使用する必要があります。

付録 A. 「構成」ページでのプロパティーの構成

このセクションでは、「構成」ページにある構成プロパティーについて説明しま す。

Marketing Platform 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Marketing Platform 構成プロパティーについて取り上げます。

全般 | ナビゲーション セキュア接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、IBM 製品間での通信に内 部的に使用されます。

デフォルト値

7001

標準接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM 製品間での通信に 内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

Unica URL

説明

IBM Unica Marketing で使用する URL を指定します。これはインストール時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に示すように、ドメイン名が含まれることに注意してください。

protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/ context-root

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

未定義

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下のようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/customer/unica

全般 | データ・フィルタリング デフォルト・テーブル名

説明

既定オーディエンス名 (Default audience name) と組み合わせて、IBM Unica Marketing のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフィルターと割り当てを読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ構成)を判別します。

デフォルト値

未定義

有効な値

データ・フィルター基準として使用されるフィールドを含んでいる顧客テーブルの物理名。最大 50 文字の varchar 型の文字。

デフォルト・オーディエンス名

説明

既定表名 (Default table name) と組み合わせて、IBM Unica Marketing の データ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフィルターと割り当て を読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ構成) を判別しま す。

デフォルト値

未定義

有効な値

Distributed Marketing のデータ・フィルターを構成する場合、名前は、 Campaign のオーディエンス・レベルに指定されている名前と同じでなけれ ばなりません。最大 50 文字の varchar 型の文字。

全般 | パスワード設定

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Unica Marketing パスワードに適用される ポリシーを指定します。これらのパスワード・オプションのほとんどは、(Marketing Platform 内で作成された)内部ユーザーのパスワードにのみ適用され、(外部システ ムからインポートされた)外部ユーザーには適用されません。例外は、ログインの 失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)」プロ パティーで、これは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に適用されます。また、こ のプロパティーは外部システム内で設定された類似の制約事項をオーバーライドし ないことにも注意してください。

ログインの失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)

説明
ユーザーの 1 回のログインにつき、無効なパスワードの入力が許される最 大回数を指定します。最大回数になると、ユーザーは IBM Unica Marketing システムを利用できなくなり、そのユーザーとしてだれもログインできなく なります。

ゼロ以下に設定した場合、システムは連続した失敗を何回でも許可します。

デフォルト値

3

有効な値

任意の整数

パスワード履歴数 (Password history count)

説明

あるユーザーについて、システムが保存する古いパスワードの数を指定しま す。そのユーザーは、この古いパスワードのリスト内にあるパスワードの再 利用を許可されません。値をゼロ以下に設定した場合、履歴は保存されず、 ユーザーは同じパスワードを繰り返し再利用できます。このパスワード履歴 数には、ユーザー・アカウントの作成時に初期値として割り当てられたパス ワードは含まれません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

有効期間 (日数) (Validity (in days))

説明

ユーザーのパスワードが失効するまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードの有効期限はありません。

値がゼロより大きい場合、ユーザーは最初にログインしたときにパスワード の変更を求められ、その最初のログインの日付から有効期限がカウントされ ます。

ユーザーとパスワードが作成された後に、この値を変更すると、既存のユー ザーに対する新しい有効期限は、既存のユーザーが次回にパスワードを変更 したときに有効になります。

デフォルト値

30

有効な値

任意の整数

空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)

説明

空白のパスワードを許可するかどうかを指定します。これを true に設定した場合は、最小文字長 (Minimum character length)=0 も設定してください。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

同一のユーザー名とパスワードを許可 (Allow identical user name and password)

説明

ユーザーのパスワードをユーザーのログイン名と同じものにすることを許可 するかどうかを指定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

最小英字数 (Minimum number of letter characters)

説明

パスワード内に必要な英字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最 小要件はありません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

数字の最小数

説明

パスワード内に必要な数字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最 小要件はありません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

最小文字長 (Minimum character length)

説明

パスワードの最小の長さを指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はあ りません。値を 0 より大きく設定した場合は、空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)=false も設定してください。 デフォルト値

4

有効な値

任意の整数

全般 | その他

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される値、およびロケール用に設定することが必要な場合がある値を指定します。

TokenLifetime

説明

Marketing Platform が生成するトークンが有効な期間を秒単位で指定しま す。これは、スイートのサインオン実装の一部です。この値は変更しないで ください。

デフォルト値

15

有効な値

任意の正の整数

デフォルトの地域

説明

Marketing Platform の既定のロケールを指定します。Campaign をインスト ールする予定の場合、この値は、Campaign の defaultLocale プロパティー で Campaign 用に設定したロケールと同じでなければなりません。

デフォルト値

en_US

有効な値

サポートされるロケール

トラステッド・アプリケーションが有効 (Trusted application enabled)

説明

この値を「True」に設定する場合、Marketing Platform を SSL ポートのあ る環境でデプロイし、「全般」>「ナビゲーション (Navigation)」カテゴリー の「Unica URL」プロパティーで HTTPS を使用するように設定しなければ なりません。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

プラットフォーム

地域設定

説明

IBM Unica Marketing ユーザーのロケール設定を指定します。「構成」ページでこのプロパティーを設定すると、その適用する設定が IBM Unica Marketing のすべてのユーザーの既定の設定となります。ただし、Marketing Platform の「ユーザー」ページで個別にロケール設定を指定するユーザーは 例外です。個別のユーザーにこのプロパティーを設定する場合には、そのユーザーに適用する設定がデフォルト設定よりも優先されます。

この設定は、IBM Unica Marketing アプリケーションの言語、時間、数値、 日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの使用可能性は IBM Unica Marketing アプリケーションによって 異なる場合があり、すべての IBM Unica アプリケーションが Marketing Platform のロケール設定をサポートしているわけではありません。 「地域 設定」プロパティーが使用可能でサポートされているかどうかについては、 固有の資料を参照してください。

デフォルト値

英語 (米国)

ヘルプ・サーバー

説明

IBM Unica ホスト・オンライン・ヘルプがインストールされているサーバ ーの URL です。IBM Unica Marketing ユーザーがインターネットにアクセ スできる場合、既定値を変更しないでください。既定値は、IBM Unica が 保守/更新しているオンライン・ヘルプ・サーバーを指しています。

デフォルト値

ホステッド・ヘルプ・サーバーの URL。

有効な値

IBM Unica ホスト・ヘルプがインストールされているサーバー。

Unica Marketing Operations - Campaign の統合

説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールして統合するかどうかを示すフラグです。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Unica Marketing Operations - オファー統合

説明

Marketing Operations と Campaign を統合するシステムの場合、このフラグ は、オファー統合も有効かどうかを示します。オファー統合を使用すると、 Marketing Operations を使用して、オファー・ライフサイクル管理タスクを 実行できるようになります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してくださ い。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

開始ページ

説明

ユーザーが IBM Unica Marketing にログインする際に表示されるページの URL です。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードです。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効な値

任意の IBM Unica Marketing URL。フォーム送信ページ、編集ページ、検 索結果ページは除きます。

ドメイン名

説明

IBM Unica Marketing がインストールされているドメインの名前です。この 値は、インストール時に設定されます。ドメイン名を変更した場合以外、こ れは変更しないでください。

デフォルト値

未定義

ページのタグを無効にする (Disable Page Tagging)

説明

既定値の False に設定すると、IBM Unica は Marketing Platform のインス トール時に入力したサイト ID コードを使用して、製品全体の使用傾向を追 跡する基本的な統計を収集します。こうした統計は、IBM Unica 製品の開 発や向上に使用されます。そのような情報を収集しない場合は、このプロパ ティーを True に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

プラットフォーム | スケジューラー クライアント・ポーリング間隔

説明

Campaign は、ミリ秒単位で指定されたこの値が示す周期的間隔で、ジョブ について IBM Scheduler をポーリングします。デフォルト値は 60 秒で す。このプロパティーを 10000 (10 秒) 未満の値に設定しないでください。 キャンペーンのパフォーマンスが低下する可能性があるためです。

デフォルト値

60000

クライアント初期化遅延

説明

Campaign が最初に始動した際に、Campaign スケジューラー・スレッドが ジョブに関して IBM Scheduler をポーリングするまでに待機するミリ秒単 位の期間です。この値は、少なくとも、ご使用のシステム上で Campaign が 始動するための十分な時間を確保できる長さに設定してください。デフォル ト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

有効な値

任意の整数

プラットフォーム | スケジューラー | 繰り返し定義

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Scheduler の反復パターンを設定します。 反復パターンは、スケジュールを作成する際に反復パターンを設定する場合に使用 するダイアログ・ボックスに表示されます。反復テンプレートを使用すると、有効 な任意の Cron 式により独自の反復パターンを作成できます。

毎時

説明

ジョブは1時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

0 0 0/1 * * ?

毎日

説明

ジョブは、24 時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

000**?

毎 [曜日] 午前 12 時 00 分

説明

このジョブは、各週の指定された曜日の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 月 0 0 0 ? * MON
- 火 0 0 0 ? * TUE
- 水 0 0 0 ? * WED
- 木 0 0 0 ? * THU
- 金 0 0 0 ? * FRI
- 土 0 0 0 ? * SAT
- 日 0 0 0 ? * SUN

毎月の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every month at 12:00 am)

説明

このジョブは、毎月の指定の日 (初日または最終日) の午前 12 時 00 分に トリガーされます。

デフォルト値

- 毎月の初日 0 0 0 1 * ?
- 毎月の最終日 0 0 0 L * ?

各四半期の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every quarter at 12:00 am)

説明

このジョブは、各四半期の指定の日 (初日または最終日)の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 各四半期の初日 0 0 0 1 * JAN, APR, JUL, OCT
- 各四半期の最終日 0 0 0 L * MAR, JUN, SEP, DEC

毎年の [初日|最終日] の午前 12:00 ([FirstlLast] day of every year at 12:00 am)

説明

このジョブは、毎年の指定の日 (初日または最終日)の午前 12 時 00 分に トリガーされます。

デフォルト値

- 毎年の初日 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年の最終日 0 0 0 L ? DEC *

毎 [月] 午前 12 時 00 分

説明

このジョブは、指定月の初日の午前 12 時 00 分にトリガーされます。 デフォルト値

- 毎年1月-0001? JAN *
- 毎年 2 月 0 0 0 1 ? FEB *
- 毎年 3 月 0 0 0 1 ? MAR *
- 毎年 4 月 0 0 0 1 ? APR *
- 毎年 5 月 0 0 0 1 ? MAY *
- 毎年 6 月 0 0 0 1 ? JUN *
- 毎年 7 月 0 0 0 1 ? JUL *
- 毎年 8 月 0 0 0 1 ? AUG *
- 毎年 9 月 0 0 0 1 ? SEP *
- 毎年 10 月 0 0 0 1 ? OCT *
- 毎年 11 月 0 0 0 1 ? NOV *
- 毎年 12 月 0 0 0 1 ? DEC *

プラットフォーム | スケジューラー | スケジュール登録 | キャン ペーン | [オブジェクト・タイプ]

IBM スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、異なるカ テゴリーが存在します。これらのカテゴリーのプロパティーを、通常は変更すべき ではありません。

Executor クラス名

説明

フローチャートまたはメール配信の実行をトリガーするために IBM Scheduler が使用するクラスです。

デフォルト値

ステータス・ポーリング間隔

説明

IBM スケジューラーは、ステータスを報告していないスケジュールされた オブジェクトの実行ステータスについて、定期的な間隔で Campaign に対し てポーリングを行います。ここではこの間隔を、ミリ秒単位で指定します。 デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔がより頻繁になるように (小さ い値に) 設定すると、システムのパフォーマンスに影響を及ぼします。ポー リング間隔の頻度が少なくなるように (大きな値に) 設定すると、システム への負荷が減少します。例えば、完了までに 10 分を超える時間を必要とす る Campaign フローチャートが大量にある場合には、ポーリング間隔の頻度 を少なく設定するといいでしょう。

デフォルト値

600000

プラットフォーム | スケジューラー | スケジュール登録 | キャン ペーン | [オブジェクト・タイプ] | [制限グループ]

IBM Unica スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、デフォルトの制限グループが存在します。「制限グループ」テンプレートを使用して、追加グループを作成できます。

制限しきい値

説明

同時に実行できる、このグループに関連付けられているスケジュールの最大 数。構成済みのスケジューラー・グループは、スケジュールの作成および編 集に使用できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「 スケジューラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。デフ ォルトの制限グループは、事実上無制限の 999 に設定されます。すべての スケジュールが 1 つの制限グループに属している必要があるので、この値 は変更せずに残し、制限したくないスケジュールをこのグループに割り当て ることができるようにしてください。

デフォルト値

有効な値

任意の正の整数。

プラットフォーム | セキュリティー

ログイン方法

説明

一緒にインストールおよび構成されているすべての IBM Unica Marketing 製品の認証モードを、次のように指定します。

- 値を Windows 統合ログイン (Windows integrated login) に設定する
 と、 IBM Unica Marketing 製品では認証に Windows Active Directory が 使用されます。
- この値を Unica Marketing Platform に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証と許可に Marketing Platform が使用されます。
- 値を LDAP に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証に LDAP サーバーが使用されます。
- 値を Web アクセス制御 (Web access control) に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証に Web アクセス制御ソフトウェアが使用 されます。

デフォルト値

Unica Marketing Platform

有効な値

Windows 統合ログイン (Windows integrated login) | Unica Marketing Platform | LDAP | Web アクセス制御 (Web access control)

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Windows 統合ログイン (Windows integrated login)

ドメイン

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.smb.client.Domain の値を設定します。SMB URL でドメインが指定 されていない場合に使用するドメインを指定します。この値は、Windows ドメイン・ネームに設定してください。ほとんどの環境では、このプロパテ ィーまたはドメイン・コントローラー (Domain Controller) プロパティー のどちらかを設定します。

デフォルト値

未定義。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

クライアント・タイムアウト

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.smb.client.soTimeout の値を設定します。クライアントとサーバー の間でアクティビティーがない場合、ソケットが閉じるまでの期間をミリ秒 単位で指定します。この数値は可能な限り短くしなければなりませんが、プ ロトコル・ハンドシェークが完了する十分な長さを確保する必要がありま す。その長さはネットワーク特性によって異なります。

デフォルト値

1000

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

キャッシュ・ポリシー

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.netbios.cachePolicy の値を設定します。重複する名前クエリーを減 らすために NetBIOS 名をキャッシュに入れる期間を秒単位で指定します。 値を 0 に設定すると、キャッシュ操作は行われません。値を -1 に設定す ると、キャッシュはクリアされません。このプロパティーは、SMB 署名が 有効で、Windows 2003 ドメインで必要な場合に使用されます。

デフォルト値

0

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

ドメイン・コントローラー

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー

jcifs.http.domainController の値を設定します。(NtlmHttpFilter および NetworkExplorer で使用される) HTTP クライアントを認証するために使用 する必要があるサーバーの IP アドレスを指定します。 ドメイン (Domain) プロパティーで指定したドメインのワークステーションの IP アドレスを使 用することも可能です。ほとんどの環境では、このプロパティーまたはドメ イン・コントローラー (Domain Controller) プロパティーのどちらかを設 定します。

デフォルト値

未定義。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

WINS サーバーの IP

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.netbios.wins の値を設定します。WINS サーバーの IP アドレスを 指定します。複数の IP アドレスをコンマで区切って入力することもできま す (例: 192.168.100.30,192.168.100.31)。WINS サーバーの照会が、ドメ イン (Domain) プロパティーで指定したドメインをドメイン・コントローラ ーの IP アドレスに解決するために必要となります。このプロパティーは、 (ドメイン・コントローラーの名前が異なるなど)別のサブネット上のホスト にアクセスする際に WINS サーバーが使用可能であることが強く推奨され る環境で必要です。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

ドメインの除去 (Strip Domain)

説明

ユーザーが IBM Unica Marketing にアクセスする際に、Marketing Platform がユーザーのログイン名からドメインを削除するかどうかを指定します。ご 使用の Windows 構成においてユーザーのログイン時にユーザーのログイン 名にドメインを含める必要がある場合、この値は False に設定してくださ い。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

認証障害時に再試行 (Retry on Authentication Failure)

説明

この値が True に設定されている場合、ユーザーがログインに失敗しても、 システムではさらにログインを試行できます。複数回のログイン試行を行え ないようにするには、False に設定します。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP

LDAP サーバー・ホスト名

説明

LDAP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバーのマシン名または IP アドレスに指定してください。例: machineName.companyDomain.com

Windows Active Directory と統合する場合、DNS 名ではなくサーバー名を 使用します。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP サーバー・ポート

説明

LDAP サーバーが listen するポートを指定します。適切なポート番号にこの値を設定してください。通常、ポート番号は 389 になります (SSL を使用する場合には 636)。

デフォルト値

389

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

ユーザー検索フィルター

説明

ユーザーを検索するために使用するフィルターを指定します。任意の有効な LDAP 検索フィルター (RFC 2254 を参照) が有効な値です。この値の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。

通常、ユーザー・ログイン属性の値は LDAP サーバーでは uid で、 Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する 必要があります。LDAP サーバーが Windows Active Directory の場合に は、このプロパティーの既定値を uid ではなく sAMAccountName に変更し なければなりません。次に例を示します。

(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(sAMAccountName={0}))

デフォルト値

(&(| (objectClass=user) (objectClass=person)) (uid={0}))

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

Unica に格納されている資格情報を使用

説明

(ログイン時の) ユーザー認証中に LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを検索する際、Marketing Platform が Marketing Platform データベースの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベ ースの資格情報を使用するので、このカテゴリーの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティーと LDAP 資格 情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティー に適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセス が許可されない場合には、この値を true に設定してください。

この値が false の場合、Marketing Platform は LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを匿名で介して接続します。LDAP サー バーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可され る場合には、この値を false に設定できます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Unica Marketing ユーザ ーの名前を指定します。このカテゴリーの Unica に格納された資格情報を 使用 (Use credentials stored in Unica) プロパティーを true に設定し た場合には、この値を設定してください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成した ユーザー名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティ ーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定しま す。このカテゴリーの Unica に格納された資格情報を使用 (Use credentials stored in Unica) プロパティーを true に設定した場合に は、この値を設定してください。 LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成した データ・ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロ パティーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

ベース DN

説明

LDAP ディレクトリー構造のルートを示す基本識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー | LDAP

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを認証する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

```
false
```

有効な値

true | false

プラットフォーム | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御

ユーザー名パターン

説明

Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログ インを抽出するために使用する Java 正規表現です。この正規表現の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。SiteMinder および Tivoli[®] Access Manager の推奨値は \w* です。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意の Java 正規表現。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェ アと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

Web アクセス制御のヘッダー変数 (Web access control header variable)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数を指定します。これは、Web アプリケーション・サーバーに送信されます。既定では、SiteMinder は sm_user を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は iv-user を使用します。TAM の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意のストリング

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェ アと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

プラットフォーム | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期

LDAP 同期が有効

説明

LDAP または Active Directory 同期を有効にするには、true に設定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 同期間隔

説明

ここで指定する秒数の周期的間隔で、Marketing Platform が LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーと同期します。値がゼロ以下の場合、 Marketing Platform は同期しません。値が正整数の場合、新しい値は再始動しなくても 10 分以内に有効になります。その後に変更した場合は、構成された間隔内に有効になります。

デフォルト値

600 (10 分)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 同期遅延

説明

これは、Marketing Platform の開始後に、LDAP サーバーとの周期的同期が 開始される時刻 (24 時形式) です。例えば、LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay) が 23:00 で LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval) が 600 の場 合、Marketing Platform が開始されると、周期的同期は午後 11:00 に実行を 開始され、その後 10 分 (600 秒) ごとに実行されます。

デフォルト値

23:00 (午後 11:00)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 同期タイムアウト

説明

LDAP 同期タイムアウト・プロパティーは、同期の開始後、Marketing Platform がプロセスに終了済みのマークを付けるまでの最大時間を分単位で 指定します。Platform で実行できるのは、1 度に 1 つの同期プロセスだけ です。同期が失敗すると、正常に完了したかどうかに関係なく、終了済みの マークが付けられます。

クラスター環境では、これがとても役立ちます。例えば、Marketing Platform が 1 つのクラスターでデプロイされている場合、そのクラスターにあるサ ーバーが LDAP 同期を開始して、その後プロセスが終了済みのマークが付 けられる前にダウンしてしまう可能性があります。その場合、Marketing Platform はこのプロパティーで指定された期間待機してから、スケジュール されている次の同期を開始します。

デフォルト値

600 (600 分、つまり 10 時間)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 同期スコープ

説明

一群のユーザーを取り出すための初期クエリーのスコープを制御します。ほ とんどの LDAP サーバーとの同期の場合、既定値の SUBTREE のままにして ください。

デフォルト値

SUBTREE

有効な値

値は、標準的な LDAP 検索スコープの用語です。

- OBJECT ベース DN でのみ項目を検索し、結果的にその項目だけを返 します。
- ONE_LEVEL ベース DN の 1 レベル下にあるすべての項目を検索しま すが、ベース DN は含まれません。
- SUBTREE 指定されたベース DN とその下のすべてのレベルにあるすべての項目を検索します。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP プロバイダー URL

説明

ほとんどの実装の場合、以下のいずれかの書式で LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーの LDAP URL に設定します。

- ldap://IP_address:port_number
- Idap://machineName.domain.com:port_number

LDAP サーバーの場合、ポート番号は通常 389 になります (SSL を使用している場合には 636)。

IBM Unica Marketing を Active Directory サーバーと統合する場合、Active Directory 実装環境でサーバー未使用のバインドが使用されているときには、このプロパティーの値を Active Directory サーバーの URL に設定してください。その際、次の形式を使用します。

ldap:///dc=example,dc=com

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

```
Platform | セキュリティー (Security) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)
```

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを同期する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP config Unica グループ区切り文字 (LDAP config Unica group delimiter)

説明

Unica グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map) カテゴリーで、1 つの LDAP グループまたは Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合には、ここで指定 する区切り文字を使用します。名前の分離に使用されていない任意の単一文 字にできます。

デフォルト値

; (セミコロン)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 参照 config 区切り文字 (LDAP reference config delimiter)

説明

SEARCHBASE コンポーネントと FILTER コンポーネントを区切る区切り文字 を指定します。これらのコンポーネントは、LDAP または Active Directory 参照を構成します (Unica ユーザーの LDAP 参照の作成 (LDAP references for Unica user creation) カテゴリーに記述されているとおりに構成しま す)。

FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名の値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

;(セミコロン)

有効な値

区切られる名前の中に出現しない任意の 1 文字。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Unica Marketing ユーザ 一の名前を指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成した ユーザー名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティ ーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成した データ・ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロ パティーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) ^{説明}

LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーがグループ・オブジェクト のユーザー属性に使用する名前を指定します。通常、この値は LDAP サー バーでは uniquemember となり、Windows Active Directory サーバーの場合 には member になります。

AM ユーザーの LDAP 参照の作成 (LDAP references for AM user creation) セクションおよび AM グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP references to AM group map) セクションで FILTER 参照を省略すると、この値に基づ いて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されま す。そのため、LDAP サーバーや Active Directory サーバーでのこの値を確 認する必要があります。

デフォルト値

member

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

ユーザー・ログイン

説明

IBM Unica Marketing ユーザーのログインを、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。ユーザ ー・ログイン (User login) は唯一の必須マッピングです。通常、この属性 の値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーの 場合には sAMAccountName です。LDAP サーバーまたは Active Directory サ ーバーにおけるこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

uid

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

名

説明

Marketing Platform における名 (First Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

givenName

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

姓

説明

Marketing Platform における姓 (Last Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

sn

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

ユーザーの肩書き

説明

Marketing Platform におけるタイトル (Title) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

デフォルト値

title

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

部門

説明

Marketing Platform における部門 (Department) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

会社

説明

Marketing Platform における会社 (Company) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

玉

説明

Marketing Platform における国ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

ユーザーの電子メール

説明

Marketing Platform における E メール・アドレス (Email Address) 属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

デフォルト値

mail

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

住所 1

説明

Marketing Platform におけるアドレス・ユーザー属性を、LDAP サーバーま たは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

電話 (会社)

説明

Marketing Platform における勤務先電話 (Work Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

デフォルト値

telephoneNumber

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

携帯電話

説明

Marketing Platform における携帯電話 (Mobile Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

電話 (自宅)

説明

Marketing Platform における自宅電話 (Home Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

代替ログイン

説明

Marketing Platform における代替ログイン (Alternate Login) ユーザー属性 を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属 性にマップします。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP 同期 (LDAP synchronization) | Unica グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map)

LDAP 参照マップ

説明

ここで指定する LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバ ーのユーザーは、Unica グループ (Unica group) プロパティーで指定され た Marketing Platform グループにインポートされます。

次の構文を使用して、このプロパティーの値を設定します。SEARCHBASE DELIMITER FILTER ここで、

SEARCHBASE は、オブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、LDAP config AM グループ区切り文字 (LDAP config AM group delimiter) プロパティーの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルターです。FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) プロパティーの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

Unica グループ

説明

```
LDAP 参照グループ (LDAP reference group) プロパティーで指定された
LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、
ここで指定する Marketing Platform グループにインポートされます。
```

デフォルト値

未定義

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

IBM Coremetrics 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの IBM Coremetrics 構成プロパティーについ て取り上げます。

これらの構成プロパティーは、IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing 間におけ るシングル・サインオンを構成する際に使用します。この統合の詳細については、 「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Coremetrics

Coremetrics Analytics を有効にする (Enable Coremetrics Analytics)

説明

これは、IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。

シングル・サインオンを有効にするための 1 つのステップとして true に 設定します。

この統合の詳細については、「*IBM Unica Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

false

Coremetrics | 統合 | パーティション | パーティション[n] Coremetrics アカウントの Platform ユーザー (Platform user for Coremetrics account)

説明

データ・ソースに IBM Coremetrics 共有秘密鍵を保持する IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのログイン名を指定します。

これは、IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing との間のシングル・サ インオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、 「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。 デフォルト値

asm_admin

Coremetrics アカウントのデータ・ソース (Datasource for Coremetrics account)

説明

IBM Coremetrics 共有秘密鍵を保持するために作成されたデータ・ソースの 名前を指定します。

これは、IBM Coremetrics と IBM Unica Marketing との間のシングル・サ インオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、 「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

CoremetricsDS

Interaction History 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Interaction History 構成プロパティーについて取り上げます。

Interaction History

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される値を指定します。通常、これ らの値はインストールの際に自動的に設定されます。

ETL サーバー名 (ドメインなし)

説明

Interaction History がインストールされているマシンの名前を指定します。 何らかの理由により、この値を手動で設定する場合は、localhost ではない マシン名を使用してください。

デフォルト値

localhost

オペレーティング・システム

説明

Interaction History がインストールされているオペレーティング・システム。

デフォルト値

Windows

有効な値

Windows | AIX | Linux | Solaris

Interaction History | ナビゲーション (navigation)

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Unica 製品間をナビゲートするために内部 で使用される値を指定します。

HTTPS ポート

説明

Interaction History がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、SSL が使用可能な場合、 IBM Unica 製品間の通信のために内部で使用されます。

デフォルト値

7001

有効な値

HTTP ポート

説明

Interaction History がデプロイされている Web アプリケーション・サーバ ーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM Unica 製品間 での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

有効な値

サーバー URL

説明

IBM Unica Marketing で使用する URL を指定します。これはインストール 時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に 示すように、ドメイン名が含まれることに注意してください。

protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/context-root

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

定義されていません

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下のようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/customer/unica

表示名

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

InteractionHistory

スケジューラー編集ページ URI

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

jsp/scheduleOverride.jsp?taskId=

ログアウト URL

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

logout.do

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | datasource

このカテゴリーのプロパティーは、Interaction History システム・テーブルの詳細情報を指定します。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリーが含まれます。

データベース・タイプ

説明

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | dataSource プロパティーは、このパーティションの Interaction History シ ステム・テーブルのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

SQLSERVER

有効な値

SQLSERVER | DB2 | ORACLE | NETEZZA

JNDI 名

説明

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | jndiName プロパティーは、Interaction History システム・テーブルへの JDBC 接続に Web アプリケーションで使用する JNDI 名を指定します。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History DSN

説明

このプロパティーは以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが SQLServer の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に 設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが DB2 の場合、DB2 インスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが Oracle の場合、 tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

データ・ソース・ユーザー名

説明

Interaction History システム・テーブルのデータベースまたはスキーマのデ ータベース資格情報を保持するデータ・ソースを持つ IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのログイン名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

Interaction History システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキ ーマの名前。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | 構成 (configuration)

ThresholdValueForResponse

説明

非常に少量のクレジットに関連付けられた刺激を、レポートで表示しないよ うにする必要があります。このプロパティーを使ってそれらの小さなクレジ ットを除去することにより、レポートが過大になることを回避できます。

レスポンスのクレジットがこのプロパティーによって設定されたしきい値よ りも低い値となるコンタクトは、レポートに含められません。代わりに、こ のクレジットは、このレスポンスのクレジットを受け取るのに適した他のコ ンタクトに配布されます。

デフォルト値

0.05

初期 ETL の開始日 (MM-DD-YYYY)

説明

このプロパティーは、インポートされるレコードの最も早い日付を設定しま す。これは Campaign、Interact、および eMessage からの最初のデータ・イ ンポートにのみ適用されます。

日付値を MM-DD-YYYY 形式で入力してください。

このプロパティーの値が設定されない場合、将来の日付である場合、または 形式が正しくない場合には、システム・デフォルトとして 90 日前の日付が 使用されます。

デフォルト値

[変更してください]

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | CoreMetrics

このカテゴリーのプロパティーは、それぞれのパーティションで以下の詳細情報を 指定します。

- Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Coremetrics がアップロードする FTP サーバーを指定します。
- Interaction History で使用するためにエクスポートされた IBM Coremetrics データ を指定します。

FTP ルート・ディレクトリー

説明

Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Coremetrics がアップロードする FTP サーバー上のディレクトリーを指定します。

デフォルト値

[変更してください]

FTP サーバー

説明

Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Coremetrics がアップロードする FTP サーバーの名前または IP アドレスを 指定します。

デフォルト値

[変更してください]

FTP ポート

説明

FTP サーバーが listen するポートを指定します。

デフォルト値

21

データ・ソース・ユーザー名

説明

IBM Unica Marketing ユーザー・アカウントのログイン名に設定します。こ れは、Interaction History 用にエクスポートされるデータを IBM Coremetrics がアップロードする FTP サーバーの資格情報を保持するデータ・ソースを 持つユーザー・アカウントです。

デフォルト値

[変更してください]

CoreMetrics クライアント ID

説明

この値は、会社に割り当てられた固有の IBM Coremetrics クライアント ID に設定します。

デフォルト値

[変更してください]

フィード名

説明

このプロパティーは内部的に使用されるため、変更してはなりません。

ステージング・ディレクトリー

説明

このプロパティーは、Interaction History がインストールされているマシン 上のディレクトリー名に設定してください。データ・インポートの際に、 IBM Coremetrics データ・フィードがこのディレクトリーに一時的に保管さ れます。

デフォルト値

[変更してください]

コンタクトのコスト

説明

IBM Coremetrics に記録された各コンタクトのコストを指定します。

デフォルト値

0

レスポンスのコスト

説明

IBM Coremetrics に記録された各レスポンスのコストを指定します。

デフォルト値

0

デフォルト・チャネル

説明

このプロパティーは、Interaction History レポートで Web チャネルに付与 される名前を指定します。 Interaction History 設定ページでチャネルをマッ プするときには、Web チャネルに同じ名前を付ける必要があります。

デフォルト値

[変更してください]

オーディエンス・レベル名

説明

Campaign でオーディエンス・レベルとして使用される名前。このレベルか らコンタクト履歴およびレスポンス履歴に使用されます。使用できるオーデ ィエンス・レベルは 1 つだけです。

デフォルト値

[変更してください]

デフォルト・セル名

説明

IBM Coremetrics レスポンスを含むセグメントに割り当てる名前。これは、 セグメントによってデータをフィルター処理する Interaction History レポー トで使われます。

デフォルト値

[変更してください]

オーディエンス・マッピングのソース

説明

変換テーブルがフラット・ファイルであるかデータベース・テーブルである かを示すフラグ。

デフォルト値

File

有効な値

File | Table

変換テーブルのデータ・ソース

説明

変換テーブルに接続する JDBC データ・ソースの名前。この JDBC デー タ・ソースは、Interaction History が配置される Web アプリケーション・ サーバーにおいて作成されます。

AudienceIDMappingSrc プロパティーが **Table** に設定されている場合にの み使われます。

デフォルト値

[変更してください]

変換テーブル名

説明

IBM Coremetrics キーを Campaign オーディエンス・キーに変換するために 使用している変換テーブルの名前を指定します。AudienceIDMappingSrc プ ロパティーが Table に設定されている場合にのみ使用します。

デフォルト値

[変更してください]

変換テーブルの自動増分項目

説明

タイプが自動増分数である変換テーブル内の列の名前。 Interaction History はこの列を使用して、この表に追加された新しいレコードはどれかを判別します。

初めてインポートが実行されるとき、Interaction History は使用可能なすべ てのデータをインポートします。「変換テーブルの自動増分項目」プロパテ ィーが設定されると、以降のインポートでは、Interaction History は新しい コンタクトだけをインポートします。この列が指定されない場合は、毎回す べてのレコードがインポートされます。これにより、パフォーマンスが遅く なることがあります。

AudienceIDMappingSrc プロパティーが **Table** に設定されている場合にの み使われます。

デフォルト値

定義されていません

CMRegIdColumn

説明

IBM Coremetrics 登録 ID を保持する変換テーブル内の列の名前。 AudienceIDMappingSrc プロパティーが Table に設定されている場合にの み使われます。

デフォルト値

定義されていません

CampaignColumn[n]

説明

これらのプロパティーは 5 つあります (CampaignColumn1、 CampaignColumn2、など)。それらに相当する変換テーブル内の列には、対応 するプロパティーがあります (TTColumn1、TTColumn2、など)。

 Campaign でのオーディエンス・レベルが複合オーディエンス・レベルで はない場合、Campaign オーディエンス・レベルを保持するデータベース 列の名前に CampaignColumn1 を設定してください。 TTColumn1 を、 Campaign オーディエンス・レベルを保持する変換テーブル内の列の名前 に設定します。

 複数の列から構成される複合オーディエンス・レベルの場合、必要な数だけ CampaignColumn および TTColumn プロパティーを使用してください (オーディエンス・レベルの各部分に対して 1 つのペア)。

例えば、custid と emailid の 2 つの列で構成される複合オーディエン ス・レベルが Campaign にあるとします。

このケースでは、Campaign オーディエンス・レベルの各部分を保持する変換テーブルの部分は、例えば次のようになります。

表 20. 変換テーブルでのマッピング例

変換テーブルの列	Campaign オーディエンス列
CampAud1	custid
CampAud2	emailid

構成プロパティーを次のように設定することができます。

- CampaignColumn1: custid
- TTColumn1: CampAud1
- CampaignColumn2: emailid
- TTColumn2: CampAud2

AudienceIDMappingSrc プロパティーが **Table** に設定されている場合にの み使われます。

デフォルト値

定義されていません

TTColumn[n]

説明

これらのプロパティーは 5 つあります (TTColumn1、TTColumn2 など)。これ らのプロパティーを設定する方法については、CampaignColumn[n] を参照し てください。

AudienceIDMappingSrc プロパティーが **Table** に設定されている場合にの み使われます。

デフォルト値

定義されていません

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | CampaignAndInteract

このカテゴリーのプロパティーは、このパーティションにおける Campaign と Interact のデータ・ソースを指定します。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリーが含まれます。

データベース・タイプ

説明

```
Interaction History | パーティション | パーティション[n] |
CampaignAndInteract | dataSource プロパティーは、このパーティション
の Campaign システム・テーブルのデータベース・タイプを指定します。
```

デフォルト値

SQLSERVER

有効な値

SQLSERVER、DB2、ORACLE

キャンペーン DSN

説明

このプロパティーは、以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが SQLServer の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に 設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが DB2 の場合、DB2 イ ンスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが Oracle の場合、 tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[変更してください]

データ・ソース・ユーザー名 (Datasource User Name)

説明

Campaign システム・テーブル・データベースまたはスキーマのデータベー ス資格情報を保持するデータ・ソースを持つ IBM Unica Marketing ユーザ ー・アカウントのログイン名。

デフォルト値

[変更してください]

キャンペーン DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

Campaign およびシステム・テーブルを保持するスキーマのデータベースが DB2 である場合にのみ、このプロパティーを設定してください。その場合 には、DB 名に設定します。

デフォルト値

[変更してください]
Interaction History | パーティション | パーティション[n] | eMessage

このカテゴリーのプロパティーは、このパーティションにおける eMessage デー タ・ソースを指定します。

このカテゴリーのデータベース・タイプ、DSN、およびログインのプロパティーに 設定する値は、eMessage と Campaign テーブルが異なるデータベース内またはスキ ーマ内にある場合を除いて、多くの場合 Interaction History | パーティション | パ ーティション[n] | CampaignAndInteract カテゴリーの同等のプロパティーに設定す る値と同じです。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリーが含まれます。

データベース・タイプ

説明

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | eMessage | type プロパティーは、このパーティションの eMessage システム・テー ブルのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

有効な値

SQLSERVER、DB2、ORACLE

eMessage DSN

説明

このプロパティーは以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが SQLServer の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に 設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが DB2 の場合、DB2 イ ンスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが Oracle の場合、 tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[変更してください]

データ・ソース・ユーザー名

説明

eMessage システム・テーブル・データベースまたはスキーマのデータベー ス資格情報を保持してデータ・ソースを持つ IBM Unica Marketing ユーザ ー・アカウントのログイン名に設定します。

デフォルト値

[変更してください]

eMessage DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

eMessage システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキーマが DB2 である場合にのみ、このプロパティーを設定します。その場合は、DB 名に設定します。

デフォルト値

[変更してください]

デフォルト・チャネル

説明

このプロパティーは、Interaction History レポートで電子メール・チャネル に付与される名前を指定します。 Interaction History 設定ページでチャネル をマップするときには、電子メール・チャネルに同じ名前を付ける必要があ ります。

デフォルト値

Email

eMessage コンタクト・コスト

説明

このプロパティーは、このパーティションにおける各電子メール・コンタク トのコストを指定します。

デフォルト値

0

eMessage レスポンス・コスト

説明

このプロパティーは、このパーティションの電子メールによる各レスポンスのコストを指定します。

デフォルト値

0

eMessage URL 処理パラメーター

説明 処理コードを保持するために eMessage で使用されるパラメーターの名前。

デフォルト値

[変更してください]

Interaction History | パーティション | パーティション[n] | Reports

Analysis_Report_Folder

このプロパティーは、レポートで使用する、Cognos 内のフォルダーの名前 を指定します。これは、ご使用のシステムのパーティションごとに異なりま す。デフォルト値に示されている構文を保持してください。ただし、必要で あれば、Interaction History と示されている値をパーティションごとに変 更してください。

デフォルト値

/content/folder[@name='Interaction History']

Attribution Modeler 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Attribution Modeler 構成プロパティーについて取り上げます。

Attribution Modeler | ナビゲーション (navigation)

このカテゴリーのプロパティーは、内部的に使用される、すべてのパーティション に適用される値を指定します。

httpPort

説明

Attribution Modeler がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM Unica 製品間での 通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

Attribution Modeler がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、IBM Unica 製品間での通 信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

IBM Unica Marketing で使用する URL を指定します。これはインストール 時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に 示すように、ドメイン名が含まれることに注意してください。

protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/context-root

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

http://localhost:7001/am

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下のようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/am

logoutURL

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

/logout

displayName

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

Attribution Modeler

AttributionModeler | AMListener

このカテゴリーのプロパティーは、内部的に使用される、すべてのパーティション に適用される値を指定します。

serverHost

説明

Attribution Modeler リスナーがインストールされているマシンの名前または IP アドレスに設定します。

デフォルト値

localhost

logStringEncoding

説明

Attribution Modeler リスナー・ログに使用するエンコードを指定します。

この値は、オペレーティング・システムで使用するエンコードと同じでなけ ればなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定と なります。この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに 書き込まれることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファ イルを削除する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Unica Campaign 管* 理者ガイド 」を参照してください。

systemStringEncoding

説明

このプロパティーは、Attribution Modeler がオペレーティング・システムか ら受け取る値 (例えば、ファイル・システム・パスやファイル名など) のイ ンタープリットに使われるエンコード、および Attribution Modeler がオペ レーティング・システムに値を戻すときに使われるエンコードを指定しま す。通常この値は、ネイティブ (native) に設定する必要があります。複数 のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値には、複数のエンコードをコンマで区切って含めることできます。例 えば、次のようにします。

UTF-8, ISO-8859, CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Unica Campaign 管* 理者ガイド 」を参照してください。

loggingLevel

説明

このプロパティーは、リスナー・ログに記録される情報の量を決定します。 ロギング・レベルを HIGH または ALL に設定すると、パフォーマンスに影 響を与える可能性があることにご注意ください。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW、 MEDIUM、 HIGH、 ALL

serverPort

説明

このプロパティーの値は、Attribution Modeler サーバーが listen するポート を設定します。

デフォルト値

5664

AttributionModeler | パーティション | パーティション[n] | AMFields

numFields

説明 デフォルト値 1

FieldName

説明

デフォルト値

Customer

type

説明

デフォルト値

数値

name

説明 デフォルト値 OfferID

Attribution Modeler | パーティション | パーティション[n]

このカテゴリーのプロパティーは、Attribution Modeler がデータを評価する方法に 影響を与える値を指定します。パーティションごとに、これらのプロパティーから 成る 1 つのセットがあります。

Attribution Modeler の有効化

説明

Attribution Modeler のレスポンス・アトリビューションを、レポートに適用 するかどうかを示すフラグです。このプロパティーを False に設定する と、SIRA、最初の顧客接点、イコール・クレジット・アトリビューション の各方式は無効になります。直接および前回の顧客接点アトリビューション 方式は引き続き有効で、Interaction History を構成するレポートはサポート されます。

デフォルト値

True

対話履歴の最大遅延

このプロパティーによって設定された日数が顧客からのレスポンス後に経過 すると、追加の顧客対話が Attribution Modeler によりスコア設定に使用さ れます。Interaction History にレコードが存在した直近の日付から、このプ ロパティーによって設定された日数をさかのぼった日までの間に発生したレ スポンスは、Attribution Modeler の実行ごとにスコア設定されます。

デフォルト値

10

トレーニング期間

説明

このプロパティーは、各実行時に Interaction History からコンタクトとレス ポンスをプルして Attribution Modeler モデルをトレーニングする日数を、 現在日付から逆算して設定します。

このプロパティーを設定すると、使用するビジネス・モデル、オファーが変 更される頻度、およびマーケティング上の目標に基づいて代表的なサンプル を取得できます。

デフォルト値

40

有効値

任意の整数

Attribution Modeler | パーティション | パーティション[n] | dataSources

このカテゴリーは、初めて Attribution Modeler をインストールするときには空で す。システムのパーティションごとに、構成プロパティーをインポートすることに よって、Attribution Modeler とそのシステム・テーブル間の相互作用のさまざまな 詳細を指定できようにする必要があります。

システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキーマのタイプに応じて、適切な構成プロパティーのセットをインポートします。

この手順は、「Interaction History および Attribution Modeler インストール・ガイ ド」に記載されています。

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign で使用されている同じ名前のプロパティーとそれぞれ同一です。

プロパティーについて、詳しくは「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」 を参照してください (すべての Enterprise 製品の構成プロパティーが説明されてい ます)。

「構成」ページでコンテキスト・ヘルプを使用している場合、「ヘルプ」>「このペ ージのヘルプ」をクリックすると開く最初のランディング・ページで、Campaign の リンクをクリックします。リンクを辿って、Campaign | パーティション | パーテ ィション[n] | dataSources カテゴリーに移動します。開いたページにリストされて いるプロパティーには、Attribution Modeler | パーティション | パーティション[n] | dataSources カテゴリーにリストされているプロパティーが含まれます。

AttributionModeler | パーティション | パーティション[n] | サー バー (server) | エンコード (encoding)

パーティションごとに、これらのプロパティーのいずれか 1 つがあります。

stringEncoding

説明

このプロパティーは、Attribution Modeler によるフラット・ファイルの読み 取り/書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ファイルで使用する エンコードが同じでなければなりません。どこにも構成しないと、フラッ ト・ファイル・エンコードの既定の設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Attribution Modeler のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコ ードされます。

使用する値が暗黙のデフォルト値と同じ UTF-8 であっても、システムに適したエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスです。

注: StringEncoding プロパティーの値を dataSources カテゴリーのデー タ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティーの値が既定 値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性がありま す。dataSources カテゴリーでは、必ず StringEncoding プロパティーを明 示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Unica Campaign 管* 理者ガイド 」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AttributionModeler | パーティション | パーティション[n] | サー バー (server) | ロギング (logging)

このカテゴリーのプロパティーは、Attribution Modeler がロギングを扱う方法に影響を与える値を指定します。パーティションごとに、これらのプロパティーから成る 1 つのセットがあります。

loggingCategories

説明

loggingCategories プロパティーは、 Attribution Modeler サーバー・ロ グ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。このプ ロパティーは、(選択したすべてのカテゴリーに関して) 重大度に基づいてど んなメッセージをログに記録するかを決定する loggingLevels プロパティ ーと連動します。複数のカテゴリーをコンマ区切りリストで指定できます。 特殊カテゴリー all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリーを素早 く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効値

以下のカテゴリーがサポートされます。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

loggingLevel

説明

このプロパティーは、重大度に基づいて、Attribution Modeler サーバー・ロ グ・ファイル AMSvr.log に書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

注:診断のために Attribution Modeler からのロギング出力を最大限取得する には、構成やテストの際に loggingLevels プロパティーを ALL に設定する こともできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実動操 作にはお勧めできない場合があります。

logMaxFileSize

説明

このプロパティーは、Attribution Modeler サーバー・ログ・ファイルに許可 される最大サイズ (バイト単位)を指定します。このサイズに達すると、バ ックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

logMaxBackupIndex

説明

このプロパティーは、Attribution Modeler サーバーのバックアップ・ログ・ファイルのうち最も古いものが削除される前に保持されるバックアップ・ログ・ファイルの数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、 logFileMaxSize プロパティーで指定されたサイズに達するとログ・ファイ ルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である n の場合、ファイル {File.1, …, File.n-1} は {File.2, …, File.n} に名前変更されます。また File は File.1 と名前変 更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい File が作成されます。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ログ・ファイルを作成)

enableLogging

説明

このプロパティーは、このプロパティーが検出される partitions カテゴリ ーで指定されたパーティションのログ記録のオンとオフを切り替えます。

デフォルト値

TRUE

Attribution Modeler | パーティション | パーティション[n] | AdvancedOptions

このカテゴリーのプロパティーは、Attribution Modeler がデータを評価する方法に 影響を与える、すべてのパーティションに適用される値を指定します。

sampleSize

トレーニングに使われる使用可能なレコードのパーセンテージを定義しま す。この値は、0 より大きく 100 より小さい数値 (パーセント) に設定され る必要があります。

デフォルト値

100

randomSeed

説明

ランダム・シードは、Attribution Modeler でレコードのランダムな選択に使われる開始点を表します。

デフォルト値

値は定義されていません。

maxTrainingTime

説明

このプロパティーは、Attribution Modeler がトレーニング自体に費やす最大 時間を指定します (時間単位)。これは、converganceThreshold プロパティ ーで設定された目標に到達するためにトレーニング・プロセスがデータに対 して繰り返し実行される際の制限時間を設定します。この時間制限は、 Attribution Modeler の消費するリソースを管理者が制限するうえで役立ちま す。 SIRA がこのトレーニング時間制限を超えると、監視画面には実行状 態「オーバーラン (Overrun)」が表示されます。

デフォルト値

12

convergenceThreshold

説明

このプロパティーは、あるトレーニング反復の結果とその次のトレーニング 反復の結果とで、どの程度の差を許容するかに関する制限を設定するのに使 用します。この差は応答のパーセンテージとして表現されますが、そのパー センテージで、ある反復から次の反復で結果(ウィニング・オファー)が変 わることが許容されます。

このプロパティーを 0 (ゼロ) に設定すると、あるトレーニング反復の結果 とその次の結果との間で、いかなる変更も許可されなくなります。これは最 も厳格な設定です。このプロパティーを 0 より大きい値に設定すれば、ト レーニングの結果がよりフレキシブルになるのを許容することになります。 基準が緩くなることで、トレーニングの完了が早まる可能性があります。

デフォルト値

3

noiseEliminationThreshold

```
このプロパティーは、将来使用される可能性があるために予約されています。
```

デフォルト値

5

レポート構成プロパティー

レポート作成の場合、IBM Unica Marketing Suite は、サード・パーティーのビジネ ス・インテリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。 Cognos プロパティーを使用して、IBM Unica インストールで使用する IBM Cognos システムを示します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポート作 成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に使用する追加の構成プロパテ ィーがあります。

Reports | 統合 | Cognos [バージョン]

このページには、この IBM Unica システムで使用される IBM Cognos システムの URL および他のパラメーターを指定するプロパティーが表示されます。

統合名

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、IBM Unica Marketing によってレポートを 表示するために使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツール であることを示します。

デフォルト値

Cognos

ベンダー

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパティーで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティーによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<バージョン>

有効

デフォルト値

False

有効な値

True | False

統合クラス名

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティーで指定された アプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を示します。

```
デフォルト値
```

 $\verb|com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration|| \\$

ドメイン

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例えば、myCompanyDomain.com などです。

会社でサブドメインを使用している場合には、この項目の値には該当するサ ブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

1024 文字以下のストリング。

ポータル URL

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「**ドメイン** (**Domain**)」プロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合 にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<*version*>/cgi-bin/ cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で確認できます。

デフォルト値

http://[変更してください]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

有効な値

正しい形式の URL。

ディスパッチ URL

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合 にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch

Cognos Content Manager の既定のポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効な値

正しい形式の URL。

認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Unica Authentication Provider を使用 するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定しま す。

デフォルト値

anonymous

有効な値

- anonymous: 認証が無効であることを意味します。
- authenticated: IBM Unica システムと Cognos システムとの間の通信は マシン・レベルで保護されます。1人のシステム・ユーザーを構成し、 そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、 このユーザーには「cognos_admin」という名前が付きます。
- authenticatedPerUser: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証ネームスペース

説明

読み取り専用。IBM Unica Authentication Provider のネームスペースです。

デフォルト値

Unica

認証ユーザー名

説明

レポート・システム・ユーザーのログイン名を指定します。Unica Authentication Provider を使用するよう Cognos が構成されている場合、 IBM Unica アプリケーションはこのユーザーとして Cognos にログインし ます。このユーザーには IBM Unica Marketing へのアクセス権限も与えら れることに注意してください。

この設定は、「認証モード」プロパティーが authenticated に設定されてい る場合にのみ適用されます。

デフォルト値

cognos admin

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデ ータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証を有効にする

説明

フォーム・ベース認証を有効にするかどうかを指定します。以下のいずれか が該当する場合に、このプロパティーを True に設定します。

- IBM Unica Marketing が IBMCognos アプリケーションと同じドメインに インストールされていない。
- IBM Unica Marketing アプリケーションと IBMCognos インストール済み 環境が同じマシン上にある場合でも、(IBM Unica Marketing アプリケー ションへのアクセスに使われる) 完全修飾ホスト名ではなく、(同じネッ トワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使って IBMCognos へのアクセ スが行われる。

ただし、値が True の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセ スによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBMCognos と IBM Unica Marketing で SSL 通信を使用するように構成されていないと、 機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM Unica Marketing を同じドメインにインストールすべきです。

False

有効な値

True | False

レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成 テーブル/ビュー名

デフォルト値

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成され ることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準または既定の テーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなりま す。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデル にあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなけれ ばなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制限があるストリング。

- 18 文字以下でなければなりません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

次の命名規則を使用する必要があります。

- 名前は英字「UAR」で開始します。
- IBM Unica アプリケーションを表す1 文字のコードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。
- アンダースコアーを追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す1つ以上の文字コードを含めます。
- アンダースコアーで終了します。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。

例えば、UARC_COPERF_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM Unica アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードの リストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU

• 年: YR

レポート | スキーマ| キャンペーン 入力データ・ソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソ ースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブ ルを作成するスクリプトを生成する場合は、このデータ・ソースが存在する 必要があります。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくても、レ ポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプ トを検証することはできません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレ ポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベ ース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー実績

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。既定では、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー(またはテーブル)を生成するように構成されています。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [コンタクト指標 (Contact Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオ ファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト指標を追加する場合 に使用します。

カラム名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」項目で指定した列に関して、レポート 作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

機能

説明

コンタクト・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

入力カラム名

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・ グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成 スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりませ ん。1 つの列はコントロール・グループの指標を表し、もう 1 つの列はタ ーゲット・グループの指標を表します。「コントロール処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを 表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [レスポンス指標 (Response Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマに、レポートに含めるレスポンス 指標を追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」項目で指定した列に関して、レポート 作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

機能

説明

レスポンス・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

入力カラム名

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グル ープが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキ ーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はタ ーゲット・グループのレスポンスを表します。「コントロール処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グ ループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | キャンペーン | パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オ ファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指 標が提供されます。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー・レスポンス内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なレスポンスについて、レスポンス・タイプ 別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキ ーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファ ーの各カスタム・レスポンス・タイプについて、さまざまなコンタクト・カウント を提供します。

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA ResponseHistory

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・レ スポンスによるブレークアウト (Offer Response Breakout) | [レスポンス・タイプ (Response Type)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプを追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「**レスポンス・タイプ・コード**」項目で指定した列に関して、レポート作成 ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

レスポンス・タイプ・コード

説明

指定されたレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コード。この値は、 UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

- レスポンス・タイプ・コードの例を以下に示します。
- EXP (参照)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実現)
- USE (使用)
- USB (購読解除)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タ イプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ

説明

IBM Unica Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを 使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポー トを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タ イプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グル ープのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループ のレスポンス・タイプを表します。「コントロール処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを 表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファーの コンタクト・ステータスの内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なコンタクトについて、コンタクト・ステー タス・タイプ別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートしま す。このスキーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化 されたオファーの各カスタム・コンタクト・ステータス・タイプについて、さまざ まなコンタクト・カウントを提供します。

既定では、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンス・キー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンス・キーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の間にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、コンタ クト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細な コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファーの コンタクト・ステータスの内訳 | [コンタクト・ステータス・コー ド]

カラム名

説明

「**コンタクト・ステータス**」フィールドで指定した列の、レポート・ビュー またはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

コンタクト・ステータス

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前。これは、UA_ContactStatus テー ブルの ContactStatusCode 列に保持される値です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト・ステータス・タイプの例を以下に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ス テータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・キャンペーン属性を レポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「**属性 ID**」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブ ル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CampAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型。

```
デフォルト値
```

StringValue

有効な値

StringValue、 NumberValue、 DatetimeValue

このキャンペーン属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択 します。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボッ クス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・オファー属性をレポ ート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「**属性 ID**」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブ ル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_OfferAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。 デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、 NumberValue、 DatetimeValue

このオファー属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」が Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定されている場合は、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [セル・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・セル属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「**属性 ID**」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブ ル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CellAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue, NumberValue, DatetimeValue

レポート | スキーマ| Interact

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。このページにあるプロパティーを使用して、それらのデータベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定してください。

レポート SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブルを作成するスクリプト を生成する場合は、このページで指定したデータ・ソースが存在する必要がありま す。SQL 生成ツールは、これらのデータ・ソースがなくても、レポート・ビューを 作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはでき ません。

これらのデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート・テー ブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベース・タイプに一致 する必要があることに注意してください。

Interact デザイン・データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定しま す。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact ランタイム・データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact ラーニング・データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ | Interact | 対話実績

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャネル、チャネル・オファー、チ ャネル・セグメント、チャネル・インタラクション・ポイント、インタラクティ ブ・セル、インタラクティブ・セル・オファー、インタラクティブ・セル・インタ ラクション・ポイント、インタラクティブ・オファー、インタラクティブ・オファ ー・セル、インタラクティブ・オファー・インタラクション・ポイントの各レベル において、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ| eMessage

eMessage トラッキング・データ・ソース (JNDI)

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指 定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル 内にあります。レポート SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブル を作成するスクリプトを検証する場合は、このデータ・ソースが存在する必 要があります。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくても、レポ ート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプト を検証することはできません。 このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート・テ ーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベース・タイ プに一致する必要があります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Marketing Operations 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの IBM Unica Marketing Operations 構成プロ パティーについて説明します。

注: Marketing Operations > about カテゴリーのプロパティーは、内部専用なの で、これらの値は編集しないでください。

Marketing Operations

supportedLocales

説明

IBM Unica Marketing Operations のインストール済み環境で使用できるロケールを指定します。実際に使用しているロケールだけをリストしてください。リストされた各ロケールは、サーバー上のメモリーを指定します。使用されるメモリーの量は、テンプレートのサイズと数によって異なります。

初期インストールまたはアップグレードの後にロケールを追加する場合は、 アップグレード・サーブレットを再度実行する必要があります。詳しくは、 アップグレード資料を参照してください。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置 をいったん停止して再起動する必要があります。

デフォルト値

en_US

defaultLocale

説明

IBM Unica Marketing Operationsで、すべてのユーザーに対して表示する、 サポートされているロケールを指定します。ただし、Marketing Operations 管理者によって、特定のユーザーについて明示的にオーバーライドされてい る場合は除きます。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置 をいったん停止して再起動する必要があります。

デフォルト値

en_US

Marketing Operations | Navigation welcomePageURI

IBM Unica Marketing Operations 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部 で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

affiniumPlan.jsp?cat=projectlist

projectDetailpageURI

説明

IBM Unica Marketing Operations 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部 で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

空白

seedName

説明

IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この 値は変更しないでください。

デフォルト値

Plan

type

説明

IBM Unica Marketing アプリケーションによって内部で使用されます。この 値は変更しないでください。

デフォルト値

Plan

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーによって IBM Unica Marketing Operations ア プリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーによって IBM Unica Marketing Operations ア プリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

```
IBM Unica Marketing Operations インストールの URL。
```

デフォルト値

http:// servername:port /plan

logoutURL

説明

内部で使用されます。この値は変更しないでください。

ユーザーがスイート内のログアウト・リンクをクリックすると、IBM Unica Marketing Platform は、この値を使用して、登録済みの各アプリケーション のログアウト・ハンドラーを呼び出します。

デフォルト値

/uapsysservlet?cat=sysmodules&func=logout

displayName

説明

内部で使用されます。

```
デフォルト値
```

Plan

Marketing Operations | About

「**Marketing Operations」>「バージョン情報」**構成プロパティーは、IBM Unica Marketing Operations インストール済み環境に関する情報をリストします。これらの プロパティーを編集することはできません。

displayName

説明

製品の表示名。

デフォルト値

IBM Unica Marketing Operations

releaseNumber

説明

現在インストールされているリリース。

デフォルト値

8.6.0.x.x

copyright

説明

著作権の年。

デフォルト値

2011

os

説明

IBM Unica Marketing Operations がインストールされているオペレーティン グ・システム。

デフォルト値

java

説明

Java の現行バージョン。

デフォルト値

サポート

説明

https://customercentral.unica.com で資料を読み、サポートにお問い合わせください。

デフォルト値

https://customercental.unica.com

appServer

説明

デフォルト値

空白

otherString

```
説明
```

デフォルト値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration

serverType

説明

アプリケーション・サーバーのタイプ。カレンダー・エクスポートに使用さ れます。

デフォルト値

WEBLOGIC

有効な値

WEBLOGIC または WEBSPHERE

usermanagerSyncTime

説明

スケジュールされた IBM Unica Marketing Platform との同期化の時間間隔 を表すミリ秒数。

デフォルト値

10800000 ミリ秒 (3 時間)

firstMonthInFiscalYear

説明

アカウントの会計年度を開始する月に設定します。アカウントの「サマリ ー」タブには、表示専用テーブルが含まれており、これにはアカウントの会 計年度の予算情報が月別にリストされます。このテーブルの最初の月は、こ のパラメーターによって決まります。

1月は0で表されます。会計年度を4月に開始するには、

firstMonthInFiscalYear を 3 に設定します。

デフォルト値

0

有効な値

0から11までの整数

maximumItemsToBeRetainedInRecentVisits

説明

最新リストに保存するアイテムの最大数。

デフォルト値

10

maxLimitForTitleString

説明

ページ・タイトルに表示できる最大の文字数。指定した数よりタイトルが長い場合、IBM Unica Marketing Operations はタイトルを切り取ります。

デフォルト値

40

maximumLimitForBulkUploadItems

説明

同時にアップロードできる添付ファイルの最大数。

デフォルト値

5

workingDaysCalculation

説明

IBM Unica Marketing Operations で期間を計算する方法を制御します。

デフォルト値

すべて

有効な値

- ・ 営業日のみ: 営業日のみを含みます。週末と休日は含まれません。
- ・ 営業日 + 週末:営業日と週末を含みます。休日は含まれません。
- 営業日 + 休日 : すべての営業日と休日を含みます。週末は含まれません。
- すべて:カレンダーのすべての日を含みます。

validateAllWizardSteps

説明

ウィザードを使ってプログラム、プロジェクト、または要求を作成すると き、IBM Unica Marketing Operations は、現行ページの必須フィールドに値 が入力されているかどうかを自動的に検証します。このパラメーターは、 「完了」をクリックしたときに、すべてのページ (タブ)の必須フィールド を Marketing Operations で検証するかどうかを制御します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: Marketing Operations は、ユーザーが開かなかったページ (ワーク フロー、トラッキング、および添付ファイルを除く)の必須フィールドを 検査します。必須フィールドが空白の場合、ウィザードはそのページを開 き、エラー・メッセージを表示します。
- false: Marketing Operations は、ユーザーが開かなかったページにある 必須フィールドを検証しません。

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザーがプロジェクト/要求または承認を保存するときに、変更コメント を追加するようプロンプトを出します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

useForecastDatesInTaskCalendar

カレンダー・ビューにタスクを表示するときに使用する、日付のタイプを指 定します。

デフォルト値

false

有効な値

- true: 予測および実際の日付を使ってタスクを表示します。
- false: 目標の日付を使ってタスクを表示します。

copyRequestProjectCode

説明

プロジェクト・コード (PID) を要求からプロジェクトに引き継ぐかどうか を制御します。このパラメーターを false に設定した場合、プロジェクト と要求では異なるコードが使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

projectTemplateMonthlyView

説明

プロジェクト・テンプレートのワークフローで、月次の表示を許可するかど うかを制御します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

disableAssignmentForUnassignedReviewers

説明

承認のために、作業が役割によってどのように割り当てられるかを指定しま す。disableAssignmentForUnassignedReviewers パラメーターは、ワークフ ロー承認における承認者の割り当てのために、「人物」タブの「役割別に作 業を指定」の動作を制御します。

デフォルト値

false

有効な値

• true:「人物」タブで未割り当てのレビューアーは、新しいステップとし て承認に追加されません。
- 「追加 (Append)」オプション: 役割が割り当てられていない、承認者 に割り当てられた既存の所有者は、変更されません。「人物」タブに 役割が「未割り当て」のレビューアーが存在しても、新しい承認者ス テップは追加されません。
- 「置換」オプション:役割のない、承認者に割り当てられた既存の所有 者は、空白によって置き換えられます。人物タブに役割が「未割り当 て」のレビューアーが存在しても、新しい承認者ステップは追加され ません。
- false:未割り当てのレビューアーは、承認に追加されます。
 - 「追加 (Append)」オプション:承認に役割が定義されていない所有者 割り当てステップがある場合、役割のないすべてのレビューアーは、 承認にレビューアーとして追加されます。
 - 「置換」オプション: 承認の既存の承認者は、「人物」タブ内の未割り
 当て承認者によって置き換えられます。

enableApplicationLevelCaching

説明

アプリケーション・レベルのキャッシュを有効にするかどうかを示します。 キャッシュ・メッセージのマルチキャストが有効でないクラスター化環境で 最良の結果を得るには、Marketing Operations のアプリケーション・レベル のキャッシングをオフにすることを検討してください。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

customAccessLevelEnabled

説明

IBM Unica Marketing Operations でカスタム・アクセス・レベル (プロジェ クト役割)を使用するかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: プロジェクトおよび要求に対するユーザー・アクセスは、オブジ ェクト・アクセス・レベルとカスタム・アクセス・レベル (プロジェクト 役割)に従って評価され、カスタム・タブのタブ・セキュリティーは有効 になります。
- false:プロジェクトおよび要求に対するユーザー・アクセスは、オブジ ェクト・アクセス・レベル (オブジェクトの暗黙の役割)のみに従って評 価され、カスタム・タブのタブ・セキュリティーは無効になります。

enableUniqueIdsAcrossTemplatizableObjects

説明

プログラム、プロジェクト、計画、請求書などのテンプレートから作成され た複数のオブジェクトにまたがって、固有の内部 ID を使用するかどうかを 決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true を使用すると、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクト にまたがって、固有な内部 ID が有効になります。このように、同じテー ブルを 2 つの異なるオブジェクト・タイプに使用して、クロスオブジェ クト・レポートを単純化することができます。
- false では、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにまたが る固有な内部 ID が無効になります。

FMEnabled

説明

「アカウント」、「請求書」、および「予算」の各タブを製品内で表示する かどうかを決める、金融管理モジュールを有効または無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

FMProjVendorEnabled

説明

```
プロジェクト明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメ
ーター。
```

デフォルト値

false

有効な値

true | false

FMPrgmVendorEnabled

説明

```
プログラム明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメー
ター。
```

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | templates templatesDir

説明

これは、XML ファイルに保管されたすべてのプロジェクト・テンプレート 定義を入れておくディレクトリーに設定します。

完全修飾パスを使用してください。

デフォルト値

templates

assetTemplatesFile

説明

資産のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、 templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要があ ります。

デフォルト値

asset_templates.xml

planTemplatesFile

説明

計画のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、 templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要があ ります。

デフォルト値

plan_templates.xml

programTemplatesFile

説明

プログラムのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイル は、templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要 があります。

デフォルト値

program_templates.xml

projectTemplatesFile

説明

プロジェクトのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイ ルは、templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必 要があります。

デフォルト値

project_templates.xml

invoiceTemplatesFile

説明

請求書のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、 templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要があ ります。

デフォルト値

invoice_templates.xml

componentTemplatesFile

説明

マーケティング・オブジェクト・テンプレートのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要があります。

デフォルト値

component_templates.xml

metricsTemplateFile

説明

メトリックのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイル は、templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要 があります。

デフォルト値

metric_definition.xml

teamTemplatesFile

説明

チームのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、 templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要があ ります。

デフォルト値

team_templates.xml

offerTemplatesFile

説明

オファーのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイル は、templatesDir プロパティーで指定したディレクトリーに配置する必要 があります。

デフォルト値

uap_sys_default_offer_comp_type_templates.xml

Marketing Operations | umoConfiguration | attachmentFolders

uploadDir

説明

プロジェクトの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

projectattachments

planUploadDir

説明

```
計画の添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。
```

デフォルト値

planattachments

programUploadDir

説明

```
プログラムの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。
```

デフォルト値

programattachments

componentUploadDir

説明

```
マーケティング・オブジェクトの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。
```

デフォルト値

component attachments

taskUploadDir

説明

タスクの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

taskattachments

approvalUploadDir

説明

承認アイテムを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

approvalitems

assetUploadDir

説明

```
資産を保管するアップロード・ディレクトリー。
```

デフォルト値

assets

accountUploadDir

説明

```
アカウントの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。
```

```
デフォルト値
```

accountattachments

invoiceUploadDir

説明

請求書の添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

invoiceattachments

graphicalRefUploadDir

説明

属性イメージを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

graphicalrefimages

templateImageDir

説明

```
テンプレート・イメージを保管するアップロード・ディレクトリー。
```

デフォルト値

images

recentDataDir

説明

各ユーザーの最新データ (直列化したもの) を保管する一時ディレクトリー。

デフォルト値

recentdata

workingAreaDir

説明

グリッドのインポート時にアップロードされた CSV ファイルを保管する一 時ディレクトリー。

デフォルト値

umotemp

managedListDir

説明

管理対象リストの定義を保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

managedList

Marketing Operations | umoConfiguration| email notifyEMailMonitorJavaMailHost

説明

電子メール通知メール・サーバーの DNS ホスト名か、そのドット形式の IP アドレスを指定するオプションのストリング。組織の SMTP サーバーの マシン名または IP アドレスに設定してください。

IBM Unica Marketing Operationsに、上記のセッション・パラメーターを使用する既存の JavaMail セッションを指定しておらず、代理人 に「完了」のマークが付いている場合は、このパラメーターが必要です。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

有効な電子メール・アドレスに設定します。システムは、通知電子メールを 送信するために使用できる有効な電子メール・アドレスがない場合、このア ドレスを使用して電子メールを送信します。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifySenderAddressOverride

説明

このパラメーターを使用して、通知の REPLY-TO および FROM 電子メー ル・アドレスの標準値を指定します。デフォルトでは、これらのアドレスに はイベント所有者の電子メール・アドレスが設定されます。

デフォルト値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration | markup

IBM Unica Marketing Operations は、添付ファイルのコメントを作成するためのマ ークアップ・ツールを備えています。Adobe Acrobat マークアップまたはネイティ ブの Marketing Operations マークアップを使用できます。このカテゴリーのプロパ ティーを使用して、使用するオプションを構成してください。

markupServerType

説明

使用するマークアップ・オプションを決定します。

デフォルト値

МСМ

有効な値

 SOAP を使用すると、PDF 文書内のマークアップを編集および表示することができます。Adobe Acrobat Standard または Professional がマークアップに必要です。これを指定した場合、ユーザーは Web ネイティブ Marketing Operations 方式によって Web ブラウザー内で作成されたマークアップを表示できません。

SOAP を指定した場合は、markupServerURL パラメーターと useCustomMarkup パラメーターも構成する必要があります。

- MCM を指定すると、 Marketing Operations マークアップ方式が有効になり、ユーザーは Web ブラウザー内でマークアップを編集および表示できます。これを指定した場合、ユーザーは、以前に Adobe Acrobat を使用して PDF で作成されたマークアップを編集または表示できません。
- 空白の場合、マークアップ機能は無効になり、「マークアップの表示/追加」リンクは表示されません。

markupServerURL

説明

markupServerType = SOAP に依存します。

Web アプリケーション・サーバーが listen するために使用するポート番号 も含め、マークアップ・サーバーをホストするコンピューターの URL に設 定します。この URL には、完全修飾ホスト名が含まれている必要がありま す。

デフォルト値

http://[SERVER]:[PORT]/plan/services/collabService?wsdl

useCustomMarkup

説明

Windows ユーザーが、「Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)」ボタンを使用してマークアップ・コメントを送受信できるかどうかを決定します。

デフォルト値

True

有効な値

 true: Windows ユーザーは、「Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)」ボタンを使用してのみ、マークアップ・コメントを 送受信することができます。クライアント・サイド Acrobat インストー ルの javascript フォルダーに、UM0_Markup_Collaboration.js ファイルが 置かれている必要があります。

markupServerType = SOAP に依存します。

false: Windows ユーザーは、Marketing Operations のカスタムの「コメントを送信 (Send Comments)」ボタンを使用してのみ、マークアップ・コメントを送受信することができます。「Acrobat」ボタンを使用することはできず、IBM Unica Marketing Operationsの「コメント」ツールバーが有効になるように Acrobat を構成する必要があります。PDF ファイルのレビューについて詳しくは、「IBM Unica Marketing Operations ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

instantMarkupFileConversion

説明

true の場合、IBM Unica Marketing Operations は PDF 添付ファイルのイメ ージへの変換を、ユーザーがアイテムをマークアップ用に初めて開いたとき に行うのではなく、それらの添付ファイルがアップロードされると同時に行 います。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfigurations | grid gridmaxrow

説明

グリッドに取り出す最大行数を定義するオプションの整数。デフォルトの -1 では、すべての行が取り出されます。

デフォルト値

-1

reloadRuleFile

説明

グリッド検証プラグインを再ロードする必要があるかどうかを示す、オプションのブール値パラメーター。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

gridDataValidationClass

説明

カスタム・グリッド・データ検証クラスを指定するオプション・パラメータ ー。指定しなかった場合は、グリッド・データの検証にデフォルトの組み込 みプラグインが使用されます。

デフォルト値

空白

tvcDataImportFieldDelimiterCSV

説明

グリッドへのインポート中に、データの構文解析に使用する区切り記号。デ フォルトはコンマ (,) です。

デフォルト値

, (コンマ)

maximumFileSizeToImportCSVFile

説明

TVC 用のコンマ区切りデータをインポートするときに、アップロードでき る最大ファイル・サイズを MB 単位で表します。

デフォルト値

0 (無制限)

maximumRowsToBeDisplayedPerPageInGridView

説明

グリッド・ビューで、1ページに表示される行数を指定する整数パラメーター。

デフォルト値

100

有効な値

正の整数

griddataxsd

説明

グリッド・データ XSD ファイルの名前。

デフォルト値

griddataschema.xsd

gridpluginxsd

説明

グリッド・プラグイン XSD ファイルの名前。

デフォルト値

gridplugin.xsd

gridrulesxsd

説明

グリッド・ルール XSD ファイルの名前。

```
デフォルト値
```

gridrules.xsd

Marketing Operations | umoConfiguration | workflow hideDetailedDateTime

説明

```
タスク・ページの詳細な日時に関する、オプションの表示/非表示パラメー
ター。
```

デフォルト値

false

有効な値

true | false

daysInPastRecentTask

説明

このパラメーターは、タスクを「最新」のタスクと見なす期間を決定しま す。タスクが「アクティブ」であり、過去 X 日未満に開始されたか、タス クの「目標の終了日」が今日と過去の X 日との間である場合、そのタスク は最新のタスクとして表示されます。

デフォルト値

14

有効な値

正の整数

daysInFutureUpcomingTasks

説明

このパラメーターは、次回タスクを検索する今後の日数を決定します。タス クが今後 daysInFutureUpcomingTasks 日以内に開始されるか、現在日付の 前に終了しない場合、それは次回タスクです。

デフォルト値

有効な値

正の整数

beginningOfDay

説明

営業日の開始時間。このパラメーターは、部分的な期間を使用してワークフ ロー内の日時を計算するために使用されます。

デフォルト値

9 (午前 9 時)

有効な値

0から12までの整数

numberOfHoursPerDay

説明

1 日の時間数。このパラメーターは、部分的な期間を使用してワークフロー 内の日時を計算するために使用されます。

デフォルト値

8

有効な値

1から24までの整数

mileStoneRowBGColor

説明

ワークフロー・タスクの背景色を定義します。値を指定するには、色を表す 6 文字の 16 進コードの前に # 文字を挿入します。例えば、#0099CC のよ うにします。

デフォルト値

#DDDDDD

Marketing Operations | umoConfiguration | integrationServices

enableIntegrationServices

説明

サード・パーティー・ユーザーが Web サービスおよびトリガーを使用して IBM Unica Marketing Operations 機能にアクセスするために使用できる、統 合サービス・モジュールを有効または無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

integrationProcedureDefinitionPath

説明

```
カスタム・プロシージャー定義 XML ファイルへの、オプションの完全フ
ァイル・パス。
```

デフォルト値

[PLAN_HOME]/devkits/integration/examples/src/procedure/procedureplugins.xml

integrationProcedureClasspathURL

説明

カスタム・プロシージャーのクラスパスへの URL。

デフォルト値

file://[PLAN_HOME]/devkits/integration/examples/classes/

Marketing Operations | umoConfiguration | campaignIntegration

defaultCampaignPartition

説明

IBM Unica Marketing Operations を IBM Unica Campaign と統合する場合、このパラメーターはプロジェクト・テンプレートで campaign-partition-id が定義されていない場合にデフォルトの Campaign パ ーティションを指定します。

デフォルト値

partition1

webServiceTimeoutInMilliseconds

説明

Web サービス統合 API 呼び出し用に追加されます。このパラメーターは、 Web サービス API 呼び出しのタイムアウトとして使用されます。

デフォルト値

1800000 ミリ秒 (30 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | reports reportsAnalysisSectionHome

説明

```
分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。
```

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Plan']

reportsAnalysisTabHome

説明

```
分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。
```

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Plan - Object Specific Reports']

cacheListOfReports

説明

このパラメーターは、オブジェクト・インスタンスの分析ページで、レポートのリストのキャッシュを有効/無効にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | invoiceRollup invoiceRollupMode

説明

ロールアップの発生方法を指定します。許容される値は、以下のとおりで す。

デフォルト値

immediate

有効な値

- immediate: 請求書に PAID のマークが付くたびに、ロールアップが発生 します。
- schedule: ロールアップはスケジュール・ベースで発生します。

このパラメーターを schedule に設定した場合、システムは以下のパラメ ーターを使用してロールアップの発生時点を決定します。

- invoiceRollupScheduledStartTime
- invoiceRollupScheduledPollPeriod

invoiceRollupScheduledStartTime

説明

invoiceRollupMode が schedule の場合、このパラメーターはロールアップ が発生するポーリング期間を秒単位で指定します。

invoiceRollupMode が immediate の場合、このパラメーターは使用されません。

デフォルト値

3600 (1 時間)

invoiceRollupScheduledPollPeriod

説明

invoiceRollupMode が schedule の場合、このパラメーターは以下のように 使用されます。

- このパラメーターに値 (11:00 pm など) が入っている場合、この値はス ケジュールが開始される開始時刻です。
- このパラメーターが未定義の場合、ロールアップ・スケジュールはサーバーの起動時に開始されます。

invoiceRollupMode が immediate の場合、このパラメーターは使用されま せん。

デフォルト値

Marketing Operations | umoConfiguration | database fileName

説明

JNDI 検索を使用してデータ・ソースをロードするための、ファイルへのパス。

デフォルト値

plan_datasources.xml

sqlServerSchemaName

説明

使用するデータベース・スキーマを指定します。このパラメーターは、IBM Unica Marketing Operations データベースに SQL Server を使用している場合にのみ適用されます。

デフォルト値

dbo

thresholdForUseOfSubSelects

説明

ここで指定したレコード数を超えると、(リスト・ページの) SQL の IN 節 で、IN 節内の実際のエンティティー ID の代わりにサブクエリーを使用す る必要があります。このパラメーターを設定すると、大量のアプリケーショ ン・データがある IBM Unica Marketing Operations インストール済み環境 のパフォーマンスが向上します。パフォーマンスの問題が発生した場合以外 は、この値を変更しないことがベスト・プラクティスです。このパラメータ ーがないかコメント化されている場合、データベースは、しきい値が非常に 大きな値に設定された場合と同じように動作します。

デフォルト値

3000

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

```
このパラメーターは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルなクエ
リーについて、resultset フェッチ・サイズを指定します。
```

デフォルト値

0

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルなクエ リーについて、resultset の最大サイズを指定します。

デフォルト値

-1

useDBSortForAllList

説明

このパラメーターは、すべての IBM Unica Marketing Operations リスト・ ハンドラーを構成するときに使用されます。特定のリストのページング動作 をオーバーライドするには、USE_DB_SORT_FOR_[MODULE]_LIST を使用しま す。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に1ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForPlanList

説明

このパラメーターは、計画リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に1ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForProjectList

説明

このパラメーターは、プロジェクト・リスト・ハンドラーを構成するために 使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に1ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForTaskList

説明

このパラメーターは、タスク・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に1ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForProgramList

説明

このパラメーターは、プログラム・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- false: すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForApprovalList

説明

このパラメーターは、承認リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForInvoiceList

説明

このパラメーターは、請求書リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

useDBSortForAlerts

説明

このパラメーターは、アラート・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

デフォルト値

true

有効な値

- true: データベースからリスト・データを一度に1ページ取得します。
- false : すべてのリスト・データをキャッシュします。

Marketing Operations | umoConfiguration | listingPages listItemsPerPage

説明

1 つのリスト・ページに表示するアイテム (行)の数を指定します。この値 は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

10

listPageGroupSize

説明

リスト・ページでリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを 指定します。例えば、ページ 1-5 は、1 つのページ・グループです。この 値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

システムがカレンダーに表示するオブジェクト(計画、プログラム、プロジェクト、またはタスク)の最大数。このパラメーターを使用して、ユーザーに対するカレンダーの表示を、特定のオブジェクト数だけに制限します。数値0は、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

listDisplayShowAll

説明 リスト・ページに「すべて表示」リンクを表示します。 デフォルト値 false 有効な値 true | false

Marketing Operations | umoConfiguration | objectCodeLocking

enablePersistentObjectLock

説明

IBM Unica Marketing Operations をクラスター化環境に配置した場合は、 enablePersistentObjectLock を true に設定する必要があります。このオ ブジェクト・ロック情報は、データベース内で持続されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

lockProjectCode

説明

ユーザーが「プロジェクト・サマリーの編集 (Project Summary Edit)」タ ブでプロジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定しま す。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockProgramCode

説明

ユーザーが「プログラム・サマリーの編集 (Program Summary Edit)」タブ でプログラム・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

• true: ロックを使用可能にします

• false: ロックを使用不可にします

lockPlanCode

説明

ユーザーが「**計画サマリーの編集** (Plan Summary Edit)」タブで計画コード または PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockMarketingObjectCode

説明

ユーザーが「**マーケティング・オブジェクト・サマリーの編集** (Marketing Object Summary Edit)」タブでマーケティング・オブジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

lockAssetCode

説明

ユーザーが「**資産サマリーの編集 (Asset Summary Edit)**」タブで資産コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

デフォルト値

true

有効な値

- true: ロックを使用可能にします
- false: ロックを使用不可にします

Marketing Operations | umoConfiguration | thumbnailGeneration

trueTypeFontDir

説明

True Type フォントが置かれているディレクトリーを指定します。このパラ メーターは、Aspose を使用する非 Windows プラットフォームでサムネー ルを生成するために必要です。Windows インストール済み環境の場合、こ のパラメーターはオプションです。 デフォルト値

空白

coreThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッド用に、スレッド・プール内に保持される永続スレッドの数を指定します。

デフォルト値

5

maxThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッド用にスレッド・プール内で許容され る、スレッドの最大数を指定します。

デフォルト値

10

threadKeepAliveTime

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのキープアライブ時間を構成するた めのパラメーター。

デフォルト値

60

threadQueueSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのスレッド・キュー・サイズを構成 するためのパラメーター。

デフォルト値

20

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications notifyPlanBaseURL

説明

ホスト名とポート番号を含む、IBM Unica Marketing Operations の配置の URL。Marketing Operations は、この URL を、Marketing Operations 内の他 の情報へのリンクが入っている通知に組み込みます。

注: メール・クライアントと IBM Unica Marketing Operations サーバーを同 じマシン上で実行している場合以外は、「localhost」をサーバー名として使 用しないでください。

デフォルト値

notifyDelegateClassName

説明

サービスによってインスタンス化される代理実装の完全修飾 Java クラス 名。このクラスは、com.unicapcorp.afc.service.IServiceImpl インターフ ェースを実装する必要があります。指定しなかった場合は、デフォルトでロ ーカル実装になります。

デフォルト値

空白

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了したかどうかを示す、オプションのブール値ストリング。指 定しなかった場合は、デフォルトで「true」になります。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

notifyEventMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations製品が開始された後、通知モニターが初め て処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケールの java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定します。例え ば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:45 PM になります。

デフォルト値

Marketing Operations が開始された直後。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

イベント・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるお およその時間を、秒単位で定義します。ポーリング期間とポーリング期間の 間、イベントはイベント・キューに累積されます。時間が短いほど通知の処 理が早く行われますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があり ます。デフォルト値を消去して、値を空白のままにした場合、ポーリング期 間はデフォルトのやや短めの時間(通常では1分未満)になります。

デフォルト値

5

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除するイベントの数を指定します。イベント・モニター は、この値で指定された増分を単位として、イベント・キューから何もなく なるまでイベントを削除し続けます。

注: この値を 1 以外に設定すると、イベント処理のパフォーマンスが向上 する場合がありますが、削除されたすべてのイベントが処理される前にサー ビス・ホストがダウンした場合は、イベントを失うおそれがあります。

デフォルト値

10

alertCountRefreshPeriodInSeconds

説明

アラート・カウントの、システム全体のアラート・カウント更新期間を秒単 位で指定します。このカウントは、ユーザーのログイン後にナビゲーショ ン・バーの上部に表示されます。

注: マルチユーザー環境では、更新期間を変更してポーリングを高速にする と、パフォーマンスに影響が出る場合があります。

デフォルト値

180 (3 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | email

notifyEMailMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、電子メール・モニタ ーが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケ ールの java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定します。 例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になりま す。

デフォルト値

IBM Unica Marketing Operations が開始された直後。

notifyEMailMonitorPollPeriod

説明

電子メール・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる おおよその時間を、秒単位で定義します。

注: イベントと同様に、ポーリング期間とポーリング期間の間、電子メール はキューに累積されます。ポーリング時間が短いほど電子メールが早く送信 されますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があります。

デフォルト値

60

notifyEMailMonitorJavaMailSession

説明

電子メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名。指定しなかった場合、代理人に「完了」のマークが付いていると きは、IBM Unica Marketing Operationsがセッションを作成できるよう、 JavaMail ホスト・パラメーターを指定する必要があります。

デフォルト値

空白

notifyEMailMonitorJavaMailProtocol

説明

電子メール通知に使用する、電子メール・サーバーのトランスポート・プロ トコルを指定します。

デフォルト値

smtp

notifyEMailMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除する電子メールの数を指定します。電子メール・モニ ターは、電子メール・キューから何も残らなくなるまで、付加的に電子メー ルの削除を続行します。

注:1 以外の値を設定すると、電子メールの処理パフォーマンスが向上する 場合がありますが、削除されたすべての電子メールが処理される前にサービ ス・ホストがダウンした場合は、電子メールを失うおそれがあります。

デフォルト値

10

notifyEMailMonitorMaximumResends

説明

最初の送信の試みが失敗した電子メール・メッセージについて、システムが そのメッセージの送信を試みる最大回数を指定します。送信に失敗した場 合、電子メールは、既にこのパラメーターで許容された最大試行回数に到達 した場合を除いて、キューに書き戻されます。

例えば、電子メール・モニターが 60 秒ごとにポーリングを行うように設定 されている場合、maximumResend を 60 に設定すると、電子メール・モニタ ーは 1 分ごとに (1 回のポーリングで 1 回) 最大 1 時間、再試行します。 値を 1440 (24x60) に設定すると、1 分ごとに最大 24 時間、再試行が行わ れます。

デフォルト値

1440

showUserNameInEmailNotificationTitle

説明

IBM Unica Marketing Operations の通知システムとアラート・システムで、 電子メール通知の「送信者 (From)」フィールドにユーザー名を含めるかど うかを指定します。

注: この設定は、IBM Unica Marketing Operations の通知システムとアラート・システムによって送信される電子メールにのみ適用されます。

デフォルト値

false

有効な値

- true: Marketing Operations はユーザー名をメッセージのタイトルに付加 し、両方を電子メールの「送信者 (From)」フィールドに表示します。
- false: Marketing Operations は「送信者 (From)」フィールドにメッセージのタイトルだけを表示します。

notifyEMailMonitorJavaMailDebug

説明

```
JavaMail デバッグ・モードを設定するかどうかを指定します。
```

デフォルト値

false

有効な値

- true : JavaMail デバッグを有効にします。
- false:デバッグ・トレースを無効にします。

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | project

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、プロジェクト警告モ ニターが初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在の ロケールの java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定しま す。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM にな ります。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニターは 作成された直後に開始されます。

デフォルト値

10:00 PM

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

プロジェクト警告モニターおよびプログラム警告モニターが、ポーリングと ポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義しま す。

デフォルト値

60

notifyProjectAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プロジェクトの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユー ザーへの開始通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プロジェクトの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユー ザーへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

タスクの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの開始通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

タスクの開始日の何日後に、タスクが開始されていないことについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの通知を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、タスクが終了していないことについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの通知を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

説明

タスク・マイルストーンの開始日の何日後に、IBM Unica Marketing Operations で通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | projectRequest

notifyRequestAlarmMonitorLateCondition

説明

要求が遅れていることについて、IBM Unica Marketing Operations で通知を 送信するまでの日数を定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyRequestAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

要求の終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの 終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | program

notifyProgramAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プログラムの開始日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザ ーへの通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyProgramAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プログラムの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザ ーへの終了通知の送信を開始するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | marketingObject

notifyComponentAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの開始日の何日前に、 IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1

notifyComponentAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの終了通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | approval

notifyApprovalAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations製品が開始された後、承認警告モニターが 初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケール の java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定します。例え ば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。 デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニターは作成 された直後に開始されます。

注:最良の結果を得るには、警告モニターがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにして ください。

デフォルト値

9:00 PM

notifyApprovalAlarmMonitorPollPeriod

説明

承認警告モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおお よその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyApprovalAlarmMonitorLateCondition

説明

承認の開始日の何日後に、承認が遅れていることについて、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの通知を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

notifyApprovalAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

承認の終了日の何日前に、IBM Unica Marketing Operations でユーザーへの 終了通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | asset

notifyAssetAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、資産警告モニターが 初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケール の java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定します。例え ば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になります。 デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニターは作成 された直後に開始されます。

注:最良の結果を得るには、警告モニターがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにして ください。

デフォルト値

11:00 PM

notifyAssetAlarmMonitorPollPeriod

説明

資産警告モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる時間 を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyAssetAlarmMonitorExpirationCondition

説明

IBM Unica Marketing Operations で、資産の有効期限が切れそうなことをユ ーザーに通知する必要がある場合、資産の有効期限が切れるまでの日数を指 定します。

```
注: この値が -1 の場合、Marketing Operations は有効期限の確認を行いま
せん。
デフォルト値
3
```

Marketing Operations | umoConfiguration | notifications | invoice

notifyInvoiceAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Unica Marketing Operations 製品が開始された後、請求書警告モニター が初めて処理を開始する必要がある時点を指定します。値は、現在のロケー ルの java.text.DateFormat クラスの短縮形に従った形式で指定します。例 えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 PM になりま す。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニターは作成 された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、警告モニターがオフピーク時間に開始される ように開始時刻をずらして構成し、データ処理の負荷が分散されるようにし てください。

デフォルト値

9:00 PM

notifyInvoiceAlarmMonitorDueCondition

説明

IBM Unica Marketing Operations で、ユーザーに対して請求書の支払い期限 が近づいていることの通知を開始する日数を指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

5

Campaign 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Campaign 構成プロパティーについて取り 上げます。

Campaign

これらの構成プロパティーは、ご使用の Campaign インストール環境でサポートされるコンポーネント・アプリケーションとロケールを指定します。

currencyLocale

説明

currencyLocale プロパティーは、表示ロケールに関係なく Campaign Web アプリケーションでの通貨表示方法を制御するグローバル設定です。

重要:(複数ロケール機能が実装されていて、ユーザー指定のロケールに基づいて表示ロケールの変更が行われる場合など)表示ロケールが変更されても、Campaign では通貨変換は行われません。ロケールを切り替えた場合、例えば、米国英語で US\$10.00 である通貨の金額をフランス語ロケールに切り替えた場合、通貨記号はロケールと共に変更されても、通貨の金額は変更されない(10,00)ことを認識しておく必要があります。

デフォルト値

en_US

supportedLocales

説明

supportedLocales プロパティーは、Campaign でサポートするロケールまた は言語ロケールのペアを指定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

defaultLocale

説明

defaultLocale プロパティーは、supportedLocales プロパティーで指定さ れたロケールのうち、Campaign の既定の表示ロケールとするロケールを指 定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインストール する際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

en

acoInstalled

パス

説明

acoInstalled プロパティーは、Optimize がインストールされているかどう かを指定します。

Optimize がインストールされて構成されている場合には、この値を「はい」に設定し、Optimize プロセスがフローチャートで表示されるようにします。値が「true」で Optimize がインストールも構成もされていないと、 プロセスは表示されますが、使用できません (ぼかし表示)。

デフォルト値

false

有効な値

false および true

collaborateInstalled

説明

collaborateInstalled プロパティーは、Distributed Marketing がインストー ルされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストール されて構成されている場合、この値を「true」に設定し、Distributed Marketing 機能が Campaign ユーザー・インターフェースで表示されるよう にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Campaign | Collaborate

このカテゴリーのプロパティーは、Distributed Marketing 構成に関連します。

CollaborateIntegrationServicesURL

説明

```
CollaborateIntegrationServicesURL プロパティーは、Distributed Marketing
のサーバーとポート番号を指定します。この URL は、ユーザーがフローチ
ャートを Distributed Marketing に公開する際に Campaign によって使用さ
れます。
```

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/
CollaborateIntegrationServices/1.0

Campaign | navigation

このカテゴリーの一部のプロパティーは、内部で使用されるため、変更しないでく ださい。

welcomePageURI

説明

welcomePageURI プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に 使用されます。Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

seedName

説明

seedName プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

「Campaign」>「ナビゲーション (navigation)」>「タイプ」プロパティー は、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値は変更 しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

httpPort

説明

このプロパティーは、Campaign Web アプリケーション・サーバーが使用す るポートを指定します。Campaign インストールで既定以外のポートを使用 する場合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

SSL が構成されている場合、このプロパティーは、Campaign Web アプリ ケーション・サーバーがセキュア接続のために使用するポートを指定しま

- す。Campaign インストールで既定以外のセキュア・ポートを使用する場
- 合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

「Campaign」>「ナビゲーション (navigation)」>「serverURL」プロパティーは、Campaign が使用する URL を指定します。Campaign インストール で既定以外の URL を使用する場合、この値を次のように編集しなければな りません。

http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign

serverURLInternal

パス

説明

serverURLInternal プロパティーは、SiteMinder を使用する場合の Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティー が空の場合は、serverURL プロパティーの値が使用されます。SiteMinder を 使用する場合には、この値を、Campaign Web アプリケーション・サーバー の URL に設定する必要があります。次のようにフォーマット設定します。

http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

campaignDetailPageURI

説明

campaignDetailPageURI プロパティーは、IBM アプリケーションが内部的 に使用します。Campaign 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

campaignDetails.do?id=

flowchartDetailPageURI

説明

flowchartDetailPageURI プロパティーは、特定のキャンペーンでフローチャートの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

flowchartDetails.do?campaignID=&id=

offerDetailPageURI

説明

offerDetailPageURI プロパティーは、特定のオファーの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

offerDetails.do?id=

offerlistDetailPageURI

説明

offerlistDetailPageURI プロパティーは、特定のオファー・リストの詳細 へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでく ださい。

デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

displayName

説明

displayName プロパティーは、それぞれの IBM 製品の GUI に表示される ドロップダウン・メニューの Campaign リンクに使用されるリンク・テキス トを指定します。

デフォルト値

Campaign

Campaign | caching

caching カテゴリーのプロパティーは、チャネル、イニシアチブ、キャンペーン、セッション、およびオファー用のキャッシュされたデータが、保持される時間の長さを指定します。

offerTemplateDataTTLSeconds

説明

offerTemplateDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー・テン プレートのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位 で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを 意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

campaignDataTTLSeconds

説明

campaignDataTTLSeconds プロパティーは、システムが Campaign キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

sessionDataTTLSeconds

説明

sessionDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセッションのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間)を秒単位で指定します。値が 空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

folderTreeDataTTLSeconds

説明

folderTreeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがフォルダー・ツリ ーのキャッシュ・データを保持する時間の長さ(存続時間)を秒単位で指定 します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味し ます。
デフォルト値

600 (10 分)

attributeDataTTLSeconds

説明

attributeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー属性のキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。 値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

initiativeDataTTLSeconds

説明

initiativeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがイニシアチブのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

offerDataTTLSeconds

説明

offerDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファーのキャッシュ・ データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の 場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

segmentDataTTLSeconds

説明

segmentDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセグメントのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間)を秒単位で指定します。値が 空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

Campaign | partitions

このカテゴリーには、すべての Campaign パーティション (パーティション1 という名前の既定のパーティションも含みます)を構成するためのプロパティーが含まれています。それぞれの Campaign パーティションに対して 1 つのカテゴリーを作

成する必要があります。このセクションでは、パーティション[n] カテゴリーのプロ パティーについて取り上げます。このカテゴリーは、Campaign で構成するすべての パーティションに適用されます。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | eMessage

このカテゴリーのプロパティーを使用すると、宛先リストの特性を定義したり、 IBM Unica Hosted Services にリストをアップロードするリソースの場所を指定した りできます。

eMessagePluginJarFile

説明

Recipient List Uploader (RLU) として動作するファイルの場所を示す、完全 なパス。この Campaign へのプラグインは、OLT データとそれに関連する メタデータを、IBM によってホストされるリモート・サービスにアップロ ードします。Campaign Web アプリケーション・サーバーをホストするマシ ンのファイル・システムにあるローカル・ディレクトリーの絶対パスを指定 する必要があります。

IBM インストーラーを実行すると、既定のパーティション用のこの設定が インストーラーによって自動的に取り込まれます。追加のパーティションに ついては、管理者が手動でこのプロパティーを構成する必要があります。 eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべて のパーティションに関して RLU に同じ場所を指定する必要があります。

IBM で指示されない限り、この設定は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign Web サーバーをインストールしたマシンのローカル・ディレクト リーの絶対パスです。

defaultSeedInterval

説明

defaultSeedType が Distribute list である場合、シード・メッセージ間 のメッセージ数。

デフォルト値

1000

defaultSeedType

説明

eMessage がシード・アドレスを宛先リストに挿入するために使用する既定のメソッドです。

デフォルト値

Distribute IDS

有効な値

- Distribute IDS 受信者リストのサイズと、使用可能なシード・アドレスの数に基づいて、ID を均等に分散し、シード・アドレスを受信者リスト 全体に均等間隔で挿入します。
- Distribute list すべての defaultSeedInterval ID のシード・アドレ スをメイン・リストに挿入します。使用可能なシード・アドレスのリスト 全体を、指定された間隔で受信者リスト全体に挿入します。挿入点間の間 隔を指定する必要があります。

oltTableNamePrefix

説明

生成されたスキーマ内で、出力リスト・テーブルに使用されます。管理者 は、このパラメーターを定義する必要があります。

デフォルト値

OLT

有効な値

このプレフィックスは、8 文字以下の英数字またはアンダースコアーを含む ことができ、英字で始まる必要があります。

oltDimTableSupport

説明

この構成パラメーターによって制御される機能は、eMessage スキーマで作成された出力リスト表 (OLT) にディメンション表を追加する機能です。ディメンション・テーブルは、電子メールに拡張スクリプトを使用して、電子メール・メッセージ内にデータ・テーブルを作成するために必要です。

デフォルト設定は False です。マーケティング担当者が eMessage プロセ スを使用して受信者リストを定義するときにディメンション・テーブルを作 成できるようにするには、このプロパティーを True に設定する必要があり ます。データ・テーブルの作成および電子メールの拡張スクリプトの使用に ついて詳しくは、「*IBM Unica eMessage* ユーザー・ガイド」を参照してく ださい。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | パーティション | パーティション[n] | reports

これらの構成プロパティーは、レポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリストさ れる、バースト (拡張) されたオファー・レポートの仕様が入っているフォ ルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分 析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して 指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメント・レポートが入っているフォルダ ーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファー・レポートが入っているフォルダー の場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリスト される、バースト (拡張) されたセグメント・レポートの仕様が入っている フォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの 「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用 して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポートの仕様が保管されている ルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指 定します。 デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分 析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーン・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリスト される、バースト (拡張) されたキャンペーン・レポートの仕様が入ってい るフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの 「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用 して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「レポート」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage
Reports']

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

インタラクティブ・チャネル分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フ ォルダー・ストリング。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

可用性

```
このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で
す。
```

Campaign | パーティション[n] | validation

Campaign に同梱されている検証プラグイン開発キット (PDK) を使用すると、サード・パーティーはカスタム検証ロジックを開発し、Campaign で使用することができます。「パーティション[n]」>「検証 (validation)」カテゴリーのプロパティーは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス名、さらにはオプションの構成ストリングを指定します。

validationClass

説明

validationClass プロパティーは、Campaign における検証で使用するクラ ス名を指定します。クラスのパスは、validationClasspath プロパティーで 指定します。クラスは、そのパッケージ名で完全修飾されている必要があり ます。

以下に例を示します。

com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator

サンプル・コードの SimpleCampaignValidator クラスであることを示して います。

このプロパティーは既定では未定義で、Campaign ではカスタム検証は行われません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationConfigString

説明

validationConfigString プロパティーは、Campaign が検証プラグインをロ ードする際にそのプラグインに渡す構成ストリングを指定します。使用する 構成ストリングは、使用するプラグインによって異なる可能性があります。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationClasspath

説明

validationClasspath プロパティーは、Campaign におけるカスタム検証で 使用するクラスのパスを指定します。

次のようにこのパスを指定できます。

値は、完全なパスでも相対パスでもかまいません。絶対パスではない場合、 Campaign を実行しているアプリケーション・サーバーによって動作が異なります。 WebLogic では、ドメイン作業ディレクトリーへのパスが使用されます。このパスは、既定では次のとおりです。

c:¥bea¥user_projects¥domains¥mydomain

 パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合には /、Windows の場合には円 記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグイ ン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末 尾がスラッシュでないと、Campaign では、Java クラスが含まれる JAR ファイルの名前と見なされます。例えば、値 /opt/affinium/campaign/ pdk/lib/validation.jar の場合、UNIX プラットフォーム上のパスで、 プラグイン開発者キットにあるすぐに使用可能な JAR ファイルを指しま す。

このプロパティーは既定では未定義で、このプロパティーは無視されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | audienceLevels | audienceLevel

「パーティション[n]」>「audienceLevels」のカテゴリーには、Campaign において ユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に作成されてデータが設定される サブカテゴリーとプロパティーが含まれています。このカテゴリー内のプロパティ ーを編集しないでください。

パーティション[n] > audienceLevels > audienceLevel カテゴリー内のプロパティー は、オーディエンス・レベル内のフィールドの数とオーディエンス・レベルの名前 を指定します。これらのプロパティーは、Campaign においてユーザーがオーディエ ンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリー内のプロパティーを編 集しないでください。

numFields

説明

このプロパティーは、Campaign の「システム管理」ページで、ユーザーが オーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティーを 編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

audienceName

説明

このプロパティーは、Campaign の「システム管理」ページで、ユーザーが オーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティーを 編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n]

このカテゴリーのプロパティーは、オーディエンス・レベル・フィールドを定義し ます。これらのプロパティーは、Campaign の「システム管理」ページでユーザーが オーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリーのプロパテ ィーは編集しないようにしてください。

type

説明

「パーティション[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevel」>「項目 [n]」>「タイプ」のプロパティーは、Campaign の「システム管理」ページ でユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプ ロパティーを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

name

説明

「パーティション[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevel」>「項目 [n]」>「名前」プロパティーは、Campaign の「システム管理」ページでユ ーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパ ティーを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | dataSources

このカテゴリーに含まれるプロパティーは、Campaign が (独自のシステム・テーブ ルを含む) データベースと対話する方法を構成します。これらのプロパティーは、 Campaign からアクセス可能なデータベース、およびクエリーの構成方法に関する多 くの面を指定します。

Campaign で追加する各データ・ソースは、「パーティション [n]」>「dataSources」>[DATA_SOURCE_NAME] の下のカテゴリーによって表され ます。 注: Marketing Platform において、各パーティションの Campaign システム・テーブ ル・データ・ソースの名前は UA_SYSTEM_TABLES でなければならず、Campaign のどのパーティションについても、「構成」ページに dataSources > UA_SYSTEM_TABLES のカテゴリーが存在していなければなりません。

AccessLibrary

説明

Campaign は、データ・ソースのタイプに従ってデータ・ソース・アクセ ス・ライブラリーを選択します。例えば、Oracle の接続には libora4d.so が使用され、DB2 の接続には libdb24d.so が使用されます。ほとんどの場 合、既定の選択内容が適切です。しかし、Campaign の実際の環境において 既定値が適切でないという場合には、AccessLibrary プロパティーを変更す ることが可能です。例えば、64 ビット Campaign には 2 つの ODBC アク セス・ライブラリーが提供されています。 1 つは unixODBC 実装 (Informix[®] などへのアクセスのために Campaign が使用する libodb4d.so) と互換の ODBC データ・ソースに適するもの、もう 1 つは、DataDirect 実 装 (Teradata などへのアクセスのために Campaign が使用する libodb4dDD.so) と互換のものです。

AIX[®] 用の追加ライブラリー

説明

Campaign には、ODBC Unicode API ではなく ODBC ANSI API をサポー トする AIX ODBC ドライバー・マネージャーのための 2 つの追加ライブ ラリーが含まれています。

- libodb4dAO.so (32 ビットおよび 64 ビット) unixODBC 互換実装用 ANSI 専用ライブラリー
- libodb4dDDAO.so (64 ビットのみ) DataDirect 互換実装用 ANSI 専用 ライブラリー

既定のアクセス・ライブラリーをオーバーライドする必要があると判断した 場合 (一例として、Informix 用の DataDirect ドライバー・マネージャーお よびドライバーを購入した場合)、必要に応じてこのパラメーターを設定し ます (前述の例の場合、既定では libodb4d.so が選択されているところを オーバーライドして libodb4dDD.so にします)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて新 しいテーブルに書き込む際に、Campaign により自動的に作成される別名 を、Campaign がどのように生成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデー タベースのドキュメンテーションを調べて、設定する値がデータベースの最 大 ID 長を超えないものであることを確認してください。 А

AllowBaseJoinsInSelect

説明

Select の処理において使用される (同じデータ・ソースからの) 基本テーブ ルの SQL 結合の実行を Campaign が試みるかどうかを決定します。それを しない場合、それに相当する結合は Campaign サーバーにおいて実行されま す。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowSegmentUsingSQLCase

説明

AllowSegmentUsingSQLCase プロパティーは、Campaign の Segment プロセスにおいて、構成に関する特定の条件が満たされた場合に、複数の SQL ステートメントを統合して単一の SQL ステートメントにするかどうかを指定します。

このプロパティーを TRUE に設定すると、以下の条件のすべてが満たされた 場合に、パフォーマンスが大幅に改善されます。

- セグメントが相互排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルからのものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づくものである。

この場合、Campaign は、セグメンテーションを実行した後、項目ごとのセ グメント処理を Campaign アプリケーション・サーバー上で実行するための 単一の SQL CASE ステートメントを生成します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowTempTables

説明

AllowTempTables プロパティーは、Campaign がデータベース中に一時テー ブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャン ペーンのパフォーマンスが大幅に改善されることがあります。値が TRUE の 場合、一時テーブルが有効です。

ー時テーブルが有効の場合、(例えば Segment プロセスによって) データベースに対してクエリーが発行されるたびに、結果として生成される ID がデ

ータベース中の一時テーブルに書き込まれます。追加のクエリーが発行され ると、Campaign は、データベースから行を取り出すために、その一時テー ブルを使用します。

一時テーブルが有効でない場合、Campaign は、選択された ID をサーバ
 ・メモリー中に保持します。追加のクエリーでは、データベースから ID を取り出して、サーバー・メモリー中の ID との突き合わせが実行されます。

一時テーブルの結合を制御することについて詳しくは、

MaxTempTableJoinPctSelectAll および MaxTempTableJoinPctWithCondition の 説明を参照してください。

ー時テーブルを使用するには、データベースへの書き込むための適切な特権 が付与されていなければなりません。それは、データベースへの接続時に入 力するデータベース・ログイン情報によって決まります。

デフォルト値

TRUE

ASMSaveDBAuthentication

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティーは、Campaign にログインし、それ までログインしたことのないデータ・ソース中のテーブルをマップする際 に、Campaign がユーザー名とパスワードを IBM Unica Marketing に保存す るかどうかを指定します。

このプロパティーを TRUE に設定した場合、Campaign は、データ・ソース へのログイン時にユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトを表 示しません。このプロパティーを FALSE に設定した場合、データ・ソース にログインするたびに、毎回ユーザー名とパスワードを入力するためのプロ ンプトが Campaign によって表示されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

ASMUserForDBCredentials

説明

ASMUserForDBCredentials プロパティーは、Campaign システムのユーザー に割り当てられている IBM Unica Marketing ユーザー名を指定します (Campaign システム・テーブルにアクセスするために必要)。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

BulkInsertBlockSize

説明

```
BulkInsertBlockSize プロパティーは、Campaign がデータベースに一度に
渡すデータ・ブロックの最大サイズを、レコード数として定義します。
```

デフォルト値

100

BulkInsertRequiresColumnType

説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティーは、Data Direct ODBC デー タ・ソースのサポートのためにのみ必要です。 Data Direct ODBC データ・ ソースにおいて、バルク (配列) 挿入機能を使用する場合、このプロパティ ーを TRUE に設定します。その他のほとんどの ODBC ドライバーと互換 にするには、このプロパティーを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

BulkReaderBlockSize

説明

BulkReaderBlockSize プロパティーは、Campaign がデータベースから一度 に読むデータ・ブロックのサイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

2500

ConditionalSQLCloseBracket

説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マ クロ内で、条件付きセグメントの終わりを示すために使用されるブラケット のタイプを指定します。 ConditionalSQLOpenBracket プロパティーと ConditionalSQLCloseBracket プロパティーによって指定されるブラケット で囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用 され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

} (右中括弧)

ConditionalSQLOpenBracket

説明

ConditionalSQLOpenBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マク ロ内で、条件付セグメントの開始を示すために使用されるブラケットのタイ プを指定します。 ConditionalSQLOpenBracket プロパティーと ConditionalSQLCloseBracket プロパティーによって指定されるブラケット で囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用 され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (左中括弧)

ConnectionCacheSize

説明

ConnectionCacheSize プロパティーは、Campaign においてデータ・ソース ごとにキャッシュ中に維持する接続の数を指定します。

既定では N=0 であり、その場合 Campaign は、1 つの操作ごとにデータ・ ソースとの新しい接続を 1 つ確立します。 Campaign で接続キャッシュが 維持されていて、接続の再利用が可能なら、Campaign は、新しい接続を確 立するのではなく、キャッシュに含まれる接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、接続を利用して実行されるプロセスについて、 Campaign は、指定された数の接続を、InactiveConnectionTimeout プロパ ティーによって指定される時間にわたって、開かれた状態に維持します。そ の時間の満了後、キャッシュから接続が除去され、閉じられます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DateFormat

説明

Campaign は、Campaign マクロ言語を使用する際、または日付列からのデ ータを解釈する際に、DateFormat プロパティーの値を使用することによ り、さまざまな日付形式のデータの解析方法を決定します。

DateFormat プロパティーの値は、Campaign において、このデータ・ソース から受け取る日付について予期されている形式に設定します。その値は、 select において日付表示のためにデータベースによって使用される形式と一 致するものでなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設 定値は、DateOutputFormatString プロパティーの設定値と同じです。

注: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付 形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用 する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。

データベースで使用する日付形式を判別するには、下記の説明のようにし て、データベースから日付を選択します。

データベースによる日付の選択

表 21. 日付形式

データベース	正しい設定を判別する方法
DB2	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある db2test を使用して 接続してから、以下のコマンドを発行します。 values current date

表 21. 日付形式 (続き)

データベース	正しい設定を判別する方法
Informix	Informix では、データベースの書き込みとデータベースからの選択 で異なる形式が使用されます。 Campaign サーバーの実行されてい るマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレク トリーにある odbctest を使用して接続してから、以下のコマンド を発行します。
	select today from informix.systables where tabid=1;
Netezza®	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用し て接続してから、以下のコマンドを発行します。 CREATE TABLE date_test (f1 DATE); INSERT INTO date_test values (current_date); SELECT f1 FROM date_test;
	日付形式を選択する別の方法は、以下のコマンドを実行することで す。 SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;
	ANY_TABLE は、既存のテーブルの名前です。
Oracle	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースにログ インします。 SQL *Plus を使用して接続し、次のコマンドを発行し ます。
	SELECT sysdate FROM dual
	現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT で返されます。
SQL Server	Campaign リスナーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用し て接続してから、以下のコマンドを発行します。 SELECT getdate()
Sybase	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用し て接続してから、以下のコマンドを発行します。
	serect today(*) from sys.aummy;

追加の考慮事項

データベース固有の以下の説明に注意してください。

Teradata

Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。 dateFormat と dateOutputFormatString に加えて、SuffixOnCreateDateField を設定する 必要があります。ここでのシステム・テーブルの設定値と一貫性のあるもの とするには、下記を使用します。

- SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
- DateFormat = DELIM_Y_M_D
- DateOutputFormatString = %Y-%m-%d

SQL Server

ODBC データ・ソースの構成の中で、「通貨、数値日付、および時刻の出 カ時に地域設定値を使用する」オプションにチェックが付いていない場合、 日付形式をリセットすることはできません。一般に、この設定値のチェック を外した状態のままにして、日付形式の構成が言語ごとに変わらないように しておくほうが簡単です。

デフォルト値

DELIM_Y_M_D

```
有効な値
```

DATE マクロ内で指定された任意の形式

DateOutputFormatString

説明

DateOutputFormatString プロパティーは、Campaign が日付 (キャンペーン の開始日付や終了日付など) をデータベースに書き込む際に使用される日付 データ・タイプの形式を指定します。 DateOutputFormatString プロパティ ーの値は、データ・ソースにおいてタイプ date の列について予期されてい る形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は [data_source_name] >「DateFormat」プロパティーの設定値と同じです。

DateOutputFormatString プロパティーは、DATE_FORMAT マクロの中で、 format_str について指定されている形式のいずれかに設定することができ ます。 DATE_FORMAT マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け付けます。 1 つは ID (DELIM_M_D_Y や DDMMMYYYY など、DATE マクロで受け付けられ るのと同じ)、そしてもう 1 つは書式ストリングです。

DateOutputFormatString プロパティーの値は書式ストリングでなければな りません。 DATE マクロ ID の 1 つにすることはできません。一般的に は、区切り文字で区切られた形式の 1 つを使用します。

以下に説明されている手順に従ってテーブルを作成し、選択した形式で日付 を挿入することにより、正しい形式が選択されているかどうかを検証できま す。

DateOutputFormatString を確認するには

1. 「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして、 適切なツールを使用してデータベースに接続します。

日付がデータベースに正しく送信されていることを確認するために、デ ータベース付属の照会ツール (SQL Server の Query Analyzer など) は 使用しないでください。それらの照会ツールは、日付形式を、Campaign が実際にデータベースに送信するものとは異なる形式に変換する可能性 があります。

 テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、 %m/%d/%Y を選択した場合、

CREATE TABLE date_test (F1 DATE) INSERT INTO date_test VALUES ('03/31/2004') INSERT コマンドがデータベースにより正常に完了した場合、選択した形 式は正しいということです。

デフォルト値

%Y/%m/%d

DateTimeFormat

説明

[data_source_name] >「DateTimeFormat」プロパティーの値は、Campaign がデータベースから日時/タイム・スタンプ・データを受け取る際に予期さ れている形式を指定します。これは、select において日時/タイム・スタン プ・データの表示のためにデータベースによって使用される形式に一致して いなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、 DateTimeOutputFormatString の設定値と同じです。

多くの場合、DateTimeFormat には、「データベースによる日付の選択」の 表で説明されているようにして DateFormat の値を判別した後、その DateFormat の値の前に DT を付加したものを設定します。

注: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付 形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用 する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。

デフォルト値

DT_DELIM_Y_M_D

有効な値

以下のように、区切り文字で区切った形式だけがサポートされます。

- DT_DELIM_M_D
- DT_DELIM_M_D_Y
- DT_DELIM_Y_M
- DT_DELIM_Y_M_D
- DT_DELIM_M_Y
- DT_DELIM_D_M
- DT_DELIM_D_M_Y

DateTimeOutputFormatString

説明

DateTimeOutputFormatString プロパティーは、Campaign が、キャンペーンの開始日時や終了日実行などの日時データをデータベースに書き込む際に使用する日時データ・タイプの形式を指定します。

DateTimeOutputFormatString プロパティーの値は、データ・ソースにおい てタイプ datetime の列について予期されている形式に設定します。ほとん どのデータベースの場合、この設定値は、[data_source_name] >「DateTimeFormat」プロパティーの設定値と同じです。 選択する形式が正しいものであることを検証する方法については、 DateOutputFormatStringの説明を参照してください。

デフォルト値

%Y/%m/%d %H:%M:%S

DB2NotLoggedInitially

説明

DB2NotLoggedInitially プロパティーは、DB2 の一時テーブルのデータを 設定する際に、Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するか どうかを決定します。このプロパティーを TRUE に設定した場合、一時テー ブルへの挿入のロギングは無効になり、その結果、パフォーマンスが向上 し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

not logged initially 構文がサポートされていないバージョンの DB2 を 使用している場合、このプロパティーは FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

DB2NotLoggedInitiallyUserTables

説明

DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティーは、DB2 のユーザー・テ ーブルへの挿入操作で、Campaign が not logged initially SQL 構文を使 用するかどうかを決定します。このプロパティーを TRUE に設定した場合、 ユーザー・テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォー マンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

注: TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブル・トランザクションが何ら かの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしな ければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータ は、すべて失われます。

注: DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティーは、Campaign のシス テム・テーブルについては使用されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DefaultScale

説明

DefaultScale プロパティーは、スナップショットまたはエクスポート・プ ロセスの使用時に、フラット・ファイルからの数値を保管するために Campaign がデータベース項目を作成するときに使われます。

このプロパティーは、精度とスケールについての情報がデータベース項目に 含まれない場合を除き、データベース・テーブルから生じる数値のためには 使用されません。(精度は、項目に許可される総桁数を示します。スケール は、小数点の右側に許可される桁数を示します。例えば 6.789 の精度は 4、スケールは 3 です。データベース・テーブルから取得される値には、項 目の作成時に Campaign で使われる、精度およびスケールについての情報が 含まれます。)

フラット・ファイルでは、精度およびスケールが示されません。 DefaultScale を使用すると、作成される項目に関して、小数点の右側に定 義する桁数を指定できます。次に例を示します。

- DefaultScale=0 は、小数点の右側の桁がない項目を作成します (整数だ けを保管できます)。
- DefaultScale=5 は、小数点の右側に最大で 5 つの値がある項目を作成します。

DefaultScale に設定された値が項目の精度を超える場合、それらの項目に は DefaultScale=0 が使用されます。例えば、精度が 5 で DefaultScale=6 の場合、値 0 が使用されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DeleteAsRecreate

説明

DeleteAsRecreate プロパティーは、TRUNCATE がサポートされておらず、 REPLACE TABLE を実行するように出力処理が構成されている場合に、 Campaign がテーブルをドロップしてから再作成するのか、それとも単にそ のテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルをドロップしてから再作成しま す。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行しま す。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DeleteAsTruncate

説明

DeleteAsTruncate プロパティーは、REPLACE TABLE を実行するように出力 プロセスが構成されている場合に、Campaign が TRUNCATE TABLE を使用す るのか、それともテーブルから削除するのかを指定します。 値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

既定値は、データベースのタイプに応じて異なります。

デフォルト値

- TRUE (Netezza、Oracle、Sybase、および SQLServer の場合)
- FALSE (その他のデータベース・タイプの場合)

有効な値

TRUE | FALSE

DisallowTempTableDirectCreate

説明

DisallowTempTableDirectCreate プロパティーは、Campaign がデータを一時テーブルに追加する方法を指定します。

FALSE に設定されている場合、Campaign は、1 つのコマンドを使用することにより、直接的な作成およびデータ設定 SQL 構文を実行します。例えば、CREATE TABLE <table_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合)、および SELECT <field_names> INTO <table_name> ... (SQL Server の場合)が使用されます。

TRUE に設定されている場合、Campaign は、一時テーブルを作成した後、複数の別個のコマンドを使用することにより、テーブルからテーブルにデータを直接設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DSN

説明

このプロパティーは、ODBC 構成の中で、この Campaign データ・ソース について割り当てられているデータ・ソース名 (DSN) に設定します。この 値は、デフォルトでは定義されていません。

Campaign データ・ソース構成プロパティーを使用することにより、同じ物 理データ・ソースを参照する複数の論理データ・ソースを指定できます。例 えば、同じデータ・ソースについて 2 つのデータ・ソース・プロパティ ー・セットを作成し、1 つは AllowTempTables = TRUE、もう 1 つは AllowTempTables = FALSE とすることが可能です。それらのデータ・ソース のそれぞれは、Campaign の中で異なる名前にすることができますが、それ らが同じ物理データ・ソースを参照する場合、DSN 値は同じになります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

DSNUsingOSAuthentication

説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティーは、Campaign データ・ソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。 Windows の認証モードを使 用するように DSN が構成されている場合、値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableBaseDimSelfJoin

説明

EnableBaseDimSelfJoin プロパティーは、Base テーブルと Dimension テー ブルが同じ物理テーブルにマップされ、Base テーブルの ID 項目上で Dimension が Base テーブルに関連付けられていない場合、Campaign デー タベースの動作として自己結合操作を実行するかどうかを指定します。

このプロパティーの既定値は FALSE であり、Base テーブルと Dimension テーブルが同じデータベース・テーブルで、かつ関係項目が同じ (AcctID から AcctID へ、など) であるなら、Campaign は、結合を実行しないとい うことを想定します。

デフォルト値

FALSE

EnableSelectDistinct

説明

EnableSelectDistinct プロパティーは、Campaign の ID の内部リストに対 する非重複化を Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで 実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによって非重複化が実行され、データベー スに対して生成される SQL クエリーは以下の形になります (該当する場 合)。

SELECT DISTINCT key FROM table

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによって非重複化が実行され、デー タベースに対して生成される SQL クエリーは以下の形になります。 SELECT key FROM table

以下の場合には、既定値 FALSE のままにしてください。 if:

- ユニーク ID (基本テーブルの主キー) に重複がないことが既に保証済み となるように、データベースが構成されている場合。
- Campaign アプリケーション・サーバーで非重複化を実行することにより、データベースのリソース消費量/負荷を軽減する場合。

このプロパティーにどんな値を指定するかには関係なく、Campaign では、 必要に応じてキーの非重複化が実行されることが自動的に保証されていま す。このプロパティーは、単に非重複化がどの場所で実行されるか (データ ベース上か、それとも Campaign サーバー上か)を制御するだけです。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableSelectOrderBy

説明

EnableSelectOrderBy プロパティーは、Campaign の ID の内部リストのソートを、Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによってソートが実行され、そのデータベースに対して生成される SQL クエリーは以下の形になります。

SELECT <key> FROM ORDER BY <key>

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによってソートが実行され、データ ベースに対して生成される SQL クエリーは以下の形になります。

SELECT <key>FROM

注: 使用されるオーディエンス・レベルが英語以外のデータベースでのテキ スト・ストリングである場合、このプロパティーは FALSE にのみ設定して ください。それ以外のすべてのシナリオでは、デフォルトの TRUE を使用で きます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

True | False

ExcludeFromTableDisplay

説明

ExcludeFromTableDisplay パラメーターを使用すると、Campaign における テーブル・マッピングにおいて、表示されるデータベース・テーブルを制限 することができます。データベースから取り出すテーブル名の数は削減され ません。

指定されたパターンに一致するテーブル名は表示されません。

例えば、このパラメーターの値が sys.* に設定されている場合、sys.で始 まる名前のテーブルは表示されません。このパラメーターの値は、大文字と 小文字が区別されることに注意してください。

デフォルト値

UAC_*。一時テーブルと抽出テーブルが除外されます (ExtractTablePrefix プロパティーの値が既定値の場合)

ExtractTablePostExecutionSQL

説明

ExtractTablePostExecutionSQL プロパティーは、抽出テーブルの作成とデ ータ設定の直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメン トを指定するために使用します。

ExtractTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置 換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ ートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 22. ExtractTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

ExtractTablePrefix

説明

```
ExtractTablePrefix プロパティーは、Campaign におけるすべての抽出テーブル名の前に自動的に付加されるストリングを指定します。
```

デフォルト値

UAC_EX

ForceNumeric

説明

ForceNumeric プロパティーは、Campaign が数値をデータ・タイプ double として取り出すかどうかを指定します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign は、すべての数値をデータ・タイプ double として取り出しま す。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

InactiveConnectionTimeout

説明

InactiveConnectionTimeout プロパティーは、非アクティブの Campaign デ ータベース接続を開いたままにしておく秒数を指定します。指定した時間が 経過した後、その接続は閉じられます。この値を 0 に設定するとタイムア ウトは無効になり、接続は開いたままにされます。

デフォルト値

120

InsertLogSize

説明

InsertLogSize プロパティーは、Campaign のスナップショット・プロセス の実行中、ログ・ファイルに新しいエントリーがいつ入力されるかを指定し ます。スナップショット・プロセスによって書き込まれるレコード数が、 InsertLogSize プロパティーで指定される数の倍数に達するたびに、ログ・ エントリーが書き込まれます。それらのログ・エントリーは、実行中のスナ ップショット・プロセスの進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設 定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合がありま す。

デフォルト値

100000 (10 万レコード)

有効な値

正の整数

JndiName

説明

JndiName プロパティーは、Campaign システム・テーブルを構成する際にの み使用されます (カスタマー・テーブルなど、その他のデータ・ソースでは 使用されません)。その値は、アプリケーション・サーバーで定義されてい る Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースに設定します (WebSphere[®] または WebLogic)。

デフォルト値

campaignPartition1DS

LoaderCommand

説明

LoaderCommand プロパティーは、Campaign においてデータベース・ロー ド・ユーティリティーを呼び出すために発行されるコマンドを指定します。 このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイ ルのうち、「全レコード置換」設定値で使用されるものすべてについて、 Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードに入りま す。また、このパラメーターは、Campaign が ID リストを一時テーブル中 にアップロードする際に、データベース・ローダー・ユーティリティー・モ ードを呼び出します。

このプロパティーの有効な値は、データベース・ロード・ユーティリティー を起動するデータベース・ロード・ユーティリティー実行可能ファイルまた はスクリプトの絶対パス名です。スクリプトを使用すると、ロード・ユーテ ィリティー呼び出しの前に付加的なセットアップ処理を実行できます(例え ば、最初にファイルをデータベース・サーバーに移動したり、Sybase IQ で ロード・コマンドを使用するために ISQL を呼び出したりするなど)。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動する ために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイ ルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースおよびテーブルを指 定するための引数が含まれることがあります。 Campaign では、以下のトー クンがサポートされています。コマンド実行時に、これらは、指定された要 素に置換されます。データベース・ロード・ユーティリティーを起動すると きに使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリテ ィーの資料を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommand で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、フローチャートに関連するキャンペーン のコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンの名前に置換されます。
<controlfile></controlfile>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータ ーで指定されるテンプレートに従って Campaign によって 生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置 換されます。
<database></database>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タ・ソースの名前に置換されます。これは、そのデータ・ ソースのカテゴリー名の中で使用されているデータ・ソー ス名と同じものです。

表 23. LoaderCommand で利用可能なトークン

表 23. LoaderCommand で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって 作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名 に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレク トリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、データベースのデータベース・ユーザー 名に置換されます。
<dsn></dsn>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、 <dsn> トーク ンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデ ータ・ソース名に置換されます (<database> トークンの置 換に使用されるのと同じ値)。</database></dsn>
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置換さ れます。
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わり ます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<table></table>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンと の互換性のためにサポートされています。 <tablename> を 参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<table> の 代わりにそれが使用されています。</table></tablename>
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タベース・テーブル名に置換されます。このは、スナップ ショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<user></user>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・ユーザーに置き換わりま す。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータ ベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトのいずれかの絶対 パス名

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Campaign においてデータベー ス・テーブルにレコードを付加するために、データベース・ロード・ユーテ ィリティーを起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメー ターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、 「レコード付加」設定値で使用されるものすべてについて、Campaign はデ ータベース・ローダー・ユーティリティー・モードに入ります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能 ファイルかデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプト を指す、フルパス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロー ド・ユーティリティー呼び出しの前に付加的なセットアップ処理を実行でき ます (例えば、最初にファイルをデータベース・サーバーに移動したり、 Sybase IQ でロード・コマンドを使用するために ISQL を呼び出したりする など)。

大部分のデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータ・ファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが 含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベース・ロード・ユーティリティーを起動するときに使用する正しい 構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの資料を参照し てください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンの名前に置換されます。
<controlfile></controlfile>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータ ーで指定されるテンプレートに従って Campaign によって 生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置 換されます。
<database></database>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タ・ソースの名前に置換されます。これは、そのデータ・ ソースのカテゴリー名の中で使用されているデータ・ソー ス名と同じものです。
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって 作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名 に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレク トリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。

表 24. LoaderCommandForAppend で利用可能なトークン

表 24. LoaderCommandForAppend で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<dsn></dsn>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、 <dsn> トーク ンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデ ータ・ソース名に置換されます (<database> トークンの置 換に使用されるのと同じ値)。</database></dsn>
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わり ます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<table></table>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンと の互換性のためにサポートされています。 <tablename> を 参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<table> の 代わりにそれが使用されています。</table></tablename>
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タベース・テーブル名に置換されます。このは、スナップ ショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<user></user>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・ユーザーに置き換わりま す。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplate

説明

LoaderControlFileTemplate プロパティーは、Campaign で構成されている 制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパ ラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここに指定するテンプレ ートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファ イルのパスおよび名前は、LoaderCommand パラメーターから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユ ーティリティーのドキュメンテーションを参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークンとしては、 LoaderCommand プロパティーについて説明されているのと同じものに加え て、アウトバウンド・テーブル内の項目ごとに 1 回ずつ反復される以下の 特殊トークンがあります。

トークン	説明
<dbcolumnnumber></dbcolumnnumber>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されま す。
<fieldlength></fieldlength>	このトークンは、データベース内にロードされるフィール ドの長さに置き換わります。
<fieldname></fieldname>	このトークンは、データベース内にロードされるフィール ドの名前に置き換わります。
<fieldnumber></fieldnumber>	このトークンは、データベース内にロードされるフィール ドの番号に置き換わります。
<fieldtype></fieldtype>	このトークンは、リテラル CHAR() に置換されます。() の中により、この項目の長さが指定されます。データベー スで項目タイプ CHAR が認識されていない場合、項目タイ プとして適切なテキストを手動で指定し、 <fieldlength> トークンを使用することができます。例えば、SQLSVR お よび SQL2000 の場合、SQLCHAR(<fieldlength>) を使用し ます。</fieldlength></fieldlength>
<nativetype></nativetype>	このトークンは、この項目のロード先である実際のデータ ベースのタイプに置換されます。
<xyz></xyz>	このトークンは、指定された文字を、データベース中にロードされている項目のうち、最後を除くすべてに配置します。典型的な使用方法としては、<,> があります。これは、最後を除くすべての項目についてコンマを繰り返します。
<~xyz>	このトークンは、指定された文字を、反復の最後の行にの み配置します。
xyz	このトークンは、指定された文字 (不等号括弧 < > を含む)を、すべての行に配置します。

表 25. LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークン

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティーは、Campaign において 構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定 します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここで指 定されているテンプレートに基づいて一時制御ファイルを動的に作成しま す。この一時制御ファイルのパスと名前は、LoaderCommandForAppend プロ パティーで使用可能な <CONTROLFILE> トークンに使用できます。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用す るには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テ ンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、 以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一 時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルに必要な正しい構文については、使用するデータベース・ロー ダー・ユーティリティーの資料を参照してください。制御ファイル・テンプ レートで使用できるトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティー のトークンと同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiter

説明

LoaderDelimiter プロパティーは、一時データ・ファイルが固定幅ファイル か、それとも区切りフラット・ファイルかを指定します。また、区切りファ イルの場合には、Campaign が区切り文字として使用する文字を指定しま す。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時デ ータ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であると認 識されているテーブルのデータを設定するために使用されます。 Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することにより、区切り フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderDelimiterAtEnd

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルが区切りファ イルでなければならず、さらに各行が区切り文字で終わることが必要です (例えば、外部テーブルを使用する Informix の dbaccess)。この要件を満た すためには、LoaderDelimiterAtEnd の値を TRUE に設定することにより、 ローダーが起動して、空として認識されているテーブルのデータを設定する 際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

FALSE

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルが区切りファ イルでなければならず、さらに各行が区切り文字で終わることが必要です (例えば、外部テーブルを使用する Informix の dbaccess)。この要件を満た すためには、LoaderDelimiterAtEndForAppend の値を TRUE に設定すること により、ローダーが起動して、空として認識されてはいないテーブルのデー タを設定する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するように します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティーは、Campaign の一時データ・ファ イルが固定幅であるか、それとも区切りフラット・ファイルであるかを指定 します。また、区切りファイルの場合には、区切りとして使用する文字また は文字の集合を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時デ ータ・ファイルを作成します。

値を指定した場合は、空であることが分かっていないテーブルにデータを設 定するためにローダーが起動されたときに、その値が使用されます。 Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することによ り、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティーは、Campaign が、データベース・ロード・ユーティリティーによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。 ピリオド (.) を小数点として使用するよう指定するには、この値を FALSE に設定します。 ロケールに適した小数点記号を使用するよう指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

MaxItemsInList

説明

Campaign が SQL 中の単一リスト (WHERE 節の IN 演算子の後の値リス トなど)の中に含めることのできる項目の最大数を指定します。

デフォルト値

1000 (Oracle のみ)、それ以外のすべてのデータベースでは 0 (無制限)

有効な値

整数

MaxQueryThreads

説明

MaxQueryThreads プロパティーは、Campaign の単一のフローチャートか ら、各データベース・ソースに対して同時実行可能なクエリーの数の上限を 指定します。

Campaign は、独立した複数のスレッドを使用してデータベース・クエリー を実行します。 Campaign のプロセスは並列実行されるため、単一のデー タ・ソースに対して複数のクエリーを同時に実行することが少なくありませ ん。並列実行するクエリーの数がこのプロパティーで指定される値を超える と、Campaign サーバーは、同時実行クエリーの数を、自動的にこの値まで 制限します。

最大値は無制限です。 maxReuseThreads プロパティーがゼロでない値に設 定されている場合、それは MaxQueryThreads の値以上でなければなりませ ん。

デフォルト値

データベースによって異なる

MaxRowFetchRecords

説明

選択された ID 数が MaxRowFetchRecords プロパティーによって指定される 値より小さい場合、Campaign は、一度に 1 つずつ、それぞれ別個の SQL クエリーで ID をデータベースに渡します。この処理には、非常に長い時間 がかかる場合があります。選択された ID 数がこのパラメーターで指定され る値より大きい場合、Campaign は、一時テーブルを使用するか (データベ ース・ソースに対して可能な場合)、またはテーブルから、不要な値を除く すべての値をプルダウンします。 パフォーマンス上の理由から、この数をできるだけ低い値に保つのが最善で す。

デフォルト値

100

MaxTempTableJoinPctSelectAll

説明

クエリーが発行されると Campaign は、そのクエリーの結果として、ID の 正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。す べてのレコードを選択する追加クエリーがデータベースに対して発行される 場合、MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーによって、一時テーブ ルとの結合が実行されるかどうかが指定されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティーの値より大きい場合、結合は実行されません。まずすべてのレコードが選択された後、不要なレコードが破棄されます。

ー時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティーの値以下の場合、まず一 時テーブルとの結合が実行された後、結果としての ID がサーバーに取り出 されます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。 useInDbOptimization プロパティーが YES に設定されている場合、このプロパティーは無視されます。

デフォルト値

90

有効な値

0-100 の間の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して 使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブル のサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。まず、 勘定残高 (Accnt_balance) が \$1,000 より大きいカスタマー (CustID) を、 データベース・テーブル (Customer) から選択するとします。

対応する SQL 式として Select プロセスで生成されるものは、下記のよう になります。

SELECT CustID FROM Customer
WHERE Accnt_balance > 1000

Select プロセスでは、合計テーブル・サイズ 1,000,000 のうちの 10% に当たる 100,000 個の ID を取り出す可能性があります。一時テーブルが可能になっている場合、Campaign は、選択された ID (TempID) をデータベース中の一時テーブル (Temp table) に書き込みます。

次に、選択された ID (CustID) と現在の残高 (Accnt_balance) のスナップ ショットを取るとします。一時テーブル (Temp_table) の相対サイズは 90% (MaxTempTableJoinPctSelectAll) より小さいため、まず一時テーブルとの 結合が実行されます。スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer, Temp_table WHERE CustID = TempID

Select プロセスで取り出すものが 90% を超える場合、それより後のスナッ プショット・プロセスでは、すべてのレコードが取り出され、最初の ID セ ットとそれらが突き合わされて、不要なものが破棄されます。

スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のように なります。

SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer

MaxTempTableJoinPctWithCondition

説明

クエリーが発行されると Campaign は、そのクエリーの結果として、ID の 正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。制 限条件を伴うレコード選択の追加クエリーがデータベースに対して発行され る場合、MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティーは、一時テーブ ルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値より大きい場合、結合は実行され ません。これにより、不要なデータベースでのオーバーヘッドが回避されま す。その場合、データベースに対するクエリーが発行され、結果として ID のリストが取り出された後、サーバー・メモリー内のリストに一致する不要 なレコードが破棄されます。

ー時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctWithCondition の値以下の場合、まず一時テーブルと の結合が実行された後、結果として ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

有効な値

0-100 の間の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して 使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブル のサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

MinReqForLoaderCommand

説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定す るために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値 を超えると、Campaign は、LoaderCommand パラメーターに割り当てられて いるスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込まれるレ コードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、Campaign では、値として既定 値(ゼロ)が想定されます。このプロパティーが構成されてはいるが、値と して設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値 がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

整数

MinReqForLoaderCommandForAppend

説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定す るために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値 を超えると、Campaign は、LoaderCommandForAppend パラメーターに割り当 てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込 まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、Campaign では、値として既定 値(ゼロ)が想定されます。このプロパティーが構成されてはいるが、値と して設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値 がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

正の整数

NumberOfRetries

説明

NumberOfRetries プロパティーは、データベース操作での障害発生時に Campaign が自動的に再試行する回数を指定します。 Campaign は、この回 数だけ、データベースに対するクエリーを自動的に再サブミットします。こ の回数を超えると、データベース・エラーまたは障害が報告されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

ODBCTableTypes

説明

ODBCTableTypes プロパティーは、Sybase IQ/ASE データ・ソースをサポー トするためにのみ必要です。テーブル・マッピング・ウィンドウの中にテー ブルのリストを表示するためには、Campaign において、このプロパティー を設定する必要があります。 Sybase IQ/ASE データ・ソースでマッピング を有効にするには、このプロパティーに以下の値を追加します。

 「TABLE」、「VIEW」、「SYNONYM」、「ALIAS」

このプロパティーは既定値は空です。 Sybase IQ/ASE 以外のデータ・ソー スでは、既定値が適切です。

デフォルト値

未定義

有効な値

「TABLE」、「VIEW」、「SYNONYM」、「ALIAS」

ODBCUnicode

説明

ODBCUnicode プロパティーは、Campaign ODBC 呼び出しにおいて使用され るエンコード方式のタイプを指定します。これは、ODBC データ・ソース でのみ使用されるものであり、Oracle または DB2 のネイティブ接続で使用 される場合は無視されます。

重要: このプロパティーが UTF-8 または UCS-2 に設定されている場合、デ ータ・ソースの StringEncoding 値は UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定され ていなければなりません。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティーの設 定値は無視されます。

デフォルト値

disabled

有効な値

- このプロパティーに指定できる値は、以下のとおりです。
- Disabled Campaign は、ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8 Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 1 バイトであると想定します。これは DataDirect ODBC ドライバー と互換です。
- UCS-2 Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 2 バイトであると想定します。これは Windows および unixODBC ODBC ドライバーと互換です。

ODBCv2

説明

ODBCv2 プロパティーは、Campaign においてデータ・ソースのためにどの ODBC API 仕様を使用するかを指定するために使用します。

既定値は FALSE であり、その場合、Campaign は v3 API 仕様を使用しま す。 TRUE に設定した場合、Campaign は v2 API 仕様を使用します。 ODBC v3 API 仕様がサポートされていないデータ・ソースでは、ODBCv2 プロパティーを TRUE に設定します。 ODBCv2 プロパティーが TRUE に設定されている場合、Campaign において ODBC Unicode API はサポートされず、ODBCUnicode プロパティーに関し て disabled 以外の値は認識されなくなります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

OwnerForTableDisplay

説明

OwnerForTableDisplay プロパティーは、Campaign におけるテーブル・マッ ピングの表示を指定されたユーザーの所有するテーブル、または指定された ユーザーの所有するテーブルからなる 1 つ以上の集合に制限します。

1 人以上のユーザーによって所有されるテーブルだけを表示するには、コン マ区切りリストを使用してデータベース・ユーザー ID を指定します。次に 例を示します。

<property name="OwnerForTableDisplay">user1,user2,user3</property></property>

ユーザー名に加えてテーブル名パターンを指定するには、パターンをユーザ ー ID に付加します。例えば、以下の設定値の場合、テーブルの表示は、 user1 では ABC、user2 では XYZ で始まるテーブルに制限されます。

 ${\tt OwnerForTableDisplay=user1.ABC\%, user2.XYZ\%}$

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PadTextWithSpaces

説明

PadTextWithSpaces プロパティーが TRUE に設定されている場合、Campaign は、ストリングがデータベース項目と同じ幅になるまで、テキスト値にスペースを埋め込みます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

PostExtractTableCreateRunScript

説明

PostExtractTableCreateRunScript プロパティーは、抽出テーブルが作成されて、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは 実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。
表 26. PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置 換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ ートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。

未定義

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSegmentTableCreateRunScript

説明

Segment 一時テーブルの作成とデータ設定の後、Campaign が実行するスク リプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 27. PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデ ータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな ったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユー ザー名に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな ったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換 されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな ったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置 換されます。

表 27. PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成に関連す
	るフローチャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換さ れます。

未定義

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSnapshotTableCreateRunScript

説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティーは、スナップショット・ テーブルが作成され、そのデータが設定された後に Campaign が実行するス クリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 28. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成され たデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されま す。
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に 置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連 するフローチャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置 換されます。

デフォルト値

未定義

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostTempTableCreateRunScript

説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティーは、ユーザー・データ・ソー スまたはシステム・テーブル・データベースの中で一時テーブルが作成さ れ、データが設定された後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可 能ファイルを指定するために使用します。

PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され
	ます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー
	ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま
	す。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。

表 29. PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークン

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PostUserTableCreateRunScript

説明

ユーザー・テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign が実行 するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 30. PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータ
	ベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。

表 30. PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー 名に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換さ れます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフロ ーチャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャー ト接続からの、データベース・パスワードに置き換わりま す。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されま す。

未定義

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PrefixOnSelectSQL

説明

PrefixOnSelectSQL プロパティーは、Campaign によって生成される SELECT SQL 式のすべてに対して、自動的にその先頭に付加するストリングを指定 するために使用します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選 択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文チェックなしで自動的に SELECT SQL 式に追加 されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認 してください。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 31. PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。

表 31. PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	下に関連りるキャンハーンの名前に直換されまり。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値は定義されていません。

QueryThreadSleep

説明

QueryThreadSleep プロパティーは、Campaign サーバー・プロセス (UNICA_ACSVR) の CPU 使用率に影響します。値が TRUE に設定されている 場合、Campaign サーバー・プロセスがクエリーの完了をチェックするため に使用するスレッドは、チェックとチェックの間でスリープします。値が FALSE の場合、Campaign サーバー・プロセスは、クエリーの完了を連続的 にチェックします。

デフォルト値

TRUE

ReaderLogSize

説明

ReaderLogSize パラメーターは、Campaign がデータベースからデータを読 む際に、ログ・ファイル中の新しいエントリーをいつ作成するかを定義しま す。データベースから読み取られるレコード数が、このパラメーターによっ て定義される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーがログ・ファイル に書き込まれます。

このパラメーターは、プロセスの実行の進行状況を判別するのに役立ちま す。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる 場合があります。

デフォルト値

1000000 (100 万レコード)

有効な値

整数

SegmentTempTablePrefix

説明

このデータ・ソースにおいて、CreateSeg プロセスによって作成されるセグ メント・テーブルの接頭部を設定します。

デフォルト値

UACS

ShareConnection

説明

ShareConnection プロパティーは使用されなくなりました。デフォルト値 FALSE のままにしてください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

FALSE

SQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が 実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 32. SQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

StringEncoding

説明

StringEncoding プロパティーは、データベースの文字エンコードを指定し ます。 Campaign がデータベースからデータを取り出す際、指定されたエン コード方式から、Campaign の内部エンコード方式 (UTF-8) にデータが変換 されます。同じように、Campaign がデータベースにクエリーを送信する 際、内部エンコード方式 Campaign から、StringEncoding プロパティーで 指定されるエンコード方式に文字データが変換されます。

このプロパティーの値は、データベース・クライアントで使用されるエンコ ード方式に一致していなければなりません。

既定値として未定義になっているのでない限り、この値をブランクのままに はしないでください。 ASCII データを使用する場合は、この値を UTF-8 に 設定します。

注: データベース・クライアントのエンコード方式が UTF-8 として設定さ れている場合、この値のための望ましい設定値は WIDEUTF-8 です。 WIDE-UTF-8 設定値は、データベース・クライアントが UTF-8 に設定され ている場合にのみ有効です。

重要: 「パーティション」>「パーティション[n]」>「dataSources」> [data_source_name] >「ODBCUnicode」プロパティーを使用する場合、このプ ロパティーは UTF-8 または WIDEUTF-8 のいずれかに設定されます。そうで ない場合、ODBCUnicode プロパティーの設定値は無視されます。

サポートされているエンコード方式のリストについては、付録 C「国際化対応とエンコード方式」を参照してください。

重要な例外および追加の考慮事項については、以下のセクションを参照して ください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

データベース固有の考慮事項

DB2 または SQL Server においては、iconv エンコードではなくコード・ペ ージを使用してください。 Teradata の場合は、一部のデフォルト動作をオ ーバーライドしてください。このセクションでは、これらのデータベースに おいて StringEncoding プロパティーに適切な値を設定する方法について説 明します。

DB2

DB2 データベースにおいて StringEncoding プロパティーの適切な値を判 別するには、Campaign サーバーのオペレーティング・システムの地域設定 値に対応するコード・ページを調べてください。

StringEncoding プロパティーに DB2 データベース用の値を設定するに は、以下のコマンドを Campaign サーバーの始動スクリプトに追加します。 db2set DB2CODEPAGE=CP*IBM_code_page*

例えば、UTF-8 を使用するには、次のようにします。

db2set DB2CODEPAGE=1208

これは DB2 のすべてのデータ・ソースに影響します。さらに、実行中の他のプログラムにも影響することがあります。

SQL Server

SQL Server データベースにおける StringEncoding プロパティーの適切な 値を判別するには、サーバーのオペレーティング・システムの地域設定値に 対応するコード・ページを調べてください。

例えば、コード・ページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、

StringEncoding=CP932

Teradata

Teradata では列ごとに文字エンコードの指定がサポートされていますが、 Campaign でサポートされているのはデータ・ソースごとのエンコードのみ です。 Teradata ODBC ドライバーのバグのため、Campaign で UTF-8 を使 用することはできません。 Teradata では、ログインごとに既定の文字エン コードが設定されます。これは、Windows において ODBC データ・ソース 構成に含まれるパラメーター、または UNIX プラットフォームにおいて odbc.ini に含まれるパラメーターを使用することにより、以下のようにし てオーバーライドすることができます。

CharacterSet=UTF8

Teradata テーブルの既定のエンコード方式は LATIN です。 Teradata の組み 込みエンコード方式はごくわずかのみですが、ユーザー定義エンコード方式 がサポートされています。

StringEncoding プロパティーの既定値は ASCII です。

重要: UTF-8 データベースの関係する多くの状況では、WIDEUTF-8 疑似エン コード方式を使用してください。それについては、WIDEUTF-8 に関するセ クションで説明されています。

WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード方式 UTF-8 と、データベースのエ ンコード方式の間のトランスコーディングをそれ自身で処理します。データ ベースのエンコードが UTF-8 の場合、StringEncoding の値として UTF-8 を指定することができ (SQLServer を除く)、トランスコーディングは不要で す。従来、データベース内の英語以外のデータに Campaign がアクセスする ための可能なモデルは、それらのみでした。

Campaign のバージョン 7.0 では、StringEncoding プロパティーのための 有効な値として、WIDEUTF-8 という新しいデータベース・エンコード方式が 導入されています。このエンコード方式を使用することにより Campaign で は、データベース・クライアントとの通信に UTF-8 を使用しながら、UTF-8 と実際のデータベースのエンコード方式との間のトランスコーディングの作 業をクライアント側で実行することが可能です。変換後のテキストに十分に 対応できるよう、テーブル列マッピングの幅を変更するため、このように拡 張されたバージョンの UTF-8 が必要になっています。 注: WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用できるのは、データベース構成の中のみです。その他の目的では使用しないでください。

注: Oracle では、クライアントによるトランスコーディングはサポートされ ていません。

SuffixOnAllOtherSQL

説明

SuffixOnAllOtherSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるあら ゆる SQL 式のうち、SuffixOnInsertSQL、SuffixOnSelectSQL、 SuffixOnTempTableCreation、SuffixOnUserTableCreation、そして SuffixOnUserBaseTableCreationのどのプロパティーによってもカバーされ ないものに自動的に付加するストリングを指定します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選 択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnAllOtherSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成され る際に使用されます。

TRUNCATE TABLE table DROP TABLE table DELETE FROM table [WHERE ...] UPDATE table SET ...

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このパラメーターを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 33. SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnCreateDateField

説明

SuffixOnCreateDateField プロパティーは、CREATE TABLE SQL ステートメントで、DATE 項目のすべてに Campaign によって自動的に付加されるストリングを指定します。

例えば、このプロパティーを以下のように設定することができます。

SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'

このプロパティーが未定義 (既定値) の場合、CREATE TABLE コマンドは未変 更のままです。

注: DateFormat プロパティーの説明に含まれる表を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnInsertSQL

説明

SuffixOnInsertSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるすべて の INSERT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプ ロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロ セスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnInsertSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

INSERT INTO table ...

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 34.	SuffixOnInsertSQL	で利用可能なトークン
-------	-------------------	------------

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。

表 34. SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSelectSQL

説明

SuffixOnSelectSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるすべて の SELECT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプ ロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロ セスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 35. SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnTempTableCreation

説明

SuffixOnTempTableCreation プロパティーは、一時テーブルが作成される際 に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリング を指定するために使用します。このプロパティーは Campaign により生成さ れた SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式 の SQL には適用されません。このプロパティーを使用するためには、 AllowTempTables プロパティーが TRUE に設定されていなければなりませ ん。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

注: Oracle データベースの場合、一時テーブル作成 SQL 式のうちテーブル 名の後に構成パラメーターが付加されます。

SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 36. SuffixOnTempTableCreation	で利用可能なトークン
---------------------------------	------------

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され
	ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSegmentTableCreation

説明

セグメントー時テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式 に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 37. SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな
	ったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユー
	ザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな
	ったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置
	換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな
	ったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換
	されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデ
	ータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成に関連す
	るフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換さ
	れます。
<tablename></tablename>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き
	換えられます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnSnapshotTableCreation

説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティーは、スナップショット・テー ブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加され るストリングを指定するために使用されます。

SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 38. SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に 置換されます。

表 38. SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータが、ファデータが、ファデータが、ファデータが、ファデータに異絶された
	たりークハースのリークハース・ユーリー石に直換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連 するフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置 換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置 換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnExtractTableCreation

説明

SuffixOnExtractTableCreation プロパティーは、抽出テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを 指定するために使用します。

SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 39. SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置 換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ ートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

未定義

有効な値

有効な SQL

SuffixOnUserBaseTableCreation

説明

SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティーは、ユーザーが基本テーブル を作成する際に (抽出プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロ パティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセ スで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

ドークン	說明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 40. SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークン

⇒¥ n⊓

デフォルト値

2

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation

説明

SuffixOnUserTableCreation プロパティーは、ユーザーが一般のテーブルを 作成する際に (スナップショット・プロセスなど)、Campaign によって生成 される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用しま す。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用さ れ、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されま せん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 41. SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され
	ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SystemTableSchema

説明

Campaign システム・テーブルで使用されるスキーマを指定します。 デフォルト値は空白です。このパラメーターは、UA_SYSTEM_TABLES デー タ・ソースにのみ関係するものです。

UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースに複数のスキーマが含まれるという場合 (例えば、複数のグループで使用される Oracle データベースの場合) 以外 は、この値をブランクのままにしてください。 (この文脈で「スキーマ」と いう語は、X.Y という形式の「修飾」テーブル名の先頭部分のことを指しま す (dbo.UA Folder など)。ただし、この形式のうち X はスキーマ、Y は修 飾なしのテーブル名です。この構文に関しては、Campaign でサポートされ ているさまざまな異なるデータベース・システムの間で異なる用語が使用さ れています。)

システム・テーブル・データベースの中に複数のスキーマが存在する場合、 この値は、Campaign システム・テーブル作成時のスキーマの名前に設定し てください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

TempTablePostExecutionSQL

説明

TempTablePostExecutionSQL プロパティーは、ユーザー・データ・ソースま たはシステム・テーブル・データベースでの一時テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを 指定するために使用します。データ・ソースで一時テーブルを作成できるよ うにするには、AllowTempTables プロパティーを TRUE に設定する必要があ ります。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

TempTablePostExecutionSQL プロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。 SQL ステ ートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメン トとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバッ クスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: TempTablePostExecutionSQL プロパティーでストアード・プロシージャ ーを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されてい ることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・ プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラ ッシュ (円記号) を使用しています。 begin dbms stats.collect table stats()¥; end¥;

TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。

表 42. TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

表 42. TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値は定義されていません。

TableListSQL

説明

TableListSQL プロパティーは、マップに使用可能なテーブルのリストにシ ノニムを含めるために使用する SQL クエリーを指定するために使用しま す。

デフォルト値は空白です。データ・ソースが SQL Server の場合に、返され るテーブル・スキーマの中でシノニムをマップできるようにするためには、 このプロパティーが必須です。その他のデータ・ソースにおいて、標準的な 方法 (ODBC 呼び出しやネイティブ接続など)を使用して取り出したテーブ ル・スキーマ情報の代わりに (またはそれに加えて)、特定の SQL クエリー を使用する場合、このプロパティーはオプションです。

注: キャンペーンにおいて SQL Server のシノニムが正常に動作するには、 ここで説明されているこのプロパティーの設定に加えて、 UseSQLToRetrieveSchema プロパティーを TRUE に設定する必要がありま す。

有効な SQL クエリーでこのプロパティーを設定する場合、Campaign によ り、マッピング用のテーブルのリストを取り出すための SQL クエリーが発 行されます。そのクエリーから 1 個の列が返される場合、それは名前の列 として扱われます。そのクエリーから 2 個の列が返される場合、最初の列 は所有者の名前の列であると想定され、2 番目の列はテーブル名の列である と見なされます。

SQL クエリーがアスタリスク (*) で始まっていない場合、Campaign は、通常の方法で (ODBC 呼び出しやネイティブ接続などにより) 取り出されるテ ーブルのリストとこのリストをマージします。 SQL クエリーがアスタリスク (*) で始まる場合、その SQL から返される リストは、通常のリストにマージされるのではなく、それを置き換える も のとなります。

デフォルト値

なし

有効な値

有効な SQL クエリー

例

データ・ソースが SQL Server の場合、通常の環境では、キャンペーンで使 用される ODBC API 呼び出しから返されるのはテーブルとビューのリスト であり、シノニムではありません。シノニムのリストも含めるには、 TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

select B.name AS oName, A.name AS tName
from sys.synonyms A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B
on A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2

ODBC API をまったく使用しないでテーブル、ビュー、およびシノニムの リストを取り出すには、TableListSQL を以下の例に示すように設定しま す。

*select B.name AS oName, A.name AS tName from
 (select name, schema_id from sys.synonyms UNION
 select name, schema_id from sys.tables UNION select name,
 schema_id from sys.views) A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B on
 A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2

データ・ソースが Oracle の場合は、ALL_OBJECTS ビューを調べるネイテ ィブ接続方式を使用してデータを取り出す代わりに、以下のようなクエリー を使用することにより、テーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り 出すことができます。

*select OWNER, TABLE_NAME from (select OWNER, TABLE_NAME from ALL_TABLES UNION select OWNER, SYNONYM_NAME AS TABLE_NAME FROM ALL_SYNONYMS UNION select OWNER, VIEW_NAME AS TABLE_NAME from ALL_VIEWS) A ORDER BY 1, 2

UOSQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が 実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。 UOSQLOnConnect プロパティーはこれによく似ていますが、それは特に Optimize 適用されます。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

UOSQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 43. UOSQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され
	ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値は定義されていません。

UseSQLToRetrieveSchema

説明

このデータ・ソースにおいてテーブル・スキーマとして使用するスキーマを 取り出すには、ODBC やネイティブ API 呼び出しではなく、SQL クエリ ーを使用します。

このプロパティーの既定値は FALSE です。これは、Campaign が標準的な 方法 (ODBC やネイティブ接続など) を使用してスキーマを取り出すよう指 示するものです。このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すために select * from のよう な SQL クエリーを準備することになります。

これは、各データ・ソース固有の利点を提供するものとなります。例えば、 一部のデータ・ソース (Netezza、SQL Server) の場合、既定の ODBC また はネイティブ接続では SQL のシノニム (create synonym 構文を使用して 定義されるデータベース・オブジェクトの代替名) のレポートが正しく作成 されません。このプロパティーを TRUE に設定することにより、Campaign 内でのデータ・マッピングのための SQL シノニムが取り出されます。

以下のリストは、いくつかのデータ・ソースに対するこのプロパティーの設 定値の動作を説明したものです。

- Netezza においてシノニムのサポートを可能にするには、このプロパティーを TRUE に設定する必要があります。このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すための SQL クエリーを準備することになります。 Netezza データ・ソースにおいて、シノニム・サポートのために、それ以外の設定や値は必要ありません。
- SQL Server の場合、シノニムのサポートを可能にするには、このプロパ ティーを TRUE に設定し、かつ、このデータ・ソースの TableListSQL

プロパティーに有効な SQL を入力する必要があります。詳しくは、 TableListSQL プロパティーの説明を参照してください。

- Oracle データ・ソースの場合にこのプロパティーを TRUE に設定する と、Campaign はテーブル・スキーマを取り出すための SQL クエリーを 準備することになります。結果セットでは NUMBER 項目 (精度/有効桁数の 指定がないため Campaign では問題が発生する)が、NUMBER(38) として 識別されるため、問題発生を回避できます。
- その他のデータ・ソースの場合、このプロパティーを TRUE に設定する ことにより、前述の既定の SQL select クエリーを使用したり、または既 定値として使用される ODBC API やネイティブ接続の代わりに (または それらに加えて) 使用する有効な SQL を TableListSQL プロパティーで 指定したりすることができます。詳しくは、TableListSQL プロパティー の説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

例

Campaign で Netezza または SQL Server シノニムが正常に動作するために は、

UseSQLToRetrieveSchema=TRUE

UserTablePostExecutionSQL

説明

UserTablePostExecutionSQL プロパティーは、ユーザー・データ・ソースま たはシステム・テーブル・データベースにおけるユーザー・テーブルの作成 直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステート メントを指定するために使用します。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

UserTablePostExecutionSQL プロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。 SQL ステ ートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメン トとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバッ クスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: UserTablePostExecutionSQL プロパティーでストアード・プロシージャー を使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されている ことを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号)を使用しています。 begin dbms_stats.collect_table_stats ()¥; end¥;

UserTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 44. UserTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー 名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換さ れます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換され ます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータ ベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフロ ーチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されま す。
<tablename></tablename>	このトークンは、ユーザー・テーブル名に置き換わりま す。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

UseTempTablePool

説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポート されています。サポートされているその他のすべてのデータベースでは、こ のオプションを FALSE に設定してください。

UseTempTablePool プロパティーが TRUE に設定されている場合、一時テー ブルがデータベースからドロップされません。一時テーブルは、切り捨てら れた上で、Campaign によって維持されているテーブルのプールから再利用 されます。 FALSE に設定されている場合、一時テーブルはドロップされ、 フローチャートが実行されるたびに毎回再作成されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

SegmentTablePostExecutionSQL

説明

SegmentTablePostExecutionSQL プロパティーは、セグメント一時テーブル が作成され、データが設定された後に Campaign によって実行される、完成 された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用されます。

SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 45. SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユー ザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな ったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換 されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデ ータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連す るフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換さ れます。
<tablename></tablename>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き 換えられます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

SnapshotTablePostExecutionSQL

説明

SnapshotTablePostExecutionSQL プロパティーは、スナップショット・テー ブルが作成され、データが設定された直後に実行される、完成された 1 個 以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

SnapshotTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 46. SnapshotTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象
	となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing
	ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象
	となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード
	に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象
	となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に
	置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成され
	たデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されま
	す。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連
	するフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置
	換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置
	換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

未定義

有効な値

有効な SQL ステートメント

TempTablePrefix

説明

TempTablePrefix パラメーターは、Campaign によって作成されるすべての 一時テーブルの名前の先頭に、自動的に付加されるストリングを指定しま す。このパラメーターを使用すると、一時テーブルの識別と管理のために役 立ちます。また、このプロパティーを使用することによって、一時テーブル を特定の場所に作成することができます。

例えば、ユーザー・トークンがスキーマと一致している場合、次のように設 定できます。

TempTablePrefix="<USER>"

そして、すべての一時テーブルが、データ・ソースに接続されているあらゆ るユーザーのスキーマで作成されます。

TempTablePrefix で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 47. TempTablePrefix で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

注: トークンの解決後の最終一時テーブル名が、データベース固有の名前長の制限を超えていないことを確認する必要があります。

注: TempTablePrefix に使用されるトークンで、データベース・テーブル名 のために有効でない文字があれば、それらはすべてスキップされます。トー クンの解決後、結果として得られる一時テーブル接頭部は、先頭の文字が英 字でなければならず、残りは英数字または下線文字でなければなりません。 正しくない文字があれば、警告が出されることなく除去されます。結果とし て得られる一時テーブル接頭部の先頭文字が英字でない場合、Campaign は 接頭部の前に U の文字を付加します。

デフォルト値

UAC

TempTablePreTruncateExecutionSQL

説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティーは、一時テーブル切り捨 ての前に実行する SQL クエリーを指定するために使用します。指定するク エリーは、TempTablePostExecutionSQL プロパティーで指定される SQL ス テートメントの効果を打ち消すために使用できます。

例えば、TempTablePostExecutionSQL プロパティーを使用することにより、 索引作成のための以下の SQL ステートメントを指定できます。

CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>

その上で、TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティーに、索引をド ロップするための以下のクエリーを指定します。

DROP INDEX <TABLENAME>Idx 1 ON <TABLENAME>

未定義

有効な値

有効な SQL クエリー

TempTablePreTruncateRunScript

説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateRunScript プロパティーは、一時テーブルの切り捨て の前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用し ます。指定するスクリプトは、PostTempTableCreateRunScript プロパティ ーで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用すること ができます。

例えば、PostTempTableCreateRunScript プロパティーを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを含むスクリプトを指定 することができます。

CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>

その上で、TempTablePreTruncateRunScript プロパティーに、索引をドロッ プするための以下のステートメントを含む別のスクリプトを指定します。

DROP INDEX <TABLENAME>Idx 1 ON <TABLENAME>

デフォルト値

未定義

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

TeradataDeleteBeforeDrop

説明

TeradataDeleteBeforeDrop パラメーターは、Teradata データ・ソースにの み適用されます。これは、テーブルをドロップする前にレコードを削除する かどうかを指定します。

テーブルをドロップする前に、テーブルからすべてのレコードを削除する場合は、この値を TRUE に設定します。

注: 何らかの理由で Campaign がレコードを削除できなかった場合、テーブ ルはドロップされません。

最初にすべてのレコードを削除することなく、テーブルをドロップする場合は、この値を FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

TruncateSQL

説明

TruncateSQL プロパティーは、DB2 データ・ソースで使用可能であり、テ ーブルの切り捨てのための代替 SQL を指定するために使用します。このプ ロパティーは、DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合にのみ適 用されます。 DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合、このプ ロパティーにカスタム SQL が指定されているなら、テーブルの切り捨てに は、それが使用されます。このプロパティーが設定されていない場合、 Campaign は、TRUNCATE TABLE <TABLENAME> の構文を使用します。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

TruncateSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 48. TruncateSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign が切り捨てるデータベース・テ
	ーブル名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Туре

説明

「パーティション」>「パーティション[n]」>「dataSources」> [data_source_name] >「タイプ」プロパティーは、このデータ・ソースのデ ータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

既定値は、データ・ソース構成を作成するために使用されるデータベース・ テンプレートに応じて異なります。

有効な値

システム・テーブルに有効な値は、以下のとおりです。

- SQLServer
- DB2
- DB20DBC
- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9

顧客テーブルに有効な値には、以下も含まれます。

- SYBASE
- INFORMIX7
- INFORMIX8
- INFORMIX9
- TERADATA

- NETEZZA
- SAS
- SASDB

UseExceptForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操 作が実行される場合、既定値として次のような "NOT EXISTS" の構文が使 用されます。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS
(SELECT * FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)

UseExceptForMerge が TRUE に設定されている場合 (UseNotInForMerge が 無効になっているか、またはオーディエンス・レベルが複数の項目で構成さ れていてデータ・ソースが Oracle でないために) "NOT IN" を使用できな い場合、この構文は以下のように変更になります。

Oracle

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

その他

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseMergeForTrack

説明

トラック・プロセスのパフォーマンス向上のため、SQL MERGE 構文を実 装します。 DB2、Oracle、SQL Server 2008、および Teradata 12 では、 UseMergeForTrack プロパティーを TRUE に設定できます。 SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースでも使用できます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (その他すべて)

有効な値

TRUE | FALSE

UseNonANSIJoin

説明

UseNonANSIJoin プロパティーは、このデータ・ソースで非 ANSI の結合構 文を使用するかどうかを指定します (例えば、Oracle の 8 より前のバージ ョン、および Informix8 の場合)。

- データ・ソースのタイプが Informix8 に設定されている場合、 UseNonANSIJoin の値は無視され、Informix8 に該当する非 ANSI の結合 構文が常に使用されます。
- データ・ソースのタイプが Oracle7 または Oracle8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定されているなら、データ・ソースにおいて Oracle に該当する非 ANSI の結合構文が使用されます。
- データ・ソースのタイプが Sybase に設定されている場合、 UseNonANSIJoin が TRUE に設定されているなら、データ・ソースにおい て Sybase に該当する非 ANSI 結合構文が使用されます。

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseNotInForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操 作が実行される場合、既定値として次のような "NOT EXISTS" の構文が使 用されます。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT *
FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)

UseNotInForMerge が有効の場合 (値が YES に設定されている場合) で、か つ (1) オーディエンス・レベルが単一 ID 項目で構成されているか、また は (2) データ・ソースが Oracle であるかのいずれかなら、構文は以下のよ うに変更されることになります。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

デフォルト値

NO

有効な値

YES | NO

UseSQLToProfile

説明

UseSQLToProfile プロパティーは、("SELECT *field*, count(*) FROM *table* GROUP BY *field*" を使用して) プロファイルを計算するのに、レコードをフェッチする代わりに、データベースに対して SQL クエリー GROUP BY をサブミットするよう、Campaign を構成するために使用します。

- 値が FALSE (既定値) の場合、Campaign は、テーブル中の全レコードに ついて項目の値を取り出して項目のプロファイルを作成し、異なる各値の カウントを追跡します。
- 値が TRUE の場合、Campaign は、以下のようなクエリーを発行すること により、項目のプロファイルを作成します。

```
SELECT field, COUNT(*) FROM table GROUP BY field
```

これは、データベースに負荷を押し付けます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリーのプロパティーには、システム・テーブルを再マッ プするか、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップする と、自動的にデータが設定されます。このカテゴリー内のプロパティーを編集しな いでください。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | systemCodes

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign において可変長コードを許容するかどうか、キャンペーンとセル・コードの形式とジェネレーター、オファー・コードを表示するかどうか、さらにはオファー・コードの区切り文字を指定します。

offerCodeDelimiter

説明

offerCodeDelimiter プロパティーは、複数のコード・パーツを連結する場合 (例えば、Campaign 定義項目の「OfferCode」項目を出力する場合) や、 Campaign レスポンス・プロセスの着信オファー・コードを複数のパーツに 分割する場合に内部的に使用されます。値は、単一文字のみでなければなり ません。

今回のバージョンの Campaign の場合、「NumberOfOfferCodesToUse」パラ メーターは既に存在しないことに注意してください。現在ではこの値は、オ ファー・テンプレートから取得されます (オファー・テンプレートそれぞれ のオファー・コード数は異なる可能性があります)。

デフォルト値

-

allowVariableLengthCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティーは、可変長コードが Campaign で 許容されるかどうかを指定します。

値が「はい」で、コード形式の末尾部分が x の場合、異なるコード長にすることが可能です。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合、コード長が 4

文字から 8 文字までのコードが可能です。これは、キャンペーン、オファ ー、バージョン、トラッキング、セルの各コードに適用されます。

値が「いいえ」の場合には、可変長コードは許容されません。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

displayOfferCodes

説明

```
displayOfferCodes プロパティーは、Campaign GUI でオファー・コードの
名前の横にオファー・コードを表示するかどうかを指定します。
```

- 値が「はい」の場合、オファー・コードが表示されます。
- 値が「いいえ」の場合、オファー・コードは表示されません。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

cellCodeFormat

説明

cellCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーター が、既定のセル・コード・ジェネレーターによって自動的に作成されるセ ル・コードの形式を定義するために使用されます。

有効値のリストについては、campCodeFormat を参照してください。

デフォルト値

Annnnnnn

campCodeFormat

説明

campCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーター が、ユーザーによるキャンペーン作成時に既定のキャンペーン・コード・ジ ェネレーターによって自動的に生成されるキャンペーン・コードの形式を定 義するために使用されます。

デフォルト値

Cnnnnnnnn

有効な値

可能な値は、以下のとおりです。

- A-Z または任意の記号 定数として扱われます。
- a ランダムな英字 A-Z (大文字のみ)

- c ランダムな英字 A-Z または数字 0-9
- n ランダムな数字 0-9
- x 0 から 9 または A から Z までの任意の単一の ASCII 文字。生成されたキャンペーン・コードを編集し、Campaign が「x」に関して置換した ASCII 文字をさらに任意の ASCII 文字に置き換えて、Campaign が代わ りにその文字を使用するようにできます。

cellCodeGenProgFile

説明

cellCodeGenProgFile プロパティーは、セル・コード・ジェネレーターの名 前を指定します。ジェネレーターが、Campaign によって提供される既定の ジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定します。 生成されたコードの形式を制御するプロパティーは、cellCodeFormat プロ パティーで設定します。サポートされるオプションのリストについては、 campCodeGenProgFile を参照してください。

独自のセル・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プロ グラムの絶対パスで既定値を置換してください。絶対パスには、UNIXの場 合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥)を使用してファイル 名と拡張子を含めます。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

campCodeGenProgFile

説明

campCodeGenProgFile プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレー ターの名前を指定します。ジェネレーターが Campaign によって提供される 既定のジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定し ます。

生成されたコードの形式を制御するプロパティーは campCodeFormat プロパ ティーで設定します。

独自のキャンペーン・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスで既定値を置換してください。絶対パスには、 UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥)を使用してファイル名と拡張子を含めます。

既定のキャンペーン・コード・ジェネレーターでは、以下のオプションを指 定して呼び出す操作が可能です。

- -y: 年 (整数 4 桁)
- -m 月 (1 桁または 2 桁の整数。値を 12 より大きくできません)
- -d 日 (1 桁または 2 桁の整数。値を 31 より大きくできません)
- -n キャンペーン名 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- -o キャンペーン所有者 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)

- -u:キャンペーン・コード (任意の整数)。アプリケーションに生成させ るのではなく、ユーザーが正確なキャンペーン ID を指定できます。
- -f 既定値を指定変更する場合のコード形式。 campCodeFormat で指定された値をとります。
- -i: その他の整数。
- -s:その他のストリング。

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | エンコード (encoding)

このカテゴリーのプロパティーは、非英語データをサポートするために、ファイル に書き込まれる値のテキスト・エンコーディングを指定します。

stringEncoding

説明

「パーティション[n]」>「サーバー (server)」>「エンコード (encoding)」>「stringEncoding」プロパティーは、Campaign がフラット・ ファイルを読み込む方法と書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ ファイルで使用するエンコードが同じでなければなりません。どこにも構成 しないと、フラット・ファイル・エンコードの既定の設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

既定では、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Campaign の既 定のエンコードである UTF-8 としてエンコードされます。

使用する値が暗黙の既定値と同じ UTF-8 であっても、システムに適切なエ ンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスとなりま す。

注: StringEncoding プロパティーの値を dataSources カテゴリーのデー タ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティーの値が既定 値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性がありま す。dataSources カテゴリーでは、必ず StringEncoding プロパティーを明 示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

forceDCTOneBytePerChar

説明

forceDCTOneBytePerChar プロパティーは、Campaign が UTF-8 にトランス コーディングするための十分なスペースを確保するために予約済みの拡張可 能な項目幅ではなく、出力ファイルの元の項目幅を用いるかどうかを指定し ます。

テキスト値の長さは、表記に使用するエンコードによって異なる場合があり ます。stringEncoding プロパティーが ASCII でも UTF-8 でもないデー タ・ソースに由来するテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 にトランス コーディングするための十分なスペースを確保するために項目幅の 3 倍を 予約します。例えば、stringEncoding プロパティーが LATIN1 に設定さ れ、データベースの項目が VARCHAR(25) と定義されている場合、Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために 75 バイトを予 約します。元の項目幅を用いる場合には、forceDCTOneBytePerChar プロパ ティーを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | timeout

このカテゴリーのプロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了し た後に Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数、および Campaign サーバー・プロセスがエラーを報告するまでに外部サーバーからの応答を待機する 秒数を指定します。

waitForGracefulDisconnect

説明

waitForGracefulDisconnect プロパティーは、Campaign サーバー・プロセ スではユーザーが切断するまでは確実に実行を継続するのか、ユーザーに切 断する意思があるかどうかに関係なく終了するのかを指定します。

値が既定の「はい」の場合、サーバー・プロセスは、ユーザーが終了する意 思があるかどうかはっきりするまで実行を継続します。このオプションを使 用すると、変更内容が失われることがなくなりますが、サーバー・プロセス が累積してしまう恐れがあります。

値が「いいえ」の場合、サーバー・プロセスはシャットダウンするので累積 することはありませんが、ネットワーク中断が生じたり終了するために推奨 されている操作手順に正しく従わなかったりする場合には作業内容が失われ る可能性があります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

urlRequestTimeout

説明

urlRequestTimeout プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスが外部 サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。現在、この設定は Campaign を使用して作動する IBM Unica Marketing サーバーと eMessage コンポーネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバー・プロセスがこの期間内に応答を受け取らないと、通信 タイムアウト・エラーが報告されます。

デフォルト値

60

delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業 が完了した後に、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数 を指定します。

このプロパティーを「0」以外の値に設定すると、後続の Campaign フロー チャートでは新しいインスタンスを開始するのではなく、既存のインスタン スを使用できるようになります。

デフォルト値

10

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | collaborate

collaborateInactivityTimeout

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティーは、unica_acsvr プロセスが、 Distributed Marketing 要求にサービス提供を終了してから閉じるまでの待機 時間を秒単位で指定します。この待機期間によって、フローチャートを実行 する前に Distributed Marketing が一連の要求を行うという一般的なシナリオ において、このプロセスを使用可能な状態のままにしておくことができま す。

最小値は 1 です。このプロパティーを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

デフォルト値

60

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | permissions

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign によって作成されるフォルダーに設定 される権限、および「プロファイル」ディレクトリーに入れるファイルに設定され る UNIX グループと権限を指定します。

userFileGroup (UNIX のみ)

説明

userFileGroup プロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイルに関連付 けるグループを指定します。このグループが設定されるのは、ユーザーが指 定のグループのメンバーである場合のみです。

このプロパティーは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

catalogFolderPermissions

説明

catalogFolderPermissions プロパティーは、「テーブル・カタログ」>「フ ォルダー作成」ウィンドウを使用して Campaign によって作成されるディレ クトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

templateFolderPermissions

説明

templateFolderPermissions プロパティーは、「**テンプレート**」>「フォル **ダー作成**」ウィンドウを使用して、Campaign によって作成されるテンプレ ート・ディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには読み取り/実行アクセス権があります)

adminFilePermissions (UNIX のみ)

説明

adminFilePermissions プロパティーは、「プロファイル」ディレクトリー に入るファイルの権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

660 (所有者とグループには読み取り/書き込みアクセス権のみがあります)

userFilePermissions (UNIX のみ)

説明
userFilePermissions プロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイル (例えば、ログ・ファイル、サマリー・ファイル、エクスポート済みフラット・ファイル) の権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

666 (サーバーで Campaign によって作成されるファイルはすべてのユーザ ーが読み取りおよび書き込みできます)

adminFileGroup (UNIX のみ)

説明

adminFileGroup プロパティーは、「プロファイル」ディレクトリーに入る ファイルと関連付ける UNIX 管理グループを指定します。

このプロパティーは、既定では未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | flowchartConfig

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign 生成済み項目の動作、重複セル・コードが許可されるかどうか、および「コンタクト履歴テーブルに記録」オプションの 既定値を有効にするかどうかを指定します。

allowDuplicateCellcodes

説明

allowDuplicateCellcodes プロパティーは、Campaign スナップショット・ プロセスのセル・コードで重複値を許可するかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードが強制されま す。

値が yes の場合、Campaign では固有のセル・コードは強制されません。

デフォルト値

yes

allowResponseNDaysAfterExpiration

説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティーは、すべてのオファーの 有効期限の後、レスポンスを追跡できる最大日数を指定します。こうした戻 りの遅い応答は、パフォーマンス・レポートに含められる可能性がありま す。

デフォルト値

90

agfProcessnameOutput

```
説明
```

agfProcessnameOutput プロパティーは、リスト、最適化、応答、スナップ ショットの各プロセスにおける Campaign 生成済み項目 (UCGF) の出力動 作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、UCGF には入力セルに関連するプロセス名が入ります。

値が CURRENT の場合、UCGF は使用しているプロセスのプロセス名を保持します。

デフォルト値

PREVIOUS

有効な値

PREVIOUS | CURRENT

logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティーは、Campaign コンタクト・プロセスの 「ログ」タブにある「コンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブ ルに記録 (Log to Contact History and Tracking Tables)」オプションを既定 で有効にするかどうかを指定します。

値が yes の場合、このオプションは有効になります。

値が no の場合、このオプションは新しく作成されるコンタクト・プロセス ではすべて無効になります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes no

defaultBehaviorWhenOutputToFile

説明

ファイルへの出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を 指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティションのみ です。設定時の既定の動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく 追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加される と、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

データ置換

有効な値

- データ追記
- 新規ファイル作成
- データ置換

defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベース表への出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの 動作を指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティショ ンのみです。設定時の既定の動作の適用対象となるのは、フローチャートに 新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加 されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

データ置換

有効な値

- データ追記
- データ置換

replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames が TRUE に設定されている場合、Campaign は照会テ キストに組み込まれているユーザー変数と UCGF 名を実際の値に置き換え ます。ただし、それらの名前は英数字以外の文字、例えばアンダースコアー などによって区切られている必要があります (例えば、ABC_UserVar.v1 は 置換されますが、ABCUserVar.v1 は置換されません)。 Campaign 7.2 以前と の後方互換性を持たせるには、このプロパティーを TRUE に設定してくださ い。

FALSE に設定すると、Campaign が実際の値に置換するのは識別可能なユー ザー変数と UCGF 名 (Unica 式および未加工の SQL 式)のみです。 Campaign 7.3 以降との後方互換性を持たせるには、このプロパティーを FALSE に設定してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | flowchartSave

このカテゴリーのプロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プ ロパティーとチェックポイント・プロパティーの既定の設定を指定します。

checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの チェックポイント・プロパティーの既定の設定を分単位で指定します。これ は、クライアント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャートごとに構 成できます。チェックポイント機能を使用すると、実行中のフローチャート のスナップショットを、リカバリーの目的で取り込むことができます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

autosaveFrequency

説明

autosaveFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自 動保存プロパティーの既定の設定を分単位で指定します。これは、クライア ント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。 自動保存機能は、編集時および構成時に、フローチャートの強制的な保存を 行います。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | dataProcessing

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign がフラット・ファイル内のストリング 比較と空項目を処理する方法、およびマクロ STRING CONCAT の動作を指定します。

longNumericIdsAsText

説明

longNumericIdsAsText プロパティーは、Campaign マクロ言語が、15 桁を 超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。

値を yes に設定すると、15 桁を超える数値 ID はテキストとして処理されます。

値を no に設定すると、15 桁を超える数値 ID は数値として処理されるの で、切り捨てや丸めが行われると精度や固有性が失われる可能性がありま す。

注: この設定は、対象のデータ・ソースに由来する項目で 「パーティション」> 「パーティション[n]」>「dataSources」> [data_source_name] >「ForceNumeric」プロパティーを TRUE に設定すると無効になります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

stringConcatWithNullIsNull

説明

stringConcatWithNullIsNull プロパティーは、Campaign マクロ STRING CONCAT の動作を制御します。

値が yes の場合、STRING_CONCAT のいずれかの入力が NULL であると、 NULL を戻します。

値が no の場合、STRING_CONCAT は NULL 以外のすべてのプロパティーを連結した値を戻します。その場合、STRING_CONCAT のすべての入力が NULL であれば、NULL だけを戻します。

```
デフォルト値
```

yes

有効な値

yes no

performCaseInsensitiveComparisonAs

説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティーは、 compareCaseSensitive プロパティーが no に設定されている場合 (つまり、 大/小文字を区別しない比較の場合)、Campaign がデータ値を比較する方法 を指定します。compareCaseSensitive の値が yes の場合には、このプロパテ ィーは無視されます。

値が UPPER の場合、Campaign はすべてのデータを大文字に変換してから比較を行います。

値が LOWER の場合、Campaign はすべてのデータを小文字に変換してから比較を行います。

デフォルト値

LOWER

有効な値

UPPER | LOWER

upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティーは、 UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定し ます。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメー ターを使用できます。 データベースが DB2、Teradata、Sybase、Informix の場合には、値を no に 設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パ ラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes no

compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティーは、Campaign データ比較において英字 の大/小文字 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign では、データ値の比較の際に大/小文字の違いが 無視され、バイナリーのテキスト・データは大/小文字を区別しない方法で ソートされます。英語データを使用する場合には、この設定を強くお勧めし ます。

値が yes の場合、Campaign は大/小文字を区別してデータ値を識別し、そ れぞれの文字の実際のバイナリー値比較を行います。英語以外のデータを使 用する場合には、この設定を強くお勧めします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

IowerAllowsDate

説明

lowerAllowsDate プロパティーは、 LOWER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定し ます。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメー ターを使用できます。

データベースが DB2、Teradata、Sybase、Informix の場合には、値を no に 設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パ ラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。 通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけで すが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあ ります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

substrAllowsDate

説明

substrAllowsDate プロパティーは、 SUBSTR/SUBSTRING データベース関数 で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデ ータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する 必要があるのかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata の場合には、値を yes に設定しま す。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが SQL Server、DB2、Sybase、Informix の場合には、値を no に設定します。SQL Server、DB2、Sybase では、SUBSTR/SUBSTRING 関数に おいて DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されません。Informix の SUBSTR では DATE パラメーターは受け入れられますが、DATE はまずテキス トに変換されて、形式が変更されます。そのため SUBSTR は Campaign サー バーを使用して比較が行われるデータベースで戻す結果が異なるので、デー タベースが Informix の場合のベスト・プラクティスとしては substrAllowsDate を no にします。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

ItrimAllowsDate

説明

ltrimAllowsDate プロパティーは、 LTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。 データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を yes に設 定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラ メーターを使用できます。

データベースが DB2、Sybase、Informix の場合には、値を no に設定しま す。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータ ーの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。 通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけで すが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあ ります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes no

rtrimAllowsDate

説明

rtrimAllowsDate プロパティーは、 RTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を yes に設 定します。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラ メーターを使用できます。

データベースが DB2、Sybase、Informix の場合には、値を no に設定しま す。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメータ ーの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes no

likeAllowsDate

説明

likeAllowsDate プロパティーは、 LIKE データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定し ます。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメータ ーを使用できます。

データベースが DB2、Teradata、Sybase、Informix の場合には、値を no に 設定してください。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

注: これはグローバルの設定で、データ・ソース単位の設定ではありません。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes no

fileAllSpacesIsNull

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティーは、フラット・ファイル内のすべてのスペース値を NULL 値と見なすかどうかを指定することによって、Campaign がマップ済みフラット・ファイル内の空項目をインタープリットする方法を指定します。

値が yes の場合、すべてのスペース値は NULL 値と見なされます。 Campaign は <field> is null のような照会を突き合わせますが、<field> = "" などの照会では失敗します。

値が no の場合、すべてのスペース値は NULL ではない空ストリングとして 処理されます。Campaign は <field>= "" のような照会を突き合わせます が、<field> is null という照会では失敗します。

デフォルト値

yes

```
有効な値
```

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | optimization

このカテゴリーのプロパティーは、パーティションのための Campaign サーバーの 最適化を制御します。

注: このカテゴリーのパラメーターは、Optimize には関連しません。

maxVirtualMemory

説明

```
maxVirtualMemory プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの
Affinium 仮想メモリー使用量 (Affinium Virtual Memory Usage) プロパティ
ーの既定設定を指定します。これは、クライアント側の「詳細設定」ウィン
ドウからフローチャートごとに構成できます。単位は、M バイトです。
```

デフォルト値

128

useInDbOptimization

説明

useInDb0ptimization プロパティーは、Campaign が、Campaign サーバー ではなくデータベースで可能な限り多くの操作の実行を試行するかどうかを 指定します。

値が「いいえ」の場合、Campaign では、Campaign サーバーにある ID の リストが常時維持されます。

値が「はい」の場合、Campaign では ID リストのプルを可能な限り行わな いようにします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

maxReuseThreads

説明

maxReuseThreads プロパティーは、サーバー・プロセス (unica_acsvr) が再 使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッド の数を指定します。既定では、このプロパティーが 0 に設定され、キャッ シュは無効になります。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプ リケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあ るオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベス ト・プラクティスと言えます。

```
maxReuseThreads プロパティーをゼロ以外の値に設定する場合、
MaxQueryThreads の値以上でなければなりません。
```

デフォルト値

0(ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

threadStackSize

説明

threadStackSize は、各スレッドのスタックに割り当てられるバイト数を決 定します。 IBM から指示された場合にのみ、このプロパティーを変更して ください。最小値は 128K です。最大値は 8MB です。

デフォルト値

1048576

tempTableDataSourcesForSegments

説明

tempTableDataSourcesForSegments プロパティーは、セグメント作成プロセスが永続セグメントー時表を作成する必要のあるデータ・ソースのリストを 定義します。このリストは、コンマ区切りリストです。

既定では、このプロパティーはブランクです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

doNotCreateServerBinFile

説明

このオプションを「TRUE」に設定すると、戦略セグメントによって Campaign サーバー上にバイナリー・ファイルは作成されません。代わり に、戦略セグメントによってデータ・ソース内にセグメント一時表が作成さ れます。値を「TRUE」に設定する場合、セグメント作成プロセスの構成で、 少なくとも 1 つのデータ・ソースを指定する必要があります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

forceViewForPreOptDates

説明

デフォルト値 (TRUE) の場合、Optimize からオファーが割り当てられたメー ル・リスト・プロセス内のパラメーター化されたオファー属性ビューを強制 的に作成します。値 FALSE を指定すると、少なくとも 1 つのパラメータ化 されたオファー属性がメール・リストによってエクスポートされる場合にの み、パラメータ化されたオファー属性ビューが作成されます。

この値が FALSE に設定された場合、(Optimize セッションをソースとする) 抽出プロセスから入力を得るよう構成されたメール・リスト・プロセスは、 パラメーター化された開始日と終了日がオファーに含まれる場合でも、

UA_Treatment テーブル内で EffectiveDate および ExpirationDate に NULL 値を書き込むことがあります。この場合、設定を TRUE に戻してください。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | logging

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign サーバーで標準および Windows のイベント・ロギングを有効にするかどうか、ロギング・レベルとカテゴリー、および その他のロギング動作を指定します。

enableWindowsEventLogging

説明

enableWindowsEventLogging プロパティーは、Windows イベント・ログに 対する Campaign サーバー・ロギングを有効にするか無効にするかを指定し ます。

値が yes の場合、Windows イベント・ログへのロギングが有効になりま す。

値が no の場合には、Windows イベント・ログへのロギングは無効です。 無効の場合、windowsEventLoggingLevel と windowsEventLoggingCategory の設定は無視されます。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

logFileBufferSize

説明

logFileBufferSize プロパティーは、keepFlowchartLogOpen プロパティー の値が yes の場合に使用されます。設定するこのログ・メッセージ数の上 限に達した後に、メッセージはファイルに書き込まれます。

値が1の場合、それぞれのログ・メッセージはすぐにファイルに書き込まれ、事実上バッファリングは不要になりますが、パフォーマンスに悪影響を 及ぼします。

このプロパティーは、keepFlowchartLogOpen の値が no に設定されている 場合には無視されます。

デフォルト値

5

keepFlowchartLogOpen

説明

keepFlowchartLogOpen プロパティーは、ログ・ファイルに行が書き込まれ るたびに、フローチャート・ログ・ファイルを Campaign が開いて閉じるか どうかを指定します。 値が no の場合、Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを開いてか ら閉じます。

値が yes の場合、Campaign は 1 度だけフローチャート・ログ・ファイル を開き、その後、フローチャートのサーバー・プロセスが終了する際にのみ フローチャート・ログ・ファイルを閉じます。リアルタイム・フローチャー トの場合、値を yes にするとパフォーマンスが向上する場合があります。 yes 設定を使用する副作用としては、ログに記録されたばかりのメッセージ がログ・ファイルに直ちに表示されないことがあります。Campaign がロ グ・メッセージをファイルにフラッシュするのは、内部バッファーが満杯に なったか、ログ・メッセージ数が logFileBufferSize プロパティーの値と 等しくなった場合だけだからです。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

logProcessId

説明

logProcessId プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスのプロセス ID (PID) をログ・ファイルに記録するかどうかを制御します。

値が yes の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が no の場合には、プロセス ID は記録されません。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティーは、Campaign サーバーのバックアップ・ ログ・ファイルのうち最も古いログ・ファイルを削除するまでに、保持して おくバックアップ・ログ・ファイル数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、 logFileMaxSize プロパティーで指定されたサイズに達するとログ・ファイ ルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である n の場合、ファイル {File.1, ..., File.n-1} は {File.2, ..., File.n} に名前変更されます。また File は File.1 と名前変 更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい File が作成されます。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ログ・ファイルを作成)

loggingCategories

説明

loggingCategories プロパティーは、 Campaign サーバー・ログ・ファイル に書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。このプロパティー は、すべての選択したカテゴリーの重大度に基づいてログに記録するメッセ ージを判別する loggingLevels と連動します。複数のカテゴリーをコンマ区 切りリストで指定できます。特殊カテゴリー all を使用すると、すべての ロギング・カテゴリーを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

以下のカテゴリーがサポートされます。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE IO
- WEBPROC

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティーは、重大度に基づいて、Campaign サーバー・ ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM

- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。フローチャート内の「ツール」>「ログ・オプション」メニューを使用して、これらの設定を調整できます。

注:診断のために Campaign からのロギング出力を最大限取得するには、構成やテストの際に loggingLevels プロパティーを ALL に設定することもできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実動操作にはお勧めできない場合があります。

windowsEventLoggingCategories

説明

windowsEventLoggingCategories プロパティーは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定し ます。このプロパティーは、すべての選択したカテゴリーの重大度に基づい てログに記録するメッセージを判別する windowsEventLoggingLevels と連動 します。

コンマ区切りリストに複数のカテゴリーを指定できます。特殊カテゴリー all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリーを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

logFileMaxSize

説明

logFileMaxSize プロパティーは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに許可されるバイト単位の最大サイズを指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

```
windowsEventLoggingLevels プロパティーは、Campaign サーバーの
Windows イベント・ログに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御しま
す。
```

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く(最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

enableLogging

説明

enableLogging プロパティーは、 Campaign サーバー・ロギングをセッショ ン始動時に有効にするかどうかを指定します。

値が yes の場合、ロギングが有効になります。

値が no の場合、ロギングは無効です。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | flowchartRun

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign スナップショットのエクスポートで許 容されるエラー数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト 実行の最上位プロセスごとの最大 ID 数を指定します。

maxDataErrorsAllowed

説明

```
maxDataErrorsAllowed プロパティーは、Campaign スナップショットのエク スポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。
```

```
デフォルト値
```

```
0(ゼロ)。これは、エラーを許容しません。
```

saveRunResults

説明

saveRunResults プロパティーは、ユーザーが Campaign フローチャートを 保存する際に保存されるファイルを指定します。

値がはいの場合にはアンダースコアー付きのファイルが保存され、

useInDbOptimization の値がはいの場合にはデータベース一時表が保持されます。

値がいいえの場合、保存されるのは .ses ファイルだけで、フローチャート を再ロードしても中間結果は表示できません。

デフォルト値

```
yes
```

有効な値

```
yes | no
```

testRunDefaultSize

説明

testRunDefaultSize プロパティーは、Campaign テスト実行における最上位 プロセスごとの最大 ID 数の既定値を指定します。値が 0 (ゼロ) の場合、 ID 数に制限はありません。

デフォルト値

0(ゼロ)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | profile

このカテゴリーのプロパティーは、数値およびテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数を指定します。

profileMaxTextCategories

説明

profileMaxTextCategories プロパティーと profileMaxNumberCategories プロパティーは、テキスト値と数値のプロファイル作成時に Campaign で作 成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

これらの値は、ユーザーに対して表示される階級数の設定 (これはユーザ ー・インターフェースを通じて変更できます) とは異なります。 デフォルト値

1048576

profileMaxNumberCategories

説明

profileMaxNumberCategories プロパティーと profileMaxTextCategories プロパティーは、数値とテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作 成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

これらの値は、ユーザーに対して表示される階級数の設定 (これはユーザ ー・インターフェースを通じて変更できます) とは異なります。

デフォルト値

1024

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | internal

このカテゴリーのプロパティーは、選択した Campaign パーティションの統合設定 と internalID の制限を指定します。 Campaign インストール済み環境に複数のパー ティションがある場合、関係するパーティションごとにこれらのプロパティーを設 定します。

internalldLowerLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も 使用できます。

デフォルト値

0(ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も 使用できます。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。yes を選択すると、 eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。 IBM インストーラーは、eMessage インストールの既定のパーティションに 関してこのプロパティーを yes に設定します。eMessage をインストールし た追加パーティションについては、このプロパティーを手動で構成する必要 があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティーを yes に設定 し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact をインストールしていない場合、no に設定してください。このプロ パティーを no に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・ インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプション を削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動 で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

このパーティションで、Marketing Operations との統合を有効にします。以下の3つのオプションのいずれかをYes に設定する計画の場合、 MO_UC_integration をYes に設定する必要があります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合*ガ イド」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

MO_UC_BottomUpTargetCells

説明

このパーティションにおけるターゲット・セル・スプレッドシートのボトム アップ・セルを許可します。Yes に設定すると、トップダウンとボトムアッ プの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲッ ト・セルは読み取り専用です。MO_UC_integration が有効でなければなら ないことに注意してください。この統合の構成について詳しくは、「IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Legacy_campaigns

説明

MO_UC_integration プロパティーが Yes に設定されていると、 Legacy_campaigns プロパティーによって、統合が有効になる前に作成され たキャンペーン (Campaign 7.x で作成されたキャンペーンおよび Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンを含む) にアクセスできるように なります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

IBM Unica Marketing Operations - オファーの統合

説明

このパーティションにおいて、Marketing Operations を使用してオファー・ ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします (MO_UC_integration が有効でなければなりません。また、「設定」>「構成」 >「Unica」>「Platform」で「キャンペーンの統合 (Campaign integration)」も有効でなければなりません)。この統合の構成について詳し くは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参 照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

UC_CM_integration 説明

キャンペーン・パーティションで IBM Coremetrics オンライン・セグメン ト統合を有効にします。このオプションを Yes に設定すると、フローチャ ートの「選択」プロセス・ボックスに、「IBM Coremetrics セグメント」 を入力として選択するためのオプションが表示されます。それぞれのパーテ ィションの統合を構成するには、「設定」>「構成」>「Campaign | パーテ ィション | パーティション[n] | Coremetrics」を選択します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | fileDialog

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign の入力および出力のデータ・ファイル の既定のディレクトリーを指定します。

defaultOutputDirectory

説明

defaultOutputDirectory プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイ アログを初期設定するために使用するパスを指定します。 defaultOutputDirectory プロパティーは、出力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しなかった場合は、 環境変数 UNICA_ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

defaultInputDirectory

説明

defaultInputDirectory プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイ アログを初期設定するために使用するパスを指定します。 defaultInputDirectory プロパティーは、入力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しなかった場合は、 環境変数 UNICA ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | offerCodeGenerator

このカテゴリーのプロパティーは、オファー・コード・ジェネレーター、およびタ ーゲット・セル・スプレッドシートのセルにコンタクト・プロセスを割り当てる際 に使用するセル・コード・ジェネレーターのクラス、クラスパス、構成ストリング を指定します。

offerCodeGeneratorClass

説明

offerCodeGeneratorClass プロパティーは、オファー・コード・ジェネレー ターとして使用するクラス Campaign の名前を指定します。クラスは、パッ ケージ名で完全修飾する必要があります。

デフォルト値

印刷用に改行が使用されていることに注意してください。

com.unica.campaign.core.codegenerator.samples. ExecutableCodeGenerator

offerCodeGeneratorConfigString

説明

offerCodeGeneratorConfigString プロパティーは、オファー・コード・ジ ェネレーターのプラグインが Campaign によってロードされる際にそのプラ グインに渡されるストリングを指定します。既定では、 ExecutableCodeGenerator (Campaign に同梱) によってこのプロパティーが

使用され、実行する実行可能プログラムのパス (Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーへの相対パス) が示されます。

デフォルト値

./bin

defaultGenerator

説明

defaultGenerator プロパティーは、セル・コードのジェネレーターを指定 します。セル・コードはコンタクト・スタイル・プロセス・ボックスに表示 され、ターゲット・コントロール・スプレッドシートのセルにセルを割り当 てるのに使用されます。ターゲット・コントロール・スプレッドシートは、 キャンペーンとフローチャートにおけるセルとオファーのマッピングを管理 します。

デフォルト値

uacoffercodegen.exe

offerCodeGeneratorClasspath

説明

offerCodeGeneratorClasspath プロパティーは、オファー・コード・ジェネ レーターとして使用するクラス Campaign のパスを指定します。絶対パスで も相対パスでも構いません。

パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合 には円記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグ イン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末 尾がスラッシュではないと、Campaign では、Java クラスが含まれる jar ファイルの名前と見なされます。 相対パスの場合には、Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーに対して相対であると Campaign は見なします。

デフォルト値

codeGenerator.jar (Campaign.war ファイルにパッケージ)

Campaign | monitoring

このカテゴリーのプロパティーは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどう か、Operational Monitoring サーバーの URL、およびキャッシュ動作を指定します。 Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制 御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティーは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティーは、完了した実行がキャッシュに入れ られ、「監視」ページに表示される時間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティーは、モニターをオンにするかどうかを指定し ます。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

はい

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティーは、Operational Monitoring サーバーの URL を指定します。これは、必須の設定です。 Operational Monitoring サーバー URL がデフォルトでない場合は、値を変 更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されて いる場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティーの値を設定しま す。例えば、次のようにします。 serverURL=https://host:SSL_port/ Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host*は、Webアプリケーションがインストールされているマシンの名前 または IP アドレスです。
- SSL_Port は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

「はい」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で 使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

「いいえ」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

可用性

```
このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。
```

port

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、そのオファーに関連付けられる製品を指定できます。オファ ーとの関連付けに使用できる製品のリストが変更された場合は、オファーと製品の 関連付けを更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリーのプロ パティーは、その更新頻度、および最初に更新を実行する時刻を指定します。

startTime

説明

startTime プロパティーは、オファーと製品の関連付けが初めて更新される 時刻を指定します。最初の更新日付は Campaign サーバーを始動した後の日 付となり、その後の更新は間隔パラメーターで指定した間隔で行われます。 フォーマットは HH:mm:ss で、24 時間クロックを使用します。

Campaign を初めて始動する場合、以下の規則に従って、startTime プロパ ティーが使用されます。

- startTime で指定された時刻が将来の時刻である場合、オファーと製品の 関連付けの最初の更新は、当日の startTime に発生します。
- startTime が当日の過去の時刻である場合、最初の更新は、翌日の startTime か、現在の時刻から interval 分後のどちらか早い方の時刻に 発生します。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

interval

説明

interval プロパティーは、オファーと製品の関連付けの更新間隔を分単位 の時間で指定します。更新は、Campaign サーバーを開始した後の日付で、 startTime パラメーターで指定された時刻が初めて来ると行われます。

デフォルト値

3600 (60 時間)

Campaign | unicaACListener

このカテゴリーのプロパティーは、ロギング・レベル、特定のアクセス権、言語エ ンコード方式、オペレーティング・システム・スレッド数、および Campaign リス ナーのプロトコル、ホスト、ポートを指定します。これらのプロパティーを設定す る必要があるのは、それぞれの Campaign インスタンスについて 1 度限りです。各 パーティションに関して設定する必要はありません。

enableWindowsImpersonation

説明

enableWindowsImpersonation プロパティーは、Windows 偽装を Campaign Windows で有効にするかどうかを指定します。Campaign における Windows 偽装について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照して ください。

Windows 偽装を使用する場合には、値を TRUE に設定します。

Windows 偽装を使用しない場合には、値は FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

enableWindowsEventLogging

説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「enableWindowsEventLogging」プロパ ティーは、Windows イベント・ログへのロギングを制御します。このプロ パティーを TRUE に設定すると、Windows イベント・ログにログが記録さ れます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverHost

説明

serverHost プロパティーは、Campaign リスナーがインストールされている マシンの名前または IP アドレスを指定します。Campaign リスナーが、 IBM Unica Marketing がインストールされているのと同じマシン上にインス トールされていない場合、Campaign リスナーがインストールされているマ シンのマシン名または IP アドレスにこの値を変更してください。

デフォルト値

localhost

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティーは、保持可能なバックアップ・ファイル数 を指定します。このファイル数を超えると、最も古いバックアップ・ファイ ルが削除されます。このプロパティーを 0 (ゼロ) に設定すると、Campaign ではバックアップ・ファイルは作成されず、logMaxFileSize プロパティー で指定したサイズに達するとログ・ファイルでロギングが停止します。

このプロパティーに数値 (N) を指定すると、logMaxFileSize プロパティー で指定したサイズにログ・ファイル (File) が達すると、Campaign は既存 のバックアップ・ファイル (File.1 ... File.N-1) の名前を File.2 ... File.N に名前変更し、現在のログ・ファイル File.1 も名前変更してから 閉じ、File という名前の新しいログ・ファイルを開始します。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ファイルを作成)

logStringEncoding

説明

logStringEncoding プロパティーは、すべてのログ・ファイルで使用するエンコードを制御します。この値は、オペレーティング・システムで使用する エンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれ ることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除 する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

systemStringEncoding

説明

systemStringEncoding プロパティーは、オペレーティング・システムから Campaign が受け取る値 (例えば、ファイル・システム・パスやファイル名 など) のインタープリットに使用するエンコード、および Campaign がオペ レーティング・システムに値を戻す場合に使用するエンコードを指定しま す。通常この値は、ネイティブ (native) に設定する必要があります。複数 のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値には、複数のエンコードをコンマで区切って含めることできます。例 えば、次のようにします。

UTF-8, ISO-8859, CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

loggingLevels

説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「loggingLevels」プロパティーは、ロ グ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

maxReuseThreads

説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「maxReuseThreads」プロパティーは、 Campaign リスナー・プロセス (unica_aclsnr) が再使用するためにキャッ シュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を設定します。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプ リケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあ るオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベス ト・プラクティスと言えます。

デフォルト値

0(ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

logMaxFileSize

説明

logMaxFileSize プロパティーは、ログ・ファイルの最大サイズをバイト単 位で指定します。このサイズを超えると、ログ・ファイルはバックアップ・ ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティーは、Windows イベント・ログ・ファイルに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断のためのトレース・メッセージが含まれます。

serverPort

説明

serverPort プロパティーは、Campaign リスナーがインストールされるポートを指定します。

デフォルト値

4664

useSSL

説明

useSSL プロパティーは、Campaign リスナーと Campaign Web アプリケー ションの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定しま す。

また、このカテゴリーの serverPort2 プロパティーの説明も参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

serverPort2

説明

serverPort2 プロパティーを (同じくこのカテゴリーにある) useSSLForPort2 プロパティーと一緒に使用すると、(このカテゴリーの serverPort および useSSL プロパティーで指定される) Campaign Web ア プリケーションとリスナー間の通信とは別に、Campaign リスナーとフロー チャート・プロセス間の SSL 通信を指定できます。 Campaign コンポーネント間 (Web アプリケーションとリスナー間、および リスナーとサーバー間) のすべての通信は、以下のいずれかの条件に適合す るとき、useSSL プロパティーで指定されるモードを使用します。

- serverPort2 がデフォルト値 0 に設定されている、または
- serverPort2 が serverPort と同じ値に設定されている、または
- useSSLForPort2 が useSSL と同じ値に設定されている

これらの場合、2 番目のリスナー・ポートが使用可能になることはなく、 Campaign リスナーとフローチャート (サーバー) プロセス間の通信、およ びリスナーと Campaign Web アプリケーション間の通信は同じモードを使 用します (useSSL プロパティーの値に応じてどちらも非 SSL、またはどち らも SSL)。

以下の両方の条件が存在するとき、リスナーは 2 つの異なる通信モードを 使用します。

- serverPort2 が、serverPortの値とは異なる0以外の値に設定されている、しかも
- useSSLForPort2 が useSSL の値とは異なる値に設定されている。

この場合、2 番目のリスナー・ポートが使用可能になり、リスナーおよびフ ローチャート・プロセスは useSSLForPort2 で指定された通信モードを使用 します。

Campaign Web アプリケーションは、リスナーに通信するとき、useSSL で 指定された通信モードを常に使用します。

Campaign リスナーとフローチャート・プロセス間の通信で SSL が使用可 能になっている場合は、このプロパティー (serverPort2) の値を適切なポー トに設定します。

デフォルト値

0

useSSLForPort2

説明

このカテゴリーの serverPort2 プロパティーの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE、 FALSE

keepalive

説明

キープアライブ (keepalive) プロパティーを使用して、Campaign Web ア プリケーション・サーバーがキープアライブ・メッセージを送信する頻度を 秒単位で指定します。その送信時以外は、Campaign リスナーへのソケット 接続は非アクティブな状態になります。 キープアライブ (keepalive) 構成パラメーターを使用すると、Web アプリ ケーションとリスナー (例えば、ファイアウォール) との間で非アクティブ な接続は閉じるように設定されている環境で、アプリケーションが非アクテ ィブな状態にある期間であっても、ソケット接続を開いたままにすることが できます。

ソケットにアクティビティーが存在すると、キープアライブ期間は自動的に リセットされます。 Web アプリケーション・サーバーの DEBUG ロギン グ・レベルの場合、campaignweb.log では、キープアライブ・メッセージが リスナーに送信する際にそのことが表示されます。

```
デフォルト値
```

0。これはキープアライブ機能を無効にします。

有効な値

正の整数

Campaign | server

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される URL を指定し、変更する必要はありません。

fullContextPath

説明

fullContextPath プロパティーは内部で使用され、値の指定は任意です。これは、ActiveX コントロールがアプリケーション・サーバーのリスナーのプロキシーと通信するために使用する URL を指定します。

このプロキシーはデフォルトでは定義されておらず、その場合、システムは 動的に URL を決定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | logging

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign ログ・プロパティー・ファイルの場所 を指定します。

log4jConfig

説明

log4jConfig プロパティーは、Campaign ログ特性ファイル campaign_log4j.properties の場所を指定します。 Campaign ホーム・ディ レクトリーに対する相対パスを、ファイル名を含めて指定します。UNIX の 場合にはスラッシュ (/) を使用し、Windows の場合には円記号 (¥) を使用 します。

デフォルト値

./conf/campaign_log4j.properties

eMessage 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの eMessage 構成プロパティーについて取り 上げます。

eMessage | serverComponentsAndLocations | hostedServices

このページのプロパティーは、IBM Unica Hosted Services に接続するための URL を指定します。eMessage では、受信者リストおよび受信者リストを記述したメタデ ータのアップロードと、ホスト対象の環境へ送信する一般的な通信に別々の接続が 使用されます。

IBM が英国に設立したデータ・センターを通じて IBM Unica Hosted Services に接 続する場合は、デフォルト値を変更する必要があります。接続先のデータ・センタ ーを判別するには、IBM にお問い合わせください。

uiHostName

説明

受信者リストとそれに関連するメタデータのアップロードを除いて、 eMessage が IBM Unica Hosted Services へのすべての通信に使用するアド レス。

デフォルト値

em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

dataHostName

説明

受信者リストに関連するメタデータを IBM Unica Hosted Services にアップ ロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

ftpHostName

説明

受信者リストのデータ (リストのメタデータを除く) を IBM Unica Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

ftp-em.unicaondemand.com

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を ftp-em-eu.unicaondemand.com に変更してください。

eMessage | パーティション | パーティション[n] | hostedAccountInfo

このカテゴリーのプロパティーを使用すると、IBM Unica Hosted Services へのアク セスに必要なアカウント情報を保管するデータベースにアクセスするために必要 な、ユーザー資格情報を定義できます。ここで指定する値は、Marketing Platform 内 でユーザー設定として定義されている必要があります。

amUserForAcctCredentials

説明

このプロパティーを使用して、IBM Unica Hosted Services へのアクセスに 必要なアカウント・アクセス資格情報を指定する Marketing Platform デー タ・ソースを含んでいる Marketing Platform ユーザーを指定します。

デフォルト値

asm_admin

有効な値

任意の Marketing Platform ユーザー。

amDataSourceForAcctCredentials

説明

このプロパティーを使用して、IBM Unica Hosted Services のログイン資格 情報を定義している Marketing Platform データ・ソースを指定します。

デフォルト値

UNICA_HOSTED_SERVICES

有効な値

```
amUserForAcctCredentials で指定するユーザーに関連付けられているデー
タ・ソース。
```

eMessage |パーティション |パーティション[n] |dataSources |systemTables

このカテゴリーには、ネットワーク環境内の eMessage システム・テーブルを含ん でいるデータベースについて、そのスキーマ、接続設定、およびログイン資格情報 を定義するプロパティーが含まれています。

type

説明

eMessage システム・テーブルをホストするデータベースのタイプ。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティーを定義す る必要があります。

有効な値

- SQLSERVER
- ORACLE9
- ORACLE10 (Oracle 11 データベースを示すためにも使用される)
- DB2

schemaName

説明

eMessage システム・テーブルのデータベース・スキーマの名前。これは、 Campaign システム・テーブルのスキーマ名と同じです。

スクリプト内でシステム・テーブルを参照するときは、このスキーマ名を含める必要があります。

デフォルト値

dbo

jdbcBatchSize

説明

JDBC がデータベース上で一度に実行する実行要求の数。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロより大きい整数。

jdbcClassName

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC ドライバー。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティーを定義す る必要があります。

jdbcURI

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC 接続 URI。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティーを定義す る必要があります。

asmUserForDBCredentials

説明

このプロパティーを使用して、eMessage システム・テーブルへのアクセス を許可される IBM Unica Marketing ユーザーを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティーを定義す る必要があります。

有効な値

Marketing Platform で定義されている任意のユーザー。一般に、これは Campaign のシステム・ユーザーの名前にします。

amDataSourceForDBCredentials

説明

このプロパティーを使用して、eMessage システム・テーブルを含んでいる データベースのログイン資格情報を定義しているデータ・ソースを指定しま す。これは、Campaign システム・テーブルのデータ・ソースと同じものに することができます。

デフォルト値

UA_SYSTEM_TABLES

有効な値

asmUserForDBCredentials で指定する IBM Unica Marketing ユーザーに関 連付けられている Marketing Platform データ・ソース。

このデータ・ソースは、eMessage システム・テーブルへのアクセスに使用 されるデータベース・ユーザーおよび資格情報を指定します。データベー ス・ユーザーのデフォルト・スキーマが、システム・テーブルを含んでいる スキーマでない場合は、システム・テーブルへのアクセスに使用する JDBC 接続の中で、システム・テーブル・スキーマを指定する必要があります。

poolAcquireIncrement

説明

データベース接続プールの接続を使い尽くしたときに、eMessage がシステム・テーブル用に作成する新規接続の数。eMessage は、poolMaxSize で指定された数を最大値として、新規接続を作成します。

デフォルト値

1

有効な値

ゼロより大きい整数。

poolIdleTestPeriod

説明

eMessage で、eMessage システム・テーブルへのアイドル接続のアクティビ ティーの有無をテストする間の待ち時間 (秒数)。

デフォルト値

100

有効な値

ゼロより大きい整数。

poolMaxSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最大数。ゼロ (0) の値は、最大値がないことを示します。

デフォルト値

100

有効な値

ゼロ以上の整数。

poolMinSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最小数。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロ以上の整数。

poolMaxStatements

説明

eMessage で PrepareStatement キャッシュに保管される、システム・テーブ ルへの接続 1 つあたりの最大ステートメント数。poolMaxStatements をゼロ (0) に設定すると、ステートメントのキャッシュが無効になります。

デフォルト値

0

有効な値

0以上の整数。

timeout

説明

eMessage で、アイドル状態のデータベース接続が除去されるまでに維持される秒数。

poolIdleTestPeriod が 0 より大きい場合、eMessage はプール内にあるチェックアウトされていないすべてのアイドル接続を、timeout 秒ごとにテストします。

poolIdleTestPeriod が timeout より大きい場合、アイドル接続は除去され ます。
デフォルト値 100 有効な値

0 以上の整数。

eMessage | パーティション | パーティション[n] | recipientListUploader

この構成カテゴリーには、Recipient List Uploader のアクションまたはステータスに 応じてアクションを実行する、ユーザー定義スクリプトの場所に関するオプション のプロパティーが含まれています。

pathToTriggerScript

説明

IBM Unica Hosted Services への受信者リストのアップロードに対して、ア クションをトリガーするスクリプトを作成できます。例えば、リスト・デザ イナーに対して、リストのアップロードが正常に完了したときに電子メール のアラートを送信するスクリプトを作成できます。

このプロパティーの値を定義した場合、eMessage は Recipient List Uploader に関するステータス情報を、指定された場所に渡します。このプロパティー を空白のままにした場合、eMessage は何もアクションを実行しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

任意の有効なネットワーク・パス。

eMessage | パーティション | パーティション[n] | responseContactTracker

このカテゴリーのプロパティーは、Response and Contact Tracker (RCT) の動作を指 定します。RCT は、電子メール・コンタクト、電子メール配信、および受信者のレ スポンス (例えば、リンクのクリックとオープンなど) に関するデータを取り出し、 処理します。

pauseCustomerPremisesTracking

説明

eMessage は、コンタクトとレスポンスのデータを IBM Unica Hosted Services 内のキューに保管します。このプロパティーを使用すると、RCT に IBM Unica Hosted Services からのデータの取得を一時的に停止するよう 指示できます。トラッキングを再開すると、RCT は累積されたデータをダ ウンロードします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

waitTimeToCheckForDataAvailability

説明

RCT は、電子メール・コンタクトまたは受信者レスポンスに関して、新規 データの有無を定期的に検査します。このプロパティーを使用すると、RCT が IBM Unica Hosted Services 内の新規データの有無を検査する頻度を秒単 位で指定できます。デフォルト値は 300 秒、つまり 5 分ごとです。

デフォルト値

300

有効な値

1 より大きい任意の整数。

perfLogInterval

説明

このプロパティーを使用すると、パフォーマンス統計を RCT によってロ グ・ファイルに記録する頻度を指定できます。入力した値によって、ログ項 目間のバッチの数が決まります。

デフォルト値

10

有効な値

ゼロより大きい整数。

enableSeparatePartialResponseDataTracking

説明

このプロパティーは、eMessage で、部分的な電子メール・レスポンス・デ ータをローカル eMessage インストール済み環境内のトラッキング・テーブ ルに転送するかどうかを決定します。

eMessage で電子メール・レスポンスを正しく属性付けするには、メール配 信インスタンス ID とメッセージ・シーケンス番号が必要です。 enableSeparatePartialResponseDataTracking を True に設定すると、eMessage は不完全なレスポンスを別個のローカル・トラッキング・テーブルに入れま す。このテーブルで、それらのレスポンスを確認するか追加の処理を行うこ とができます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Interact 構成プロパティーについて取り上 げます。

Interact ランタイム環境構成プロパティー

このセクションでは、Interact ランタイム環境のすべての構成プロパティーについて 説明します。

Interact | general

これらの構成プロパティーは、デフォルト・ログ・レベルとロケール設定も含め、 ランタイム環境の一般的な設定を定義します。

log4jConfig

説明

```
log4j プロパティーが入っているファイルの場所。このパスは、
INTERACT_HOME 環境変数を基準にした相対パスでなければなりません。
INTERACT HOME は、Interact インストール・ディレクトリーの場所です。
```

デフォルト値

./conf/interact_log4j.properties

asmUserForDefaultLocale

説明

asmUserForDefaultLocale プロパティーは、Interact のロケール設定の派生 元となる IBM Unica Marketing ユーザーを定義します。

ロケール設定は、設計時に表示される言語と、Interact API からの通知メッ セージの言語を定義します。ロケール設定がマシンのオペレーティング・シ ステムの設定に一致しない場合でも、Interact は機能します。ただし、設計 時の表示と通知メッセージは異なる言語で表示される可能性があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | learningTablesDataSource

これらの構成プロパティーは、組み込み学習テーブルのデータ・ソース設定を定義 します。Interact 組み込みの学習を使用している場合は、このデータ・ソースを定義 する必要があります。

学習 API を使用して独自の学習実装を作成する場合は、ILearningConfig インター フェースを使用して、これらの値を読み取るためのカスタム学習実装を構成できま す。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic)内で、Interact ランタイム・サーバーがアク セスする学習テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別できます。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、 UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだ けではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーがアクセスする学習テーブルによって使用される、データ・ソースのデータベース・タイプ。

学習テーブルは aci 1rntab ddl ファイルによって作成され、

UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだ けではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、学習テーブルについて失敗したデ ータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定 します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、こ こで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値 を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定す ると、再試行を実行しません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、 UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだ けではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、学習テーブルへの接続に失敗した後、 Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で 指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。 学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、 UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだ けではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

組み込み学習モジュール用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティーの値を挿入します (例: UACI IntChannel は schema.UACI IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あ いまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | prodUserDataSource

これらの構成プロパティーは、実動プロファイル・テーブルのデータ・ソース設定 を定義します。管理者は、このデータ・ソースを定義する必要があります。これ は、ランタイム環境で、配置後のインタラクティブ・フローチャートを実行すると きに参照されるデータ・ソースです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic)内で、Interact ランタイム・サーバーがアク セスする顧客テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI)データ・ソースを識別することができます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーによってアクセスされる顧客テーブルのデー タベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用して、 Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブル内の新規テーブ ルに書き込むときに Interact で自動的に作成されるエイリアス名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。 使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最 大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

А

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、ランタイム顧客テーブルについて 失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒 単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告す る前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行 します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact ランタイム顧客テーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの 待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行され ません。

デフォルト値

-1

schema

説明

プロファイル・データ・テーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティーの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あ いまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource

これらの構成プロパティーは、ランタイム環境用のシステム・テーブルのデータ・ ソース設定を定義します。管理者は、このデータ・ソースを定義する必要がありま す。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内でランタイム環境テーブル用に定義され る、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別でき ます。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テ ーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

ランタイム環境システム・テーブルのデータベース・タイプ。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テ ーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、ランタイム・システム・テーブル について失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する 時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗 を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接 続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行しま す。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テ ーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。 -1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact ランタイム・システム・テ ーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試み るまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は 実行されません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テ ーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

ランタイム環境用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、す べてのテーブル名の前にこのプロパティーの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あ いまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource | loaderProperties

これらの構成プロパティーは、ランタイム環境用のシステム・テーブルのデータベ ース・ローダー・ユーティリティーの設定を定義します。これらのプロパティーを 定義する必要があるのは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用して いる場合だけです。

databaseName

説明

データベース・ローダーが接続するデータベースの名前。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Interact 内のコンタクト履歴とレスポンス履歴のステージング・データベース・テーブルにレコードを付加す

る目的で、データベース・ロード・ユーティリティーを起動するために発行 するコマンドを指定します。コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ用に データベース・ローダー・ユーティリティーを有効にするには、このパラメ ーターを設定する必要があります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能 ファイルかデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプト を指す、フルパス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロー ド・ユーティリティーを起動する前に、追加のセットアップを行うことがで きます。

大部分のデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータ・ファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが 含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベース・ロード・ユーティリティーを起動するときに使用する正しい 構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの資料を参照し てください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で使用可能なトークンについて、次の表で説明します。

トークン	説明
<controlfile></controlfile>	このトークンは、 LoaderControlFileTemplate パラメーターで 指定されたテンプレートに従って Interact が 生成した一時制御ファイルの、フルパスおよ びファイル名に置き換わります。
<database></database>	このトークンは、Interact がデータをロード するデータ・ソースの名前に置き換わりま す。これは、このデータ・ソースのカテゴリ ー名で使用されるのと同じデータ・ソース名 です。
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセスで Interact によって作成された一時データ・フ ァイルのフルパスおよびファイル名に置き換 わります。このファイルは、Interact 一時デ ィレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っていま す。
<dbcolumnnumber></dbcolumnnumber>	このトークンは、データベース内の列の序数 に置き換わります。
<fieldlength></fieldlength>	このトークンは、データベース中にロードさ れている項目の長さに置換されます。

トークン	説明
<fieldname></fieldname>	このトークンは、データベース中にロードさ れている項目の名前に置換されます。
<fieldnumber></fieldnumber>	このトークンは、データベース中にロードさ れている項目の番号に置換されます。
<fieldtype></fieldtype>	このトークンは、リテラル「CHAR()」に置 き換わります。このフィールドの長さは、() の間で指定されます。使用するデータベース がフィールド・タイプ CHAR を認識できな い場合は、フィールド・タイプに適したテキ ストを手動で指定して、 <fieldlength> トークンを使用できます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合は、 「SQLCHAR(<fieldlength>)」を使用しま す。</fieldlength></fieldlength>
<nativetype></nativetype>	このトークンは、このフィールドのロード先 になるデータベースのタイプに置き換わりま す。
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル中の項目の数に置 換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートから データ・ソースへの接続のデータベース・パ スワードに置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、Interact がデータのロード 先にするデータベース・テーブル名に置き換 わります。
<user></user>	このトークンは、現在のフローチャート接続 からデータ・ソースへのデータベース・ユー ザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティーは、以前に Interact で 構成された制御ファイル・テンプレートを指すフルパスおよびファイル名を 指定します。このパラメーターを設定すると、Interact はここで指定された テンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に構築します。この一時 制御ファイルのパスおよび名前は、LoaderCommandForAppend プロパティー から利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。 Interact をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用する 前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを 構成する必要があります。制御ファイル・テンプレートは、以下のトークン をサポートしています。これらは、Interact によって一時制御ファイルが作 成されるときに、動的に置き換わります。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユ ーティリティーのドキュメンテーションを参照してください。制御ファイ ル・テンプレートで利用可能なトークンは、LoaderControlFileTemplate プ ロパティーのものと同じです。

このパラメーターは、既定では未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティーは、Interact 一時データ・ファイル が固定幅のフラット・ファイルであるか、それとも区切り文字で区切られた フラット・ファイルであるかを指定し、区切り文字で区切られている場合 は、区切り文字として使用する文字または文字セットを指定します。

値が未定義の場合、Interact は一時データ・ファイルを固定幅のフラット・ファイルとして作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは 認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。 Interact は、このプロパティーの値を区切り文字として区切ったフラット・ ファイルとして、一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、既定では未定義です。

デフォルト値

有効な値

文字。必要であれば、二重引用符で囲むことができます。

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切り文字 で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります。この要 件に対処するには、LoaderDelimiterAtEndForAppend 値を TRUE に設定し、 空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダー が起動されたときに、Interact が各行の末尾に区切り文字を使用するように します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティーは、Interact がデータベース・ロード・ユ ーティリティーによってロードされるファイルに数値を書き込むとき、小数 点にロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Interact | general | testRunDataSource

これらの構成プロパティーは、Interact 設計環境用のテスト実行テーブルのデータ・ ソース設定を定義します。このデータ・ソースは、少なくとも 1 つのランタイム環 境について定義する必要があります。これらは、インタラクティブ・フローチャー トのテストを実行するときに使用されるテーブルです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic)内で、インタラクティブ・フローチャートの テスト実行のときに設計環境がアクセスする顧客テーブル用に定義されてい る、Java Naming and Directory Interface (JNDI)データ・ソースを識別する ことができます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

インタラクティブ・フローチャートのテスト実行のときに、設計環境によっ てアクセスされる顧客テーブルのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用して、イン タラクティブ・フローチャートのテスト実行時に設計環境がアクセスする顧 客テーブル用の新規テーブルに書き込むときに、Interact で自動的に作成さ れるエイリアス名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。 使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最 大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

А

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、テスト実行テーブルについて失敗 したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位 で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前 に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行しま す。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に 設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、テスト実行テーブルへの接続に失敗した後、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

インタラクティブ・フローチャートのテスト実行用のテーブルを含んでいる スキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティー の値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel にな ります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あ いまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | idsByType

これらの構成プロパティーは、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールによって使用される ID 番号の設定を定義します。

initialValue

説明

UACI_IDsByType テーブルを使用して ID を生成するときに使用される、初 期 ID 値。

デフォルト値

1

有効な値

0より大きい任意の値。

retries

説明

UACI_IDsByType テーブルを使用して ID を生成する場合の、例外を生成するまでの再試行の回数。

デフォルト値

20

有効な値

0 より大きい任意の整数。

Interact | general | contactAndResponseHistoryDataSource

これらの構成プロパティーは、Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキン グに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ・ソースの接続設定を定義し ます。

これらの設定は、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールには関係ありません。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用すると、アプリケーション・サーバー (WebSphere または WebLogic) 内で Interact クロス・セッション・レスポン ス・トラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ・ソー ス用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) デー タ・ソースを識別することができます。

デフォルト値

type

説明

Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクト 履歴とレスポンス履歴のデータ・ソースによって使用される、データ・ソー スのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、Interact クロスセッション・レス ポンス・トラッキングが失敗したときに、Interact が自動的にデータベース 接続要求を再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベー スのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的に データベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、 無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact クロスセッション・レスポ ンス・トラッキングが失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を 試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試 行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキング用のテーブルを含ん でいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパ ティーの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あ いまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart

このセクションでは、インタラクティブ・フローチャートの構成設定を定義します。

defaultDateFormat

説明

Interact で日付からストリング、およびストリングから日付への変換に使用 する、デフォルトの日付形式。

デフォルト値

MM/dd/yy

idleFlowchartThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、インタラクティブ・フローチャート専用のスレッドが、解放される前にアイドル状態でいることが許容される分数。

デフォルト値

5

idleProcessBoxThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、インタラクティブ・フローチャート・プロセス専用のスレッド が、解放される前にアイドル状態でいることが許容される分数。

デフォルト値

5

maxSizeOfFlowchartEngineInboundQueue

説明

Interact でキューに保持されるフローチャート実行要求の最大数。この要求 数に到達した場合、Interact は要求の取得を停止します。

デフォルト値

1000

maxNumberOfFlowchartThreads

説明

```
インタラクティブ・フローチャート要求専用のスレッドの最大数。
```

デフォルト値

25

maxNumberOfProcessBoxThreads

説明

インタラクティブ・フローチャート・プロセス専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

50

maxNumberOfProcessBoxThreadsPerFlowchart

説明

```
フローチャート・インスタンス 1 つあたりの、インタラクティブ・フロー
チャート・プロセス専用のスレッドの最大数。
```

デフォルト値

3

minNumberOfFlowchartThreads

説明

```
インタラクティブ・フローチャート要求専用のスレッドの最小数。
```

デフォルト値

10

minNumberOfProcessBoxThreads

説明

```
インタラクティブ・フローチャート・プロセス専用のスレッドの最小数。
```

デフォルト値

20

sessionVarPrefix

説明

セッション変数のプレフィックス。

デフォルト値

SessionVar

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コー ルアウトのクラス設定を定義します。

class

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスの名前。

これは、IBM Unica マクロ EXTERNALCALLOUT によってアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

classpath

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスを示すクラスパス。こ のクラスパスは、ランタイム環境サーバー上の jar ファイルを参照している 必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイ ム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサ ーバーが同じ場所に jar ファイルのコピーを持っている必要があります。ク ラスパスは、いくつかの jar ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境 サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字、例えば Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:) で分離されて いる必要があります。クラス・ファイルを含んでいるディレクトリーは、受 け入れられません。例えば、UNIX システムでは、/path1/file1.jar:/ path2/file2.jar のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。.jar ファイルの 中でマニフェスト・ファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定できる ため、クラスパス内に出現する .jar ファイルは、1 つだけにする必要があ ります。

これは、IBM Unica マクロ EXTERNALCALLOUT によってアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName] | Parameter Data | [parameterName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コー ルアウトのパラメーター設定を定義します。

value

説明

外部コールアウトのクラスに必要な、いずれかのパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部コールアウトに外部サーバーのホスト名が必要な場合は、host という 名前のパラメーター・カテゴリーを作成し、value プロパティーをサーバー 名として定義します。

Interact | monitoring

この構成プロパティー・セットを使用すると、JMX 監視設定を定義できます。これ らのプロパティーを構成する必要があるのは、JMX 監視を使用している場合だけで す。 Interact 設計環境の構成プロパティーの中に、コンタクトおよびレスポンス履歴モジ ュールについて定義する別の JMX 監視プロパティーがあります。

protocol

説明

Interact メッセージング・サービスのプロトコルを定義します。

JMXMP を選択した場合は、以下の JAR ファイルをこの順序でクラスパス に組み込む必要があります。

Interact/lib/InteractJMX.jar;Interact/lib/jmxremote_optional.jar

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

port

説明

メッセージング・サービスのポート番号。

デフォルト値

9998

enableSecurity

説明

Interact ランタイム・サーバー用に JMXMP メッセージング・サービスのセ キュリティーを有効または無効にするブール値。 true に設定した場合は、 Interact ランタイム JMX サービスにアクセスするためのユーザー名とパス ワードを指定する必要があります。このユーザー資格情報は、ランタイム・ サーバー用の Marketing Platform によって認証されます。Jconsole では、空 のパスワードのログインは許容されません。

プロトコルが RMI の場合、このプロパティーは効果がありません。このプロパティーは、Campaign 用の JMX には影響を与えません (Interact 設計時)。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | profile

この構成プロパティー・セットは、オファー非表示とスコア・オーバーライドも含め、オプションのオファー配信機能のいくつかを制御します。

enableScoreOverrideLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、 scoreOverrideTable からスコア・オーバーライド・データをロードしま す。False の場合、Interact はセッションの作成時に、マーケティング・ス コア・オーバーライド・データをロードしません。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > scoreOverrideTable プロパティーも構成する必要があ ります。scoreOverrideTable プロパティーは、必要なオーディエンス・レ ベルについてのみ定義する必要があります。あるオーディエンス・レベルに ついて、scoreOverrideTable を空白のままにすると、そのオーディエン ス・レベルのスコア・オーバーライド・テーブルは無効になります。

```
デフォルト値
```

False

有効な値

True | False

enableOfferSuppressionLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、 offerSuppressionTable からオファー非表示データをロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、オファー非表示データをロード しません。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > offerSuppressionTable プロパティーも構成する必要があります。enableOfferSuppressionLookup プロパティーは、必要なオーディエンス・レベルについてのみ定義する必要があります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableProfileLookup

説明

Interact の新しいインストール済み環境では、このプロパティーは推奨され ません。Interact のアップグレードされたインストール済み環境では、この プロパティーは最初の配置までの間、有効です。

インタラクティブ・フローチャート内で使用され、インタラクティブ・チャ ネル内でマップされていないテーブルのロード動作。True に設定した場 合、Interact はセッションの作成時に、profileTable からプロファイル・デ ータをロードします。

true の場合は、Unica > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > profileTable プロパティーも構成する必要があります。

インタラクティブ・チャネル・テーブル・マッピング・ウィザードの「訪問 セッションの開始時にこのデータをメモリーに読み込む」の設定は、この構 成プロパティーをオーバーライドします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

defaultOfferUpdatePollPeriod

説明

システムが、キャッシュ内のデフォルト・オファーをデフォルト・オファ ー・テーブルから更新する前に待つ秒数。-1 に設定した場合、システムは ランタイム・サーバーの開始時に初期リストがキャッシュ内にロードされた 後、キャッシュ内のデフォルト・オファーを更新しません。

デフォルト値

-1

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName]

この構成プロパティー・セットを使用すると、追加の Interact 機能に必要なテーブ ル名を定義できます。関連する機能を使用している場合は、テーブル名を定義する だけで済みます。

scoreOverrideTable

説明

このオーディエンス・レベルのスコア・オーバーライド情報が入っているテ ーブルの名前。このプロパティーは、enableScoreOverrideLookup を true に設定してある場合に適用できます。このプロパティーは、スコア・オーバ ーライド・テーブルを有効にしたいオーディエンス・レベルに対して定義す る必要があります。このオーディエンス・レベルに対するスコア・オーバー ライド・テーブルがない場合は、たとえ enableScoreOverrideLookup が true に設定されている場合でも、このプロパティーを未定義のまま残してか まいません。

Interact は、このテーブルを、Interact ランタイム・サーバーによってアクセ スされ、prodUserDataSource プロパティーによって定義された顧客テーブ ル内で探します。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブルの前にスキーマを付加し、例えば

schema.UACI_ScoreOverride のようにします。完全修飾名 (例えば、 mySchema.UACI_ScoreOverride) を入力した場合には、Interact はスキーマ名 を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_ScoreOverride

offerSuppressionTable

説明

このオーディエンス・レベルのオファー非表示情報が入っているテーブルの 名前。このプロパティーは、オファー非表示テーブルを有効にしたいオーデ ィエンス・レベルに対して定義する必要があります。このオーディエンス・ レベルに対するオファー非表示テーブルがない場合は、たとえ enableOfferSuppressionLookup が true に設定されている場合でも、このプ ロパティーを未定義のまま残してかまいません。

Interact は、このテーブルを、ランタイム・サーバーによってアクセスされ、prodUserDataSource プロパティーによって定義された顧客テーブル内で探します。

デフォルト値

UACI_BlackList

profileTable

説明

Interact の新しいインストール済み環境では、このプロパティーは推奨され ません。Interact のアップグレードされたインストール済み環境では、この プロパティーは最初の配置までの間、有効です。

このオーディエンス・レベルのプロファイル・データが入っているテーブルの名前。

Interact は、このテーブルを、ランタイム・サーバーによってアクセスされ、prodUserDataSource プロパティーによって定義された顧客テーブル内で探します。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_usrProd のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_usrProd) を入力した 場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

contactHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴データが入っているステージ ング・テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保 管されます。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば

schema.UACI_CHStaging のようにします。完全修飾名 (例えば、

mySchema.UACI_CHStaging) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前 に付加しません。

デフォルト値

UACI_CHStaging

chOfferAttribTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴オファー属性テーブルの名 前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保 管されます。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_CHOfferAttrib のようにします。完全修飾名 (例えば、 mySchema.UACI CHOfferAttrib) を入力した場合には、Interact はスキーマ名

デフォルト値

UACI_CHOfferAttrib

を前に付加しません。

responseHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのレスポンス履歴ステージング・テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保 管されます。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば

schema.UACI_RHStaging のようにします。完全修飾名 (例えば、

mySchema.UACI_RHStaging) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前 に付加しません。

デフォルト値

UACI_RHStaging

crossSessionResponseTable

説明

レスポンス・トラッキング機能用にアクセス可能なコンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内にある、クロスセッション・レスポンス・トラッキング に必要な、このオーディエンス・レベルのテーブルの名前。

このデータ・ソースに schema プロパティーを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば

schema.UACI XSessResponse のようにします。完全修飾名 (例えば、

mySchema.UACI_XSessResponse) を入力した場合には、Interact はスキーマ名 を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_XSessResponse

Interact | offerserving

これらの構成プロパティーは、汎用の学習構成プロパティーを定義します。

組み込みの学習を使用している場合、学習の実装をチューニングするには、設計環 境用の構成プロパティーを使用します。

optimizationType

説明

optimizationType プロパティーは、オファー割り当てを支援するために、 Interact で学習エンジンを使用するかどうかを定義します。NoLearning に設 定した場合、Interact は学習を使用しません。BuiltInLearning に設定した 場合、Interact は Interact で作成された baysean 学習エンジンを使用しま す。ExternalLearning に設定した場合、Interact は提供された学習エンジン を使用します。ExternalLearning を選択した場合は、 externalLearningClass プロパティーと externalLearningClassPath プロ パティーを定義する必要があります。

デフォルト値

NoLearning

有効な値

NoLearning | BuiltInLearning | ExternalLearning

segmentationMaxWaitTimeInMS

説明

ランタイム・サーバーが、オファーを取得する前にインタラクティブ・フロ ーチャートが完了するのを待つ最大ミリ秒数。

デフォルト値

5000

treatmentCodePrefix

説明

処理コードの前に付くプレフィックス。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | offerserving | Built-in Learning Config

これらの構成プロパティーは、組み込み学習用のデータベース書き込み設定を定義 します。

学習の実装をチューニングするには、設計環境用の構成プロパティーを使用しま す。

insertRawStatsIntervalInMinutes

説明

学習ステージング・テーブルにさらに行を挿入するまでの、Interact 学習モジュールの待ち時間を表す分数。環境内で学習モジュールが処理しているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合もあります。

デフォルト値

5

aggregateStatsIntervalInMinutes

説明

学習ステージング・テーブル内のデータを集約してから次に集約するまで に、Interact 学習モジュールが待つ分数。環境内で学習モジュールが処理し ているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合も あります。

デフォルト値

15

有効な値

ゼロより大きい整数。

Interact | offerserving | External Learning Config

これらの構成プロパティーは、学習 API を使用して作成した外部学習モジュールの クラス設定を定義します。

class

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定した場合は、 externalLearningClass を外部学習エンジンのクラス名に設定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、optimizationType が ExternalLearning に設定され ている場合にのみ適用されます。

classPath

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定した場合は、 externalLearningClass を外部学習エンジンのクラスパスに設定します。

このクラスパスは、ランタイム環境サーバー上の jar ファイルを参照してい る必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイ ム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサ ーバーが同じ場所に jar ファイルのコピーを持っている必要があります。ク ラスパスは、いくつかの jar ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境 サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字、例えば Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:) で分離されて いる必要があります。クラス・ファイルを含んでいるディレクトリーは、受 け入れられません。例えば、UNIX システムでは、/path1/file1.jar:/ path2/file2.jar のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。.jar ファイルの 中でマニフェスト・ファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定できる ため、クラスパス内に出現する .jar ファイルは、1 つだけにする必要があ ります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、optimizationType が ExternalLearning に設定され ている場合にのみ適用されます。

Interact | offerserving | External Learning Config | Parameter Data | [parameterName]

これらの構成プロパティーは、外部学習モジュールのパラメーターを定義します。

value

説明

外部学習モジュールのクラスに必要なパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部学習モジュールにアルゴリズム・ソルバー・アプリケーションへのパス が必要な場合は、solverPath というパラメーター・カテゴリーを作成し、 value プロパティーを、そのアプリケーションへのパスとして定義します。

Interact | services

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ と統計をレポート用に収集し、ランタイム環境システム・テーブルに書き込む操作 を管理する、すべてのサービスの設定を定義します。

externalLoaderStagingDirectory

説明

このプロパティーは、データベース・ロード・ユーティリティーのステージング・ディレクトリーの場所を定義します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

ステージング・ディレクトリーへの絶対パス、または Interact インストー ル・ディレクトリーを基準にした相対パス。

データベース・ロード・ユーティリティーを有効にした場合は、 contactHist カテゴリーおよび responstHist カテゴリーの cacheType プ ロパティーを External Loader File に設定する必要があります。

Interact | services | contactHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクト履歴ステージング・テーブル用のデータを収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、コンタクト履歴データを記録するためにデータを収集するサ ービスが有効になります。false の場合、データは収集されません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

コンタクト履歴用に収集されたデータを、メモリー内に保持するか (Memory Cache)、それともファイル内に保持するか (External Loader File) を定義 します。External Loader File を使用できるのは、データベース・ローダ ー・ユーティリティーを使用するように Interact を構成してある場合だけで す。

Memory Cache を選択した場合は、cache カテゴリー設定を使用します。 External Loader File を選択した場合は、fileCache カテゴリー設定を使 用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | contactHist | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクト履歴ステージング・テーブル用 のデータを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデー タベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。 デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | contactHist | fileCache

このカテゴリーの構成プロパティーは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用している場合に、コンタクト履歴データを収集するサービスのキャッシュ 設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデー タベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | defaultedStats

このカテゴリーの構成プロパティーは、インタラクション・ポイントのデフォル ト・ストリングが使用された回数に関して、統計を収集するサービスの設定を定義 します。

enableLog

説明

true の場合、インタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングが使 用された回数に関して、UACI_DefaultedStat テーブルに統計を収集するサ ービスが有効になります。false の場合、デフォルト・ストリング統計は収 集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、 このプロパティーを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | defaultedStats | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、インタラクション・ポイントのデフォル ト・ストリングが使用された回数に関して統計を収集するサービスの、キャッシュ 設定を定義します。

threshold

説明

収集されたデフォルト・ストリング統計が flushCacheToDB サービスによっ てデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eligOpsStats

このカテゴリーの構成プロパティーは、対象となるオファーの統計を書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、対象となるオファーの統計を収集するサービスが有効になり ます。false の場合、対象となるオファーの統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、 このプロパティーを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eligOpsStats | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、対象となるオファーの統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集された、対象となるオファーの統計が flushCacheToDB サービスによっ てデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eventActivity

このカテゴリーの構成プロパティーは、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスが有効 になります。false の場合、イベント統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、 このプロパティーを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eventActivity | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたイベント・アクティビティー統計が flushCacheToDB サービスに よってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

insertPeriodInSecs

説明

```
データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。
```

デフォルト値

3600

Interact | services | customLogger

このカテゴリーの構成プロパティーは、テーブルに書き込むカスタム・データ (UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターを使用するイベント) を収集 するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合は、テーブルへのカスタム・ログ機能が有効になります。false の場合、UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターは効果があり ません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | customLogger | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、カスタム・データ (UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターを使用するイベント) をテー ブルに収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたカスタム・データが flushCacheToDB サービスによってデータベ ースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

Interact | services | responseHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、レスポンス履歴ステージング・テーブルに 書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブルに書き込むサービス が有効になります。false の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブル にデータは書き込まれません。

レスポンス履歴ステージング・テーブルは、オーディエンス・レベルの responseHistoryTable プロパティーによって定義されます。デフォルトは UACI RHStaging です。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

キャッシュをメモリーとファイルのどちらに保持するかを定義します。 External Loader File を使用できるのは、データベース・ローダー・ユー ティリティーを使用するように Interact を構成してある場合だけです。

Memory Cache を選択した場合は、cache カテゴリー設定を使用します。 External Loader File を選択した場合は、fileCache カテゴリー設定を使 用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | responseHist | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、レスポンス履歴データを収集するサービス のキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたレスポンス履歴データが flushCacheToDB サービスによってデー タベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist | fileCache

このカテゴリーの構成プロパティーは、データベース・ローダー・ユーティリティ ーを使用している場合に、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ 設定を定義します。

threshold

説明

Interact によってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

responseHist - オーディエンス・レベルの responseHistoryTable プロパ ティーによって定義されたテーブル。デフォルトは、UACI_RHStaging で す。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse

このカテゴリーの構成プロパティーは、crossSessionResponse サービスと xsession プロセスの一般設定を定義します。Interact クロスセッション・レスポンス・トラッ キングを使用している場合は、これらの設定を構成するだけで済みます。

enableLog

説明

true の場合、crossSessionResponse サービスが有効になり、Interact は、クロスセッション・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルにデータを書き込みます。false の場合は、crossSessionResponse サービスが無効になります。

デフォルト値

False

xsessionProcessIntervalInSecs

説明

xsession プロセスの実行間隔を示す秒数。このプロセスは、クロスセッショ ン・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルからレスポンス履 歴ステージング・テーブルおよび組み込み学習モジュールにデータを移動し ます。

デフォルト値

180

有効な値

ゼロより大きい整数

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内のコンタクトに一致しないレス ポンスに、crossSessionResponse サービスがマーク付けするまでの待ち時間 (分数)。

レスポンスに一致するものがコンタクトおよびレスポンス履歴テーブルにな い場合、Interact は purgeOrphanResponseThresholdInMinutes 分後に、 xSessResponse ステージング・テーブルの Mark 列の値を -1 に設定して、 そのレスポンスにマーク付けします。その後、これらのレスポンスを手動で 突き合わせるか削除することができます。

デフォルト値

180

Interact | services | crossSessionResponse | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、クロスセッション・レスポンス・データを 収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたクロスセッション・レスポンス・データが flushCacheToDB サー ビスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの 数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

XSessResponse テーブルへの強制書き込みの間隔を表す秒数。

デフォルト値

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byTreatmentCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキング で処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義しま す。

SQL

説明

このプロパティーは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それと も 0verrideSQL プロパティーで定義されたカスタム SQL を使用するかを 定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアード・プロシージャーを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、処理コードとコンタクトおよびレス ポンス履歴を突き合わせるストアード・プロシージャーへの参照を含んでい る必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリーでな ければなりません。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Туре

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 1 でなければなりません。

デフォルト値

1

有効な値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byOfferCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキング でオファー・コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定 義します。

SQL

説明

このプロパティーは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それと も OverrideSQL プロパティーで定義されたカスタム SQL を使用するかを 定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

オファー・コードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフ ォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアー ド・プロシージャーを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、オファー・コードとコンタクトおよ びレスポンス履歴を突き合わせるストアード・プロシージャーへの参照を含 んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリーでな ければなりません。

デフォルト値
false

有効な値

true | false

Туре

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 2 でなければなりません。

デフォルト値

2

有効な値

UACI TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byAlternateCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキング でユーザー定義代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方 法を定義します。

Name

説明

このプロパティーは、代替コードの名前を定義します。これは、ランタイム 環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルにある「名前」値に一致す る必要があります。

デフォルト値

OverrideSQL

説明

代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を、オファー・コードまたは 処理コードによって突き合わせるための SQL コマンドまたはストアード・ プロシージャー。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、代替コードとコンタクトおよびレス ポンス履歴を突き合わせるストアード・プロシージャーへの参照を含んでい る必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL クエリーでな ければなりません。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Туре

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。

デフォルト値

3

有効な値

UACI TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | threadManagement | contactAndResponseHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクトおよびレスポンス履歴ステージ ング・テーブル用のデータを収集するサービスの、スレッド管理設定を定義しま す。

corePoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に(た とえアイドル状態であっても)保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に保持 するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、コンタクトおよびレスポン ス履歴データを収集するために、超過したアイドル・スレッドが終了する前 に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、スレッド・プー ルによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、サービス・スレッド がコンタクトおよびレスポンス履歴データの収集を完了するのを待つ秒数で す。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | allOtherServices

このカテゴリーの構成プロパティーは、オファー資格統計、イベント・アクティビ ティー統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ロ グ・データを収集するサービスのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリ ング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサー ビス用に、プール内に (たとえアイドル状態であっても)保持するスレッド の数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリ ング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサー ビス用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合、超過したアイドル・スレッド が終了する前に、オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デ フォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・デー タを収集するサービス用の新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリ ング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサー ビス用に、スレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、オファー資格統計、 イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリング使用統計、およ びテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービスについて、サー ビス・スレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | flushCacheToDB

このカテゴリーの構成プロパティーは、キャッシュ内に収集したデータをランタイ ム環境データベース・テーブルに書き込むスレッドの、スレッド管理設定を定義し ます。

corePoolSize

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのス レッド用に、プール内に保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのス レッド用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、キャッシュされたデータを データ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、超過したアイ ドル・スレッドが終了する前に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのス レッド用に、スレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、キャッシュされたデ ータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッドについて、サ ービス・スレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | sessionManagement

この構成プロパティー・セットは、ランタイム・セッションの設定を定義します。

cacheType

説明

ランタイム・サーバーのキャッシュ方法のタイプを定義します。

デフォルト値

Local

有効な値

Distributed | Local

maxNumberOfSessions

説明

キャッシュ内に一度に保持されるランタイム・セッションの最大数。キャッ シュがこの最大値に到達した後に、新しいランタイム・セッションを追加す る要求が発生した場合は、アクティブでない最も古いランタイム・セッショ ンが削除されます。

デフォルト値

9999999999

有効な値

ゼロより大きい整数。

multicastIPAddress

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用された IP アドレスを入力します。また、multicastPort も定義する必要がありま す。

cacheType が Local の場合は、multicastIPAddress を未定義のまま残して かまいません。

デフォルト値

230.0.0.1

有効な値

任意の有効な IP アドレス

multicastPort

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用された ポート番号を入力する必要があります。また、multicastIPAddress も定義 する必要があります。

cacheType が Local の場合は、multicastPort を未定義のまま残してかま いません。

デフォルト値

6363

有効な値

 $1024\ -\ 49151$

sessionTimeoutInSecs

説明

セッションを非アクティブのまま残すことができる時間 (秒単位)。 sessionTimeout 秒が経過すると、Interact はセッションを終了します。

デフォルト値

300

有効な値

1 以上の任意の整数。

Interact 設計環境構成プロパティー

このセクションでは、Interact 設計環境のすべての構成プロパティーについて説明します。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | reports

これらの構成プロパティーは、レポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリストさ れる、バースト (拡張) されたオファー・レポートの仕様が入っているフォ ルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分 析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して 指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメント・レポートが入っているフォルダ 一の場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファー・レポートが入っているフォルダー の場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリスト される、バースト (拡張) されたセグメント・レポートの仕様が入っている フォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの 「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用 して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポートの仕様が保管されている ルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指 定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

```
campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分
析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーン・レポートが入っているフ
ォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。
```

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='campaign']

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、「分析」タブにリスト される、バースト (拡張) されたキャンペーン・レポートの仕様が入ってい るフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの 「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用 して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペー ンの「レポート」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダ ーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage
Reports']

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

可用性

```
このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。
```

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

インタラクティブ・チャネル分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フ ォルダー・ストリング。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking

これらの構成プロパティーは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールの設定を定義します。

isEnabled

説明

yes に設定された場合、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュー ルが有効になります。このモジュールは、Interact のコンタクト履歴とレス ポンス履歴を、Interact ランタイム内のステージング・テーブルから Campaign のコンタクト履歴とレスポンス履歴のテーブルにコピーします。 プロパティー interactInstalled も、yes に設定されている必要がありま す。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

runOnceADay

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴の ETL を 1 日 1 回実行するかどうかを 指定します。このプロパティーを Yes に設定した場合、ETL は preferredStartTime および preferredEndTime で指定されたスケジュール 間隔の間に実行されます。 ETL の実行に要する時間が 24 時間を超える場合、しかも、そのために翌 日の開始時刻を失した場合、ETL はその日をスキップし、次の日のスケジ ュールされた時刻に実行されます。例えば、ETL が午前 1 時から午前 3 時までの間に実行されるように構成されており、その処理が月曜日の午前 1 時に開始され、火曜日の午前 2 時に完了した場合、本来は火曜日の午前 1 時にスケジュールされていた次回の実行はスキップされ、次の ETL は水曜 日の午前 1 時に開始されます。

ETL スケジューリングでは、夏時間調整の時間変更は考慮されません。例 えば、午前1時と午前3時の間に実行するようスケジュールされた ETL は、DST 変更が発生すると午前(深夜)12時または午前2時に実行される 場合があります。

デフォルト値

No

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

processSleepIntervalInMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、Interact ランタイム のステージング・テーブルから Campaign コンタクトおよびレスポンス履歴 テーブルへのデータのコピーの間で待つ時間を表す分数。

デフォルト値

60

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

preferredStartTime

説明

日次の ETL プロセスを開始する優先時刻。このプロパティーは、 preferredEndTime プロパティーと一緒に使用された場合、ETL を実行する 優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に 開始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大 限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、 12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

12:00:00 AM

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

preferredEndTime

説明

日次の ETL プロセスを完了する優先時刻。このプロパティーは、 preferredStartTime プロパティーと一緒に使用された場合、ETL を実行する 優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に 開始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大 限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、 12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

2:00:00 AM

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で す。

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、対応するコンタクトのないレスポンスをパージするまでの待ち時間を表す分数。これにより、コンタクトをログに記録せずにレスポンスがログに記録されるのが防止されます。

デフォルト値

180

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で す。

maxJDBCInsertBatchSize

説明

クエリーがコミットされるまでの JDBC バッチの最大レコード数。これ は、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが 1 回のイテレー ションで処理する最大レコード数ではありません。各イテレーションで、 Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールは、ステージング・テ ーブルにあるすべてのレコードを処理します。ただし、それらすべてのレコ ードは、maxJDBCInsertSize 個のチャンクに分割されます。

デフォルト値

1000

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

maxJDBCFetchBatchSize

説明

ステージング・データベースからフェッチする JDBC バッチの最大レコー ド数。コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのパフォーマンスをチュ ーニングするために、この値を大きくすることが必要な場合もあります。

例えば、1 日に 250 万個のコンタクト履歴レコードを処理するには、1 日 のすべてのレコードが処理されるよう、maxJDBCFetchBatchSize を 2.5M よ り大きい数値に設定する必要があります。

その後、maxJDBCFetchChunkSize および maxJDBCInsertBatchSize の値をよ り小さい値 (この例では、それぞれ 50,000 と 10,000 など) に設定できま す。次の日のレコードも一部が処理される場合がありますが、それらは次の 日まで保持されます。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

maxJDBCFetchChunkSize

説明

ETL (抽出、トランスフォーム、ロード) のときに読み取られるデータの JDBC チャンク・サイズの最大数。場合によっては、チャンク・サイズを挿 入サイズより大きくすると、ETL プロセスの速度が向上することがありま す。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

deleteProcessedRecords

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴のレコードを、処理後に保存するかどうか を指定します。

デフォルト値

Yes

completionNotificationScript

説明

ETL の完了時に実行するスクリプトへの絶対パスを指定します。スクリプトを指定すると、4 つの引数 (開始時刻、終了時刻、処理された CH レコードの合計数、および処理された RH レコードの合計数) が完了通知スクリプトに渡されます。開始時刻と終了時刻は 1970 年以降に経過したミリ秒数を表す数値です。

デフォルト値

なし

fetchSize

説明

ステージング・テーブルからレコードを取り出すときの JDBC fetchSize を 設定できます。

特に Oracle データベースでは、JDBC が 1 回のネットワークの往復で取り 出すレコード数に合わせて、この設定を調整してください。100 K 以上の 大きなバッチの場合は、10000 に設定してみます。ここでは、あまり大きな 値を使用しないように注意してください。値が大きすぎるとメモリーの使用 状況に影響が出て、不利益にはならないにしても、利得はごくわずかになり ます。

デフォルト値

なし

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | runtimeDataSources | [runtimeDataSource]

これらの構成プロパティーは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュール のデータ・ソースを定義します。

jndiName

説明

systemTablesDataSource プロパティーを使用すると、Interact ランタイム・ テーブル用にアプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内で定義される Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソース を識別できます。

Interact ランタイム・データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベ ースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルおよび UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

databaseType

説明

```
Interact ランタイム・データ・ソースのデータベース・タイプ。
```

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | Oracle | DB2

可用性

```
このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。
```

schemaName

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのステージング・テーブルを含んでいるスキーマの名前。これは、ランタイム環境テーブルと同じものにしてください。

スキーマは定義する必要はありません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | contactTypeMappings

これらの構成プロパティーは、レポートまたは学習の目的で「コンタクト」にマッ プされる、キャンペーンからのコンタクト・タイプを定義します。

contacted

説明

オファー・コンタクトの Campaign システム・テーブル内で、 UA_DtlContactHist テーブルの ContactStatusID 列に割り当てられる値。 値は、UA_ContactStatus テーブル内の有効な項目でなければなりません。 コンタクト・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

2

有効な値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | responseTypeMappings

これらの構成プロパティーは、レポートおよび学習の承認または拒否のレスポンス を定義します。

accept

説明

承認されたオファーについて、Campaign システム・テーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。 値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりませ ん。CountsAsResponse 列には、値 1、レスポンスを割り当ててください。

レスポンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

3

有効な値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

reject

説明

拒否されたオファーについて、Campaign システム・テーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。 値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりませ ん。CountsAsResponse 列には、値 2、拒否を割り当ててください。レスポ ンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」 を参照してください。

デフォルト値

8

有効な値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | report

これらの構成プロパティーは、Cognos と統合されるときのレポート名を定義します。

interactiveCellPerformanceByOfferReportName

説明

「オファー別のインタラクティブ・セル・パフォーマンス」レポートの名前。この名前は、Cognos サーバー上のこのレポートの名前と一致する必要があります。

デフォルト値

オファー別のインタラクティブ・セル・パフォーマンス

treatmentRuleInventoryReportName

説明

「処理ルール・インベントリー」レポートの名前。この名前は、Cognos サ ーバー上のこのレポートの名前と一致する必要があります。

デフォルト値

チャネル処理ルール・インベントリー

deploymentHistoryReportName

説明

「配置履歴レポート」のレポート名。この名前は、Cognos サーバー上のこのレポートの名前と一致する必要があります。

デフォルト値

チャネル配置履歴

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | learning

これらの構成プロパティーを使用すると、組み込みの学習モジュールをチューニン グできます。

confidenceLevel

説明

学習ユーティリティーを参照から活用へ切り替える前に、どれくらい信頼で きるものにするかを示すパーセンテージ。値0は、調査を事実上シャット オフします。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

95

有効な値

0から95までの間の5で割り切れる整数、または99。

enableLearning

説明

Yes に設定した場合は、Interact 設計時に学習が有効であることが予期され ます。enableLearning を yes に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を BuiltInLearning または ExternalLearning に構成する必要があります。

No に設定した場合は、Interact 設計時に学習が無効であることが予期されま す。enableLearning を no に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を NoLearning に構成する必要があります。

デフォルト値

No

maxAttributeNames

説明

Interact 学習ユーティリティーが監視する学習属性の最大数。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

10

有効な値

任意の整数。

maxAttributeValues

説明

Interact 学習モジュールが学習属性ごとに追跡する値の最大数。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

5

otherAttributeValue

説明

maxAttributeValues を超えたすべての属性値を表すために使用される属性 値のデフォルト名。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

Other

ストリングまたは数値。

例

maxAttributeValues を 3 に設定し、otherAttributeValue を other に設定した 場合、学習モジュールは最初の 3 つの値を追跡します。それ以外のすべて の値は、other カテゴリーに割り当てられます。例えば、ビジター属性の髪 の色を追跡する場合、最初の 5 人のビジターの髪の色が黒、茶、ブロン ド、赤、およびグレーであれば、学習ユーティリティーは黒、茶、およびブ ロンドの髪の色を追跡します。赤とグレーの髪の色は、 otherAttributeValue、other の下にグループ化されます。

percentRandomSelection

説明

学習モジュールがランダム・オファーを提示する頻度のパーセント。例え ば、percentRandomSelection を 5 に設定することは、学習モジュールによる ランダム・オファーの提示頻度が 5% (100 件の推奨ごとに 5 件) であるこ とを意味します。

デフォルト値

5

有効な値

0から100までの任意の整数。

recencyWeightingFactor

説明

recencyWeightingPeriod によって定義されたデータ集合のパーセンテージの 10 進表記。例えば、デフォルト値の 0.15 は、学習ユーティリティーに よって使用されるデータの 15% が recencyWeightingPeriod からのもので あることを意味します。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

0.15

有効な値

1 より小さい 10 進値。

recencyWeightingPeriod

説明

学習モジュールによって重みの recencyWeightingFactor パーセンテージを 付与される、データのサイズを時間数で表したもの。例えば、デフォルト値 の 120 は、学習モジュールによって使用されるデータの recencyWeightingFactor が、過去 120 時間からのものであることを意味し ます。

このプロパティーは、optimizationType が builtInLearning に設定されて いる場合にのみ適用されます。

デフォルト値

120

minPresentCountThreshold

説明

データが計算に使用され、学習モジュールが参照モードに入る前に、オファ ーが提示されなければならない最小回数。

デフォルト値

0

有効な値

ゼロ以上の整数。

enablePruning

説明

Yes に設定した場合、Interact 学習モジュールは、学習属性 (標準または動的) に予測性がない時点をアルゴリズムによって判別します。学習属性に予 測性がない場合、学習モジュールはオファーの重みを判別するときに、その 属性を考慮しません。これは、学習モジュールが学習データを集約するまで 続行されます。

No に設定した場合、学習モジュールは常にすべての学習属性を使用しま す。予測性のない属性のプルーニングを行わなかった場合、学習モジュール の本来の正確さが十分に発揮されない可能性があります。

デフォルト値

Yes

有効な値

Yes | No

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | learning | learningAttributes | [learningAttribute]

これらの構成プロパティーは、学習属性を定義します。

attributeName

説明

各 attributeName は、学習モジュールに監視させるビジター属性の名前で す。これは、セッション・データ内の、名前と値のペアの名前に一致する必 要があります。 このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | deployment

これらの構成プロパティーは、配置の設定を定義します。

chunkSize

説明

```
各 Interact 配置パッケージのフラグメントの最大サイズ (KB 単位)。
```

デフォルト値

500

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup]

これらの構成プロパティーは、サーバー・グループの設定を定義します。

serverGroupName

説明

Interact ランタイム・サーバー・グループの名前。これは、「インタラクティブ・チャネルのサマリー」タブに表示される名前です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL]

これらの構成プロパティーは、Interact ランタイム・サーバーを定義します。

instanceURL

説明

Interact ランタイム・サーバーの URL。1 つのサーバー・グループに複数の Interact ランタイム・サーバーを含めることができます。ただし、各サーバ ーを新しいカテゴリーの下に作成する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

http://server:port/interact

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で す。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | flowchart

これらの構成プロパティーは、インタラクティブ・フローチャートのテスト実行に 使用される Interact ランタイム環境を定義します。

serverGroup

説明

Campaign がテスト実行に使用する Interact サーバー・グループの名前。この名前は、serverGroups の下に作成したカテゴリー名に一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

dataSource

説明

dataSource プロパティーを使用して、Campaign でインタラクティブ・フロ ーチャートのテスト実行を行うときに使用する物理データ・ソースを識別し ます。このプロパティーは、Interact 設計時に定義されたテスト実行デー タ・ソースの Campaign > partitions > partitionN > dataSources プロパ ティーで定義されたデータ・ソースに一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | DefaultOffers

これらの構成プロパティーは、デフォルト・オファー・テーブルのデフォルト・セル・コードを定義します。これらのプロパティーを構成する必要があるのは、グロ ーバル・オファー割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

デフォルト・オファー・テーブル内でセル・コードを定義しなかった場合 に、Interact で使用されるデフォルト・セル・コード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されたセル・コード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | ScoreOverride

これらの構成プロパティーは、スコア・オーバーライド・テーブルのデフォルト・ セル・コードを定義します。これらのプロパティーを構成する必要があるのは、個 々のオファー割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

スコア・オーバーライド・テーブルで、セル・コードを定義しなかった場合 に、Interact で使用されるデフォルト・セル・コード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されたセル・コード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | server | internal

このカテゴリーのプロパティーは、選択した Campaign パーティションの統合設定 と internalID の制限を指定します。 Campaign インストール済み環境に複数のパー

ティションがある場合、関係するパーティションごとにこれらのプロパティーを設 定します。

internalldLowerLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も 使用できます。

デフォルト値

0(ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も 使用できます。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。yes を選択すると、 eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールの既定のパーティションに 関してこのプロパティーを yes に設定します。eMessage をインストールし た追加パーティションについては、このプロパティーを手動で構成する必要 があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティーを yes に設定 し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact をインストールしていない場合、no に設定してください。このプロ パティーを no に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・ インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプション を削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動 で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で す。

MO_UC_integration

説明

このパーティションで、Marketing Operations との統合を有効にします。以下の 3 つのオプションのいずれかを Yes に設定する計画の場合、

MO_UC_integration を Yes に設定する必要があります。この統合の構成に ついて詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガ* イド」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

MO_UC_BottomUpTargetCells

説明

このパーティションにおけるターゲット・セル・スプレッドシートのボトム アップ・セルを許可します。Yes に設定すると、トップダウンとボトムアッ プの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲッ ト・セルは読み取り専用です。MO_UC_integration が有効でなければなら ないことに注意してください。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Legacy_campaigns

説明

MO_UC_integration プロパティーが Yes に設定されていると、 Legacy_campaigns プロパティーによって、統合が有効になる前に作成され たキャンペーン (Campaign 7.x で作成されたキャンペーンおよび Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンを含む) にアクセスできるように なります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。 デフォルト値

no

有効な値

yes | no

IBM Unica Marketing Operations - オファーの統合

説明

このパーティションにおいて、Marketing Operations を使用してオファー・ ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします (MO_UC_integration が有効でなければなりません。また、「設定」>「構成」 >「Unica」>「Platform」で「キャンペーンの統合 (Campaign integration)」も有効でなければなりません)。この統合の構成について詳し くは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参 照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

UC_CM_integration

説明

キャンペーン・パーティションで IBM Coremetrics オンライン・セグメン ト統合を有効にします。このオプションを Yes に設定すると、フローチャ ートの「選択」プロセス・ボックスに、「IBM Coremetrics セグメント」 を入力として選択するためのオプションが表示されます。それぞれのパーテ ィションの統合を構成するには、「設定」>「構成」>「Campaign | パーテ ィション | パーティション[n] | Coremetrics」を選択します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | monitoring

このカテゴリーのプロパティーは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどう か、Operational Monitoring サーバーの URL、およびキャッシュ動作を指定します。 Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制 御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティーは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティーは、完了した実行がキャッシュに入れ られ、「監視」ページに表示される時間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティーは、モニターをオンにするかどうかを指定し ます。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

はい

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティーは、Operational Monitoring サーバーの URL を指定します。これは、必須の設定です。 Operational Monitoring サーバー URL がデフォルトでない場合は、値を変 更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されて いる場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティーの値を設定しま す。例えば、次のようにします。 serverURL=https://host:SSL_port/ Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前 または IP アドレスです。
- SSL_Port は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

「はい」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で 使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

「いいえ」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX 監視は、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用 です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Optimize 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの IBM Unica Optimize 構成プロパティーに ついて取り上げます。

Campaign | unicaACOListener

これらの構成プロパティーは、Optimize リスナーの設定用です。

serverHost

説明

```
Optimize インストール済み環境のホスト・サーバー名に設定します。
```

デフォルト値

localhost

serverPort

説明

```
Optimize インストール済み環境のホスト・サーバー・ポートに設定します。
```

```
デフォルト値
```

なし

useSSL

説明

SSL を使用して Marketing Platform サーバーに接続するには、True に設定 します。それ以外の場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

keepalive

説明

Campaign Web アプリケーションで、接続をアクティブにしておくために ACOListener へのメッセージの送信間で待つ秒数。keepalive を使用する と、非アクティブな接続を閉じるようにネットワークが構成されている場合 に、接続が開いたままになります。

0 に設定した場合、Web アプリケーションは何もメッセージを送信しません。

```
この keepalive プロパティーは、Java ソケットの keepAlive とは別のもの
です。
```

デフォルト値

0

有効な値

正の整数

logProcessId

説明

```
Optimize リスナー・プロセスの ID を Optimize リスナー・ログ
(Optimize_installation_directory/logs/unica_acolsnr.log) に記録するに
は、yes に設定します。そうでない場合は、no に設定します。
```

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

loggingLevels

説明

ログに記録する Optimize リスナーのデータの詳細を設定できます。

この設定は、*Optimize_installation_directory*/logs/unica_acolsnr.log ファイルに影響を及ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

IogMaxFileSize

説明

```
この整数は、ログ・ファイルの最大サイズ (バイト単位) に設定します。
Optimize は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成し
ます。この設定は、Optimize_installation_directory/logs/
unica_acolsnr.log に影響を及ぼします。
```

```
デフォルト値
```

20485760

enableLogging

説明

ログへの記録を有効にするには、True に設定します。そうでない場合は、 False に設定します。この設定は、*Optimize_installation_directory/* logs/unica_acolsnr.log に影響を及ぼします。 デフォルト値

True

有効な値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップ・ファイルの数に設定します。この設定 は、*Optimize_installation_directory*/logs/unica_acolsnr.log に影響を 及ぼします。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリーを、コンマ区切りリストとして指定でき ます。この設定は、*Optimize_installation_directory*/logs/ unica acolsnr.log に影響を及ぼします。

デフォルト値

all

有効な値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table access | table io | table mapping | webproc

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば 777 は、読み 取り、書き込み、実行の権限を表します。

デフォルト値

660 (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | sessionRunMonitor

これらの構成プロパティーは、sessionRunMonitor 設定用です。

progressFetchDelay

説明

この整数は、Web アプリケーションがリスナーからの進捗情報を入手する 前に待つミリ秒数に設定します。

デフォルト値

250

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | MemoryTuning

これらの構成プロパティーは、MemoryTuning 設定用です。

MaxRamUsage

説明

コンタクト履歴をキャッシュに入れるために使用する最大メモリーを、MB 単位で定義します。この値は、少なくとも 1 つのコンタクト履歴レコード と同じ大きさでなければなりません。

デフォルト値

128

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | userTemplateTables

このプロパティーは、PCT および OCT によって使用されるテンプレート・テーブ ルを定義します。

tablenames

説明

Optimize テンプレート・テーブルのテーブル名をコンマ区切りリストで入 力します。これらのテンプレート・テーブルは、推奨コンタクト・テーブル (PCT) または最適化されたコンタクト・テーブル (OCT) にユーザー固有の フィールドを追加するために使用できます。

デフォルト値

UACO UserTable

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | AlgorithmTuning

これらの構成プロパティーは、最適化のチューニングに使用できる設定を定義します。

MaxAlternativesPerCustomerEvaluated

説明

顧客に最適の選択肢を見つけるために、提案されたトランザクションまたは 選択肢の組み合わせを Optimize でテストする最大回数。

例えば、以下が真である場合:

- 提案コンタクト・テーブル (PCT) で顧客に関連付けられているオファー が A、B、C、D であり、これらのオファーのスコアが A=8、B=4、C=2、D=1 である
- MaxAlternativesPerCustomerEvaluated プロパティーが 5 である

• 最大オファー数 =3 のルールが存在する

この場合、試行される選択肢は、以下のようになります。

- ABC スコア = 14
- ABD スコア = 13
- AB スコア = 12
- ACD スコア = 11
- AC スコア = 10

テストする選択肢の数が多くなる場合があるため、この値を使用して、 Optimize が PCT 内の次の顧客に移動する前に、コア・アルゴリズムが 1 人の顧客に対して費やす作業量を制限することができます。

デフォルト値

1000

CustomerSampleSize

説明

最適化する対象の顧客の数が CustomerSampleSize を超える場合、Optimize は CustomerSampleSize を超えないグループに顧客を分割し、それぞれのサ ンプル・グループを別々に最適化します。それでも、グループ間にまたがる ルール、例えばカスタム・キャパシティー・ルールなどは遵守されます。こ の数を大きくすると、最適性は向上してもパフォーマンスを損なう場合があ ります。

最大限に最適な CustomerSampleSize は、顧客の数と同じです。しかし、大 きなデータ集合の処理には、多大な時間を要する場合があります。Optimize で一度に処理するために、顧客をより小さなグループに分割することによ り、最適性の損失を最小にしてパフォーマンスを向上させることができま す。

デフォルト値

1000

有効な値

正の整数

CustomerRandomSeed

説明

ランダム・シードは、CustomerSampleSize によって定義されたサンプル・ グループにデータを設定する前に、Optimize でレコードのランダムな選択 に使用される開始点を表します。顧客の数が CustomerSampleSize より少な い場合、このプロパティーは最適化に効果はありません。

現行のランダム・サンプルで生成される結果に大きな偏りがあると思われる 場合は、ランダム・シードを変更できます。

デフォルト値

1928374656

正の整数

MaxIterationsPerCustomerSample

説明

Optimize が 1 つの顧客グループに対して処理するイテレーションの最大数。Optimize は、最適性が達成されるか、イテレーションが MaxIterationsPerCustomerSample と同じになるまで、1 つの顧客グループ を処理します。

セッション・ログ内の次の情報を検索し、MaxIterationsPerCustomerSampleの設定変更の効果を観察します。

- 1 顧客チャンクあたりの最大、最小、および平均イテレーション回数
- 作成された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- 試行された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- イテレーションの標準偏差

デフォルト値

1000

有効な値

正の整数

MaxCustomerSampleProcessingThreads

説明

Optimize で最適化アルゴリズムの処理に使用するスレッドの最大数。一般 に、MaxCustomerSampleProcessingThreads を大きく設定するほど、パフォ ーマンスを向上させることができます。ただし、パフォーマンスの向上は、 使用する最適化ルールのタイプと数、使用するハードウェアなど、いくつか の要因によって制限されます。Optimize の実装のチューニングに関する詳 しい手順については、IBM Unica 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

ProcessingThreadQueueSize

説明

Optimize で PCT から顧客サンプルを読み取るときに使用できるスレッドの 数。スレッドの数を増やすと、Optimize セッションのパフォーマンスが向 上する場合があります。Optimize の実装のチューニングに関する詳しい手 順については、IBM Unica 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

正の整数

PostProcessingThreadQueueSize

説明

OCT のステージング・テーブルに顧客サンプルを書き込むときに、 Optimize で使用できるスレッドの数。スレッドの数を増やすと、Optimize セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Optimize の実装 のチューニングに関する詳しい手順については、IBM Unica 営業担当員に お問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

EnableMultithreading

説明

true の場合、Optimize は最適化アルゴリズムを処理するときに複数のスレッドの使用を試みます。スレッドの数は、

MaxCustomerSampleProcessingThreads、ProcessingThreadQueueSize、および PostProcessingThreadQueueSize 構成パラメーターで構成できます。 false の場合、Optimize は最適化アルゴリズムを処理するときに単一のスレッドを使用します。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

EnableBufferingHistoryTransactions

説明

true の場合、Optimize はコンタクト履歴トランザクションを、Optimize セ ッションの実行のときに読み取るために、ファイルに書き込みます。false の場合、Optimize は Campaign システム・テーブル内の UA_ContactHistory テーブルから読み取ります。

false の場合、Optimize は Optimize セッションの間、UA_ContactHistory テーブルに対して読み取りロックを作成します。このロックにより、データ ベース・ロード・ユーティリティーを使用している場合に、テーブルへの書 き込みが失敗することもあります。true の場合、Optimize はクエリーをフ ァイルに書き込むために要する時間の間だけ、テーブルに対する読み取りロ ックを作成します。

デフォルト値

false

true | false

MinImprovementPercent

説明

この構成プロパティーを使用すると、最適化の割合が指定されたレベルに到 達した時点で、顧客のグループの処理を停止できます。 MinImprovmentPercent プロパティーを使用すると、イテレーションを続行 するための、スコアの向上の割合 (パーセンテージとして測定)を設定でき ます。デフォルト値はゼロで、これは可能なイテレーションの数に制限がな いことを意味します。

デフォルト値

0.0

UseFutureContacts

説明

どの最適化ルールの中でも時間枠を使用していない場合は、パフォーマンス 向上のための Optimize によるコンタクト履歴テーブルに対するクエリーを 防止できます。この動作は、UseFutureContacts 構成プロパティーを使用し て制御できます。

UseFutureContacts を false に設定した場合、しかも Optimizeセッションの 最適化ルールで時間枠を使用していなければ、Optimize はコンタクト履歴 テーブルに対するクエリーを行いません。この設定により、Optimize セッ ションを実行するために必要な時間が改善されます。ただし、Optimize セ ッションで時間枠を使用する場合は、コンタクト履歴テーブルに対するクエ リーが行われます。

潜在的な将来のコンタクトをコンタクト履歴に記録する場合は、 UseFutureContacts を true に設定する必要があります。例えば、次の週に 特定の顧客に特別なプロモーションに関する電子メール通信を送信すること が分かっている場合は、それらのコンタクトをあらかじめプレースホルダー としてコンタクト履歴テーブルに入れておくことができます。この場合、 UseFutureContacts を true に設定し、Optimize がコンタクト履歴テーブル を必ず照会するようにします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | Debug

このプロパティーは、PCT を処理するためのデバッグ・レベルを定義します。

ExtraVerbose

説明

提案コンタクト・テーブル内で処理された行に関する詳細なログを得るに は、この値を yes に設定します。デフォルトでは、この値を yes に設定す ると、すべての行がログに記録されます。

提案コンタクト・テーブルの処理された行をログに記録しない場合は、この 値を no に設定します。

デフォルト値

no

有効な値

yes no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Optimize | logging

このプロパティーは、Optimize のログ設定を定義します。

enableBailoutLogging

説明

True に設定すると、Optimize が MaxAlternativesPerCustomerEvaluated で設定された限度を超え、顧客に有効な選択肢がない場合、Optimizeはその 顧客についてのログを (限度を超えた顧客をカウントする通常のログに加え て) 生成します。

True に設定した場合も、Optimize で処理できなかった顧客の詳細が含まれ ている別個のファイルが得られます。これは、コンマ区切り値 (CSV) ファ イルです。1 行が 1 人の顧客に対応します。最初の列は顧客 ID で、2 番 目の列は Optimize がその顧客を処理できなかった理由です。このファイル は unprocessables_sessionID.csv という名前で、 OptimizeInstallationDirectory/partitions/partition[n]/logs ディレク

トリーに置かれます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

logProcessId

説明

Optimize サーバー・プロセスの ID をOptimize サーバー・ログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/ unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に記録する場合は、True に設定します。そ うでない場合は、False に設定します。

デフォルト値

False
有効な値

True | False

loggingLevels

説明

ログに記録するサーバー・データの詳細を設定できます。

この設定は、Optimize サーバー・ログ (Optimize_installation_directory/ partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及 ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログ・ファイルの最大サイズを表すバイト数に設定します。 Optimize は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成し ます。この設定は、Optimize サーバー・ログ (Optimize_installation_directory/partitions/partition[n]/logs/ unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

10485760

enableLogging

説明

```
ログを有効にする場合は、True に設定します。そうでない場合は、False
に設定します。この設定は、Optimize サーバー・ログ
(Optimize_installation_directory/partitions/partition[n]/logs/
unica acosvr SESSIONID.log) に影響を及ぼします。
```

デフォルト値

True

有効な値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

```
この整数は、保管するバックアップ・ファイルの数に設定します。これは、
Optimize サーバー・ログ (Optimize_installation_directory/partitions/
partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。
```

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリーを、コンマ区切りリストとして指定でき ます。この設定は、Optimize サーバー・ログ (Optimize_installation_directory/partitions/partition[n]/logs/ unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

all

有効な値

```
all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors |
dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort |
sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc
```

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば 777 は、読み 取り、書き込み、実行の権限を表します。

デフォルト値

660 (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます)

Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティーは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

getProgressCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

有効な値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

runSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

有効な値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティーは、Optimize コマンド・ライン・ツールのロ グ・ファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。選択可 能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の 詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込まれます)。 ALL レベルはトレース・メッセージを含み、主に診断を目的としていま す。

デフォルト値

HIGH

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

cancelSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

有効な値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

logoutCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_doLogout.do

有効な値

optimize/ext_doLogout.do

getProgressWaitMS

説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、getProgressCmd を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい整数

Distributed Marketing 構成プロパティー

このセクションでは、構成ページの Distributed Marketing 構成プロパティーについ て説明します。追加の構成プロパティーは、Distributed Marketing インストール・デ ィレクトリーの下にある XML ファイルの中に存在します。

ナビゲーション

welcomePageURI

説明

Distributed Marketing 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は変 更しないでください。

既定值 affiniumcollaborate.jsp?cat=home

projectDetailpageURI

説明

Distributed Marketing 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値は変 更しないでください。

既定值 uapprojectservlet?cat=projectabs&projecttype=CORPORATE&projectid=

seedName

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この 値は変更しないでください。

既定值 Collaborate

type

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この 値は変更しないでください。

既定值 Collaborate

httpPort

説明

アプリケーションサーバによって Distributed Marketing アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

既定值 7001

httpsPort

説明

アプリケーションサーバによって Distributed Marketing アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

既定值 7001

serverURL

説明

Distributed Marketing インストールの URL。

既定值 http://localhost:7001/collaborate

displayName

説明

内部で使用されます。

既定值 Distributed Marketing

timeout_redirection

説明

タイムアウト URL が表示されます。空の場合、Distributed Marketing のロ グアウト・ページが表示されます。

既定値 既定値が定義されていません。

構成設定

serverType

説明

使用している Web アプリケーション・サーバーのタイプ。有効な値は WEBLOGIC または WEBSPHERE です。

デフォルト値

userManagerSyncTime

説明

Marketing Platform と同期するための時間を表すミリ秒数。既定値は 3 時間 に相当します。

デフォルト値

10800000

firstMonthInFiscalYear

説明

会計年度の最初の月。既定値は0で、1月を表します。

デフォルト値

0

systemUserLoginName

システム・タスク (システム・タスク・モニターやスケジューラーなど) で 使用するための、 Marketing Platform ユーザーのログイン名。 IBM は、シ ステム・ユーザーを通常の Distributed Marketing ユーザーとしないように強 くお勧めします。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

searchModifiedTasksForSummaryFrequencyInSeconds

説明

「サマリー」タブの表示を更新するために、タスク実行での変更を検索する 頻度 (秒数)。

デフォルト値

10

collaborateFlowchartStatusPeriod

説明

フローチャート・ステータス検査の間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

100000

collaborateFlowchartStatusPeriodRunning

説明

フローチャートの実行中にフローチャート・ステータス検査を行う間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

2000

enableEditProjectCode

説明

true に設定されている場合、「新規リスト (New List)」ウィザードの「サ マリー」ページでリスト・コードを編集できます。 false に設定されてい る場合、リスト・コードを編集できません。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

minimumDelayForExecutionMonitoring

説明

オプション。「フローチャート実行の監視」ページに実行が表示されるまで の最小遅延時間を表す秒数を定義します。 デフォルト値

10800

validateAllWizardSteps

説明

ウィザード中の未表示のステップにある必須項目を Distributed Marketing に 検査させるかどうかを決めます。プロジェクト・ウィザードで「完了」をク リックした後に生じる動作を、このパラメーターで変更します。

- true: ウィザードを使用してプロジェクトを作成する際、ウィザード中の 未表示の全ステップ (ワークフロー、トラッキング、添付ファイルを除 く) にある、すべての必須項目を Distributed Marketing に検査させます。 空白の必須項目がある場合、ウィザードはそのページにジャンプして、エ ラー・メッセージを表示します。
- false: Distributed Marketing は、ウィザード中の未表示のステップにある 必須項目を検査しません。

注: Distributed Marketing は、現在のページに空白の必須項目がないかを自動的に検査します。このパラメーターは、「完了」がクリックされた後に、 Distributed Marketing がすべてのページを検査して空白の必須項目の有無を 調べるかどうかを制御します。

```
デフォルト値
```

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

添付ファイル

collaborateModeForAttachments

説明

Distributed Marketing は、フローチャートの実行によって生成された添付ファイルを、Campaign サーバーから以下のモードで取得できます。

- Directory (既定值)
- HTTP
- FTP
- TFTP
- SFTP

デフォルト値

true

有効な値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsDIRECTORY_directory

モードがデフォルト値の Directory に設定されている場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する Campaign サーバー内のアドレスを示します。

デフォルト値

¥Affinium¥Campaign¥partitions¥partition1

collaborateAttachmentsDIRECTORY_deletefile

説明

値 true は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。モード が Directory に設定されている場合、既定値は false です。

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsFTP_server

説明

モードが FTP に設定されている場合、 Distributed Marketing が添付ファイ ルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_username

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログイン するためのユーザー名を示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_password

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログイン するためのパスワードを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_account

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログイン するためのアカウントを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_directory

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP である場 合、Distributed Marketingが添付ファイルを取得する FTP サーバー上のディ レクトリーを示します。 Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディ レクトリーから見た相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用する FTP サー バーのファイル転送タイプを示します。値は ASCII または BINARY とする ことができます。既定値は ASCII です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_deletefile

説明

オプション。値 true は、元のファイルがコピー後に削除されることを示し ます。パラメーター collaborateModeForAttachments が HTTP の場合、既定 値は false です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_url

説明

パラメーター collaborateModeForAttachments が HTTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する HTTP URL を示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_deletefile

オプション。値 true は、元のファイルがコピー後に削除されることを示し ます。パラメーター collaborateModeForAttachments が HTTP の場合、既定 値は false です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_server

説明

パラメーター collaborateModeForAttachments が TFTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_port

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が TFTP の場 合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するポートを示します。

デフォルト値

69

collaborateAttachmentsTFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が TFTP の場 合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用するサーバ ーのファイル転送タイプを示します。有効な値は ASCII または BINARY で す。既定値は ASCII です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_server

説明

SFTP サーバー名 (または IP)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_port

説明

オプション。 FTP サーバー・ポート。

デフォルト値

collaborateAttachmentsSFTP_username

説明

```
SFTP サーバーにログインするためのユーザー名。
```

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_password

説明

```
オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP パスワード。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usepassword=true のときに使用されます。
```

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_usekey

説明

オプション。認証ユーザーのために秘密鍵ファイルを使用します。

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsSFTP_keyfile

説明

オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP 鍵ファイル名 (サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されま す)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_keypassphrase

説明

SFTP サーバーにログインするための SFTP パスフレーズ。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_knownhosts

説明

オプション。既知のホストのファイル名 (サーバーによって必要とされる場合に使用されます)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_directory

説明

オプション。 Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディレクトリー から見た相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_deletefile

説明

オプション。可能であれば元のファイルをコピーの後に削除します。

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

mergeEnabled

説明

ドキュメントのマージを使用可能にするかどうかを決めます。

- true: マージを使用可能にします (既定値)。
- false: マージを使用不可にします。

デフォルト値

true

有効な値

```
TRUE | FALSE
```

mergeFullWritePath

説明

マージ機能が使用可能のとき、このパラメーターは、ローカル・マシン上のマージ済みデータ・ファイルへの完全なパスを示します。

デフォルト値

c:/temp

mergeDataLimitSize

説明

Microsoft Word でマージするデータのサイズの上限を示します。サイズは 行数で示されます (例えば、値 100 はマージ済みファイルの内容が 100 行 を超えてはならないことを示します)。つまり、ファイル内の行数がこのパ ラメーターの値よりも大きい場合、このファイルではマージを使用できません。

デフォルト値

1000

upload_allowedFileTypes

説明

Distributed Marketing でアップロード可能なファイルのタイプを示します。

デフォルト値

doc ppt xls pdf gif jpeg png mpp

upload_fileMaxSize

説明

アップロード可能なファイルの最大サイズの制限を示します。

デフォルト値

5000000

添付ファイル・フォルダー

uploadDir

説明

Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーの完全パス。このパス を編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーへの完全 パスが含まれるようにします。例えば、

c:¥Unica¥DistributedMarketing¥projectattachments と指定します。 UNIX をご使用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き 込み、および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられて いることを確認してください。

デフォルト値

projectattachments

taskUploadDir

説明

Distributed Marketing タスク・アップロード・ディレクトリーの完全パス。 このパスを編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリー への完全パスが含まれるようにします。例えば、

c:¥Unica¥DistributedMarketing¥taskattachments と指定します。 UNIX をご使用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き込み、 および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられているこ とを確認してください。

デフォルト値

taskattachments

Campaign 統合 defaultCampaignPartition

説明

既定の Campaign パーティション。プロジェクト・テンプレート・ファイル で <campaign-partition-id> タグを定義しない場合、Distributed Marketing は このパラメーターを使用します。

デフォルト値

partition1

defaultCampaignFolderId

説明

既定の Campaign フォルダー ID。プロジェクト・テンプレート・ファイル で <campaign-folder-id> タグを定義しない場合、Distributed Marketing はこ のパラメーターを使用します。

デフォルト値

2

データ・ソース

jndiName

説明

Distributed Marketing データベースのデータ・ソース名。

デフォルト値

collaborateds

asmJndiName

説明

Marketing Platform データベースのデータ・ソース名。ユーザーの同期化の ためだけに使用されます。

デフォルト値

UnicaPlatformDS

フローチャート

enableFlowchartPublishEvent

説明

フローチャートが公開されるとき、Distributed Marketing が Campaign によって送信されるイベントを受け取るかどうかを指定します。

デフォルト値

True

flowchartRepublishOverwriteUserVarPrompt

フローチャートが再公開されるとき、「ユーザー変数」プロンプトが上書き されるかどうかを指定します。

デフォルト値

False

flowchartRepublishOverwriteProcParamPrompt

説明

フローチャートが再公開されるとき、「プロセス・パラメーター」プロンプ トが上書きされるかどうかを指定します。

デフォルト値

False

flowchartServiceCampaignServicesURL

説明

フローチャートの実行、フローチャート・データの取得、その他のために使 用する CampaignServices Web サービスの URL。

注: Campaign が Distributed Marketing とは異なるマシンまたはポート上に インストールされている場合を除いて、このパラメーターの既定値を変更し ないでください。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/Campaign/services/ CampaignServices30Service

flowchartServiceCampaignServicesTimeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Campaign サービスとの通信を待機する時間 (ミリ秒)。

デフォルト値

600000

flowchartServiceNotificationServiceURL

説明

Campaign からの通知を受け取る、 Distributed Marketing の通知サービスの URL。

注: 非標準のコンテキスト・ルートを使用する場合、このパラメーターを指 定する必要があります。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/collaborate/
flowchartRunNotifyServlet

flowchartServiceCampaignServicesAuthorizationLoginName

説明

すべてのデータ・ソースへのアクセス権限を含む管理権限を持つ Campaign ユーザー。 asm_admin など。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

flowchartServiceScheduleServices10Timeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジューラーとの通信を待機する時間 (ミリ秒)。

デフォルト値

600000

flowchartServiceScheduleServices10MaxRetries

説明

エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジ ューラーとの接続を試行する回数。

デフォルト値

3

flowchartServiceScheduleServices10RetryPollPeriod

説明

Marketing Platform スケジューラーとの通信を再試行する前に、 Distributed Marketing が待機する秒数。

デフォルト値

60

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleType

説明

スケジュール設定されたフローチャート実行の制限のタイプ。有効な値は、 次のとおりです。

- 0: 制限なし (制限の値は無視されます)
- 1: フローチャート・インスタンスごとの制限
- 2: すべてのフローチャートの制限 (既定値)

デフォルト値

2

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleValue

同時に実行できるスケジュール設定されたフローチャートまたはフローチャ ート・インスタンスの最大数。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorPollPeriod

説明

オプション。スケジューラー・モニターがポーリングとポーリングの間でス リープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorRemoveSize

説明

オプション。一度にキューからの削除を試みるジョブの数を設定します。ス ケジューラー・モニターは、この値で指定された増分を単位として、イベン ト・キューから何もなくなるまでイベントを削除し続けます。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorTimeout

説明

フローチャート実行の開始から、isAlive モニターの Campaign に対する定期的なクエリーまで待機する期間 (秒数)。

デフォルト値

900

flowchartServiceIsAliveMonitorMaxRetries

説明

フローチャート実行エラーをスローする前に、isAlive モニターによって Campaign に送信されるクエリーの最大数。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorPollPeriod

説明

isAlive モニターが Campaign にクエリーを行ってから、次のクエリーまで 待機する時間 (秒数)。

デフォルト値

履歴

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザーがプロジェクトや要求または承認を保存するときに、チャージ・コ メントの追加を求めるプロンプトが出されるようにします。

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

runHistoryKeep_LIST

説明

LIST プロジェクト用に保持する実行履歴レコードの数。値が <=0 の場 合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_LOCAL

説明

ローカル・プロジェクトを保持するための、(リストまたは Campaign フロ ーチャート用の) 実行履歴レコードの数。値が <=0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_CORPORATE

説明

企業プロジェクトを保持するための (実行フローチャート・タスクごとの) 実行履歴レコードの数。値が <=0 の場合、Distributed Marketing はすべて の実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

リスト・ページ

listItemsPerPage

説明

1 つのリスト・ページに表示するアイテム (行)の数を指定します。この値 は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

listPageGroupSize

説明

リスト・ページでリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを 指定します。例えば、ページ 1-5 は、1 つのページ・グループです。この 値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

システムがカレンダーに表示するオブジェクトの最大数。このパラメーター を使用して、ユーザーに対するカレンダーの表示を、特定のオブジェクト数 だけに制限します。 0 (既定値)を設定した場合、制限がないことを示しま す。

デフォルト値

0

リスト・マネージャー

listManagerEnabled

説明

オプション。マーケティング担当者のために「サマリー」タブにリスト・マ ネージャー・セクションを表示するかどうかを決めます。

- true: リスト・マネージャー・セクションが表示されます (既定値)
- false: リスト・マネージャー・セクションが非表示になります

リスト・マネージャーを無効にする場合、リスト・マネージャー構成ファイ ルを構成する必要はありません。

注: 生成した後にリスト・サイズを更新するためには、リスト・マネージャ ー・テーブルへのデータ・ソースがアクティブになっている必要がありま す。

デフォルト値

true

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerSearchscreenMaxrow

説明

検索画面に返される行の最大数を示します。

デフォルト値

listManagerListPageSize

説明

デフォルト値

20

listManagerListsMaxrow

説明

リストに表示される行の最大数。

デフォルト値

10000

listManagerResetToValidateIsAllowed_list

説明

既定で、このプロパティーが false に設定されていると、リストからの推 奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラ ーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerResetToValidateIsAllowed_local

説明

既定で、このプロパティーが false に設定されていると、オンデマンド・ キャンペーンからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能 です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- ・ 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラ ーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerResetToValidateIsAllowed_corporate

説明

既定で、このプロパティーが false に設定されていると、企業キャンペーン・リストからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラ ーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

false

有効な値

TRUE | FALSE

ルックアップ・クリーンアップ

lookupCleanupMonitorStartDay

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップされる日を示します。パラメーターは数値で表される曜日で、日曜日 = 1、月曜日 = 2、などとなります。頻度は週ごとです。

デフォルト値

2

lookupCleanupMonitorStartTime

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップさ れる時刻を示します。頻度は週ごとです。

デフォルト値

09:30 am

通知

notifyCollaborateBaseURL

説明

Distributed Marketing の URL。 Distributed Marketing をインストールした コンピューター名および使用するポート番号を入力することにより、URL を編集します。

デフォルト値

```
http://[server-name]:[server-port]/collaborate/
affiniumcollaborate.jsp
```

notifyDelegateClassName

説明

オプション。サービスによってインストールされる代理実装の完全修飾 Java クラス名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了していることを示します。

デフォルト値

true

有効な値

TRUE | FALSE

notifyEventMonitorStartTime

説明

オプション。現行ロケールの java.text.DateFormat クラスに応じて書式設 定される、イベント・モニターを開始する時刻 (SHORT バージョン)。例え ば、米国英語の場合、有効なストリングは HH:MM A/PM です。モニター が作成された直後に開始するように既定値が設定されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

オプション。イベントモニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状態 になるおおよその時間を、秒単位で定義します。 デフォルト値

33

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

10

電子メール:

notifySenderAddressOverride

説明

オプション。通知の REPLY-TO および FROM 電子メール・アドレスに使 用する電子メール・アドレス。デフォルトで、イベント番号所有者の電子メ ール・アドレスが使用されます。このパラメーターが宣言されないか、空の 電子メール・アドレスが指定された場合には、デフォルトのアドレスが使用 されます。

notifyEmailMonitorJavaMailSession

説明

オプション。電子メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEmailMonitorJavaMailHost

説明

組織の SMTP サーバーのマシン名または IP アドレス。

デフォルト値

[なし]

notify Email Monitor Java Mail Protocol

説明

```
オプション。電子メール通知に使用する、電子メール・サーバーのトランス
ポート・プロトコル。
```

デフォルト値

smtp

notifyDefaultSenderEmailAddress

通知電子メールを送信するために使用できる他の有効な電子メール・アドレ スがない場合、 Distributed Marketing が電子メールの送信に使用できる有効 な電子メール・アドレス。

```
デフォルト値
```

[CHANGE-ME]

notifyEmailMonitorStartTime

説明

オプション。電子メール・モニターを開始する時刻。現在のロケールの java.text.DateFormat クラスに従って書式設定されます (SHORT バージョ ン)。例えば、米国英語の場合、有効なストリングは HH:MM A/PM です。 既定で、モニターが作成された直後に開始する設定となります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEmailMonitorPollPeriod

説明

オプション。電子メールモニタがポーリングとポーリングの間でスリープ状 態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyEmailMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

10

notifyEmailMonitorMaximumResends

説明

オプション。送信問題が検出された後に電子メールの再送信を試行する最大 回数。

デフォルト値

1440

emailMaximumSize

説明

電子メールの最大サイズ (バイト数)。

デフォルト値

```
プロジェクト:
```

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

オプション。プロジェクト警告モニターを開始する時刻。設定しない場合、 モニターが作成された直後に開始します。

デフォルト値

10:00 pm

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

オプション。プロジェクト警告モニターがポーリングとポーリングの間でス リープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

86400

notify Project Alarm Monitor Schedule Start Condition

説明

オプション。プロジェクトの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユ ーザーへの開始通知の送信を開始するか。プロジェクトが保留中で、その開 始日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_START 通知が送られます。値が -1 の場合、この 条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notify Project Alarm Monitor Schedule End Condition

説明

オプション。プロジェクトの終了日の何日前に、Distributed Marketing でユ ーザーへの通知の送信を開始するか。プロジェクトがアクティブになってい て、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1 の場合、この条 件はチェックされません。

デフォルト値

3

notify Project Alarm Monitor Schedule Cutoff Condition

説明

オプション。プロジェクトが終了するようにスケジュールされていることを ユーザーに通知し始めるまでの日数。プロジェクトがアクティブになってい て、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに CORPORATE_CAMPAIGN_TO_REVIEW 通知が送られます。値が -1 の場 合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

オプション。タスクの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザー への通知の送信を開始するか。タスクが保留中で、その開始日が将来の条件 日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_START 通知 が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notify Project Alarm Monitor Task Scheduled End Condition

説明

オプション。タスクの開始日の何日前に、タスクが開始していないことについて、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。タスクがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

オプション。タスクの開始日の何日後に、タスクが開始していないという通知を Distributed Marketing からユーザーに送信し始めるか。タスクが保留中で、そのスケジュールされた開始日が過去の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_LATE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

オプション。タスクの終了日の何日後に、タスクが終了しなかったという通 知を Distributed Marketing からユーザーに送信するか。タスクがアクティブ になっていて、そのスケジュールされた終了日が過去の条件日数内にある場 合、該当するユーザーに TASK_OVERDUE 通知が送られます。値が -1 の 場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

オプション。タスク・マイルストーンの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。マイルストーン・タス クがアクティブになっていて、そのスケジュールされた終了日が将来の条件 日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_MILESTONE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

システム・タスク:

systemTaskMonitorStartTime

説明

オプション。システム・タスク・モニターを開始する時刻。

- このパラメーターに値 (例えば、11:00 pm) が入っている場合、これは、 タスク・モニターが開始される開始時刻です。
- このパラメーターが未定義の場合、モニターは作成された直後に開始され ます。

デフォルト値

3

systemTaskMonitorPollPeriod

説明

オプション。システム・タスク・モニターがポーリングとポーリングの間で スリープ状態になる期間 (秒単位)。

デフォルト値

3600

パフォーマンス

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する一部のクエリーのバッチ・ サイズを設定するパフォーマンス最適化です。アプリケーションに一度に返 される結果セットのレコードの数を決定するためにフェッチ・サイズが使用 されます。

デフォルト値

500

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、指定された値より長いすべてのリスト・ページ結果を 切り抜きます。

デフォルト値

ssdorSearchResultLimit

説明

SSDOR 検索画面によって返される行の最大数。この数値を高い値に増やす と、パフォーマンスが低下する可能性があります。

デフォルト値

500

読み取り専用ルックアップ・テーブル

lookupTableName

説明

オプション。読み取り専用ルックアップ・テーブル名。ルックアップ・テー ブルはフォーム・エディターで更新されず、ルックアップ・テーブル名の末 尾でワイルドカードとして許可されています。

デフォルト値

レポート

reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate']

reportsAnalysisTabHome

説明

オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペ ーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific
Reports']

reportsAnalysisCorporateSectionHome

説明

企業のマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ディレ クトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate']

reportsAnalysisCorporateTabHome

企業のマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン)の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Corporate Marketer']

reportsAnalysisFieldMarketerSectionHome

説明

フィールドのマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate']/folder[@name='Field
Marketer']

reportsAnalysisFieldTabHome

説明

フィールドのマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Field Marketer']

兄弟

siblingService

説明

オプション。他の Distributed Marketing インスタンスへのリンクを作成して イベントを伝搬するために使用します。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/collaborate/services/ CollaborateIntegrationServices/1.0

テンプレート

templatesDir

説明

すべてのテンプレートが入るディレクトリー。ベスト・プラクティスとして、これを IBM-Home¥DistributedMarketing¥templates への完全パスに設定することをお勧めします。

デフォルト値

templates

projectTemplatesFile

説明

指定されたファイルは、リスト、オンデマンド、および企業キャンペーンな ど、各種プロジェクトを記述しています。

デフォルト値

project_templates.xml

templateAutoGenerateNameEnabled

説明

新規テンプレートのテンプレート名を生成する必要があるかどうかを示しま す。

デフォルト値

true

有効な値

TRUE | FALSE

defaultListTableDSName

説明

データ・ソース名が定義されていない場合に、テンプレートのインポート中 にテンプレートのデータ・ソース名を割り当てるために使用します。

デフォルト値

ACC_DEMO

templateAdminGroup_Name

説明

複数のグループを指定します。これらのグループに属するユーザーは、 Distributed Marketing でテンプレート構成リンクにアクセスすることができ ます。同じ名前を持つグループが Marketing Platform に存在している必要が あります。複数のグループはコンマで区切ってください。

デフォルト値

Template Administrators

ワークフロー

daysInPastRecentTask

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する過去の日数。

デフォルト値

daysInFutureUpcomingTasks

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する今後の日数。

デフォルト値

14

beginningOfDay

説明

作業日の開始時間を示します (有効な値は 0 から 12 で、午前 0 時から正 午を表す)。この設定は、ワークフローにおける作業の完了度のパーセンテ ージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

9

numberOfHoursPerDay

説明

1 日当たりの時間数を示します (有効な値は 1 から 24)。既定値は、標準の 1 日 8 時勤務を示します。この設定は、ワークフローにおける作業の完了 度のパーセンテージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

8

automaticallyRestartFailedRecurrentTasks

説明

失敗した反復タスクを自動的に再開するかどうかを決めます。パラメーター の値が false に設定される場合、ユーザーはワークフローまたはタスク後の 更新ポップから、失敗したタスク状況を手動で「保留中」に更新する必要が あります。スケジュールは、実行保留状態にあるタスクだけを選択します。

値が true に設定される場合、このタスクを再開するための手操作による介入は必要ありません。

デフォルト値

true

有効な値

TRUE | FALSE

projectWorkflowRefreshPeriodInSeconds

説明

システム全体のワークフローのリフレッシュ期間(秒単位)。

デフォルト値

付録 B. Cognos レポートのスタイル・ガイド

IBM Cognos レポート統合コンポーネントには、グローバル・レポート・スタイ ル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。ご使用の IBM Unica ア プリケーション用の新規 IBM Cognos レポートを作成する場合、レポートでは、追 加の手動書式設定をいくつか指定して、この css ファイルからスタイルを使用する 必要があります。そうすれば、新規レポートのスタイルが IBM Unica レポート・パ ッケージで提供されているレポートで使用されるものと一致します。

この付録では、さまざまな種類のレポート (リスト、チャートなど) に関する次の情報を提供します。

GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。

スタイル・シートでは提供できないスタイルがいくつかあるため、レポートを作 成する場合、スタイルの書式設定の一部は手動で行う必要があります。

項目	CSS クラス名	スタイル
一般フォント・ファミリー	pg, pp	font-family: Arial,
レポート・タイトル	ta	font-size: 10pt;
ページ – ヘッダー	ph	padding-bottom:10px;
		font-size:8pt;
		font-weight:bold;
ページ – フッター	pf	padding-top:10px;
		font-size:8pt;
		font-weight:bold;
フィールド・セット・ラベル	fs	font-size:8pt;
テーブル	tb	border-collapse:collapse

グローバル・レポートのスタイル

•

•

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列のタイト	lt	text-align:left;
ル・セル		background-color:#F2F2F2; /*
		ライト・グレー*/
		font-weight:bold;
		border-top:1px solid silver;
		border-left:1px solid silver;
		border-bottom:1.5pt solid
		black;
		border-right:1px solid silver;
		padding-top: 13px;
テーブル - リスト列のボデ	lc, lm	border:1px solid silver;
イ・セル		
テーブル – 外部ヘッダー 	oh	background-color:#FFFFCC; /*
テーブル リフト・フッタ	of os	border top:1 5nt solid black:
	01, 05	bolder-top.1.5pt solid black,
クロス集計	xt	border-collapse:collapse;
クロス集計 – デフォルト測	xm	border-top:1px solid silver;
定セル		border-left:1px solid silver;
		border-bottom:1.5pt solid
		black;
		border-right:1.5pt solid black;
クロス集計 – メンバー・ラ	ml	background-color: transparent;
ベル・セル		border:1px solid silver:
	ol	background-color:#F7F7F7: /*
合計		オフホワイト*/
クロス集計 – スペーサー	XS	background-color: transparent;
		font-weight: bold;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	font-size:10pt;
		font-weight:bold;
グラフ – 軸ラベル	al	font-size:10pt;
チャート – 軸線	at	color:#939393;

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - グラデーション	XML レポート仕様の場合	XML レポート仕様のチャー ト・タグ
		() を閉じ る前に、以下を貼り付けま す。
		<filleffects></filleffects>
		<chartgradient <="" direction="up" td=""></chartgradient>
		fromColor="#F2F2F2"
		toColor="#FFFFFF"/>

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート – チャート・パレ	XML レポート仕様の場合	XML レポート仕様のチャー
ット		ト・タグ
		() を閉じ
		る前に、以下を貼り付けま
		9 0
		<chartpalette></chartpalette>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#00508A"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#376C37"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#FB9A4D"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#B8351F"/>
		< chartColor
		value="#69817B"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#473E9A"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#5384AE"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#61C2A3"/>
		<chartcolor value="#FF5656"></chartcolor>
		 <chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#A583BB"/>
		<chartcolor value="#506079"></chartcolor>
		value="#A0A080"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#F1EDC1"/>
		<chartcolor< td=""></chartcolor<>
		value="#A6A6A6"/>
		<chartcolor value="#818181"></chartcolor>
レポートのページ・スタイル

項目	スタイル
テキスト	Arial フォント
レポート・タイトル・テキスト	Arial 10 ポイント
ページ・フッター・テキスト	Arial 8 ポイント
フィールド・セット・ラベル	Arial 8 ポイント

リスト・レポート・スタイル

リスト・レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	1 px のシルバーの境界線 (特に注記がない場合)
列ヘッダー	ライト・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テ ーブルの残りの部分から列ヘッダーを分離さ せるためのもの)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・イエローの背景
下部の合計行	ダーク・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テ ーブルの残りの部分から行を分離させるため のもの)

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポー トと一致させてください。

- リスト・ヘッダー (リスト・フッターではなく)を使用して、集計をオブジェクト・レベルで表示します。
- リスト・ヘッダーに表示されている数字を手動で右寄せにします。リスト・フッ ターとは異なり、リスト・ヘッダーは、外部コンポーネントとサマリー・コンポ ーネントに分離されることはありません(両コンポーネントではデフォルトで右 寄せのスタイルが使用されます)。そのため、リスト・ヘッダーに情報を集計する 場合は、この追加ステップを実行して、値を右揃えにする必要があります。
- ・ 必要に応じて、グループ列に 1.5 pt の黒の実線で境界線を追加します。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないリスト・レポートです。

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
Mortgage Multi-Channel Acquisition	Low Cost Refinance DM	3,973	3,973	1,239	1,117
Campaign	Low Cost Refinance TM	2,696	2,695	875	787
Multi - Wave Campaign		18,611	18,243	312	67
Multi - Wave Campaign	15 Pct Off \$75 Direct Mail	300	300		
	Buy One Get One 50 Pct Off Direct Mail	300	300		
	Money Market Savings	18,011	18,011	312	67
Multi-Channel Category Cross- Sell		19,672	19,672	4,825	2,541
Multi-Channel Category Cross-Sell	Bath Dmail	1,552	1,552	1,013	417
	Bath Email	2,260	2,260	1,281	528
	Clearance Dmail	145	145	26	16
	Clearance Email	200	200	33	22
	Electronics Dmail	207	207	47	30
	Electronics Email	270	270	59	39
	Home Care Dmail	71	71	20	12
	Home Care Email	92	92	22	13
	Home Decor Dmail	4,190	4,190	676	446
	Home Decor Email	6,250	6,250	931	605
	Juniors Dmail	11	11		
	Juniors Email	8	8		
	Kitchen Dmail	62	62	9	6
	Kitchen Email	86	86	15	11

Example List Report

以下は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートです。

		Example List Report		Manually right public sur	many headlers
Campaign Name	Offer Name	Rumber of Offers Given	Unique Recipients	Response Transpotions	Unique Responders
1. Retention for High Value Customer - eMail		12,756	12,766	916,6	3,130
1. Retention for High Value Customer - etilal	Phone Credit \$30 (English)	1.592	1,592	420	391
	Phone Credit S10 (Spanish)	1.598	1,598	425	395
	PPV - 5 Free (English)	4,603	4,803	1,212	1,174
	PPV - 5 Free (Spaniah)	4,763	4,763	1,208	8,170
2. Targeted Acquisition		5,000	5,000	1,601	1,065
2. Targeted Acquiation	Free Webcam High Speed Internet	2,500	2,500	432	426
	Gift Certificate Otter	2,500	2,500	1,009	653
3. Direct Mail Multi-Wave		8,337	8,337	1,929	1,834
3. Direct Mail Multi-Wave	New Phone Existing Cable - Initial	8,337	8,337	1,929	1,834
Association Campaigns		150	150	,	3
Association Campaigns	016-20 pct off Books	25	25		
	041-20 pct eff Education	25	25	3	
	04-Pharma Conston Match	25	25		
	EM-20 pct off Books	25	25		
	EM-20 pct off Education	25	25	6	
	EN-Pharma Donation Watch	25	25		
Casino Marketing Campaign C800007823		884	866	10,523	1,994
Casino Marketing Campaign C000007023	Free Buffet Dinner Offer	443	443	47	57
	Free Gas Card Offer	443	443	10,078	8,979
Credit Card Acquisition		364	364	44	16
Credit Card Acquisition	Credit Card Offer	364	364	44	-10
Customer Winback		3,856	3,856	296	149
Customer Winback	15 Pct Off On Purchase \$100+ CM	2,961	2,961		
	20 Percent Off Any Single tem Offe	* 895	695	296	140
Gaming Re-Activation C000007021		2,458	2,458	1,012	363
Gaming Re-Activation C000007021	Pay Multipliers Offer	2,458	2,458	1,012	353
Home Equity Cross Sell		6,941	6,637	745	244
Nome Equity Cross Sell	Fee based Home Epuly Line of Cret	M 842	862	6	

Aug 13, 2008	1	10:55:17 AM
I Top I Page up I Page down I Bottom		

クロス集計レポートのスタイル

クロス集計レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	透明背景: 1 px のシルバーの境界線
測定セル (左上)	1.5 pt の黒い線 (クロス集計の残りの部分か らセルを分離するためのもの)
外部レベルの合計	グレー/オフホワイトの背景

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポー トと一致させてください。

- 1.5 pt の黒の境界線を使用して、測定値から集計を分離
- 1.5 の黒の境界線を使用して、論理列グループをグループ化
- 一般ガイドライン:同じレポート内で列と行の両方を集計しないようにしてください。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないクロス集計レポートです。

	1		2		3		4		7	9	
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given								
	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337			
Cross Sell	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563	
Loyalty	3,856	3,856			4,414	4,414					8
Retention	150	150			12,756	12,756					23,114
Acquisition					13,339	13,339	5,000	5,000			

Example Crosstab Report

以下は、グローバル・スタイルを使用するクロス集計レポートで、列のグループを 示すために 1.5 ピクセルの境界線が適用されています。

								Example Crosstab Report						Borney after sublate						
	l.		2		3		4		1				10.		11		12		(forages	until .
_	Number of Drives Dives	Unique Recipients	faultier of Offers Gues	Brigue Recpients	Musker offers Diret	Urape Recipients	Surfer If Offers Dutt	Uniper Recipients	Number of Others Oues	рнрит Янсранта	taveer of Others Ober	Origue Recipients	Number of Others Dives	Ungue Recipients	Number st. Otters Dutti	Brigue Reopierts	of Offers Grees	Orlant Recipients	di anti	Unque Recgieros
	1,285	1.081	1,541	6.537	1,404	2,167	1.337	1.507	-			1 1	18.611	18,343		-	844	654	44.442	41,525
Other Tel	12.940	18.604	36,124	24,324					9.563	8.963									83,837	63,680
Leyety	1.99	3,858			4.494	4.634									2,458	2,458			16,729	10,729
Betentes	tiá	162			12,718	12,716					23.514	23,914							36,829	36,620
Appareters					13.334	13.539	1.000	5.000					384						88,795	\$8,200

チャートのスタイル

チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
チャート	1 pt のライト・グレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

さらに新規チャートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のチャート・レポ ートに一致させてください。

- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- グラデーションやカラー・パレットを使用するには、563ページの『グローバル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XMLレポート仕様に貼り付けます。
- 一般ガイドライン:返されると予想されるデータに基づいてチャート・タイプを 選択します。
 - レポートが連続的なデータを取得すると保証できる場合にのみ、チャート・タ イプとして折れ線グラフを使用してください。
 - 複数の系列がある場合は、積み重ね棒グラフは、非積み重ね棒グラフより効果
 的です。
 - ベスト・プラクティスとして、パーセント合計が 100% に等しい場合にのみ、 パーセントを使用してください。値が 100% に達していない場合、円グラフで はユーザーを混乱させる場合があります。
- チャートにある系列が2つだけであり、Y1軸とY2軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の2つのパレットの色に 一致させる必要があります。



以下は、グローバル・スタイルを使用しないチャートです。

以下は、グローバル・スタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用され ています。

Campaign Detailed Offer Response Breakout



ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタ イルを使用します。必ず、ダッシュボード・ポートレットに正しく収まるように、 以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示される形式のレポートにして ください。

項目	スタイル
背景色	背景色は常にグレー (16 進値 F2F2F2) に設 定してください。
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを 指定します。パーセントのサイズ指定を使用 できない場合は、サイズを幅 323 ピクセ ル、高さ 175 ピクセルに設定してくださ い。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないで ください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

付録 C. レポートおよびレポート・スキーマ

次の方法で、Campaign レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズ することができます。

- コンタクトまたはレスポンス・メトリックを追加する
- カスタムのキャンペーン、オファー、またはセル属性を追加する
- レスポンス・タイプを追加する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを作成する

以下の表では、Campaign レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos 8 BI レポートを、それらをサポートするレポート・スキーマにマップして います。

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャン		ペーン	オファーの
	ペーン	カスタム	ペーン	オファー	オファーの	コンタク
	ビュー	属性	実績	実績	レスポンス	ト・ステー
	スキーマ	スキーマ	スキーマ	スキーマ	の内訳	タスの内訳
仮定オファ ー収支サマ リー・レポ	Х	Х		Х		
キャンペー ン詳細オフ ァー・レス ポンスの内 訳	х		х		х	
オファー・ レスポンス 内訳 (ダッ シュボード 版)	Х		Х		Х	
オファー別 キャンペー ン収支サマ リー (実績)	Х	Х	Х			
キャンペーン投資収益率の比較	Х	Х	Х			
月別キャン ペーン・オ ファー実績	X		X			

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャン		ペーン	オファーの
	ペーン	カスタム	ペーン	オファー	オファーの	コンタク
	ビュー	属性	実績	実績	レスポンス	ト・ステー
	スキーマ	スキーマ	スキーマ	スキーマ	の内訳	タスの内訳
キャンペー	v		v			
マヤンパ	Δ		Δ			
シ天順の比						
#X						
キャンペー	X		X			
ン・レスホ						
シス率の比						
較						
収益を伴う	X		X			
キャンペー						
ン実績の比						
較						
イニシアチ	X		X			
ブ別のキャ						
ンペーン実						
績の比較						
セル別のキ	X		X			
ャンペーン						
実績サマリ						
-						
収益を伴う	x		x			
ヤル別キャ	1		1			
ンペーン実						
着サマリー						
カル別セト	v		v			
ビル別わよ	Λ		Δ			
モブ別の主						
ノンパーン						
ま結サマリ						
天根シ、リ						
+7- 11	v		V			
オファー別のモルンペ	Λ		Δ			
いイヤノハ						
マリー						
収益を伴う	X		X			
オファー別						
キャンペー						
ン実績サマ						
リー						
オファー別	Х		Х			
キャンペー						
ン収益の比						
較						

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャン		ペーン	オファーの
	ペーン	カスタム	ペーン	オファー	オファーの	コンタク
	ビュー	属性	実績	実績	レスポンス	ト・ステー
	スキーマ	スキーマ	スキーマ	スキーマ	の内訳	タスの内訳
キャンペー	Х					
ン・サマリ						
-						
オファー・	Х					
キャンペー						
ン・リスト						
オファー実	Х			Х		
績メトリッ						
ク						
日別オファ	Х			Х		
ー実績						
過去 7 日	X			X		
間のオファ						
ー・レスポ						
ンス						
オファー実	Х			Х		
績の比較						
オファー・	X			X		
レスポンス						
率の比較						
キャンペー	X		X	X		
ン別のオフ						
ァー実績サ						
マリー						

次のレポートでは、Campaign で提供されるカスタムのコンタクトおよびレスポン ス・メトリック属性の標準セットを使用します。

- 仮定オファー収支サマリー
- キャンペーン詳細オファーのレスポンスの内訳
- オファー別キャンペーン収支サマリー (実績)
- 収益を伴うキャンペーン実績の比較
- 収益を伴うセル別キャンペーン実績サマリー
- 収益を伴うオファー別キャンペーン実績サマリー

eMessageレポートおよびレポート・スキーマ

eMessage レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズすることはできません。

以下の表では、eMessage レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos 8 BI レポートを、それらをサポートする Unica レポート・スキーマにマッ プしています。

	メール配信パフォーマンス・スキーマ
メッセージ概要レポート	X
詳細リンク・レポート	Х
セル別詳細リンク・レポート	Х
詳細バウンス・レポート	Х

Interact レポートおよびレポート・スキーマ

次の方法で、Interact レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズす ることができます。

- パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベルの追加パフォーマンス・レポート・スキーマを作成 する

以下の表は、Interact レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM Unica レポート・スキーマにマップしています。

	インタラク ティブ・ビュ ー・スキーマ	Interact パフ ォーマンス・ ビュー・スキ ーマ	インタラク ティブ チャネル / キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュ ー・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュ ー・スキーマ
キャンペーン - インタラク ティブ・チャ ネル配置履歴	Х		Х		
キャンペーン - インタラク ティブ・セ ル・パフォー マンス	X	X		X	
キャンペーン - オファー別 インタラクテ ィブ・セル・ パフォーマン ス	X	X		X	
キャンペーン - インタラク ティブ・オフ ァー・パフォ ーマンス	X	X		X	

	インタラク ティブ・ビュ ー・スキーマ	Interact パフ オーマンス・ ビュー・スキ ーマ	インタラク ティブ チャネル / キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュ ー・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュ ー・スキーマ
キャンペーン - セル別イン タラクティ ブ・オファー 実績	X	X		X	
キャンペーン - インタラク ティブ・オフ ァー学習の詳 細	X				X
インタラクテ ィブ・セル・ リフト分析	Х	Х		Х	Х
インタラクテ ィブ・チャネ ル - チャネル 配置履歴	Х		Х		
インタラクテ ィブ・チャネ ル - チャネ ル・イベン ト・アクティ ビティーのサ マリー・レポ ート	X			X	
インタラクテ ィブ・チャネ ル - チャネル 対話点パフォ ーマンス・サ マリー	X	X		X	
インタラクテ ィブ・チャネ ル - チャネル 処理ルール・ インベントリ ー	X				
インタラクテ ィブ・セグメ ント・リフト 分析	Х	Х		X	
対話点パフォ ーマンス	Х	Х		Х	

付録 D. IBM Unica フレーム・セットの再ブランド設定

IBM Unica HTML フレーム・セットにはほとんどの IBM Unica Marketing 製品ペ ージが表示されますが、このフレーム・セットの外観をカスタマイズできます。カ スケーディング・スタイル・シートを編集して、独自のグラフィックスを指定する ことによって、ユーザー・インターフェースのイメージ、フォント、および色の多 くは変更できます。IBM のロゴと配色を会社のロゴと配色でオーバーライドできる ため、これは、再ブランド設定とよばれることがあります。

Marketing Platform のスタイル・シートについて

IBM Unica HTML フレーム・セットは、 unica.war ファイルの中の css ディレク トリーの中にある多数のカスケーディング・スタイル・シートによってフォーマッ トされます。これらのスタイル・シートのいくつかは、css¥theme ディレクトリー の中の corporate theme.css というスタイル・シートをインポートします。デフォ ルトでは、この corporate theme.css ファイルはブランクです。このブランク・フ ァイルを独自の色とイメージを使用するファイルと置き換えると、フレーム・セッ トの外観が変わります。

IBM Unica では、unica.war ファイルの css¥theme¥DEFAULT ディレクトリーの中 に、例となる corporatetheme.css ファイルも用意されています。このスタイル・ シート例には、カスタマイズ可能な指定がすべて含まれ、各指定がフレーム・セッ トのどの領域に影響を及ぼすのかを説明するコメントも含まれています。このセク ションで説明されている方法で、このファイルを独自の変更を加えるためのテンプ レートとして使用することができます。

イメージについて

使用できるイメージは、PNG、GIF、または JPEG のいずれかです。

ロゴ・イメージのサイズは、幅 473px、高さ 88px 以下にする必要があります。 IBM Unica ロゴはこの寸法で、ナビゲーション・ペインで背景に重なる半透明の領 域が含まれていますが、ユーザー独自のロゴはもっと小さくすることができます。 サイズの異なるロゴ・イメージを使用する場合、background-position property を スタイル・シートのロゴ指定 (body.navpane #header .inner) に追加することが必 要な場合があります。

IBM Unica は、一部のボタンとアイコンにスプライトを使用しています。スプライトの使用により、サーバーに送られる HTTP 要求の数が減り、フリッカーが発生する可能性も減らすことができます。IBM Unica がスプライトを使用する個所では、 イメージの名前に _sprites が含まれています。これらのイメージを置き換える場合は、同じ寸法のスプライトを使用してください。それが、スタイル・シートへの変更が最も少なくて済むからです。スプライトについてあまり経験がない場合は、 インターネットの情報を参照してください。

企業テーマを準備するには

- Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、単純に unica.war ファイルをインストールし てある可能性があります。いずれの場合も、必要に応じてインストール済みファ イルを解凍して、unica.war ファイルに含まれているファイルおよびディレクト リーにアクセスします。
- 2. css¥theme¥DEFAULT ディレクトリーの下位にある corporatetheme.css ファイル を見つけます。
- 3. 各スタイル・シート指定が影響を及ぼすフレームワークの領域について詳しく は、corporatetheme.css ファイルの中のコメントを参照してください。
- 4. 独自のイメージを作成する際のガイドとして、css¥theme¥img ディレクトリー内 のイメージを参照してください。
- 5. テーマを好みのグラフィックス・プログラムで作成し、イメージ名、フォント、 およびフォントと背景色の 16 進数指定をメモします。
- 6. corporatetheme.css ファイルを編集して、独自のフォント、色、およびイメージを使用できるようにします。

企業テーマを適用するには

- 使用したいイメージ (例えば独自のロゴ、ボタン、アイコン) を、Marketing Platform がインストールされているマシンからアクセス可能なディレクトリーに 入れます。イメージをどこに配置するかを決定する際は、『企業テーマを準備す るには』で説明されている方法で作成した、変更済みの corporatetheme.css フ ァイルを参照してください。
- 2. Marketing Platform が配置されている場合は、配置解除してください。
- 3. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、unica.war ファイルをインストールしてある 可能性があります。いずれの場合も、以下のようにしてください。
 - JWAR ファイルまたは EAR ファイルのバックアップを作成し、そのバック アップを別の名前 (例えば original_unica.war) で保存します。こうすること で、必要な場合には変更をロールバックすることができます。
 - インストール済みのファイルを必要に応じて解凍して、unica.war に含まれて いるファイルおよびディレクトリーにアクセスします。
- 4. 『企業テーマを準備するには』で説明されている方法で作成した変更済みの corporatetheme.css ファイルを、css¥theme ディレクトリーに入れます。

これにより、すでにそこに入っているブランクの corporate theme.css ファイル が上書きされます。

- 5. unica.war ファイル、および必要な場合にはそのファイルが含まれている EAR ファイルを再作成します。
- 6. WAR ファイルまたは EAR ファイルを配置します。
- 7. ブラウザーのキャッシュを消去して、IBM Unica Marketing にログインします。

新規テーマが IBM フレーム・セットに表示されるはずです。

IBM Unica テクニカル・サポートへのお問い合わせ

文書を参照しても問題を解決できない場合には、IBM Unica テクニカル・サポート にお問い合わせください。御社指定のサポート担当者は通話を記録できます。問題 を効率的に問題なく解決するために、本セクションの情報をお使いください。

御社の指定サポート担当者ではない場合は、最寄りの IBM Unica 管理者に連絡し情報を入手してください。

収集する情報

IBM Unica テクニカル・サポートに連絡する前に、以下の情報を収集してください。

- 問題の性質についての簡単な説明
- 問題の発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細
- 問題を再現するための詳細な手順
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、設定ファイル、およびデー タ・ファイル
- 「システム情報」に記載されている、お客様の製品およびシステム環境に関する 情報

システム情報

IBM Unica テクニカル・サポートへお問い合わせいただく際に、お客様の環境に関する情報の提供をお願いすることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」 ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM Unica のア プリケーションに関する情報が表示されます。

「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択すると、「バージョン情報」ページにアクセ スできます。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合でも、各アプリケ ーションのインストール・ディレクトリーに置かれている version.txt ファイルを 表示すれば、すべての IBM Unica アプリケーションのバージョン番号を入手できま す。

IBM Unica テクニカル・サポートへのお問い合わせに関する情報

IBM Unica 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM Unica 製品技術サポ ートの Web サイト (http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm) を参照 してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合 があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービス に言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能 であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を 侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用す ることができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの 評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を 保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実 施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わ せは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19番21号 日本アイ・ビー・エム株式会社 法務・知的財産 知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM お よびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提 供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むす べての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっ ては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限 を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的 に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随 時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を 行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプロ グラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の 相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする 方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation 170 Tracer Lane Waltham, MA 02451 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができま すが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、 IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれ と同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定された ものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。 一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値 が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一 部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があ ります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要がありま す。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公 に利用可能なソースから入手したものです。 IBM は、それらの製品のテストは行 っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の 要求については確証できません。 IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それら の製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回 される場合があり、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行 価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。よ り具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品 などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであ り、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎませ ん。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を 例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されていま す。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラット フォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプ リケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式 においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを 経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、 利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。 これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるも のであり、いかなる保証も提供されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プ ログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示さ れない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストにつ いては、『www.ibm.com/legal/copytrade.shtml』 をご覧ください。



Printed in Japan